

あしあと

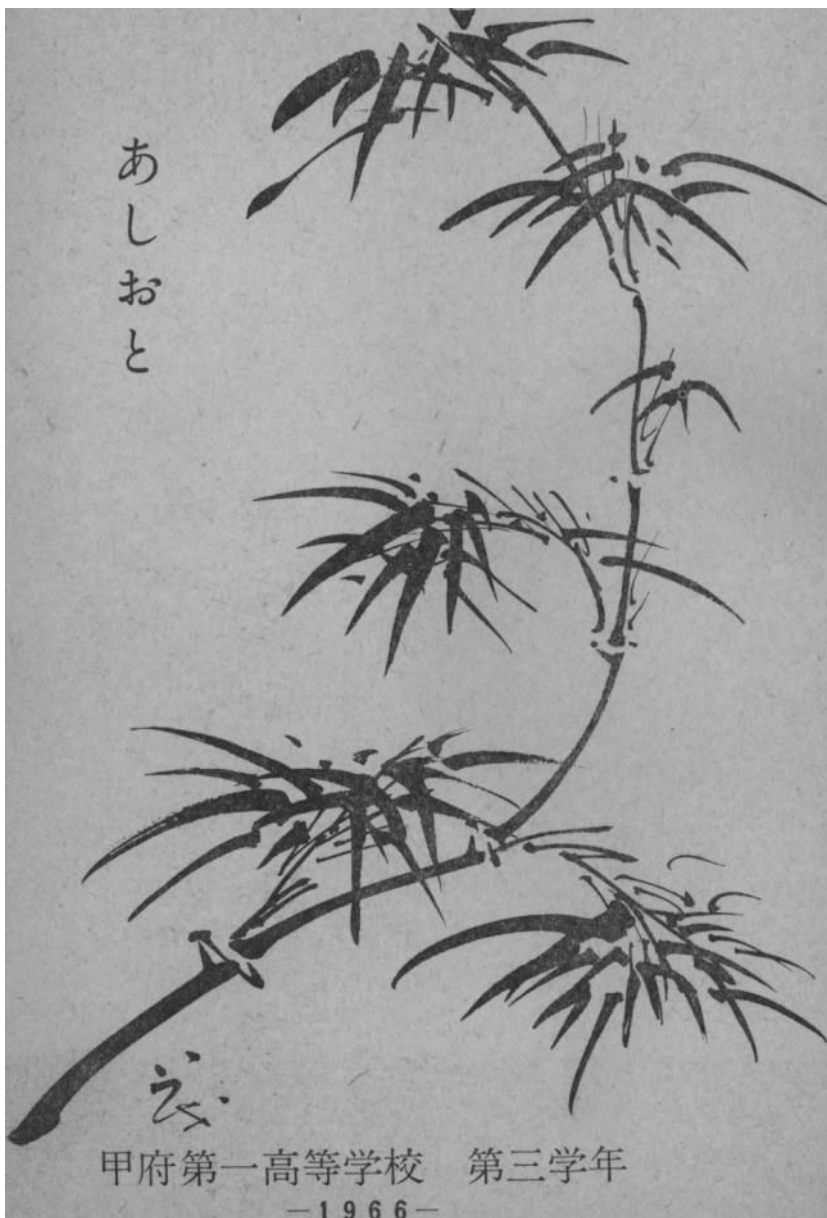
あしあと

3

H.ENDO

KOFU 1st HIGH SCHOOL

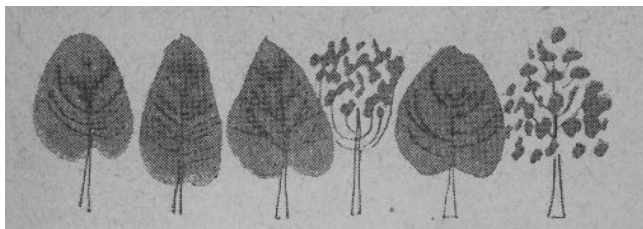
あしおと



文

甲府第一高等学校 第三学年

— 1966 —

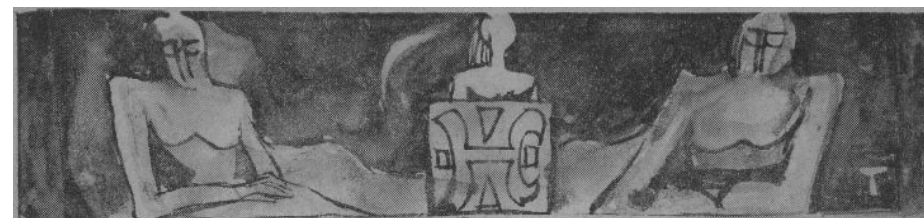


学校長 広瀬 勝雄

そのあしおとは、一つになりて、うなばらに、もりあがりくる黒潮のごとし。
 三年生諸君、君たちのあしなみ乱れることなく、日に日に前進をつづけて今日に
 いたる。ついに待望のあしおと第三号は卒論集となつて、君たちが一高生活の思
 い出をかざる実をむすぶにいたつた。古言に、その木のよしあしは、その実をみ
 よと。まことにすばらしい実であり、高校生活の記録である。一年から三年まで
 君たちがのこした、ひとりびとりの記録集であつて、高校生活のほんの一駒では
 あるけれども君たちにとつては、まことに思い出ふかいものであり、一高にとつ
 ては、貴重な資料といふことができる。このような労作が、よくも三号までつづ
 いたものである。私はしみじみとそのことを思うのである。そこには何かがあつ
 たればこそと、考えざるをえない。はたしてそれは何であつたであろう。恵まれ
 た条件、みんなの創意、あしなみそろつたあの入学当時の気持、いろいろと考え
 られるが、一つ一つ大切な要素であつたことに間違ひはない。そうであつたにし
 ても、なおこの事をつづけておしすすめたものは一体何であつたろうか。君たち
 の胸のうちに、いまそれが生きているのである。私は思う、「師弟和熟」の精神
 から生まれいであつたものではないだろうか。

一年のころ保坂忠信先生を中心として出発した、あの意慾的なもの、そのあし
 なみのそろつた雰囲気、最後を守山先生を中心に、そこに言葉につくし得ない、
 こころの世界に自然に創りいだされたもの、とにかく、そういう表現のできない、
 母体としての雰囲気なくしては生まれなかつた、つづけることはできなかつたであ
 る。そのことを人間の教育として貴いものと思うのである。この祥福の源とな
 る精神は諸君のうちにいきいて、君たちの未来の発展に源泉となるものである
 う。どうか立派なあゆみを、あしおとたく。すすめられたい。

黒潮のよせくるごとし

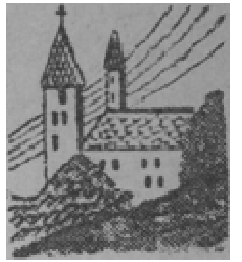


文集 あしおと 目次

黒潮のよせくるごとし…学校長 広瀬勝雄… 1
 夜のしじま……………学年主任 守山源造… 2

1 組……………	7
2 組……………	33
3 組……………	64
4 組……………	92
5 組……………	120
6 組……………	137
7 組……………	155
8 組……………	172
9 組……………	196
10 組……………	215
11 組……………	236
12 組……………	266





夜のしじまに

学生住守 山源 浩

つまりさうになるのを、足先で支えながら小刻みに登ると、身体は次第に闇の中にういてゆく。狭い階段の壁と壁との間を、手さぐりで、すり抜けるようにして更に一步を登る。眼が馴れない為か、いやに暗くて、細長く、無気味でさえある。本館の西階段を三階まで登りつめて、教室の横に出ると、ほっとした気持ちになる。東西に続く長い廊下も、足許は全く暗く、天井近くが街の灯をうつして、ほのかに白くはえ、その方向と長さを示している。真夜中近くの教室は凄まじく静まりかえっており、寒さの為か、きしむ音が、どこからともなく聞えてくる。

二つばかり教室をのぞきながら進むと、机の配列も分るようになる。三つ目の教室は、宿直室の上でもあろうか、電燈の光を鈍くうつして、部屋全体がうす赤くそめられている。壁の床に近いところは、粗末なコンクリートで、手あかがくろぐるとにじみこんでおり、赤い煉瓦の古いタイルは「摩滅して落ちてしまったところもある。

古い教室である、

私も二十数年前は、この教室の生徒であった。江口校長の指導で雑布がけに励んだ教室である。それからきょうまで、数多くの生徒が、それぞれに考え、それぞれの夢をもつて、この教室から巣立っていった。

外は風がひとしきり吹きすさび、カーテンが破れたガラスの間から、夜空にながれて、はたはたと鳴る。

教卓のすぐ前の机の上に、辞書らしいものが、すべり落ちそうになってのっている。指のあたるところは、すっかりそり返ってしまつて、三倍くらいの厚さに、ふくれあがっている。今ごろ生徒らは、さしせまった入試を前にして、ねむ気とたたかいながら頑張つて勉強を続けていることであらう。この生徒らも、もう間もなく卒業していこうとしている。

思えば長いような短いような、複雑な三年間であつた。その間にあつて、学年誌の発行も回を重ね、いよいよ最後のもの

を準備しようとしている。

「あしおと」第二号には、一カ年の高校生活を通じての感想が多くのせられ、希望の中に一抹の不安をもつて入学した生徒らの一年を終えての落着きの姿があらわれていた。

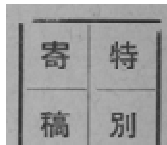
次の号は、急にずつしりと部厚い感じになった。高校生活の基盤の上に立つて、自分を眺め、勉強の苦しさを訴え、更に人生の意味をとらえようと悩んでいる姿が、なまなましく見られた。それらは青春時代の心の遍歴の偽らざる記録であり、又告白でもある。

三年になってからは、模擬試験だけでも、東大、京大、東北、旺文社、などと息をつくひまもないくらいであつた。新制度の高校教科課程の上に立つて、大学入試科目も一部改変され、最高の入学難が予想される年である。

それに備えて、できるだけの準備をしてやりたいと念じつつ、われわれ職員一同も、まさに背水の陣をしく構えの日日であつた。精神的にも、肉体的にも、急速な成長をする変化の多い高校時代の、その三カ年の過程は、まさに終ろうとしている。敗戦で精神的な支柱を失い、その底から、立ち上がろうと、もがき苦しみ抜いている日本全体の苦悩を、深く深く刻みこんだ社会の姿をうつし、その強烈な乱反射の光の中に、道を探し求め続けた三カ年であつたかも知れない。ここに第三号は最後の学年誌として、人生の岐路に立つ、生徒の若い心を、苦悩を、理想を、おりこんで書かれようとしている。

「あしおと」はとだえることなく、更に人生の探究に向かって、人間完成の峯を目ざしつつ、未完の歩みを続けねばなるまい。ひとりひとり行く道はことなろうとも。ここに歩み始めた「あしおと」の歩みをとどめることなく。そうして、われわれ教師はまた、あしおとのひびきを、この古い校舎の中でいつまでも感じとって行きたいと願う。

先程までの風もどうやら小止みになり、校舎は夜のしじまの中に静かに深く更けてゆく。



君へ（二人一人へのお便りにかえて）

日川にて 保坂忠信

——君、全くごさたしてしまいました。強行遠足、文化祭とすっかりすんで、今日は能検ですね。テレビに強行遠足の実況が出ることをきいていましたが、丁度、登校時間で見ることができず残念でした。信濃路の北斗星はいかがでしたか。僕は四分の一世紀ぶりに風光という言葉のすばらしさを味っています。それは笛吹の土手をバスで往復するときです。春は御坂山塊の麓迄一面の桃畑、夏は海のように青く蔽われた葡萄棚、それが今はあずき色にそまっているのです。夕映えを背に紫のもやがむくりと立ちこめる折など、杳然としてしまいます。さつきテレビ・ニュースをみていると、一高の能検風景がでてきました。どうも中館の二年生の教室にいる君が浮んでくるのですが、今は、三層楼の住人で、八十五周年の伝統の頂点に立っている訳ですね。僕の方は六十五年目を迎えたのです。一高の前身から分れて、第一中学、第二中学となつたのが明治三十四年です。この間、同窓会の総会がありました。七百人もの老若の同窓生が、「質実剛毅の魂を／染めたる旗を打振りて」と歌いながら乱舞したのは実に意気軒昂たるものがありました。ここの初代の校長は中川太郎先生という札幌農学校出身の方で、甲府中学で八年間英語を教えておられた方ですから、石橋湛山氏など、この間除幕式においてた方々の先生でもある訳です。こわいくらい黙りこくっていられたそうですが、非常に深い感化を生徒に与えたと、当時の方々がいつています。日川の同窓会会長の参議院議員広瀬久忠氏は七十六才で、厚生省をつくったり、大臣、東京市長をされた方ですが、中川先生から、札幌の先輩新渡戸先生が校長をされている第一高等学校にゆくよう進められたので、背水の陣を敷いて、一高一本やりで、八十人中二十七番で合格されたそうです。「その時、私が精神的に打たれたことは、人間は目標を定めて突進すれば、かならず報いられるということであつた。それ以来、私は何ごとについても目標をきめて、突進することとし、それをこんにちまで信条としてやってきた。」と回想されていますが、あの、少年よ、大志をいだけが、日川にも生きていることは実に愉悅です。今やアウト・サイダーとなった私は光栄にも招待されてあの式に参列しましたが、野尻

抱影先生や石橋湛山、内藤多仲、笠井重治、平井好一など県外の先輩に県内の方々が多数見えられ明治中期の青年の意気を示して下さつたのは実に壮観でした。東京タワーを始め耐震建築の権威者である内藤先生は昭和三十七年文化功労賞をうけられた時、体育館の記念講演で、そのモットーは、*“Where there is a will, there is a way.”* であるといわれました。平井さんの講演、「時の流れ、人の志」は残念にもきくことが出来なかったが、童顔白髪の開西汽船の前社長は、幼いころ南都留の僻村でいただいた海外への憧れを果したのであつたことを前にきいたことがあります。あの碑の陰文をかけた中村星湖氏もきておられましたが、「少年行」は明治四十年に、氏が二十四才の時、「早稲田文学」の懸賞に一等当選して有名になつたものですが、御坂峠をこえて甲府中学に学んだ河口湖畔の画才にとんだ宮川少年との交友を少年の著者の眼を通して描いたもので一種の立志小説の趣があります。Boys, be ambitious. の訳語として、氏の漢詩の起句「東西南北夢」と記し、又、大島先生ご自身の漢詩、「クラーク先生を懷う」では起句の「青年奮起して功名を立てよ」が訳語であることを、親戚の野尻さんや謝辞をのべられた令孫正幸氏がいわれたことも興味あることでした。も一度あの碑をよく読んで下さい。北大にはなくなつたというこのクラークの壮志の伝統がわが甲府一高に脈々として生きていることは、ある国語が本国になくなくなつて外国に生きているようなものかもしれません。精神は生きものです。伝統の大切な所以です。僕の学校では、直径六十三センチという大太鼓を卒業生が寄付してくれて、打ちぞめをしましたが、対校試合などにあのどうどうとした音をきいて下さい。ラグビー部が県代表として国体に出て、各務ヶ原で保善高校と同点で抽籤負けしましたが、夏も殆んど合宿し、台風のくる日も泥まみれでやっていました。彼らのスクラムをみると何か甲州武士を思わせます。伝統的眼で見すぎるせいでしょうか。

久しぶりの日曜日をなが々と書きました。もう冬の「あしおと」がきこえます。この冊子はわれわれの心の交通、ある一ときの思い出のためにあまれたものです。渡辺先生始め先生方、諸君が続けて下さつたことに感謝します。残り少ない日々を勉強に打ちこんで下さい。立志の伝統に生き、がんばって下さい。（十一月七日）

あしおと

前学年副主任 須藤 摸

あし音と云ふものは、ほんとうに個性的で面白いものだ。

あなた方の学年誌「あしおと」が始めて発行されて早くも三年に成る。そして「あしおと」はそのままあなた方のあし音の記録と成りました。あの当時は未だ見ぬ新人生を迎えるに当って、一学年担当の先生方はあても有りた、こうも有りた、いと、一学年の計画を大変慾張りに考え、毎日忙しい日をおくった事を、なつかしく思い出す。

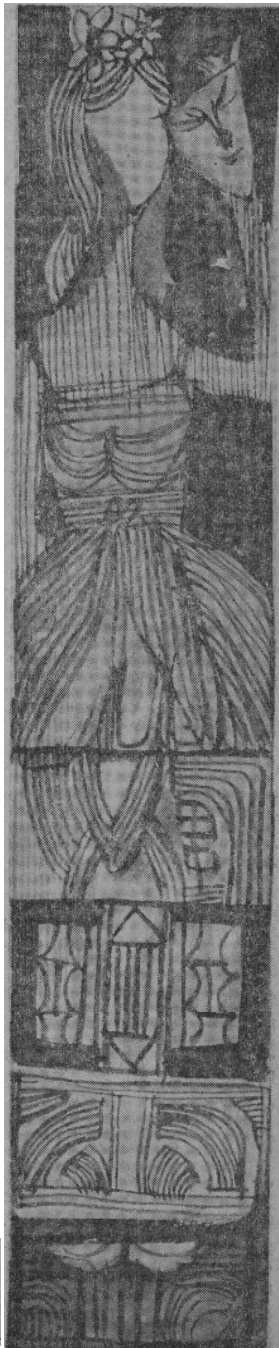
たしか「あしおと」の学年誌を発売されたのは保坂先生だったと思う。そして学年誌の銘名もデザインもあなた方の手でやるべきだと云うので募集した所某女生徒の素晴らしい図案を発見して驚いたものです。その時の名前はたしか「あしあ」とであった。それを小生をふくめた諸先生方が考えた結果「あしおと」が良いだろうと云う事に成りました。

さつ速その女生徒に二度ばかり描きあらためて戴いたのがこの学年誌に成ったのでした。内容は云ふまでも無くあなた方の大方の作品が載って居て、時にふれてそれを開けば誰の作品にも接する事が出来る、まったく素晴らしいものだと思つて居ます。私はこの「あしおと」を静かに開くと、あなた方一人一人の元氣な姿が臉に浮かんで来る。そして今もなお元氣なあし音を立てながら生活されて居ることと思ふとほんとうに愉快に成ったのである。

「あしおと」は前にも書いた様にほんとうに個性的で、そのままあなた方の学年の個性であると同じに一人一人の個性を持つて居る。

「あしおと」と云ふものは、本人が強いて意識しないのに、何か特徴のある音のするものだ。冬の夜更けなどに、かすかに聞こえる足音が隣の誰々であつたりする度に私は思ふ。

「人間と云ふものは、人生を、その人なりにあゆむものだ。そして、それでいいのだ。」と。



1

彼を乗せたブラジル丸は遠ざかつて行く。体ごとの感じで必死に手を振っている彼の姿が、私にはたまらなくうつる。

「もう、会えないかも知れない」この思いが胸の底にあつて離れない。彼が、父を呼び、母を呼び、そして私の名を叫んだ。

突然に、私の名を呼ばれたとき、言いようのないたかぶりが、言葉とならぬ声となつて私の口からとび出して行き、「もう、会えないかも知れない」という、先程の思いが、更にぶりかえし、別離という接点から、人と人とのつながりの悲しさを痛い程に感じた。

また、別離というどたん場でなければ、このような、人生における貴重かなしさを感じられない、自分の浅さを思いもした。彼の姿が、だんだん小さくなり、黒き一点となり、見えなくなり、やが、船も水平線にのみこまれるように消えてしまった時、たとえば、敗戦の兵が、しばらくの憩をとるかのように、傍の手すりによつて、息をととのえようとはするものの、このみじめさは消えるはずがなく、虚脱したような私の視線が、ふと、ある婦人の姿にあつてそこにとまった。

海しか見えない茫々たる彼方に向かって今なお 手を振り続ける彼のお母さんを見たのだ。「もう、会えないかも知れない」と言う気持は、私よりずっと強いに違いない。放心した姿ながら、ゆれ続けている手だけが生きもののようなお母さんの像に、かけがえのない一心さを見て……私の身は引きしまる。

ここにも、一つ、人生のかなしさがある。これを、宗教的な感慨と言つたら大げさになるだろうか。私は、何かに祈りたいような気持ちに沈んで行く自分をどうしようもなかった。

この一事こそ、この世の最後かと思う、その覚悟めいたもの……切ないほどの美しさをもったこの思いこそ、生きるということにつながる大切なことではなからうか。先人は言う。「人間の一生は一期という悲しい言葉につくる。その一期の中で会える人々、それは尊く、かたじけない人々だ。一度でも会うことが出来れば、これ、今生の初会で、また、とわの別れだと言う気持が、人間として、この世の真実かと私はしみじみと思うと……」

い、
思

山村鉄夫



雑草のように

森田 久子

草取りをしながら
私は思う

「雑草のように
なりたい。」 つて

踏まれても

踏まれても

いじけずに強く

生きていく雑草

しつかりと

根をはって

精一杯に

生きていく雑草

バラや

チューリップを妬まず

↓

己をよく知り
地味に生きていく雑草

人の目、人の心も

かまわずに

自分の目ざす道を知って

突進していく雑草

そんな

素朴で

力強い雑草に

私はなりたい

だれも知らない森

富岡 道明、

だれも知らない夕ぐれに

森の小枝の巢の小鳥

赤く染まってチエンチエン鳴いた

だれも知るまい

だれにもわかるまい

だれも知らない星の夜

森の小枝にかれ葉が二まい

風にふかれてヒラリと散った

だれも知るまい
だれにもわかるまい

だれも知らない風の夜

森の小枝のとなりの小枝

冷めたい風にボキリと折れた

だれも知るまい

だれにもわかるまい

だれも知らない雪の夜

森の小枝の上の雪、

枝を凍らせボトリとおちた

だれも知るまい

だれにもわかるまい

だれも知らない月の夜

森の小枝にしづくが一つ

銀に輝きボツリと落ちた

だれも知るまい

だれにもわかるまい

だれも知らない雨の夜

森の小枝の冷たいなみだ

雨といっしょにシトシトシト

だれも知るまい

だれにもわかるまい

だれも知らない森の夜

森の小枝のかなしみを

森の小枝のおちる音

だれも知るまい

だれにもわかるまい

戦いの後

山本 睦子

ブー／ ペチャクチャ／

ガチャン／ オギヤア／

地球は騒音にうめいていました。

地球は人口増加でフラフラしていました。

太陽や月は

スモッグにかすんで見えました。

ほんの一瞬でした。

何もかも溶けてしまいました。

何もかも一つになってしまいました。

歴史始まって以来でした。

人間がこんなに固くむすびついたのは、

ほんの一瞬でした。

少しの苦しみも有りませんでした。

死について語っていた思想家も、

金といっしょに寝ていた資本家も、

机にかじりついていた受験生も、

誰も知らないうちに

静かな「死」が訪れました。

ほんの一瞬でした。

スイッチ一押しでした。

パンドラの箱も溶けてしまいました。

悲しみも、憎しみも、病気も

皆消えました。

ほんの一瞬でした。

その後に平和だけが残りました。

地球がこんなに住みよくなったと言うのに

喜ぶ人間もいなければ

飛び回る動物も消えてしまいました。

いったい誰の為に、この平和が、

やってきたのでしょうか。

線の丘

矢崎 えり子

戦い終りて二十余年

赤色の激風弱まりて、

人々 緑の丘を求めつ

求めながらも求め得ず、

緑の丘は届く所にありて、

常に霧がかかりて、

人々の目にはまさやかに見えず

届かざる所にあり

すなわち

肥えたる土地もちて

心は広漠たる砂漠なる人

多しゆえなり

貧しき心もつものは、

常に闇をさまよいて、

屈曲にぶつかるのみなり

益の穀物と害の穀物を

見分けつかずして、

害多し

心豊かなるものは、

やせたる土地にありても、

常に緑の丘の上にあり、

常に、光満ちたる段階に存する

この心豊かなるもの

突如として出現したるか、

何故かありてあらん
何もあきして存すれば、
貧しき人も一瞬にして
緑の丘の上にあるらん
美稲の心にするは、
一に
心を養うことなり
汝をして汝を観ることなり
常に観るを知らねば
大海原のささ舟なり
一に
人を愛することなり
愛するは物の要なり
これみな緑の原子なり
緑の原子は霧をとき
緑の丘を目前にさせる
ダイヤを石に変えるものなり
緑の原子を飾るは安し
使うは難し
難しを難しにするは無能なり
難しを安しにするは人の業なり
業は日数にして緑の丘をつくるなり



思い出すまに

未来

功刀仁美

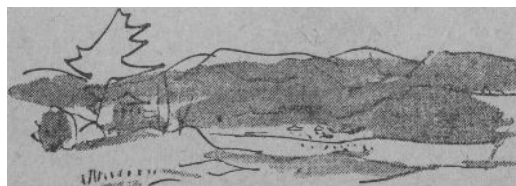
未来、それはなんとすばらしい言葉だろう。太陽が東の空から出る時金色に輝く美しさ、ちょうどそんな物ではないだろうか。過去、現在、未来とあるが、未来に希望があるから生かされるのであり、未来に希望のない人は、人生はつまらないものだと考えている人に違いない。この世に生を受けた以上、せいじつぱい与えられた人生、いや与えられたというより自分で切り開いていく人生を送らなければいけないと思う。中学生の頃、どうしてこの世になんか生まれてきたのだろう、生まれない方がよかったと思うことがたびた

生のはかなさの うちに！

浅香千代子

生きている以上気が減るのは悲しい。
だから私は、今、そういう者のためにこんな言葉を送ろう。
「いやしくも信ぜよ」と。
生きることのすべては信ずることからはじまる。如何なる場合如何なる時にあつても信ずるところから積極的生ははじまる。明るい前途を信ずることだ。大いなる希望を持つことだ。そうすれば、くじけてもくじけても、それでも立ち直ろうとするそんな意欲と情熱のうちに、生をまっとう出来るはずだ。そうじゃないだろうか。
だからあえてもう一度。
「いやしくも信ぜよ」と。
しかし、こう書きつつも、自分自身こうした自分の言葉を信じ切れぬのはどうした訳なのだろうか。

びあった。しかし今はずいぶん考えが変わった。この世に生まれた喜びを感じ、前途にある未来を想像する。これは勉学におわれている現在にとつてかけがえのない楽しい時間である。過去に生きる人より、未来に生きる人の方がより楽しい人生が送れるのではないか。過去ばかりにこだわっている人、それはなんとつまらない事ではないだろうか。過去を全然顧みないのがいいというわけではなく、あくまでも過去は未来の想像の参考として考え、失敗は直し成功はそれ以上の成功を望み大きく持つ。現在が楽しければそれでよいという人がいるが、未来はどうなのであるか。受験勉強は、未来に夢があり希望があるからするのであって、夢や希望がなければけつしてできるものではない。未来は私達をここがれの世界へ誘ってくれる。しかしこの世は不思議な物だ。ついさつきまで未来だったのがもう今では現在にそして過去へとどんどん通りすぎてしまう。私の考えている未来は、ずっとずっと遠くにある。近い未来を考えるより遠い未来を考える方がより楽しい事だ。



大学受験

内藤健司

急増期の我々は、このうえもない重荷を背負って、現役入学を目ざして一步一步前進している。この間の苦労はなみなみならぬ努力を要するもので、高校生活最後の年であるというのにんびりもできず、あらゆることを抑制しなければならない。俗にいう灰色の生活を送らねばならないのである。

どうしてこんなにも苦勞しなければならないのだろうか。皆が皆一流大学に入らなければ将来の約束がされないのではないかと考えるから、一流校の競争ははげしくなる。そして競争に勝つには何らかの苦勞が必要になってくるのであろう。

試験といえど地獄、受験勉強といえど灰色の生活、いまや私とあなたの合いことは化している。しかし苦あれば楽あり、きつといつかは楽しい時がやってきて、今の生活も思い出の一つとなるであろう。今から軒数知れない難関があるだろう。そしてそのたびに辛苦が伴うであろうが、それをのりこえた時にはじめて生きがいを感じるであろう。頑張れ。

灰色の生活が遠い思い出となる目を願って。

目標について

広瀬春男

人は皆だれでも目標をもつべきだと思う。
もし目標のない生活があったのなら、それは行先のわからない難破船と同じで、明日はどこに行くのか予測も出来ません。生きて行く事すら無意味に思えて来ます。目標と言うのは、未来に対する希望のようなものです。自分は、何カ月後又は何年後には、このようにありたいと思うそれが目標なのです。目標と言うのは、どのようなものであっても良いのです。しかしその目標に達する為の努力を怠たる事はあつてはならない。一つの目標を見定めて、それに向つて進んで行く事、これが人間の其の姿だと思ひます。たとえその目標がどんなものであつても、達成する事が出来ればもつと良いのですが、達成されなくとも、その人自身が、自分はその目標に對してまじめに考え正しい判断を得る為に十分努力したと確心が持てれば、それで目標は達成されたのと同じ事であると思う。つまり達成された結果はどうでも良いのであつて、達成す

た感じを、自分の記憶の片すみにとどめておきたい。』と。

まじめの華

自 上 未 知 子

この三年間、私は本当にまじめでした。授業中に居眠り、とんでもない。そりやあ、頭の中がぼやつとして、ぼかんとしてしまった事もあります。たぶんその方が多かったことでしょう。でも、皆さん、私がまじめだった事、認めて下さいませ。生徒総会の日に欠席する、野球の応援をエスケイブ、とんでもありません。

皆様、こんな私の唯一のふまじめお許し下さい。二年の秋、修学旅行。京都、奈良。皆さんは確かそうでした。私の修学旅行。京都、ダリ展、奈良、大阪。驚きでしょう。行きの車で、大阪行き断固決心しました。時に私の座席の前では根岸先生が居眠りをしていました。次の日の夕方、近鉄線で大阪の上六へ行き、あとはバスで。しかして私は時刻の大阪の繁華街、御堂筋の人となつていました。心斎橋、道頓堀、法善寺横丁、etc.あとはご想像にまかせませ。皆さん方がメリケ

る事よりも、その人がいかに努力し困難に替えたか、という事の方が重要であると思う。

僕の今の最大の目標は、入試にパスする事である。受験以外に自分自身から何も見出す事が出来ないのは残念な事だと思ふ。やはり人間は、こんな目前の目標だけでなく、長い時間をかけて一步一步築きあげて行くような大きな目標を持つ事が必要だと思う。

時

田 中 明 寛

時はだれからも干渉されずに、流れ去つて行く。どうすることもできない流れである。それはまことであるうか。

時間はある一定の流れではなく、遠くも遅くもなる不規則な流れだと思ふ。時は自分によつて、自分の心構えによつて作られるものに違ひない。

ある事柄に頭脳のすべてが集中したとき、一時間は単なる一時間ではない。その一時間は二時間にも三時間にも、集中の度合に比例して、その価値を増すものと思われる。

昨日から今日へ、今日から明日へ、互に関連し合い、あたかもピラミッドを築き上げる

ソ粉ばかりのしゅうまいやあやしげなタマゴ焼などでお食事中、私は大阪ずしなどほおばり、修学旅行なんてくだらないものだと思つたものです。ダリ展に行つたのは次の次の日。ペンキ屋がかいた様な彼の作品の数々にいささか失望したのですが、米人らしきがしきりにビューティフルを連発するので、笑わせるなど、思つたものです。

ざつとこんなものです。ウソをつくなら大きなウソをつけ。実は……………

すみません。ごめんなさい。申しわけありません。今のは真白なウソなのです。このまじめな私にどうしてあんな大たんなことがでさるでしょうか。が、やろうと思えば決してできない事ではないのです。たとえば、修学旅行の帰りの急行で、もし食堂車に行つて、そこに学校関係者がいなかったら、ビールを飲む事もまあできるわけです。そのやればできるかもしれない事を組み合わせたら、ちょっとしたフィクションができてしまつたのです。あまり見事なので、披ろうしてみまして。あしからず。

私はまじめな人間。お忘れなく。■

ように、ゆつくりではあるが確実に日日が移り行くとき、一日は単なる一日でない。そこに尊い時が生まれてくると思われる。

逆に、ボウと過ぐすことは、もちろん時間の浪費であらう。

高校の三カ年を通じて「時とは作り出すもの」ということを知った。しかし、物事に熱中し有意義な日を送ることは実に困難だ。今も「歳月人を待たず」のことが身にしみるが、いつか時間を征服したいものだ。

ある日考えたこと

高野孝雄

高校生活三年間に何を学びとつたか、高校生活も終りに近ずいたある日ふと考えた。
『毎日毎日を精一はいの力を出し、真剣に万事にぶつつかつてきたか、おおいに疑問点が残るような生活態度で高校生活を送つてきた自分が「何を学びとつたか」などというおおげさなことはない。ただ、他の人にとつてはあたりまえなことかもしれないが、「これからの人生の毎日毎日を全力をつくし、あとに悔の残らぬ生活態度を保持して進んで行きたい」という自分がこの三年間をふり返つて得

おわりに

斉藤妙子

最後の「あしおと」には真の自己を表わそうとしたのに……………。やはりできなくなつてしまつた。完全に言い表わそうと努力すると自己を見失つてしまひそうだし、言いつくしてしまふと真実というのは消えてしまふような気がするから。

そうは言つても何か書かないとかつこうがつかないから、他の人の言葉をかりて「あしおと」の原稿にかえる。『幸福は表現的なものである。鳥の歌うが如くおのずから外に現われて他の人々を幸福にするものが真の幸福である。』——人生論ノート——

ダンテ

松 尾 栄

「おまえの道を進め 人には勝手なことをいわせておけ」

自分で正しいと思つたことは、どこまでも自信をもつて進んでいくことがたいせつである。人があいつたから、人がこういつたか

らと、いちいちそれを気にしていたらどうだろう、何もできなくなってしまうだろう。いろいろな会合でも正しいと思ったことは、どんどん発言することが望ましい。

十人が十人、全部自分に賛成し、協力してくれるということはむずかしい。人が何とおうと自分の信ずる道をまっすぐに進めたいのだ。

強行遠足

佐野修一

「強行遠足」タイコを合図に出発する時の気迫に満ちた雰囲気を感じ、千曲川の流れを見ながら、友を上げまし、はげまされ、目的をはたそうという自分、外から見るとみじめに見えるかも知れないが、なしたげた時のあのすがすがしい気分は忘れられない。

二年の時帰りの汽車の中である人が「こんなことをしても、何の役にもたたない。軍国主義の復活だ。」といていたが、自分の精神力、脚力を試すものであり、友との結びつき、自分を試すのである。

ことしで三年目（三年生にとつて）であるが、自分の力を最大に発揮し、人生の行路を

見るつもりで、何かを強行遠足によって知り人生に役立てていきたい。

思うこと

深沢みつ子

「紀ノ川」を読んだのは一年程前でした。そこには明治、大正、昭和と急速に時代の変わる中で生きた「花」の一生が描かれています。今の新しい世の中でしだいに、いえ、もはや失われてしまっている「家」というものを考えました。そしてその中に生きた女性を。私はすべて古いものに憧れます。そして女性が「家」にとじこめられ、封建的なしきたりや家風の下に、自分を抑えている姿を限りなく美しく思います。それは単に抑えつけられているだけではない、生命があるという事です。家風というものは女によって作られるとか聞きます。卑近な例を見ても確かにうなづかれます。重く美しい「家」の中で周囲を変えてゆくのが「花」の姿であり、その時代の女性の姿であったのでしょうか。そして私達の内にもそんなものが流れているのかもしれない。

古いものへの憧れは単に少女趣味的なそれ

ータの音や、テレビ放送は実に耐え難いものだ。不快さを増進させるばかりである。こんな時には、すべての機能（人間も）が止まってほしいという気さえ起こる。

今日公害の問題が取り上げられて来ている。モター類の音、自動車の排気ガス、工場の煤煙汚染などその処理までも考えてから實際社会に活用すべきである。そんなことまで考えていけば生産は成り立たず、発展は阻止されると言うかも知れないが、一般庶民に害になっても良いはずはなく、害になつてまでして国民に便を与えなくても良いと思うのである。経済のこともまだ理解がなくこんなことを論ずるに足りないが、現左の生産は、計画性がなく基礎のしっかりしていない一時的な利益のための生産に走っているものが多いように思われる。

誰れしも経済的に許される限り、より良いもの、より便利なものを手に入れようとするのは人情である。しかし経済的に余裕があるからと言って、我れも我れもと盲目的に物を買う入れるのは良くないことだ。

近年特に普及して来たものに自動車とテレビがある。

自動車について考えてみると、各地に自動

ではなく、あくまで慎しい、そして押えつけられたゆえにかえって美しく女らしくそして強く咲いた生命への讃美であるのです。

現代をすべて否定するのではありませんが、とかく現実主義的になりがちな私達が、こんな事を振り返ってみるのもむだではないと思います。この本を読んだ後、なにか清らかな惧しいそれでいて力強い流れを感じました。いつまでも大切にしておきたい思います。

私

古屋美樹子

毎日月を見ているこの頃、ふと「ああこの日はもう内山で見たのと同じぶんかわつてしまった。同じ月のはずなのにずいぶんへんなようにみえるものだ。汚れてる。」と思つた。月ばかりではなかった。私自身もかわつた。私は大嫌いな私になつていた。あの内山で私は何もかくさなかった。ありのままの自分になつて暮した。中学の頃の私と同じだった。それなのに帰ってきたとたんに、その小さなかけらも残さずにもとの一高生となつてしまった。どうしてかはわかりかけているのに、それをなおそうとしない私は今自分の未

車教習所が造られて多くの人が免許を取るために殺到している。心配なのは道路である。幅は狭まぐ、雨が降ると水たまりが出来るような道路が実に多い。果たして自動車の生産に、道路の整備がつり合つて行けるかどうか疑問である。このまま生産が続けられ、自動車を購入する人が益々ふえていったらいったいどうなるだろう。

〇〇横断道路とか、国道××号線とか呼ばれるものが年々造られて来ている。その度に多くの農地や山林が買収される。日本においてはアメリカのように国土の広い所と異なつて車の台数や道路の延長にも制限があると思う。将来のためにも細心の計画が必要である。少々不便でも歩いた方が良いではないか。

テレビは多くの知識を与えてくれる。それは細切れで、受動的なものだ。病気で家にいる人にとっては最大の便を与えてくれるだろうけれど、健康な青年が多くの時間をテレビを見るために費すのは感心しない。住む家さえ満足でない人達がテレビを買ひ求めるといふのは、見栄や虚栄、あるいは他の一切の不満を、これによって晴らすというのであろうか。

過日佐藤総理大臣が沖繩をおとすれ「放送

変わらぬチョーク

と黒板

吉田成美

真夏の星さがり、付近から聞こえてくるモ

設備の拡充」という事を言われた。この事が第一の問題として取り上げられるべきだとは思われない。放送を通じて本土との距離を縮めようとするのだらうけれど、テレビの画面を通じてそのようなことは不可能である。近代文明からとり残されないためには確かに放送は重要な役わりを果たしている。が、放送は一方的であり、実感がなく見ている者とは関連性はない。もつと生活の基盤となる大きな問題があるにちがいない。政府は、企業は、偉大なほどに進歩している放送技術によって国民に恩恵を与えているかのように誤解しているのではないか。このような政策は具体性があり、行政の上でさほどの障害となる問題を含んでいないし、国民の弱みに付込んだようなものだと思う。

月ロケットの飛ぶ近代文明の中にあり、以前から気になっているものが一つある。学校で重要な役わりを果たしているチョークと黒板だ。これほど利用されていてずっと以前から何んの進歩もないのはおかしいことだと思う。手は汚れるし、白い粉はあたりに散り、書いたものをきれいに消す努力がいるし、その黒板ふきをきれいにするのもまた根気がいる。改善する余地を十分含んでいる。

A への手紙

鍵市 昭

受験勉強に意義など無い。

こう言うとお前は慌てて反駁する。「ある目標に向かって死にもの狂いで努力する。素晴らしい事じゃないか。」一体何が素晴らしいのか。猪武者のように突進する馬力が素晴らしいのか。お前は付け加える。「大学に入れば、楽しい学生生活、真理の探究が始まるのだ。一年ぐらゐの辛抱がなんだ。」よく言われる事だ。まったくもつともだ。辛抱しなくてはいけない。

しかし、そうすると、この一年間の勉強は辛抱であるのか。一日中水を飲まずに我慢したり、一週間断食してみたりする。あの努力と同じものなのか。俺はそんな考えはまっぴらだ。この俺の若さは、創造のためにあるのだ。お前はまた言う。「そんなに焦るもんじやない。僕は今、基礎を築いているのだ。」なるほど。だが妙な基礎造りである。ラッセルの「幸福論」を読みたいと思っても、ラッセルの文なら、英文和訳の参考書にごまんと載っている。それ以上読んだところで、そ

利用する人が考案しない限り改善されないだろうし、利益があがらない限り生産されないだろう。チョークと黒板の存在が、近代文明の不均衡を象徴しているかのように思われる。

雲

長田 亘

空は晴れていた。雲は白く西の方にあった。雪もまだらに残っていた。道は所々ぬかっていた。私が小学六年を町の学校で迎えるため山を下ることになった。六、七十人の人々が集まって来た。私はリュックを背負って長ぐつをはいていた。私の友達も数人、男の子や女の子も来てくれた。一番親しかった二人はまだ暗いうちに二キロ近く離れた上の社宅を出て、先に来ていてくれた。太陽が登りきった頃一人が聞いた。私に先日贈った本は持って来たかと。それでやつと私は思い出した。それを少しは読んでいたけれど、いままで接して来た本より難解だったし、おもしろ味がわからなかったので、机の引き出しへ入れておいた。そのまゝいそがしさに忘れてしまっていた。取りに行くには走って十分はかか

れほど点が取れるわけでもないからやめる。

「戦争と平和」を読みたい。しかし「戦争と平和」の訳文が、現代文の問題に出たなどとは聞いた事がない。それに「戦争と平和」は長すぎる。そこで小林秀雄の、それも細切れ注釈付きのを読む。その方が点が取れると言うから。

俺は受験勉強の意義など認めない。認めないが、それをしないと大学に入れないから勉強する。お前は俺の態度を非難するかも知れぬ。なるほど俺は卑怯者、臆病者だ。小学生の時、「挙手をするのに、まず回りの者を見てからする。」と、よく教師に叱られた。

しかし、家庭の事情で進学を諦める者が、皆と一緒に大学へ行けない事を嘆いても、其の学問が出来ないと言つて嘆きはすまい。口で何と言おうと、心中では必ずそうなのだ。俺の組に、勉強がしたくて、したくてたまらずに大学へ行くと言ひ得る奴が一体何人あるだろう。それに、お前はどうかのだ。もしお前が「僕は真理探求のために大学へ行く。」などと、殊勝顔して言つたなら、俺は大口開いて笑つてやろう。お前は俺に言つたではないか。「数学が嫌いだし、法律、経済はどうも受ける気がしない。それに、文学部は合格

る。母に聞くとあと五分で行くと言う。

下りだけでも六キロの山道を前にして疲れるのはいやでもあった。確か表紙の裏の名は彼ではなかったと思つて聞くと、兄の名だと言つてうつむいた。あと一人の顔は霜焼け気味で赤かった。言う言葉も思い付かないままポケットに手を入れ、足もとの石をそれぞれ長ぐつでつついていた。やがて父が出かけると言つた。木々の間を振り返り振り返りしながら走るように去つた。大きな期待をいだいて門出する私にとって、案ずるに足りない出来事だと思つてみたりしたけれど、それは間違つていた。三、四年して三、四度目の手紙が来た時、その事を思い出した。そしてその晩夢を見た。あのと二人が空家に忍び込んで本を捜し出して、さみしそうにそれを持ち帰ったという苦しい夢だった。その後手紙をやりとりすることもなくなつてしまつた。

彼らは高崎の高校へ行つたのか、それとも東京へ就職したのか少しも知らない。私はあの時いだいた志を得られないことよりもそれ以上に、旧交を暖める機会の得にくくなったことを悔んでいる。

■

点が低いから。」と

入試制度を肯定するのに、中国の科挙を持ち出してみたり、アメリカにもイギリスにも共産主義のソ連、中国にも入試制度があるなどと言う奴が居る。そのうち、米、英、仏、ソ、中は言うに及ばず、インドネシアまで原爆を持った。是非、日本も持つべきだ、などと言ひ出すに決まつている。そんな奴は豚に喰われる。誰が何と言おうと受験勉強に意義などない。入試制度よ滅びろだ。

文句があるか。あつたらまた手紙をくれ。では元気で暮せ。

通学

小川 一郎

「行つてまいります。」といつて家を出てペダルをふんで一路石和駅へと向かい、そこから電車で甲府駅へ今度は歩いて学校へというのが何か年かのかよいなれた道である。もうこの普通学道路は椅子にすわつても、あるいは蒲団の上に寝ころんでいて目を閉じても、その通路をくつきり眼前に浮かぶ程になつていくくらい通いなれた道である。

春うららかなころ、田舎の田圃道を自転車

で通ると、ひばりが麦畑の中から鳴いたり飛びだしたりするのがみられる。新学期も始まって何日かたつと、黄色い菜の花畑に蝶々という光景はもう見られない。晩春から初夏にかけてと蚕のはじまり、忙しくなる。農民達が、蚕のえさになる、通行の邪魔をする桑の葉を摘むといった光景もある。もう少したつと田植えの季節である。ところどころから何ガエルだか知らないがカエルの合唱が、あるいはまた耕耘機のダツダツダツという音が聞こえる。七月にもなつて暑くなると桃の時季である。あちこちから採取してきたティラーに行きあう。いい色いい形である。そういつた快適な気分を味わいながらペタルをふんで石和駅に着くと待っているのが板張りの満員列車、電卓である。不快な気分を味わうこと十分間やつとのおもいでおろされて、歩くこと、歩くこと十五分整前として舗装された道路を黙って歩く。同じコースをもう一度。帰る時になると電車はわりとすいている。車中で疲れがみられる者もあれば元気なものもある。騒々しい車中である。夏帰る時の自転車のペタルは重い。田圃の泉の水をのむ？その辺の桃をちよつと一つばかり拝借したくなる？帰る時はそんな気分である。

その翌朝大阪を立った。京都大阪の人は皆親切だった。京都の人はその上ゆるやかな口調なのでなおさらであった。

日の落ちた甲府の町はみすばらしかった。何の伝統も発展も感じられないごくつまらない町に見えた。しかし見慣れたこの町にはやすらぎがあった。

ある日突然に

望月孝之

そこは時間という観念のない世界。過去と未来の世界だった。

私はわずかにそこだけ樹木のない、暗緑色の森の中に立っていた。生命のない、世の果てを思わせるような世界である。鬱蒼とした樹木が、雲でできた細く遠い道に暗影を投げている。一本の高くそびえている杉らしい幹をみつめると、目の前が半透明にけむつてしまい、判然としなくなつてしまった。それは木という具象形をそなえた、冷たい巨大なもの、近寄りがたい厳しさ、というようなものを感じさせた。私にはこの未知の世界が全然わからない。記憶をたどろうと努力したが、私の記憶は断ち切られていた。

これは気候よいころである。寒い冬など自転車にのるはいやだからバスに乗って通学する。冬のバスはこむ。舗装された道路を通るバスに乗ろうとすると、四十分たつていなければならぬ。仕方ないので悪路を通つての毎日である。胃下垂にでもなりやしないか、そんな心配も起きてくるこのころである。雨や雪の日はいやだ。バスがこんで車内はむしむしして、遅刻しなければならぬ。雪の日などはバスが十分から二十分おくれ、そして道がわるくなつて苦勞させる。

こんなことを何年かくり返してきたのである。「ただいま」といって、戸を開けて家の中に入る。これで一日の通学が終つた。

旅

山尾久義

この三年間で印象に残つた事は沢山ある。その中でも去年の春休みに、姉の居る大阪へ一人で行つた事が印象深い。姉の結婚式には高校入試で行くことが出来なかつた。そこへ行くのは初めてだった。一枚の地図を頼りに甲府を出た。こんな旅も又初めてだった。東海道線では大阪まで立ち通しだった。そして

何か外きつと起こるという胸騒ぎに苦しんでいる心をおさえるように、そつと腰をおろし、じつとうつむいていた。不安はますますつのつてゆき、その絶頂にたつた。そのとき、突然に、気がなく沈滞していた大気がどよめくと、しっかりとした声が、私を嘲笑するかのように語りかけてきた。彼は多くのを無言のうちに私と語り合つた。

「君は私につれてこられたのだ。

君が正義、真理、愛、清澄さの

偉大な心情を持つために／

さあ／私と歌え。」

静かだった森が、交響曲を生み出していた。

生の炬火を輝かして

虚無へ戦え

若い血潮と自由な心、豊かな愛をもつて、さあ立ちあがれ、真理のために

聖なる目的はまだ遠い力の限り汝の舟をこげ。

永遠の平静

永遠の戦いのうちに。

無事姉の家に着いた。翌日大阪地図一枚をもつて、まず梅田地下街、大阪駅付近を歩き回つた。御堂筋を南に降りた。金融関係やその他のビルがたち並んでいる。とても明るい清潔な感じだった。そして自分一人で歩くことに快い感じを持つたり道頓堀は食べ物と遊びの通り、心齋橋は、屋根付きの商店街が長く続いていた。それからその頃よく歌にでた、通天閣に上つた。大阪市の全貌を見渡すことができた。大都会はすばらしいと思つた。

次の日京都へ行く四条河原町で降りた。京極に入つたが、昼だったので雑踏は全然なかつた。八坂神社から国道を下り豊国神社、三十三間堂を見て東本願寺に着いた。お堂の中はひんやりとして暗かつた。ろうそくが静かにもえている。信者らしい人が座つて拝んでいる。私も目をつむつた。身が沈んでいくように感じた。正面上部に「見真」という字が貼つてあつた。何か宗教的にむずかしい意味を示すらしい。隅には「毛綱」があつた。女性の最も大切にする黒髪を信仰のためにささげられたものだが、信仰とはそんなに強いものかと驚いた。西本願寺についた頃は、夕暮れとなつた。夕焼した京都の町は又きれいだつた。姉の家に着いた時は、もう暗くなつていた。

すべてが、一様な光の中でみえなくなつた。再びすべてが現われた時、私のうちに、非常に苦しい戦いが待ち伏せしているように感じられる。未来に対して、大きな力が湧きあがつてくるのを意識した。

空を見上げ、深呼吸をすると、心の中に、力強いリトムを持つた歌がくり返されるのを感じながら、あとをふりかえらずに、一直線の道を、しだいにはつきり聞こえてくる歌の方に向かつて、明るくなつてきた空のもとを駆けていった。

たけり狂う嵐の丘に

虚無や頼魔との戦いの丘に

一高生気質

古屋郁夫

ある日、寢床に入り、あの日希望に燃えて入学してから三年と七ヶ月、早い実に早いものだと思ひにふけていると、頭の中に一高生活の回想といつしよに「一高生気質」というようなものがうかんできたので、ちようど「あしおと」の作文を提出する期日に迫っているの、これについて書こうと思ひ鉛筆を

とつた。

三口でいつてしまえばいわゆるエリート意識をもち、やや無責任で、自尊心が高く少しわがままな点があるがその反面常に自己をみうしなうことなく、自己を真剣に考え、みづめようとする心がある。それから一高設立以来八十五年間に築かれた伝統的な開放性をもっていることである。

まず「エリート意識」であるが、その程度はともかくとして、多かれ少なかれ大部分の人が持っていることは否定できない。ある先生が「全員入学のようにほとんどの者が入ったのにエリートなんてとんでもない話だ」とおっしゃったことを記憶しているが、その時はみんな笑ってすませたが、実際にその通りである。心のそこからの愛校心というよりはむしろ伝統の上にあぐらをかいているような気がする。しかしいちおう山梨県の名門校である以上ある程度の「エリート意識」を持つことは許されよう。ようは程度の問題である。

つぎに無責任ということであるが、考えてみるとよく掃除をさばったものだと思う。しかし週番制が実施されてからは、掃除をよくした二年の時、「最優」をとり、H・Rで先

生にはめられもしなかったが、一応話題に出たことを記憶している。

週番制といえば、生徒総会でよくもめたものだ。賛否両論はげしく議論されたが、結果は週番制廃止案が可決された。しかし、その後どうなっているのかよく知らない。

さて、ほめられるべき点は、前にも述べたように、自己を真剣に考えることだろう。

端的な例は、大学の先生方の講演を聞く態度である。みんな大学受験をまえにして真剣そのものである。三年が一番真剣、つぎに二年一年の順。一年の時講演のあとで「二年が一番態度が悪い」と叱られたことを記憶している。

しかし同じ講演でも消防所とか警察署の人となるとまるで雰囲気が変わってくる。このへんにも「一高気質」がよく表われていると思える。

まだ拾ってみればたくさんあるけれど、枚数が限られているし、眠くなってきた。よくまとまらなかったが、これを明日提出しよう／

暴力否定

数野利夫

もし君がタクシーを拾ったと仮定したま

力否定についてどう感じたか？どんな場合でも暴力を否定しなければならないか？。

見栄

織 岡一 夫

を払って満足して帰っていった。さて皆さん。この事件の中に何かを感じませんか。見栄——金を払った優越感——を。

この一見奥ゆかしそうな譲り合いはしかし裏をかえせば見栄の大きなかたまりに過ぎないのです。又このような事は、この例に限ったことではありません。日常茶飯の事です。

どうして人はこれに注意を払わないのでしょうか。これを感じる主体がもうないのであるうか。又どうして人は見栄を張るのであるうか。見栄を張って矛盾を感じないのであるうか。このままでは、この世は、虚偽でこりかたまってしまわうでしょう。これでは世の中は悪くなつてゆくばかりです。これではいけない。見栄は決してよい結果を生まないのだ。見栄を張る人は後になって自己の矛盾に苦しむだけなのだ。皆、めざめよ。おさなごを見よ。彼らは決して見栄に汚れてはいない。皆おさなごのような素直な純粋な心を持つ。そしてこの世を真実で満たそうではないか。

半蜘蛛思惟記

秋山安彦

凡人

え。君の行く先はタクシーの方向と逆であつた。方向転換をするのにあたりがたいへんこんでいた。前からダンブカーがきたのであわててバックした。そのひょうしに何かにつ

かつた。この運転手は運転は上手ではなく気がきかない。まあ、その場は何とかうまく走り出した。すると後ろから一台の空タクシーが並行して走り運転手が「止める」とどなつた。両車同時に止まり口論をしいはじめた。どうやらさつきぶつかったのはこの空タクシーらしい。相手の運転手は大男で強そう。こちらの運転手は小男で優しそう。しかしこの小男、口先では負けていなかった。そのうち大男は二・三回頬を殴つた。君は見るに見かねて降りていく。君は正義感が強いからね。そして小男をかばってやつた。大男をにらんで「一方が口で言っているのに殴るとはなんだ。暴力を加えるとはけしからんではないか。」大男は嫌な顔をして「しかしこの野郎自分が悪いのに理屈ばかり並べやがって、俺の正しいのはキリストさんでもちゃんと知ってる。」いや、それでも絶対暴力はいけない。」「殴つていけないならば俺は損をするばかりだ。」「いや絶対暴力はいけない。」そのとき大男はアツといった。小男のタクシーが君をおいて行つてしまったのである。君は暴

狂人と天才は紙一重。では僕等凡人は一重の間のミクロの世界に住まねはならぬのか。

偽善

もつとも人間的な、高貴な、崇高な行為であらう。偽善は欲という露払いと人間という太刀持ちを従えて、人生という土俵で勝負する。

斜陽

彼が没落したのではない。他の輩が成り上つただけだ。

悪事

僕等は悪事に対して非常な憎悪を感じる。それは他人が自分の出来ない事をやったからである。

格言

格言とは処世の術を形容詞という着物で美化した偉人と呼ばれる人の寝言にすぎない。しかも彼等は永久の眠りに着いているので発言責任を問はれる朝は絶対に来ない。

キリスト

人類の歴史上、キリストほどの人はかつて存在しなかった。彼がおらねばローマの闘技場は子供達の遊び場と化しだろうし、十字軍の兵士は足に豆を作らなくてもよかつたらうに

痴愚

彼等の目を見給へ。僕は自分の目を閉じたくなる。君なら己の目を挟りたくなるだろう。

竜安寺

知識人、教養人が一度は行く所である。彼等はその庭に無闇に感心するらしい。しかし考えてもたまえ、たかが中世の庭師が気まぐれに作った砂遊びではないか。だが矢張彼等は立派な教養人なのかもしれない。それが証拠には彼等は二度と訪れることがない。

成功

僕等は皆、人生における成功を欲する。しかし全部が成功者になったら、伝記文学などは地上から姿を消してしまう。

死

死は第二の人生のスタートかもしれない。しかもそれは本体の無い人生であろう。故人はさがない世人の口によつて、安住の世界から無理矢理に現地に引き戻される。彼等はあらゆる手段を講じて彼の過去を美化して来世の幸せを保証する。死して名を残した彼は、俗世の人間によつて永久に監視されねばならぬ。かくて彼の哀れな魂は現世界とあの世を漂うほかない。

運命というもの

小菅和仁

期末試験も終つてホッとした初夏の午後のことだった。校長先生が久しぶりに教室に来て「運命」についての話をした。現在のうちに落ち着かない、そして何かにとざされたような毎日の生活の中で「運命」などという問題について真面目に考える余裕もほとんどの人がないだろうと思います。事実僕も今まで真剣に考えたこともなかった。先生の話を聞いて始めて運命の存在の有無について考えている人もいるのだなと思つた。僕には運命とは誰にも理解出来ない不足なものとして自分を取り巻く未来に起こるあらゆる事柄であるという程度のことしかわからなかった。中学時代「死」についての不安や恐怖を考えさせられたようにこれも考えれば考えるほど理解に苦勞する。運命には様々な感情が伴なう。先日「山野鉦未亡人」というタイトルのテレビ映画を見た。この事件は実に悲しい運命である。人類の力はすばらしい。人類の力によつて地球上のあらゆる問題は容易にかたづけられる。しかしこれだけはいかに才能を持ち合

わせた学者も計算でもするように確実な解答が得られるわけでなくほとんどダルマ同然となる。このように理解に苦しむ問題があるからこそ人間は進歩するのかもしれない。次に先生は外国のある人が言つた言葉を教えてくれた「運命を理解するということは自分をいかに理解するかにある。」

生きる喜び

今村 一也

勉強も終り床に就いてある詩集に目を通して見ると、その中にさし絵としてミレーの「晩鐘」がのっていました。この絵は幼ない頃から自分にとってなじみの深い絵であり、又だれにとつてもそうでしょう。しかし絵についてまったく無知である私はそれが真に意味する事もその芸術的な価値も何もわからないゆえ、いままでこの絵を見ても又その他の絵を見ても何の感情も湧かなかつたのです。しかし今はこの「晩鐘」を見て確かに特別な感情が湧いて来るのです。それは一瞬「ドキッ」とするようなものでもあり、急に自分をやるせない気持にするようなものでもあります。それは自分の生活に欠けているす

べてのものがこの絵の中に含まれているからです。一目の労働を終つて、その一日を送らせてくれた事を神に感謝するその瞬間はなんと生命にあふれている事でしょう。なんと充実した生命なのでしょう。このように一日一日を充実して、けじ目をつけて生きて行く事ができたらなんとすばらしい事でしょう。しかし残念な事に自分の生活からは少しの充実も見出せないのです。どんなに勉強に追われても、どんなに仕事におわれていても決して一日をおろそかにしてはいけませんのです。一日の終りにその日を振りかえり生命の充実感を感じる事ができるように。そして思いたいです。「生きて行くつてすばらしい事だなあ。」と。

明日は明日みずからを

思いわずらわん

一日の苦勞は一日にて、

足れり

—聖書—

忘れじ

浜 佳寛

覚えてゐるよ、君はとても寂しかった。俺

達は雨降りだったあの旅の話に花を咲かせた。飛び出す言葉とともに花びらは散り落ち話題のつきると同時に、その華やかな姿はみじみもなくなった。話の問だけの、つかのまの友だった俺達だったが、君と俺は互いの心うちにあとにただ一つ残つた素朴な果実を共存した。忘れないよ。雨にぬれた駅前の舗道に、噴水と、街のネオンが交錯して映つていたのを。あれから、もう君は二度の誕生日をむかえたね。月日のおかげさ、君もしいに俺の理解の袖を握ることができたな。一見とりつきにくいブライドの高さと、どちらかといえは気弱な余りおこることを知らない、

可逆性をもつた俺達だから、そんな君と俺ゆえに人間の平衡も、多少の外的条件による移動はあれ、保つことが出来るのかもしれない。ああ。楽しかった思い出は、あの夏の、君や俺達といった旅の現像さ。きつといつになつても、目をとじれば、楽しさという名のレンズを透して、あの沼の深い青さも、湖の対岸も見えぬほどの広さも、噴火によつて三分の一も吹き飛ばされた山の雄々しさも、早朝の駅で体を温めたそばの味さえも、又金つきて城跡から千曲川をながめた遊子の寂しさまでがありありと浮んでくれるだろうな。

俺達は邂逅のゆえ、未来につながる喜びと共に、一個の人としての新たな寂しさも見のがせないな。いかに労しても、デミアン・シンクレルにはなれそうにないからだよ。しかしそれゆえに互いに異な未来へのいのりはそれぞれ大きいんだろな。

思うことは「確実さ」風体はどんなに変わろうとあの実だけは、これを内から排出しようとする思想も他の何物も持ちたくないということだよ。張り始めた根を大切にね。

続々冥想

村松賢夫

Logic inevitably is the love of Logic.
It is not the love for living human beings.
Money and women logic intimidated
scampers off preciously. Learning is
another name for vanity.
It is the effort of human beings not to
Be human beings.

このことばを見出したとき、私は言いしれぬ感傷に襲われた。次の瞬間に於いてこれは私をして、それがたとえ一時的なものであるにはせよ、学問に対する全ての努力を遺棄さ

せ、かつ又精神の葛藤をも生ぜしめたのである。私は、しかしながら、此の言葉を以ってしてそれに因つてひきおこされる避け得べからざることの批判をしようなどとは思はない。何故ならば社会的自覚よりみるに、それは現在の私達の力ではどうすることも出来ない問題なのだからである。かといつて私達にはそれに対しての傍観者たる立場は与えられない。

では個人的自覚から出発するならばどうであらうか。即ち学問とは私達をして、成功者たらしめる必須的要素であり、又自らの稟性を肥握することに、いささかの抵抗を感じている私にとつて安易なそれは或る心の慰めにもなりかねないものである。しかしながら私も又それに困つてひきおこされるだろうところのその種の傲慢と虚飾は絶対に許され得べきものではないと考える。なんとすればその学歴のみを銜うことにより虚無的閑達たらしめんとすればなり――。

人はいさ心もしらず、私にはどうしてもわりきることができないのである。

思うこと

小野信子

毎年どこからともやってくる鶯が、今年も春を連れてやってきて、自慢ののを披露しました。その声とともに、草木は一斉に柔らかな若緑の葉をつけました。美しい生命の躍動が始まったのです。

私の窓のすぐそばにある柿の木もかわい葉を沢山つけました。太陽の光が強くなるにつれて柿の葉は、その緑を増してギラギラと太陽をはねかえす程強く、たくましくなつたのです。そして、今は九月。柿の葉は早くも赤く色づき始めてしまいました。この窓辺にしばしばやってきた紋白蝶や揚羽蝶、それにすばしっこくて、おすまし屋の塩辛とんぼは今頃どうしているでしょう。

いつもいつも、朝早くから暗くなるまで飽きもせず遊んでいるのはすずめです。彼らはようやく色づき始めた柿の実をつつくのおおわらわで私の事なんか知らん顔です。でも彼らのかわいい動きを見てると少しも退屈しないんです。雨が降ると彼らは小さな雨宿りの場所を見つけて、体を休めて、また暗い

無心

▼ 戸栗礼子

「あなたはどの様に生きたいのか。」という問いは、今の私にとってあまりありがたくない。なんともなしに毎日を生きているのであるから。言いのがれに私は言う「純粹に生きたい。」と。……………私はよく赤ん坊の『無心な笑い』に感動する。『誕生』とは自分の意志によって力強くなされたと思じた私にとつてあの笑いには、生命の喜びがあふれていると思うのだ。又、人間の純粹さの象徴だとも思う。しかし社会や人間同志の争う醜い姿を知りはじめ、それにもまして汚れて来た私の心は、もはやあの様な全くの無垢にはなり得ぬのではないかという恐れもつきまとうのである。それなら『死』は、人間にとつて何を意味するのか。私もやはり理想主義者であつた。死は無になることだとは思いたくないのだ。人間には滅亡の悲哀を味わうための生涯の努力しかないとしたら、あまりにも悲しいと思うからだ。本首をはくと私にとつての死は、恐怖しか意味しないからその救いとして無理やり信じるのである。「死と

雨の降る空に飛んでいきます。でかける前おしやれな彼らは身震いをしたあと丁寧に羽をそろえて、ちよつと空を見上げ、一瞬ためらつてまた元氣よく飛び立つのです。

雨があがりました。雲のかかつていた山々もくつきりとその姿を現わしました。ふと気がつくとき、見たこともない殺し屋スタイルの其黒な猫がじつとこちらをうかがっているのです。その黄色の目が怪しく光りました。ぞーとした私は思わず「シッ、あつちへ行きなさい」といいました。するとどうでしょう。彼は不思議そうに小首をかしげて私の顔を見るのです。そして尾を振るではありませんか。私は、彼を疑つたことを本当に恥ずかしく思いました。彼もやつぱり私の友達なのです。

夏の間中泣いてばかりいて私をこまらせた蟬君も、遠い遠い族に出かけてしましました。秋の夜は、コオロギさんがセレーナードを奏でて私を慰めてくれます。

みんなみんなかわい友達はつきりです。おやおや、今度は、いたずら小僧のムクチンが「遊ばー」一ツてキャンキャンなきだしました。

ほ人間の完成された姿だと。……………しかし私はまだ完成された死を願うなどという境地には、とても達していない。それ以前のすべてのことがなつてないのだからとても無理というものだ。まだまだ遠くに、そつとしておきたい問題である。

「純粹に生きたい。」ほんとうはこの美しいことばに魅せられているにすぎないのではないかと、自分で疑つてみたこともある。事実、私の気持ちの中には多少の少女趣味的感傷が含まれている。しかしながらすべて感傷だと言い切れないことも確かである。あの空虚さは私自身へのさげすみからである。雰囲気には踊らされて自分の行動に、人のものではないたつた一人の自分の行為に自信が持てないのである。そこで私はいつからか「自己に純粹に、素直でありたい」と願うようになった。この社会に生きている以上、思うとおりにできないことも幾度かあるにちがいないが、どんな時でも自分に素直であつてよいのだと思う。無心の微笑の美しさはいつまでも持ち続けていてよいと思うのだ。このままことなかれ主義の大人になつてはいけくないのだ。未熟な若者がかない夢を見、たわごとを言うことを、もう少しの間許してやつてほしいのだ。

無題

小林正吾

人は他人に注意を与える場合にだいたい自分のできなかつたことを言う。他人に対する注意と共に、自らをも戒めているのだらう。

その意味でも……………。

「『あすはあすこそは』と人はそれをなぐさめる。」

とはツルゲーネフのことばである。

「おかあさん、僕、あすから朝早く起きて勉強するから、必ず五時に起こしてね。」といったながら寝ても、朝になると、「ゆうべおそかつたからきようはやめるよ、あすからは必ずおきる。」と、こうして結局いつまでたつても、「あすは、あすこそは」で終つてしまう。せめて「きよう」ベストを尽くしたうえで「あす」をたよりにしたいものだ。

「あす」「あす」といつているうちに、その「あす」は墓場につながっている。ようし、「きよう」はこの原稿を書いて遅くなつちやつたから「あす」からは一生懸命やるぞ（？／）。

告白

田口英一

これを單なる恋の告白と取られては困ります。これだけははっきりさせたいと思うことを書くのです。これは、僕のあなたへの結婚の申し込み状です。そうして、そのあなたとは僕自身でもあるのです。

僕は、一口に言つて極く普通の、常識的な人間の典型にすぎません。あなたのように一生懸命にがんばった時もありました。今だって、やや消極的ではあつても向上しようという努力はしているつもりです。が、しかし、現在の僕以上には進歩しそうもありません。あなたは言いましたね。――人間には無数の手がある。そのいくつかは良い手でありいくつかは悪い手である。輝かしい未来を指し示す手。不正に誘う手。それを押える手。深刺とした手。だらしのない手。そんな手がいくつあるかわからない。大切なのは「自分の持つてゐる手を正しく知ることである。――と。賛成です。自分の手を知らないことは手が悪いの原因になります。勿論、人間の手の数には限界があるでしょう。人によつては

その数も質も違いがあるにちがひがありません。そのため、各人が自分の手を知る必要があるのです。今、僕は限界と言いました。それがあるだろうということを僕は否足しません。その限界は、しかし遙か彼方です。全部の手を有効に使うようになるのは、人間がもっと成長するずうっと未来のことです。今問題となるのは、哉々が極く僅かの手しか使つていないこと、使うべき手を使わず、使つてならない手を使つてゐるということです。だから、あなたのように自分の手を知ることが必要だと思ふんです。でも、現実問題としてむずかしいことです。人間共通の手は、決して好ましい手ではないのですから。僕自身、意欲の欠如という非常におもしろくない手をもっています。それを認めてから随分たちますが、それを直そうとする前に諦めてしまふ「正に意欲の欠如。なさけない話です。しかし、我々が発展していくには、どうして人間自身が脱皮するより他ありますまい。人間性と文明の均等な発展。それがなくては人類のこれ以上の発展は考えられません。我々に与えられた課題です。だいが話がそれてしまいました。でも、あなたに僕の考え方すべてを知つてもらいたいです。どんなつま

くれたまわりの景色もなく、ちつぽけな私でさえも、その中で大きな位置を占めてゐるのかごく充実した時間でした。

「性格について」 というテーマで、私なりの意見を先輩と交換し合つたのですが、何を言つたのかあまり覚えていないのが不思議です。でもその中で一つはつきり覚えてゐるのは、一体性格とは中に潜んでゐるものをいうのか。外に表われたものをいうのか疑問を持つたことです。大勢の人の中でとてもにぎやかに、心の底から楽しくふるまつてゐる人がいます。その人が一人きりになつた時、とても陰気にふさぎ込み、考えごとばかりしてゐるとしたら、私たちはそのどちらを取つたらよいのでしょうか。私は外観だけで人を判断してしまいがちで、後で幻滅を感じたり、思わぬ良さを発見してハツとするのがしばしばです。こういうように、相手に真に理解されなければ、その理解されたところまでがその人の性格になつてしまふのです。ある人はその人が陽気だと言ひ、別の人は陰気だと言ふかも知れません。でもそれだからこそ人生が楽しいのかも知れません。あの形一つで、歩き方だけで、すべての性格が裏表なく解つてしまつては人生は味けなすぎます。

なぜなら、それでは大ききやきずのつき具合でより分けられる、何の意志も持たないくたものと同じだからです。……………
手すりによりかかり、快い風にふかれながら真剣に語り合つたあの時、感動で涙がこぼれそうになつた私。無数にちらばる星、キラキラ光る夜空の星に、ちよつとオセンチになつたあの時のことが、今たまたなくなつかく思い出されるのです。

無題

武藤行子

よく入試に必要な授業はきちんと受けて、いろいろな科目のときは眠つたり他のことをしている人がみられます。人は千差万別ですからそういう現実的な考えもむろんあつてよいのですが、私にはどうしても肯定できません。最近特に強く感ずることは、新聞でも、人と人の対話でも、あらゆる方面の知識が必要なのだということです。歴史だつて化学だつて芸術に関することだつて、また家庭科で学ぶようなことだつて、みな一つの会話に必要ななるでしょう。(会話で恥をかかないためなら、むしろこの考えの方が現実的かもしれない

らないことも、みんな知つてもらいたいのです。あなたの崇高性に比べ、あまりにみすばらしい僕ですが、あなたに、良い点、悪い点をすべて認めてもらいたいのです。現在の僕が終結ではなく出発点となるように、僕のすべてを認めてもらいたいのです。この手紙をこんな風にするつもりはなかつたのですが、頭が混乱してしまつたようです。とにかく、我々が人間性の良い点悪い点を肯定する必要のあるように、僕にはあなたの「ハイ」という返事が必要です。我々が未来を導く意意をうながすように、あなたの一言は僕の発展をうながすと、僕自身は思ふんです。どうでしょう。今はこれだけに止めておきます。他の事はいずれ話し合う機会もありますしう。あなた自身のためにも、どうかゆつくり考えて下さい。良い返事を期待しています。

思い出すこと

高野あつ子

一年の夏休みの合宿の時、ホールの屋上で三年生と話し合つたことがありました。
星のきれいな夜、静まりかえつた世界の中で、私の胸はおどつていました。昼間の薄よ

い。(一つのことを深くやるのもよいでしょうが、浅くても広くやることは必要ではないでしょうか。
私がこんな考えをもつのは「常識」の重視からでしょうか。「こんなことを知らないの? 基礎ですよ。常識ですよ。」などと言われると、自分が本当にみじめにみえてしまひます。はやく「常識ある人」になりたいものです。

文鳥

武田光仁

わが家には、一羽の年老いた雌の文鳥がいる。そう、もう一年以上もたつたろうか。去年の五月頃中学時代の友人にもらつたのだ。その時、一羽では可愛そうだというわけで、若い威勢のいいやつをかつてやつたのだが、なにしろおばあさんと孫ぐらの差があつたのだらう、毎日喧嘩ばかり。とうとう新入りを死においやつてしまつたというつわものなのだ。しかし年のせいだらう。自分もその後何回となく死線をさまよつてきたのだが、その都度危機をのりこえて今日まで生きのびてゐる。その度に家中彼女の強い精神力には、

驚いたり、敬服したりし、又勇気づけられて
いるのである。ところで彼女は毎日夜家の中も
を飛びまわるのが日課なのだが、毎晩十時ご
ろになると必ず出してくれと鳴きだすのだ。

時間のわからない人間様よりはずつとましと
いうわけだが。またかごから出ては人さまの
肩にとまつて、耳などをチョンチョンとつづ
き、そのたびにおこられる。するとおもしろ
い。しっぽをクルクルふるのだ。またみんな
が笑うと自分も特異な声でなき、手の中に入
れて、背中をさすつてやるとなんとも具合
がよさそうに、目をつむつてしまうのであ
る。人間世界のくだらない事など忘れてしま
えといっているかのようなそんな姿がいつも
僕の気押を落ちつかせてくれ、全てのなやみ
や面白くないことを忘れさせてくれる。そん
な気分になさせてくれる。彼女は僕にとつて表
向きだけがきれいな人間よりずつとかわい
い。大切な奴なのだ。

「可愛い奴よ」いつまでもいきてこの僕
の心のささえとなつてくれ／いつまでも。：

人間

志村健美

人間とは一体どのような性質のものなのだろ
うか。それは或る意味に於てはボウフラやア
リの如きものでもあり、又他方神の様な心の
持ち主ともなり得るのだ。

それではどんな前者の存在として又は後
者のそれとして認められ、認めざるを得ない
のか、ボウフラと見る場合それには先づ第一
に人間がボウフラを見るのと同様に人間をボ
ウフラの如く見るものが存在しなくてはなら
ない。それは何だろうか。大自然、宇宙、神
— 又一人の人間が高層ビルから人間集団を
見た時にも感じるにちがいない。その様な場
合、人間はごく微小な存在として認められる
のみである。人間の偉大さ、素晴らしきなど
はどうてい考えられない。そしてその中では
一人の人間など有っても無くてもほとんどそ
の全体には関係なく、何ら影響を及ぼしてい
るとは推し測れず、かつその必要もむしろ無
と同じことなのだ。その事は或る人が見知ら
ぬ大人に対して適応できるものでもあろう。

生徒総会について

渡辺宏之

この間生徒会長の選挙の知らせがはりださ
れていた。毎年のことながら生徒会の不振は
問題にされるところだ。生徒総会にしても、
ことは同じで校門に「見張り」がいてはじめ
て成り立つというようなことが毎度である。

私も正直のところ生徒総会などにできれば
出席したくない一人である。しかし「徒総
会には出席すべきである」という心の声を聞
いている。そして生徒会の一員としての義務
はできるだけ忠実に果たすべきだということ
は、人にいわれるまでもなく十分に自覚して
いる。しかしその生徒会をサポートするた
たまたまデストで良い点を取つたりすると、
ぼくにはその生徒会に浪した時間が非常に貴
重なものに思われる。またそのつまらない時
間をもつと楽しいことに使いたいと思う。

このようにぼくには、自分の属している集
団の一員としての義務をはたすかそれとも個
人の生活に徹するかという選択に迷う場合に
しばしばぶつかる。この迷いは非常な苦痛を
与え悩みを経験させる。そこで少しでも速く

さらに恐ろしいことには、彼は自分以外の人
間は全てその様な存在と考えているのかも知
れない。そして不幸にも彼は自分が逆にそう
他人から見られているのに気付かないでいる
のだ。けれど人は宇宙全体である心地を味わ
う時もあるにちがいない。何らかにつけ成功
を得たとか、野原に仰向けになつて自然と
一体となりつつある気分が陶酔したとか、人
間関係から報いられた様な場合。その時の彼
は何を見つめ、何に気付くのだろうか。自己
の偉大さ、可能性への限らない自信、そして
又平穏な心のふるさと、一あたかも全てが自
分のそれである如く、その様な彼は人間とし
てのこの世の至福に満足していることであろ
う。彼は実に幸福であり、地上に生まれた喜
びを隠し切れないにちがいない。そして他人
のうらやみ—大層こわいものであり、強力な
ものであるにもかかわらず—を彼は物とも
せず自分の中に酔っている。僕は再び言つて
おきたい。他人のうらやみと言うものの過大
な一般化とその見苦しい有様を、ああ僕は見
ていられない。このまま立ち続けることすら
できない。

さて結局のところ人間の存在の大小は何に
よつて決まる町だろう。ああ僕は何と怠惰な

その解決をはかろうとする。しかし納得ので
きる解決はなかなか見いだせないものだ。

今までのところ私のとる方法といえ、ど
ちらか一方の行動を選択して他方を捨てるこ
とである。しかしこの解決法は捨てた方の行
動に対してなんとなく未練が残る。特にさつ
きの場合のように二つの行動の大切さが同じ
くらいであればあるほど捨てたものに對する
不満が強い。一応は生徒総会に出席しても何
となく時間をむだに過ごしたという感じがし
てしつくりした気分になれない。また逆の場
合も多くあるだろう。

そこでこのような気持ちからのがれるために
なるべくそのことを考えないようにしたり、
あるいは自分の行動を正当化しようと努め
る。しかしこのようなことが常になうまいく
とはかぎらない。

こう考えるとまつたく個人中心に徹するこ
とのむずかしさ、あるいはその逆がよくわか
る。自分の意志に忠実に行動し、しかも集団
の利益につながるといううまい方法はない
ものだろうか。

このようなことを解決するのもこの生徒会
をよくする方法の一つかも知れない。いずれ
にしろ生徒総会を開くからといって門に「見

ことだろうか。それを何と言ひ表わしてよい
のか分らないのだ。

ある日の思い出

市村

外は秋の長雨だ。こんな日は例の作文を書
いてしまおうと思った。

このことについては夏休み前から気になつ
ていたが今になつてゐた。しかし今日EPR
で明日までに提出しない者は国語を五点引く
とか冗談として先生が話したが、万が一本当
だとしても少しも苦にする必要はなかった。
自分の得点から五点も引くことはまず不可能
に近く、もしかすると、五点くらいは増して
くれるかもしれないぐらいに思つてゐた。そ
れはそれとして文を書くことにした。高校生
活をふり返つてみると、自分もいろんな点で
成長したようだ。今自分の十七年間を見つめ
てみると、まずは楽しい事だけが頭に浮か
ぶ。その中で特に中学時代が一番楽しいよう
だ。しかしその時代にはその当時の精神力肉
体力においては苦しいのだったのかもしれない。
今では全く楽しい思い出だけだ。荒川は
春になるとやわらかそうに暖かくなり川岸に

はずこしずつ青い若草が生え出てきていた。

美術の時間絵をかかず、二十分くらい歩いてその土手にいった事が幾度かあった。

また秋は土手の草が十分枯れていたからその上に寝ころびいろいろ考えた。何を考えていたのかは忘れてしまったが、しかし楽しい思い出になっている。思い出とは苦しい事、悲しいことも楽しくしてしまうものらしい。全くよいものだ。しかし人間思い出だけでは生きてゆくことは不可能だ。きびしく現実を見つめ自己に打ち克たなければ楽しく、その時代は回想できないだろう。最後にこの高校生活が楽しい思い出となるよう充実して送りたい。

歳 月

萩原 三男

あと数カ月でこの学校を去っていく。

早かったこの三年間。

自転車置場の上に自分の名前を見つけ、そして心をおどらせて入学。

スポーツクラブに入り、りつはな先輩と夕方遅くまですごした。

十月の強行遠足、途中でやめたものの何かを

学びとった。

一年の時は何事も無心にすごした。

二年となり、クラブでやつと後輩をもち、なんとなく大人になったような気がした。

一万メートル、強行遠足、そして文化祭と……

……若い僕の心はおどった。

そして十月始めての奈良、京都、うれしいのやら、めずらしいのやら、なにしろすばらしかった。

そして三年になりやつと大学を意識しはじめる。

毎日毎日大学入試というものを頭上におき、

その下で定期的な生活をする。

青春を、はちきれるばかりの若さを、一冊の本にぶちつける。

今となり、いろいろと思いうかんでくる。

苦しかった事や楽しかった事、すべて楽しい思い出となった。

僕の愛する一高

一高に入学してよかった。

楽しい高校生活。

友情、勉強、そして淡い恋……

すべてを経験した学校。

どそうとした私はがむしやらに勉強しようとした。しかししばらくして成績のよくなるな

い自分に、あたりまえだそんなにかんたんにいくはずがないと、言いきかせながらもいく分失望した。しかし失望の連続は何かしら私

に安らぎのようなものをうみだした。あきらめだったのか。それとも自分に満足したのか。三年になっていよいよ受験受験と耳にふ

たをしても入ってくる言葉に私は迷いを感じながらもその流れにとびこんだ。むろん満足に流れにのれない私は流れより速く前へなど言うことは遠い世界のことのようだった。そ

して人が三年でたどりつくところにたとえ四年であっても（むろんそれ以上だろうが）たどりつこうと決心するのです。この三年間は人生のうち最も意味深い期間だと自分に言いきかせながらも、おろかな私は次のように自分をなぐさめるのです。「高校生活の三年間は短かすぎる」と。そうですよね、みなさん、ぼくらの学校の先生達のようになつてからは十代のようにいきませんものね。

巣 立 ち

金 丸 光 邦、

とある国の小さな盆地の小さな森の一角に

小さな鳥の巣のかかった一本の木があった。その巣の中には一匹の小さなひなどりがあった。彼もやがて成長してハイスクールへ入学した。

一年目は純粹であり夢（野望）も、とほうもない大きいものだった。日本をいや世界を自

分の手で動かす人物になろうとするような大それたしかも恐ろしいほどの野望であった。だが彼は純粹さを求めるあまりこの現実に絶

望してしまい夢も根からくずれてしまった。重く息苦しい足どりで二年目を迎えた。二年

目の彼は非常に批判的になっていた。ある時は一国の政治をある時は芸術をある時は友達さえ批判してしまった。だがそのあとに残ったものは無味乾燥な感情だけであり、自己の小ささをいやというほど感じさせられた。

三年目になると生存競争も激しくなり彼は現実と妥協せざるをえなくなった。現実生きることのむずかしさを感じたのかもしれない。そして彼の夢も確かな基盤の上に立つ確固たるものとなった。彼の三年間の学校生活はまたたくまに過ぎ去った。今彼はハイスクールという小さな巣を飛びだち最高学府という大きなものにぶつかるうとしている。その彼の姿後には希望と野望（夢）が満ちみちて

すべてを覚えてくれた学校、時は僕を待たない。

一日一日とすぎていく

あと数カ月。

僕は後髪をひかれる思いで。

この学校を、愛する一高を去っていく。

思 い 出

塩 島 文 博

短かった三年間がもうすぐ終わろうとしている。いったい自分はこの三年間を——千九十五日とゆう日を自分に悔いのない生活をしたのだろうか？ 毎朝一番早く来て一人静かに考える時、フトこんなことを考えるようになった。朝自転車走らせながら十八年も生きてきたことを悔いることがしばしばある。

一年の時、何でもかんでもやってやろうと考えた私はいろんなものに手をつけた。しかし結果としてなんら得るものがなかった。私は一定時間内に行なえる事の数を忘れていたのだった。そうするとなんら得るものがなかったと言うのはうそになるかもしれない。

二年の時。それまでの学習のおくれをと年もある。それはあたかも自分の後姿のようであ

った。

三年間の雑感と

その発見

神 津 幸 哉

一年の時は男女クラスでありながら、純心素朴で……。二年の野郎クラスではおおきに教化されつくづく環境の恐ろしさを感じる。

喜び勇み三年の、男女クラスへ来てみれば、現実厳し三年の年。

第一発見

片思いは、こゝろ思いにあらず。

※二人の人を片思いしても一つにならず

二

おれが二年になったとき、野郎クラスになったとき、空虚を感じた人生に。

なんて思ったは大まちがい。野郎クラスは楽しいクラス、

気兼ねがなくて気安くて、こいつは女子にはわかるめえ。

第二の発見

女子には男子クラスの良さを絶対に体験できないこと。それは男子だけに与えられた特権である。(ザマアミロ)

三

人生とは寝ているとか。すると一高生は全授業時間の何割を聞いていないのか。

一時間の内五分は聞きのがしているとし、また三分ぐらいは先生がおくれて来るとし、さらに一週間に平均二時間は完全に寝ているとする。授業がつぶれるのは月に……。

フアー。眠いなあ、睡眠飽きるを覚えずといくか。

第三の発見

授業中の居眠りは学習の助けとはならないということ。

※いくらこいでも先へは進まない。

四

近年先生方のテレビ視聴率は上昇の一途をたどっている。授業もちよつと気をぬくとわからなくなってしまう。ちよくちよくトラヒゲやドンガバチョが現われ。モーガン警部やワイアットアープなどが活躍する。ハイウエパトロールにアンタッチャブル。第七騎兵隊にテキサスレンジャー。鉄人28号にエイトマ

ン。忍者部隊も出てくる。聞いただけでも小学生なら喜びそうだ。野球、すもうは日常茶飯事、流行歌手を授業で覚えるすさまじさ。特に八田先生はこれらをうまく使つて授業をおもしろく進める。世界史が総合学問と言うのもこのへんにあるとは八田先生の弁。

第四の発見

新聞を読み、ラジオを聞き、テレビにかじりつくは孝の初めにして終なり。※会うは別かれの初めとも言うじやんけ。

五

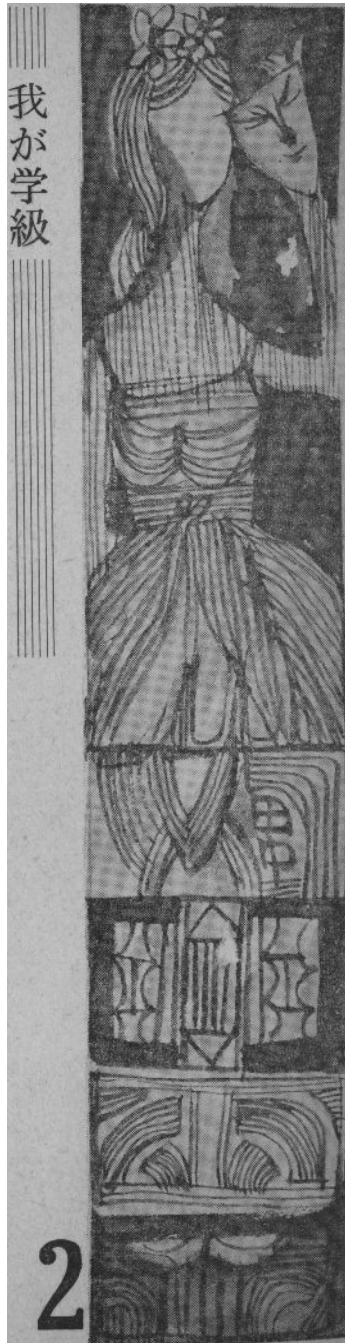
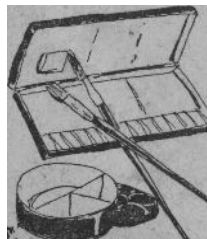
このごろの若モンはユーモアとかしやれがよくわかるようになってたいへん喜ばしい。年中ニヤニヤしてるのもこまるが、笑うことは必要である。(このごろは小じわのクリームのいいのが出てから女子も気がねなく笑うといい。)

ユーモアは文化の高さを計る尺度である。

第五の発見

それは文明の第一段階であるといわれる人間が着物を身につけたときから言えることである。

※笑う角には服着たる。と言うではないか。なに、字が違ふ。バレタカ。



我が学級

組主任 蘆原 幸

窓辺の銀杏がすっかり黄金色に染め上げられた。季節風も吹き尽くし、秋の逝くのも、もう近い。コバルトの空が冷たくなったこと。我が三学年二組の存在する本館の三階は、今朝も陽ざしが美しい。すりガラスにうつる生徒諸君の影、何の授業であろうか。

今日の出席状態はどうだろうか。皆出席だろうか。誰か休みはないだろうか。遅刻はどうだろう。今日こそ誰もいないとよいのに。

例によって一校時の休み時間に学級当番がその状況を報告してくれる「本日も残念でした。もう五分、家を出かけるのを早くしてくれたら皆まにあつたでしょうに。」というのが、いつものことになっている。時折、「遅刻してすみません。寝坊しちゃつて」なんてにこにしながら申告に来てくれる。「了解、明日は遅れちゃ駄目だよ。」

「はい。」お互ににこり笑つて別れた事もなつかしい。

屢々、「電話ですよ。」の校内連絡がある。誰か欠席の届けなんだな、と思うものからはるばる？事務室か第一職員室へ駆けつける。大概是優しいお母さんの声が響いてくる。欠席についての御連絡だ。でも大した病氣でもない様子が何度ほつとしたことか。半面、約束を守つてお家の方に欠席通知をしてくれるように頼んだ諸君達が、嬉しい。この分じやまず大丈夫と。

そらホーム・ルームの時間だ。三階までの長い道。教室に入つてまず目につく空席。誰だろう。ああ先程電話のあつた彼だな。ところで向うは、二、三日続けて休んでいる○君だ。連絡なし。周りの諸君にきいても不明。大概是近所の諸君に様子を探ねに行つてもらう」ことになる。時によると二寸違いけれどバイクで行つてくれ。なに、たったの十五分位でおつりがくるだろう。「皆がどつと笑う。某君、頭をかきかきO・K。

でも嬉しいことは、何時も教室の何カ所かに、美しい花が飾られていることだ。今頃は太輪の黄菊に紅バラのはず。手入れの行届いた清

潔な教室、きれいにふかれた黒板をバックにその美しいこと、目にしみるようだ。恐らく今朝も委員の人が冷たい水で手を其赤にしながら花を、そして水を新しく代えてくれているだろう。三カ年、何処の学級にあつても、清らかな愛情を注ぎ続けてくれた優しい委員、その人の心ずかいが、今日も教室に珠玉のように薫つていよう。

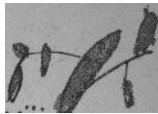
ニュースの発表だ。さて今日はどうな話かとび出すかな。彼ならこんなことかなと、ひそかな期待がもたれる。案の定、面白い話題。たまには「忘れました。」でがっかりもする。

一日の授業も終つて最後の教室の清掃。本当に良くつとめてくれたね。どなたも誉めて下さつたように、一日として放り出されたことはなかったね。時には一人、二人が無断欠勤のこともあったけれど、その代り特別参加の応援の諸君が、その分を充分補つてくれた。

何度、有難うつてお互にかわしたとか。毎日の学級当番の前後の方の二、三行は、清掃当番の諸君への感謝の言葉だった。何時までもこの気持ちを忘れないでいつてくれ。

月に一度の定期的座席の交換、抽籤だ。これも楽しみの一つだった。目を輝かし黒板の座順の図と自分の籤を見比べる。飛び上らなければ人の人。悲鳴をあげたいような人。悲喜交々の風景だった。「よろしくたのみます。」一ヶ月の隣人に対して挨拶ありか。

こんなこともあつたね。教室のロッカーの破損が目により、到頭定期調査の前後の日に、何時も机の修理・交換に精出してくれる修繕委員から、窓・扉調整委員はもとより選挙管理委員に至る有志諸君が積極的に奉仕してくれたこと。自分達で材料を買い出しに行つて、延々四、五時間かけてほぼ完全に直したことが、冗談をいつぱいとはし、鋸・金槌釘抜き、ドライバーの扱いの器用さを誇り、あちらでは出来



秋の日の

乾いた残りの夕日の中に

うす桃色のコスモスの花咲きぬ

そのやさしきに何をか求めん。
いつの頃からかこの花に淡い懐しさを覚えて好きになった。見詰めていると思わず頻ずりしたくなるような頼りなさを感じさせるこんな花に何故に……もつと洗練された色も香ももつと素晴らしい美しい花がいくらかもあるというのに。

私にこのように弱いものを庇う強い力があるというのか。それとも頼りない私の同類と見えたからか。この可憐な楚々とした花の中に私は何を見つげようとするのだ。私は私の生きるべく態度を見た。すい込まれる様な空の白い雲の上から白く上品な手を差しのべる未来に向つて、咲いている真摯な姿の中に。隣りかかつて来た、そして隣りかかるであろう無情なものにも應ずることなく素直で自然な態度を。

私はもつと強くなりたい。

自分に誠実で素直になる為に。

森の中の歌声

古屋哲雄

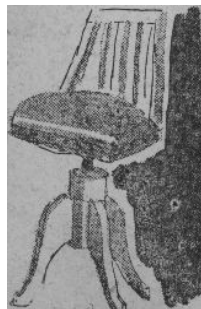
一つの森を脱け出した。

映えを、こちらでは作業上の着想を無邪気に自慢しあつて、笑い会つたんだね。今日も色紙よろしくのベニヤの色があの日思い出と共に目にとびこんでくる。

勉強のことには触れなかったけれど、勿論、言い分なし。誰だい、本当かな？。相当お世辞が入つてるよ。なんてこつちを向いて笑つてるのは。何時の「さ」の会合だつて必ず話して下さつたよ。皆がどんなに頑張っているかをね。遅刻の多い一つの原因も、その辺にだつてある事ぐらい察してはいるんだよ。でもこれは当然のことだから触れなかったんだ。頑張れよ。絶対に頑張れよ。

もうあと三カ月半で、新しい人生への出発だ。それぞれの方向で大いに健康で、愉快な充実した人生を息吹いていつてくれ。そしてお互にその活躍を祈りあい、助け合つていこう。未来は長い。しっかりとやろう。

十一月中旬、我が学級の見える職員室で。



思つてみれば緑美しい、大きな森だった。途中、鬱蒼と茂つた大樹の葉陰に自堕落な日々を過した事もあった。

毒の木の実を嚙つて、慌てて吐き出した事も美しい花の後に隠れた大きな蛇に驚いた事もあった。

やつと捕らえた小鳥を逃がして悲しんだ事も、あまりの美しさと思わず折つた花が枯れてしまつたのを泣いた事もあった。

野ばらの針に傷ついた事も、暗闇で石につまつた事も、恐ろしい落雷にふるえた事もあった。

澄んだ泉の水で喝えた咽をうるおした事も、名も知らぬ小さな花に血走つた眼を休めた事もあったのだ。

私は、今、この森を脱げ出した。少しばかり広げた野原に腰をおろして、この森をながめている。『さようなら』とつがやきながら。

※

この様々な友情が、私の身を離れて行かないかぎり、この自分勝手な私を見捨てないでいてくれるかぎり、私は自分を愛し続ける事が、いや、その努力をし続ける事が出来る。そして、どんな森でも恐れずに入つて行く事が出来る。「虫の良い奴。」などと言わなくてくれたまえ。誰にも負けはしない。自分を知っている、という事で。

※

エレキギターの騒音と、モンキータンズの馬鹿踊り。

踊る阿呆に、観る阿呆、両方阿呆なら逃げなきゃ損々。

俺の捜しているのは、こんな森じゃあない。べらな、向うが透けてみえそうないこんなお遊び用の森でもないかぎりやあ、案内札のついた観光用の森でもない。触れれば痛いような針葉樹の原始林だ。出口を捜すには、オロオロ泣きながら右往左往しなけりやあならないよう

な、暗い森。だが、時には、あの『愛』という白い花も見つける事の出来るような深い森だ。

深すぎて、二度と出られなくとも良い。出られなくなったら、そこに永住してやろう。その住人になったら、同じように迷い込んでそれでも、まだ出口を捜そうとしている若者を励ましてやろうじゃないか。そしてその若者に毛程でも勇気を与えてやる事が出来たら、本望だ。

※

向うに見える、あの森は懂れている。皆はずそこに見える、という。私には、ずつと遠くに見える。

私は、その森の上に朝陽の当る一瞬の美しさに憶がれた。何と浅はかなものに憶がれたのだろうか。だが、今の私には、どんなものであるにせよ、憶がれる、という気持が無性に嬉しい。

ひた走ってやろう。このすがすがしい朝露の野道を。転んでも、又起きて、走り続けてみよう。あの森までは。

※

友達よ。あなたは覚えていますか。あの山の枯草のおいを。覚えていますか。青春の喜びを叫んでみた、あの岩の上の事を。そして、その岩かげに小さく微笑んでいた。私の大好きな、ゆうが菊を。友達よ。あなたは覚えていますか。君達を前にして、僕が泣いた涙を。

あれらが僕のすべて。僕の青春のアルバムだ。君からの一枚の葉書き。君からの誕生日のプレゼント。君からの一冊の詩集。君からの笑顔。君からの友情の印。君からの励まし。君からの信頼。そして君からの恋の話。みんな嬉しかった。みんな楽しかった。さあ。僕の指さしているあの森に、一緒に駆けていこうじやない

曰く。「おもしろい本がたくさんあるよ。今夜中に読んでしまいたくないよ。」

二月×日

映画「アラビアのロレンス」を見る。最高だった。トルコ人を大虐殺した後で、アラブ人の言った言葉が印象的だった。「そうだ。

我々アラブは、確かに野蛮で残酷だ。だが我々だけなのかね。」そして、結局だからも理解してもらえなかったロレンス 人間は本来孤独なのだ。

六月×日

我がベットであるダックスフンドに「ボール」と命名。細長い体に短い足、突き出た鼻は実に愛嬌がある。どこことなくジャン＝ポール＝ベルモンドに似ている（と言えどどちらに怒られるだろうか。）

十一月×目

修学旅行も終わった。今、心にあるものは何だろう。それは仏像の微笑でも世界最古の建築物でもない。それは「だいご大人になった」という思いである。楽しさもあつたし、失望もあつた、が一番良かったのは、帰りの汽車の中である友人と話し合った事だ。

八月×日

月日の過ぎるのは早いものだ。夏休みもそろそろ終わるし、十八才になるのももうすぐだ。しかし遅いのは、心の成長である。目標のない毎日を送っているのは一年の時も現在も同じである。自分の存在は何の役にもたないのだと思いがち。

こんなことではいけない。「魅せられたる魂」のアントワネットのように力強く生きなければ。

か。共に、泣き、笑い、大声で歌いながら。皆なに聞かせてやろう。森の中からの大合唱を。僕等は其赤に焼けている熱い鉄だ。

日記から

佐久間文子

私には、この三年間に書きたい気分になった時だけ書いた日記がある。何もかくあてのない今、それを読み返してみよう。

十一月X日

毎日がつまらない。他人と打解けることのできない私。いったい何のために生きているんだろう。

十二月X日

福引で「シネカメラ」があたる。試験身近で、気が重いせいか実感

……

なし。「今年はついているらしい。」とチョツピリ思う。

一月一日

今にも泣きだしそうな空の色。そのせいか、元日の朝から嫌な事があつたーと言つても大した事ではない。わがまま娘の気分は変わりやすいものであるから。

一月×日

どうも「お遊び」の時間が多すぎる。考えてみて、今までに勉強に集中していたことがあつただろうか。私は常に、一つの事にのみ心を奪われているという事ができない。試験直前になつてさえ悪魔が

応援と私

岩間としお

私は熱情的な人間になりたいのだ。笑いたい時には心から笑え、泣きたい時には頬に流れる涙をそのままにしておきたいんだ。平凡、単純、そんな言葉は聞きたくありません。

私はこんな思いで一年の秋、好きだった合唱をやめ、応援団に入つた。今思うと自分が、そのように選んだのは正しかったようです。なぜなら、応援によつて自分の本当の姿を飾りも、遠慮もせずに出せたからです。そして、自分自身がなんと弱い人間であるかを知つたのです。杉山、永田南先輩はいつも私に「恥じるな」と言ってくれました。

応援だけでなく、自分のなす事すべてに恥ずかしいという気持ちが始つたなら敗けだと思ふのです。だから、他人に変な目でみられても、私はじつと我慢したのです。私は最後までやり通しました。このことは私がだれにも自負できた一つのことです。

だれにも大声をはりあげてみたい時があると思います。私はただその事が他人より強かつただけです。大声を出していやな事を忘れ、子供の澄んだ目のような純粋さを欲しかつただけです。私は一生純粋さを求めているかと思つています。こんなにすばらしかつた高校時代をささえてくれた応援団生活を無意味なものにしたくありません。

三年間の応援と私を思いながら、この文章を書く私はとてもさわやかです。思わず、私にとつて最後の試合の光景が浮かんできます。

雨がふっていました。相手は工業。19対0。スタンドの上で物につかれたように立っていた自分。最後のエールの交換。試合の後の、空虚

さ。みんな思い出となつてしまつた……。

「ころよく我に働く仕事あれ

それを仕遂げて死なむと思う。

啄木にこんな歌があります。最後の試合の時の私の気持これと同じであつたでしょう。けれどもあの時不思議と、くやしさも涙も起こらなかったのは応援生活のおわるのが恐ろしかったのかもかもしれません。

思 い 出

中村光江

ある夜外に出た。人の気配は全くなく、辺りは空漠たる闇に包まれていた。心の安全な置き所である闇。その中に電信柱の電燈が一つ侘しく浮き際立っていた。回りに虹色の正確な輪を保ち、中心に無数の小さな生命を集め、それで放射状の光は至められていた。

そんな中でふと「闇の絵巻」を思い出した時辺りがあの情景描写ではないか、と思われた。鈍色の光は現在を燈し、向こうの闇は自身の過去か未来だつた。どちらなのかは時を待つより他にない。どちらであれこの三力年がここで終わる事は、大きな不安を募らせる。自身の成長の度合は別としても総べてを以前より精細に思考し、はるか遠くに思われた事物を卑近に感ぜられる様になつた。だからこそ近い将来の自身の姿がどうあるのか、どうあるべきなのかおおよそ見当がつかない。考える程迷いが募るだけであるから漠然とした幻の様な物を尊敬し、それを亦私の運命だともして慰め、従うのであるけれど……小数の者が一心不乱に唯一の絶対不動の目的を求める姿は羨ましい。

た。本当に、もうあんな気持ちを味わうことはないかもしれない。でもいつまでも高校時代の良き思い出として私の心の中に残るだろう。

あ る 日

渡辺正彦

八時四十分。自分はまだ家から学校までの距離をまだ半分もきていない。八時五十分正門前に到着。もはや今となつては、堂々としていけず自転車置場の裏の方へ回る。

八時五十分自分の席に到着、

一校時は英語Gだ。生徒に絶対的信頼のある先生が皮肉タップリと授業を進める。

さて二校時は英語のRだ。また予習をしてこなかったので大忙ぎでせめて単語だけは調べる。先生の到着、早いペースで授業が行なわれる、いつものとおり顔を絶対先生に会わさないで下ばかりむいている。へたに先生と目が会つと上前方45度からあの鋭いニラミをまともに受ける、まったくたまつたものではない。H君がさされた、たしかにあいつは読みはうまい。スラスラと読んで解釈にくると例のごとく頭に手をやって「ワカリマセソ」次に先生が誰れにあてようか出席ボを指でさす。真中から下の方へ先生の指がいった。「アッ！」これはまずいと思つたとたん、僕の名前を先生はご指名なされた。胸がチクリとする。自信まったくなく立つ、いちおう読むだけは読む、解釈は自分でも何を言っているのかわからない。あせつて一行とばしたなんかしでどうにかこうにかうまくこまかしてすわつてしまふ。おわりのベル。

やがて家に入ろうと振り返つた時広い黒い田んぼに不思議な光を見た。一瞬驚いたけれど、まさか螢の季節ではなし、又もうこの辺はそんな場所でもなかった。恐る恐る近づくと、それは農家の方の雀よけの苦心だつた。アルミ箱を小さく切つたものである。それらは各々が電燈からの距離と角度で好き勝手な色を反射していた。やがて人は皆他の集合に移つた時、あんな風に映えるだろうか。同じ集合にいた人がこの集合に入つた時随分変わつて見えたのだから、これからも皆その集合に適応するために変わるのだろう、と思つた。私も他人からみれば変わり亦変わるかもしれないが……ともかく闇は珍奇な現象をもたらす。

気づかないうちに人の心をしゃべり、逸脱できない社会の私達に自身だけの世界にしてくれたのだから……。

思 い 出

佐藤恵美

長かつたようで短かつた三年間の出来事の中で、私が一番先にした事はやはり音楽部員として活動していた時の事である。その中でも一番印象に残っているのは毎年八月に行なう定期演奏会の事。歌っている時に足が震えて困つた事も、ピアノのペダルをまちがつて踏んでしまつた事も今考えるとなつかしさで一杯である。そして演奏会の終つた時のあの気持、ほつとしたような、何か物足りないような、寂しいような複雑な気持、もう一度味わつてみたいような気がする。そのほか合宿の事も、文化祭の時に行なつた歌声喫茶の事も忘れられない。そして皆と音楽室に集まつてした放課後の練習も。楽しかつ

楽しいお弁当の時間、この時だけは次の時間の予習がしてなからうといつさいおかまいなしに無我夢中になつて弁当を七、八分でたいたげる。これで最大の日課がおつてしまつた。何となく落着いてくる。

さて今から三四五六校時と続いている……………。

思 い 出

春日宗麻呂

何という虫だろうか、リンリンリン、ジョージーと盛んに鳴いている。「あしおと」に出さねばならぬ原稿を書くとしていているのだが考えがどうもうまくまとまらない。二年の「あしおと」を持ち出して読んでみると、どの文章も立派なもので驚いてしまふ。こんなには書けないが、この一高での約三年間で強く心に残っている強行遠足の事を、子供っぽい内容とは思ふけれど書いてみる。

太鼓の音に気を張られて学校を出た。しばらく行くとT君に出合つた。「行ける所まで行く。」と言つたが中込まで行く気らしい。かなり行つて僕はくたばつてきた。Tは「もうすぐ〇〇だ。そこで休もう。」と言つてくれたが、角を曲るとずつと直線、角を曲るとずつと直線と言つた具合でなかなか休めなかつた。

それでもやつとついた。力をつけようと思つて熱い湯をもらひ二人で飯を食つた。二、三個にぎり飯を交換して食つた。全部食べてしまふところだつた。うまく、たのしかつた。

またかなり行くとTも僕も足がいなくなりだした。適当な場所を見つけて腰をおろし休んだ。くつを脱いでみると足にまめが出ていた。Tはメンタムを取り出して「これつけろ。」と言つていっしょに取つ

てべったりとつけた。そしてまたトクホンを出して、「これもどこかに貼っておけ。」と言ってえらい余分にくれた。まだ暗い朝をさらに中込へと進んだ。

思 い 出

平井忠彦

一番たのしい思い出、それは、中学一年の時の夏である。この時、おじさん達と沼津へ一週間バンガローを借りて生活した。

最初の夜僕は、ご飯をたいた。数年前にやったことがあるので自信はあった（つもりである）。ところが実際やつてみてガツクリ／しんのあるご飯である。みんな同情してくれて食べていた。僕も食べた。実にまずい／何回となくわびると、楽しい思い出になる」といって笑つてくれながらしてくれた。毎日毎日泳いだ。

或る日僕達は、港から「竜宮丸」という船で大瀬岬というところへ行った。その岬は、木にかまれキャンプ場ぐらいしかなかった。静かだった。セミの声が、この時ほど、すばらしいと感じる時はいままでもない。奥には白い灯台が、その灯台は、青い空、海をバックにして立っていた。今考えると絵にでも書いておけばよかったとくやむ（絵はうまくないにせよ）。

帰りに船の中を見せてもらった。特に印象深いのは、船長室である。数多い機械類、日がまわる感じであった。そして残りの日をたのしくすごし帰った。体もじょうぶになった。それにもましてよかったのは、一時代にこのような思い出を持っている僕は、実にしあわせな者といわなければならない。書いている時でも、その時の様子が、瀟

断片的ではあるが、私の考えを述べようと思う。断片的なものにも何かを把握しようと努力している私をわかってもらいたい。

私達の生とは、実際にはかないものだ。一瞬さが死に変ずるかも知れない（私は死ということも生物学的にしか知らない。）そんな生をうけた私達が、肉体的存在としてではなく、宇宙の無限にも比擬する精神的存在として、無限の中に戦つてやまず、真を求めて行く。その中に意味を見い出せるか、苦しさに耐えずして放棄するかは、人間個人の問題であらう。私は見い出しているつもりだ。

マスコミの発達と共に、世の人々は、いろんな思想にふれる機会を得ている。それらの思想を皆が理解しうるわけでもあるまい。実に思想の氾濫が、又思想の不消化が、精神不健全をもたらしている。表面だけをつくり、思想の奴隷と化し、思想に追い回され、情性で生きている人間が多い。といって偉大なる哲学者以外の人間の存在に全然意味がないのであらうか？彼等を思考力の足りない愚か者だと言いつけるのであらうか？前に述べた様な人間は確かにいる。しかし人間社会の不可解さ、広さ又対人関係の複雑さを見れば、彼等の存在の意味又愚か者として捨てきれない何かがあると思う。

私はこれといって自分の確信の出来る考え、いまだ見つけ得ないでいる。あの時は独断に、又懷疑に陥ち入り、又ある時は現実的であったり、そして虚無観にとらわれたりした。又宿命観に……等々。実に自分で自分が判からなくなってくる。人間はまさに懷疑の連続であらう。今の私に確実なのは、デカルトの言葉だけである。こう思考して

つきりうつる。

三 島

渡辺良樹

夏休みも半ば過ぎた八月十五日お姉さんの実家に行ってきた。お姉さんの実家は三島市大場、下田街道に沿った所である。十一時ごろ大場に着いた、兄は泳ぎに行つていて、お姉さんは三島に行つていなかったが、お盆であったから親戚の人がたくさん来ていた。

八月十五日は三島大社のお祭りである。ボクは前から楽しみにしていた。哲子さんに案内してもらい神社に行った。途中でおみくじを引き入試の所を見ると合格すると書いてありうれしくなった。神社にお参りして、楽寺園に行った。そこは庭が広く池が美しかった。三島の商店街は人で一ぱいで歩くのに苦労した。帰りの電卓がこむので前の駅に行つて乗ろうとしたが見つかつてしまひ片道料金を駅員におこられた。こんな一日をボクは三島で過ごした。

何 か を

井上正博

この頃私の頭の中はとりとめのない、いかにも断片的な考えが、浮んでは消え消えている。考えが次から次からへと飛躍してしまつて自分ながらとても追いつけない程だ。私には、今整然とした文章はとても書けそうもない。私の書く言葉も自分自身とても心もとない、しかしどんな言葉を使おうと、私は書かねばならない。以下、いかにも

いる自分は疑かに疑いようがない。自己の存在より確実なものはないであらう。ところが、いくら自己存在から出発しても、自己以外のことを考える時、自分がわからなくなつてしまふ。私には真実なるもの、たよれるものの何ものをも発見出来得ない。私は、ついで神の存在など信じていないが、「この宇宙を支配する何かがある」そんな気がするのです。

だが人間の力は余りにも小さすぎる。無限の広さのあるはずの精神を持つてしても「……」とはこれだ、こうだと断言できる時は決して来まい。人類が永遠なら可能かもしれない、しかし人類が、無から出現したように又無に帰することは必至であらう。この後、色んな考え方が出てこようと、それらは、人類の全真実を示しうるだらうか？人類の苦悩はそこにある。あがいてもどうにもならない、どうしようもないのである。

悲観的ではあらうが、何もかも神国と言われる様な世がおとずれると、もし仮に考えるならどうだらう。人間はきつとそんな世界に住みえることが出来ないだらう。目的、理想を失なつた人間の末路はわかり過ぎるほどわかっている、が人類はその理想郷を目指しているではないか。人類の目的はその苦悩の中にあるのではないだらうか。その理想をもとめる道程にあるのではないだらうか。

人類は、生き続ける。情性か？いや絶対にちがう「何のためか」。実際、私には何もわかつていない。私はただ真面目に「何かを」求めて生きるのみだ。……………

今一九六五年九月十四日の夜、十二時ちよつと前だ。地上は秋である。雨上がりの露草の影で、スズ虫が心をすき通すような、澄み切った声で鳴いている。実に美しい、実に愛すべき夜るではないか！…

七面山へ

小林憲次郎

この夏休み七面山へ小旅行。何！七面山？急にそう言われても信心深くない人（失礼／＼）には分らないかもしれない。身延山のちよつと奥にあるその方面で全国的に有名な二千米近い山、と思つて下されれば俺は満足、現に俺は大阪と愛知の人と話を交している。台風17号の為に日帰りと変更にはなつてしまつたが、俺にとっては人生の活路を見い出した貴重な一日だつたことに、間違いはない。あるはずがない。登山口のちよつとそばに滝がある、いつもは信者が念仏をとなえながら水にうたれているのだがどうしたことか誰もいない。少し早すぎたのかもしれない。そんなことより36町目のこの山一番に見晴らしのいい所の売店でジュースを買つた。驚くなかれ一本80円。しかもまずい。いくら高い山に運んでくるなんてたつてあれでは高すぎる。そしてまずすぎる、まだある。父が水をもらいに行つた。そしてたら店員は余りいい顔をしない。俺は試しにさい銭箱に十円店員にわかるように入れたら、とたんに「ハアそうですか。さあどうぞどうぞ。アア、万事休す／＼、途中でいくとか白い服をつけてデーカイ声で、南無…：…経と言いながら、いやどなりながら下山してくる団体にあつた。きのう登り今朝御来光を拝んで来た人達だろう。

やつとのことで頂上の御社に着いたものの、なかなか人が出て来な

しきれいだと言つていいものが俺はまよう。そのうちに秋がきてまわりの山には雪が降つた。そして今日、俺の体も雪にうもれてしまつた。なんと冷たい雪か。しかし冷たくもない。たださらさらした砂だ。その下に大事な俺の体はうずくまつている。でもあの日いらい始めて安らぎをおぼえる日だ。雪はどんどんつもる。背中が重くなつてきた。でもいい感じだ。山はきれいだ。雪はきれいだ。でもその中にある俺もきれいだ。ただ耳もとの血だけはきれいだ。あまりに現実的すぎる。友達がいなくともさびしくはない。人間は本質的に孤独なのだ。胸には大地の暖いぬくみー男らしい荒々しさとすばらしい魅力を持つー背には女神のような雪がおおい、その中に一個の人間らしい物がある。人間らしいもの、決して人間ではない。

春がきて、もし俺の体が地上に表われるようなことがあつたらどうしよう。醜態だ。でもこのくすねたシャツの色とピッケルだけはすばらしい芸術品になることだろう。俺が望んではたしえなかつたこの色、つや、完全なるもの、いや不完全だ。完全なるものは自然なるものは自然より他に何があるろう。

長い冬だ。多くの人が俺の背を踏んで登つて行く。バカな連中だ。死ぬまいと思つている。なに故にそう思うのか。死ぬまいと思つている。どん欲だ。山の青さがわかるものか。空の高さを誰が知ろう。山は美しいと思つてやがる。自然はすばらしいものだと思ひ込んでいる。努力して登頂したのがすばらしい事だと感ちがいしている。この俺を無視して、自然のうえにあぐらをかいていて何がわかるものか。まわりの木々は生きている。ずうーと生きている。そして俺は死んでいる。そして木々も死んでしまふ。春がくるだろうか。雪がとけるだろうか。しかし山は山だ。

い。皆囲裏を囲んでテレビに熱中しているところ、偉そうな坊さんまでニヤニヤして見てる。たしかこの前来た時テレビなんかかつたはずだが…。偉そうなこと言つたつて坊主だつてやはり凡人である。百日の説法何とか一つつていうことわざをフツと思ひ出して苦笑した。そんな暇あつたらお経を一節でも多く覚えりやいいのに。時間は惜しむべき親友だよ。今日の目的のお祈りをしてもらう。（頼む／笑わんでくれ！）祭壇の一番奥にある小さなとびらを開く。中には太い巻物と大量生産式の日蓮の木像が置いてあつた。これがこの本尊だそうでいかにも神々しい。もつともわざと奥を暗くしてその様に見せているのかもしれん。この、日蓮をおがみながらそれをしてくれた。何だか俺に靈感がのりうつつて来た様に感じたから不思議だ。本当にこういう所ではなま物は食べないのか知リたかつたがそんなことせいたらなのでやめた。帰途「奥の院」という所でおみくじをひく、何と大吉である。いよいよ祈藤の効果が表われてきたか。このままの状態で来年までいてくれ、お願い。

春と山

青木春秋

山へ登つた。澄んだ空と冷たい空気は小気味がよかつた。霧がでてきた。そして寒くなつて死んだ。

耳もとで鳥が鳴いている。なんて強い奴なんだ。アリも俺の体をなめやがる。生きているんだ。ちくしょう。雨が降つてきた。冷たい雨だ。俺の体は寒さのためにそうすぐにはくさらない。それは少しはうれしかった。雨がやむとまた青い空がみえてきた。澄んでいる。しか

卒業式

T・H

あしおとも三号をむかえる。はやいものである。そしてこの原稿が活字になつて、各々の手に渡る頃、我々は去る。

三年前に入学した事が今日の前提であつたかのように。

大学受験という一つの目的に向かつている我々にとって、卒業という言葉は何のひびきもなく返つてくる。少くとも過去には比類のないほどに。

儀式の簡素化が叫ばれている今日ではあるが、我々に入学式とか卒業式ほどに力を与えてくれるものはない。

我々はそれ転機とし、また未来に処していく。今迄不調であつた者はまた新たに決意を固める。これきりに社会に出る人にとつても、また最高学府に進む者にとつても、高校の卒業式はそれなりの重要性を持つている。各々が高校生活の最後を色どるにふさわしい、清心な気塊に満ちた卒業式を、卒業生全員で行なえないものか。

『あしおと』への寄稿に際して

花田善治

今まで、ねばつて来たがとうとう筆を執らねばならなくなつた。僕は前々から文章を書くのが苦手だつたので「あしおと」にも寄稿しないつもりでいた。だいたい気が向かないのに良いものが出来る訳がない。それもこれも骨、今まであまりにも本と縁がなかつたからだろう

思い出

種田源正

か、それとも生まれつき作文力が弱いからなのかは分からないが、とにかく、これからは多少なりとも本と縁を持つつもりだ。

これを書き上げるまで

中村春子

あしおとの原稿締切日が迫ったので、去年のあしおとを読み直し、「さて何を書こうかなあ」と考えたが、一向に浮かんでこない。でもどうしても提出しなければならないので、やっと一枚、詩を書き上げた。題は「真夏の夜の夢」。メンデルスゾーンにもシェークスピアにも、全然関係ない。空っぽの頭からこれだけ書き上げたことに對しては、我ながら満足したのだが、いかにせん、何か物足りない。みんなの文章を読むと、何で自分にはこのように書けないんだろうかと、嘆かわしくなるしだいである。こんな詩なら、小学生の書いた詩の方が造かに上手だ。何か訴えるものを持ち、純粹で、感銘を与える。そして、素直に書いている。私の詩は、これとまったく逆なのである。

翌日、気が進まないが詩を袍に納めて登校。放課後にでも提出しようかなと思っていると、台風の為、午後の授業は無し。そして、原稿提出は明日までに延期。夜、又、ない知恵を一生懸命絞りだして、見ばえがしそうなものを書き上げた。喜こんで読み直してみると、「あれ、これ、どこかで読んだ事があるなあ」と。盗作なんて事になったから、せっかく考えて書いても意味がない。結局、詩は中止して、この筆をとっているしだいである。

天才・秀才・凡才

石川 章

世に天才といわれている人物は数多くいる。しかし、その中に偽の天才、すなわち非常な秀才が余りに多く含まれているような気がする。

天才は広大無限の可能性を持っている。そして、その可能性を総べて可能にまで持ち上げねば気のすまない人々のことである。その活動は深く、凡と等しいほどゆっくりされる。しかし、秀才は、凡人と等しい有限の可能性を持ち、その範囲を手ぎわよく、浅くすみやかに耕していく。そして、非常な秀才はその範囲を耕しつくし、その一角に腰かけてひまをつぶしている。ときにはひまを持てあまして自殺をする人々のことである。凡人は秀才と等しい有限の可能性を持ち、ゆっくりと耕していく。しかし彼らの一生をかけても耕しつくすことは少ない。耕しつくしても、そう生涯をもてあますことはないだろう。

もしこれらの人々を幸福という点からなめるならば、もつとも幸福なのは秀才といわれる人々であろう。彼らは身分に満足することができるとともに余暇を楽しむこともできる。秀才の不満はぜいたくと、わがまま以上にはでないであろう。天才は確かに秀才よりも豪華であるかもしれない。が彼らは決して自分に満足しない。いかに耕した、としてもそれは無限の一部分にすぎない。天才というのは彼の生涯において名声を得ることは少ないものである。幸福が満足を自制するところにあるならば、天才は決して幸福にはなれないだろう。凡人は天才よりも幸福であるが、秀才より不幸である。しかし、秀才

高校時代の三年間、あとに残ったものは、悔いしかない。すべてのことが満足しないで終ってしまったような気がする。入学当時のぼくの夢は大きかった。他の多くの人が思ったように、勉強に、スポーツに、そしてその他いろいろなことで他の人より一歩前を歩きたかった。しかし今のぼくはどうだろう。すべての事に、他人より一歩遅れたところを歩いている。残るものが悔いはかりであつてもそれはあたり前の事なのだ。

甲府一高生と言う名のもとに、勉強・勉強とおいまわされた三年間ではあつた。しかしその中にも何か一つ大きなこととしてみたいという夢があつた。小さな人間でいるのはいやだ、大きな人間になりたいという夢が、ところがその一つの事もできないで高校生活も終ろうとしている。今のぼくに残りの高校時代にかける夢がある。期待が、希望が、野心が、たった一つの望みがある。第一志望の大学に入りたいという望みが、このことがぼくのいう一つの大きなことになるかもしれない。と、すると今からでも高校時代をバラ色にできる。

「終りよければすべてよし」。ということわざがある。今までの灰色の二、三、四年間を残りの二、三年間をバラ色にするための肥料にしなさい。人生七〇年の中の三年、短くもあり、楽しくもあり、苦しくもあつた。そして七〇年間では語ることのできない思い出の残った三年間であつた。

は幸福にあきるとがあるが、凡人にはない。もし幸福が大小の問題でなしに、真に自分の中に存在するならば、凡人は秀才よりも幸福になれるであろう。努力して幸福になれるのは凡人だけである。秀才はあまることになるし、天才はなお一層不幸になるだけである。

次に人間の価値をいうならば、個人として天才は拔群の価値をもつ。民衆の上に立つのは常に天才である。総ての指導的立場に立つのが天才である。天才というものは、一人の人間としての、力、健康、生涯に決して満足を感じない。そしてその不満をすべて民衆の莫大な力と永遠の中に爆発させる。天才にとつて民衆が満足することは自分が満足することに等しくなる。天才には自分という一人の人間は存在しないといえるかもしれない。それに反して、秀才には常に自分が存在する。自分と人々とを常に対象的に見る。秀才は身分を分析し研究する。自分をこまぎれにして売り出す。それはただの幾万人かの中の一人の人間としてしか意味をもたない。身分という一人の小さな人間を後生大事にだきかかえている。小さな身分をより大きく立派にさせようと苦勞するのが秀才である。ある時は尊敬されることもあるが、それは凡人のしつとにすぎないだろう。それでいて、彼らは人民の上に立とうとする。しかし、その価値は凡人とくらべても、なつめと、どんなぐりの差でしかない。

幸福はあくまでも個人の問題であり、価値は社会の立場からの問題である。すなわち、幸福と価値とは全然別のものである。社会がよくならなければ、其の幸福はありえないというかもしれないが、それは幸福の理想形である。理想はあくまでも理想、人々にとつて現実に自分の満足できる世界が幸福なのである。

社会は幸福を吸収する魔物である。だから人々は手つとり早く、自

分と社会との間に城壁をつくり、自分だけの幸福をつくろうとす。

社会の幸福などという遠い世界の話より、たった数十年の間に小さいながらも自分だけの幸せを持つとするのはあたりまえのことである。価値のある人々は城の外に出て社会と戦う。天才は社会を征服しようとする君主であり、凡人はその兵である。秀才は厚い壁を持つ小さな家に住んでいる人々にすぎない。天才は征服しない限り不満である。凡人は兵であることに満足しているかもしれない。秀才は厚い壁の中にも不安である。そしてもう少し深く考えるに、天才は心の中に幸福をつくろうとする人々である。凡人は心の中に幸福をつくることをよぎなくされている人々であり、秀才は平安と幸福とをとりかえようとしている人々であるということができるだろう。

現代の人々は誰でも秀才になりたがっている。それは社会が不安になればなるほど人々はそう考えるだろう。自分だけの世界をつくり自分だけは安全でありたいと思っている。それはむろん成功するだろう。しかし、その考えることによって、人間としての価値、勇氣、其の幸福からはますます遠ざかることになるだろう。人間は自分の首をじよじよにしていることになる。そしてさらに恐ろしいことは、最終的に自分と社会との差によってのみ満足を見るようになるということである。自分をそこにおいて社会を一段下にあらしうと考えるようになる。それは完全な利己主義となる。個人主義という山頂の真下に利己主義という谷間がある。秀才であろうとするために無理をした人々は其つさかさまに利己主義の谷間に落ちていくことになる。

ここでいう天才と秀才、凡才は単に知能によつたものではない。人間の形をおおざっぱに区別したにすぎない。しかし、それはあながちはずれているとは思えない。

の穴はすてばちな気持ちによつて埋められ、さらに不安、諦め、焦燥が層をなしてそこに積み重ねられる。やがて答案用紙が私の視界から姿を消す。と、みるみるうちに層は渾然一体となり、私の体中に拡大されてゆく。掛金が病氣中の鞆は今朝と変わらず、書物をいつばいためこんで張り切っている。その中の一冊を無難作に取り出し、頁を繰ろうとする私の指先がはつとしたように動きを止める。脳の一隅から現われた灰色の雲が低くたれこめてくると、私の手は急いで教科書を鞆に押し込めてしまう。

廊下に出る。黙って腕にぶらさがっている黒い鞆がやけに重い。数人の友人の笑顔が目前を過ぎてゆく。「さようなら。」私も反射的に答える。「さようなら。」階段では多勢の足音が雑音を作っている。それに刺激されて雲がつぶやく。「どうしてこの階段はこんなに狭くて暗いんだろう。」この雲は雨を降らす場所がわからないらしい。

自転車置場も例の混乱状態。ずらつと並んだ自転車が肘の張り合いに神経をすり減らしている。寄りかかってくる隣の自転車をつき放して私の自転車を引っぱり出す。赤錆が見えはじめサドルの低いこの自転車、背伸びをして他と並んでいたのが急にあわれに思えてくる。

自転車と一体になった私の影だけが、アスファルトに照らし出されるようになると、平静さを悔恨がおしつむ。それが爆発音をたてる「パカ／＼」ペダルを力一杯踏みつける。

家の門をくぐるとなつかしい空気をそこに見い出す。するとその空気に甘えなくなか。ふと気付くと、足下で巨大な太陽に向って松葉ボタンが精一ぱい咲いている。一本の緊張した鋼鉄線が私の体をつらぬいぬ。

何くわぬ顔で戸をあける。「ただいま。」

☆☆☆☆☆☆☆☆！

横内敏昭

いやだいやだと言うのに、とうとう書かされ、一・二年の記録をやぶり学年誌に初登場となったがこんなバカな事を書くのも、自分がつまらない人間だということなのだろう。でもみんなからはそう思われたくない。だからこんなつまらないものは読まないで次の人のに行つてもらいたい。お願いだ、早く次の人のを読んでやってくれ、どうして読んでるんですか、読んで下さるのはうれしいけど、これを読めば自分がどんなにつまん人間かわかってしまうからもうよして下さい。アレ！まだ読んでますね。これほどいつてもまだ読んでるなんてどんな人なんだろう。しつこいんですね。そうか、ボクのバカなのをはつきり知りたいんですね。でも、もうやめて下さい。どうしてやめなんでしょうか早くやめて下さい。やめてくれ！ボクがこんなにたのんでいるのにもかかわらず、一向にやめようとしななんだ。やめてくれよ、もう見ないでくれ！いやだな、まだ読んでるんですか。そんなにしつこいと嫌われるよ……。

みてみる、とうとう最後まで読んでしまつてほんとにわからないんだ。まだ読んでるね、もうないよ……まだみてる。みないでくれ。

ある帰路

内藤純子

試験終了のチャイムが私の心に大きな空洞を形成する。次の瞬間そ

くずれかけた

藤巻良平

理知的で、お美しく、高貴なお生れで、虐栄心が強く、男に興味がない様な顔をした冷たい女生徒、頭脳明晰で、ひねていて、きざで傲慢で、うぬぼれが強く、好色の男生徒ばかりの一高生の中にあって田舎からひよっこ出て来た。純真無垢な自分の様な男が、いかにこのいき苦しさに耐えて来たかを知ってもらいたい。自分は冗談や、狠せつな話をしていても、常に腹の探り合いをし、いかにして人を蹴落とそうかと考えている人間の世界に身を処して来た。劣等男児の悲劇はここから始つた。自分は一高と言う外観も内部も汚れ、荒廃し、嫉妬と羨望の過巻く環境の中に三年間を過ごし、自らもまた純真さを失い皮をかぶつた人間になった。退廃的、否定的な老いた青年になった。友人関係、女性関係の複雑さ、おそらく一高と言う学校の特殊な環境からきてはいないだろうか。人生は一人で静かに歩むもの、自分自身を最も大切にする事……等々。……を知った。

これも人生の一過程かもしれない。

自分は強くなった。態度も大きくなった。あたかも離婚した女優の大胆なその様に。

自分は大学へはいったら、酒も、タバコも、マジジャンも、パチンコも、女遊びも、一切しない。ひたすら読書に沈潜したい。

恋を知らない男のひがみと取つてくれるな。願わくは、これからの人生において自己に忠実に生きたい。私は人方美人を最も軽蔑する。たとえそこに複雑な社会問題が入り組んでも、自分は自己を主張す

る。それは、利己主義のそれではない。自分の意見を持つことだ。それによって多くの敵を作るかもしれない。しかしまた真に心の許せる友が出来、自分の人生を暖かく包んでくれるかもしれない。自分は多くの敵が出てよい。より自己に忠実に生きるためにも。常に健全な批判精神を持ち続けたい。より向上するためにも……。こんな事はどうでもいい。空しさだけが私を苦しめる。いつの日にか、卒直に、純真に自然を、人生を、みつめたい。

「車輪の下」にみるヘッセ

堀内成子

夢を見る事は楽しい。未知の世界を旅する事も非常に楽しい。しかし、文学書を読む事は、もっと楽しい事ではないだろうか。なぜなら一冊の分厚い本は、それらを皆、満たしてくれるからだ。しかし、その文体が、読者のイメージをこわし、文学への愛着の念をうらざる事が往々にしてある事は、見のがせない事実である。ヘッセによる「車輪の下」も、そういう面で例外ではなかった。私は、ここで「車輪の下」と書いたが、「ヘッセの作品」と言った方が妥当なのかもしれない。中学二年の時だったろうか、題名が気に入って「青春は美わし」という本を読んだ事があったが、その時、失望させられた私は、最近になって「車輪の下」を読むに当って、ゆううつと一種の興味を持つてこの本を繙いたのである。

ハンス・ギーベンラート、この本の主人公である。一口で彼を評するならば、勤勉な田舎の模範青年といったところだろうか。州立の神

学校めざして勤勉を続けるのであるが、果たして、だれの為の勉強であるのかと思う程に、目的を失った姿は、南の国へ帰る事を忘れた渡り鳥のそれに等しかった。ただもうその神学校へ入りさえすればよい。親の為に先生の為に、そして自分の為ではなかったのである。なぜなら、ハンスは牧師になりたいわけではないし、神学校の教師になるのでもなかったからである。それは彼の寮生活において、又友人との対話により理解する事が出来る。結局、彼ハンスは無理解な教育という車輪の下じきになった形で、その重みに耐えかね、生活に敗れ、はかない初恋によるめき、果ては、〃死〃と妥協して、故郷の川に散ったのである。車輪の下じきとは、みえのマントをまとった大人達のそしてキリスト教の重圧である事は言うまでもない。彼をおそう内面のあらしは静まる事を知らず、それが頂点に達した時、ひとりの人間としての価値を失ったのである。しかしヘッセの文体に私は、ほとほと退屈してしまつた。

彼の身体を、生命を虫はむ、ニーチェ、キリスト教、ユダヤ教、禅によつて彼は穴だらけの人間になつてしまつたのだらうか、そして彼の筆から生まれる作品の主人公も、穴だらけの生活を送る人生の落伍者でしかなかったのである。人間は自由であると同時に、孤独で、責任と苦悩を背負わされているというヘッセの実存主義的考えも、信仰厚い家庭に反逆する自称、老個人主義者、「我意の人」も、心の空洞をうめるには、その方法を知らなかったのである。私の車輪とて、けつして軽くない。私の車輪が重くないと言つたらうそにIなるだらう。

どろ沼に、うずまつたハンスの車輪は、動く事を知らない。そこから投げ出る事を知らない。しかし私の車輪は、そして全民衆の車輪が

やがては快いメロディーを、はなち、地球上の、全宇宙の人々が一同に会し、幸福を喜びあう日が、必ずやつて来ると確信する。

ヨーロッパ、いや世界中で、今日も、大ぜいのハンスが生まれて行く事だらう。そしていつしか彼等が、心の傷を平癒する事も、そう遠い事ではないはずである。

社会の進歩における青年の役割

若林 宏

社会を進歩させるのは、むろん人間である。その中で最も活躍しなければならぬのは、我々青年である。なぜならば、たくましい夢、ビジョンを持つているからである。

では一体どうすれば僕達が社会の進歩にすこしでも直接的役割をはたすことができるか、まず第一に、社会を良くするための夢、ビジョンを持つことである。どんな奇技な夢でもかまわない。どんな不可能な事でもかまわない。要するに社会を良くするための意志を持てばよいのである。次は実行しようとする意志を持つことである。むろん全部を思いのままにすることは不可能である。だからできそうな事から少しずつでもやればよい。要は実行しようとする意志である。第三は自分の「意志、実行に責任を持つことである。よく自分の夢のみにために「社会の進歩のため」「人間の幸福のため」とか言つて他人を省りみずに自分の夢を実行しようとする人がいるが、それは自己の夢のためにすぎない。其の実行はあくまでも社会のためにのみ存するものであつてけつして自己のためには存しないのだ。

青春

大沢 隆

俺達青春時代というものは絶望したり、失敗したり、悩んだりするのが当然なのであつて、そこから俺達の若さを持つて立ち直つていくところに俺達青春の其の姿があるのだ。だから俺達は大きな志を持つて俺達の人生をぶつつけて切り開いていくのだ。それにはまず不安定な生命を大事にすることだ。これは人間としての当然のことなのだ。俺達青春の生命というものは可能性であつて将来どうなるのかも分らないし、又人間というものは自分で自分の本当の姿というものは分らない。自然とか社会とかから与えられて生かされているこの生命というものを自分個人の観念によつて「俺はこれだけの人間である」という風に自分かつてに決めつけてしまうのは青春という若さをうしなつてしまふし、生命というものに申し分けない。だから俺達は大きな志を持つてそしてもつともつと幅広く、大きく生きていくのだ。

無題

望月行雄

この煩雑な生活の中で自分を深く見つめ、考えたことがあつたらうか？

いやあつたかもしれないが、記憶に残っていないだけかもしれない、とにかく心に残っていないのは確かである。しかし、それは他人から見れば一些事にすぎぬかもしれない。だが我が身に取つてみれば一大事の

ことかもしれぬ。それほどの事を何故考えなかったのだ。考え、考えたとして、強く、ある物を求め、ある物が我が身に何か言い聞かせているのだと悟るに過ぎないんだ。何度も、何度も……

何んでもしてやる、

おれは独りなんだ

どうせ限界のある身なんだ

思い切り生きろ

さあ、思っていることをぶちまけろ。

克服

小沢和子

この三年間で私はどの位成長しただろうか。月並みな言葉でいえば長くて短い三年間なのだけれども。

明日は英語をしよう歴史をしようとはりきっても当日になればペチヤンコ。残るのは苦い思いだけ。兼好法師がいうように、『道を学する人々には朝あらむことを思ひ、朝には夕べあらむことを思ひて、重ねてねんごろに修せむことを期す。いはんや一刹那のうちににおいて懈怠の心あることを知らむや。なんぞ、ただ今の一念においてただちにすることの、はなはだ難き。』痛いところを突いた訓戒で、頭があらがない。兼好法師が没してから六百余年を経た今日においても同じ様な状態なのだから三年ぐらいの進歩はわかるうはずがない。今後に期待をかける方が得策なのだろう。自分の意志の弱さを克服することが今後私の大きな課題である。

片輪の人間

安部道弘

五体満足な人間をつかまえて片輪とは妙な言い方である。が次のような例を上げれば、分つてもらえるであろう。現在の社会では、大学出身者と高校出身者とは、雇用制の上でも、はっきり差が現われている。二流三流の大学を上位で卒業しようとも、大会社の中には、

「指定校以外である。」という理由で入社試験を受けさせてくれない所がある。こんな現実である以上、先生や先輩がいくら「学部学科を決めて、その上で自分の力に合った大学を選んだ。」などと言われても、いきおい、そんな忠告を無視して、一流校を目ざす人間が多くなるのは、当然であろう。その為、一点でも多く点を取るよう、自分の受験に必要な科目のみを勉強し、「他の科目は、どうでも。」という事になる。高校を卒業すれば、二度と学ぶ事の出来ない科目もある。本来ならば、そういう科目こそ、力を入れて高校時代に勉強すべきであろう。しかし現実には、「入試に必要な勉強のみをして、大学に合格さえすれば……。」という考えが、高校生全部の心の中にあるのではないだろうか。こうした考えは、非常に危険だと言えるだろう。

こういう考えを持った人間が、規格化された「一般社会人養成器」という大器に入つて何年か後にワンサと押し出されてくるのである。こういう現実が片輪の人間を生まないはずがない。こんな事では、五つも六つも持っている才能を、一つぐらいしか伸ばす事が出来ないであろう。又、才能の中には、高校時代に伸ばさなければ、一生育たないものも多くあるだろう。これらが摘み取られている現実、あまりに

さが目に染む。

本屋には画集が有る。生きている絵は私達に未来への希望を与えてくれる。

誤解されているニキビ

中山重雄

これまでニキビは誤解されてきたようである。一般にニキビが出るのを嫌う。そして、ニキビが出てくると苦心してそれを取ろうとするようである。どうしてそんなバカげた事をするのだろうか。よく考えてみると原因は、世間一般、特にニキビを取る薬を作っている会社から押しつけられた考え方である。

現在の人間は、これまでの古い考えに惑わされずに、自分自身でニキビについて考え、そしてニキビについて理解をもつべきであるの一般にニキビは「青春のシンボル」と言われている。そのとおりである。しかし、一般にその言葉をよく理解していないようである。だからニキビを気にして暗い青春を送るという悲劇が生まれるのである。本当は、ニキビが出るほうがむしろ喜ばしいことなのである。たとえば、ニキビによって、自分の青春をハッキリ自覚して、若さあふれる生活を送ることができるように。だからニキビに対して感謝するくらいの気持ちを持つべきである。うれしいことに、同じニキビでも日本人のニキビの持つ力は偉大らしい。坂本九の場合が良い例である。彼は顔にニキビがたくさん出ても恥ずかしがらず、むしろそれを誇るかのようになを向いて歩いた。そして、日本人で初めて『ゴールデン・レコード』を貰ったのである。ニキビの良さはこれらの例が示すとおり

にも大きな損失となっているのである。今のぼく達には、この現実をどうする事も出来ないが、少しでもこれに抵抗し、舵から手を離さないよう努力し、片輪の人間から、正常な人間へとなるよう努力すべきであろう。

四時間

飯室哲也

自分自身のデッサンがうとましく、やりきれなくてアトリエから逃げ出した。外はアトリエの圧迫感に対して解放的だ。素晴らしいパジャントのデッサンが脳裏をかすめる。ああ、眼前の景色は、空は、木々は、カッと冴えているのに。何と欠点の明白な事だろう。銀杏の木々の下を、閑静な家々の路地を、杜を歩くをままに考え、考えるがままに歩く。何故、カッとピシッと決まらないんだろう。運動着姿の子供等が歩いてくる。

暖かさを求め、安らぎを求めて家に帰るが、在るのは感情の高ぶる事だけ。追われるようにアトリエに戻る。そこにも居たたまれずに外へ。友が呼び留めて二人で散歩に。暗く冷たい夕暮を、ぶらぶらと店に入る。おでんを食いながら彼は認めてくれる。良しと言ってくれる。注意してくれる。示唆してくれる。三カ月が光る。

もう真暗だ。夜空には無限の空間に、星が冴え輝いて居る。二人は話し、笑いながら校庭を歩く。男二人の寂しい散歩だ。笑い声が夜空に響く端から端まで。帰り道。昼間の暗いアトリエは、電球の太陽で明かるい。そこは私を、友を、苦しめ又楽しめもする憎い楽園だ。寒

である。ニキビに対する古い考えの殻を打ち破って大いに青春を謳歌しよう。ニキビ パンザイノ

現代の不安

堀内英子

いまや世界は、二つの思想陣営にわかれて対立し、不気味な不安をかもし出している。相互に他の思想を理解しあうことができないかのように、にらみあっている。戦争は、人間が人間自身の手で人間を不幸におとしめ、破壊にさえ導くものだということが、誰にも痛感されながら、人類すなわち私達は常に戦争への危機におびえている。

今身近かな問題を考えてみると、ベトナム問題、印度とパキスタンとの戦争があげられる。いったいどうしてこのような戦争が起こったのだろうか。戦争の原因は全く人間にあり、神や仏が人間に与えるものではない。

戦争は人類を悲慘にするだけのものであるという事を私達は過去の第一次、二次世界大戦で十分に見せつけられた。人類はこれからの事を知っているにもかかわらず、あえて戦争を起こそうとする。同じ時代に生まれあわせ、同じ大空のもとで生きながら、相互の意中が理解できず、水と火のように対立し、敵視しあっているということは、人間としてこの上ない不幸ではないだろうか。

原子爆弾とか水素爆弾とかいう恐ろしい言葉が消えて人類愛・平和・人道というようなるわしい言葉ばかりが聞こえる世の中はいったいいつになったら訪れるのだろうか。

一つの過程

中 楯 洋

私は小さい時、「将来、何になるの？」と問われた時、答えかえしたという思い出を持っていない。わずかに、中学校のころテレビの放送にかぶれて、「新聞記者になりたい。」といったことを覚えていた。多分、悪を倒し正義が勝つといったふうな、単純な法則にほれこんだのかも知れない。しかし、それは無邪気な考えだったように思われる。

今、私は高校生活最後の三年という立場に立っている。大学なり、社会なりに対して、自分はこうだということが出来るような気持がする。私は高校へ入り、一つのクラブを知った。そして先輩の話を聞き同輩と話をした。その内容は、たとえたあいなきものだったにせよ、私は初めて共同体の中で自分が何をなすべきで、どこにおかれているのかを知った。そして一つの観点を見つけたような気がする。私達は現実の中に生きており、著者としての思想を持っている。そして、理想を追求することによって、現実をより理想に近づけるようにしたいと思っている。しかし、私のすぐした共同体の中では、現実とは動かないものであった。停滞し、ともすれば安易な妥協を求めがちであった。ここで私は、現実と理想とのへだたりが、いかに強靱なるもので結びつきがたいものであるかを知った。

現実とは、理想よりもはるかに優勢であった。現実が理想をたべていた。この時に私はさきほどの観点というものに気がついたのである。それは、私が理想と空想をはきちがえて考えてきた結果、現実には圧倒

されたのだからもう一度もとに戻って見ようということである。確かに高校時代は物を純粹に考えることが出来る時期である。しかし、それは、大部分は可能性、奇跡をもたない空想なのではないだろうか。私は、もう一度この時期に、自分のかかげた理想を見つめて見たい。そしてこれから出てゆき、ぶつかる社会や、大学というものを見つめて見たい。これが、私が、其の私の理想を追ってゆく敷石とならんことを願っている。

思考

早 川 光 三

今日もあと少しで一日が終ろうとする。このごろの一日は大変短く感じられる。なぜだろうか？、そんな問題を解答を考えていると、あつという間に一日が飛び去ってしまうので考えるのはやめた。今日もモノトナスな一日だった。朝学校に行き夕方近く下校する。そうするとまた家ではTVが私を待っていてくれる。大変楽しい一目であるがそういうモノトナスな目は嫌いだ。早くそこから脱出したい。しかしそこを脱出するにはどうしたらよいだろうか？そんな問題の答を考えているとあつという間に一日が飛び去ってしまうからやめた。このごろの毎日は惰性になってしまっていて何ら人生の発展には役立たない。しかしそう考えるのは私だけではないと思う。どうして毎日が惰性になってしまふのかなぜだろう。私は考えることは嫌だから考えない。しかし人間は思考がなくては何ら発展することはないであろう。だから私は人間として発展しないのである。それでは困る。今からでは遅くはない。物についての疑惑の念を持つ。こういうことを

そう願う

丸 山 道 子

動揺のやまない胸をおさえながら入って来たこの学舎にも、ようやく親しみを覚える様になったこのごろ、「受験生」、「三年生」と呼ばれてとまどう自分が、はつきり感じられます。

あの日、尊敬と畏怖心とで見上げた大きな三年生の席に、今は自分がいる。十八才になったばかりの私の中に、この三年間での「成長」を疑い目が、消えようとしないうです。

長い様で早く過ぎてしまった高校生活、その月日の流れが、ちつぽけなこの私にも沢山の思い出をプレゼントしてくれました。しあわせを追いかけてさまよう小羊が恋に恋する：そんな、水より淡い夢も見ました。

何も判らない「宙ぶらりん」な自分を忘れ、神よ、人生よ、と声を震わせて討論したこともありました。

困りの全てがいやになって、そつと帰ってしまった休み時間も、きのうの様に思われて次々と浮かんでくる友達的笑顔と、むしろ懐かしさで、得体の知れぬ幸福感が私を包みます。

そしていつか、学生時代の甘い感傷を、過去としてふりかえるその夜までも、私だけの大事な足跡として残しておきたい……。

そう願う私です。

シヨートストーリー

内藤博文

外は風が狂ったように吹き荒れていた。彼女は家の中にいた。しかも心持は、外で荒れ狂っている風とまったく同じであった。「あなたは どうしてあんなことをしてしまったのですか。」

「……」彼は何も言訳をする様子もなく、頭をさげていた。

「あなたはこれについてどんなつぐないの方法を考えていますか。」彼女はまだ20才そこそこだった。しかし、とてもおこりつぽく、この家の中ではリーダー格であった。そしてそれなりに独断的でみなを引っぱっていく力ももっていた。

すると、とつぜん彼はいすから身をはづして床の上に伏した。彼は心の中では泣いていた。しかし涙は出てこなかった。彼はうなる様な声を上げた。彼は彼女の足もとにずりよってきて、ゆるしを求める目で彼女を見た。しかし彼女はひややかに見返した。これ以上の冷たさはいえぬほどの冷たさで。彼はまたうなだれた。彼は考えていた。どうしたら自分は許されるかを、しかし、何一つとして浮んでくるものはなかった。彼女の足もとには不思議な淡い色をした球がいくつもあった。それは彼を未来の世界へ誘い出していくような色であった。そして、彼女の足は、乳色の鈍いうつとりとした。あのみがききった象牙のように彼の涙は見た。彼女はなんと美しいんだろう。彼は自分の目を楽しませる最後の物のように思っ、見た。彼は心を決めた。いやあきらめたのだった、彼は目を上げた。彼女は、あの時のままの冷たい目を見た。彼はふるえだした。彼はさきほどからいくどとなくあの光影を思いだした。そして今、彼はとてもつかれていた。彼のた



ひまなくぞ時は過ぎにけり
ある時は母のしずくにぬれ
ある時は師のしずくにぬれ
ひまなくぞ時は過ぎにけり
知れ、汝が心にかかりし、しずく
知れ、汝が身にかかりし、しずく
命あらは語れよ母のしずく師のしずく
命あらは知れ、いつの世をも
汝が心に汝が身にこの尊きしずくあらんことを。

梨の菓

清水喜彦

君と別れねばならない時が来た。
最愛の君と別れねば……………
返りみると長い年月
思い出は奔流のように私の胸に
押し寄せて胸中を猛り狂い
淡い感傷を残して消えてゆく。

君の額の梨の葉は

ましいは、完全につかれマヒしていたのだった。

彼女は、その時、突然に判決を下した。彼は首輪をはめられ、ガラス戸のない、暖かさのない、風のびゅうびゅう吹きぬける、母屋の横の小さな小屋に、その首輪にクサリをつけられて入れられた。しかし、そんなことは、彼の仲間においては、当然しごくことなのであった、なぜなら彼は犬であったのだから。そして彼は彼女のかわいがっていた、カナリヤを殺してしまったのだったから。

高校生活の思い出

古明地勝美

僕は、今アメリカにいる。
アメリカに来て、一番日本を思い出させたのは、学校のこと――高での二年四ヶ月の生活である。一高の二年余の生活は苦しかった。いつも勉強のことが頭から離れず明るい未来を夢見ながら毎日をおくった。しかしやはり楽しかったのである。苦しくても大きな目標に向って真剣に努力できたことは、本当になつかしい思い出である。それに、秋の強行遠足で足のマメをふみながら友達と検問所をめざしたこと、野球の応援のこと、書道部のことなどやはり楽しかった。僕は今、高校中途にしてアメリカに来ている。それが果して大きなプラスになるかどうか今は、わからない。しかし日本の外に出て、再び日本のことをながめることが出来たことは幸いである。
アメリカの高校生は入試がないので、のびのびしているが、何か真剣にとりくむものがなくてかわいそうな気がする。
今年も多くは友達が立派に大学に合格するだろう。僕も一年遅れはするが、きっと後からついてゆこうと思う。

(イリノイ州 グレイズレイクにて。)

春は笑顔で微笑んで
夏はキラッと憲兵顔
秋は思慮深くうつむいて
冬はかなたを直視して
いつも私を見つめていた。

君は知識の宝庫であった。
私が得た君の知識は量りしれない。
その知識は私の心で土台となった。
人間の土台と……………
これからはりっぱな家を築くのだ
私自身の手で自分の家を。
君も負けずに元気でいてくれよ。

別れに

大沢良一

すべてが終った
一体何を残したと言うんだ。
何のためらいもなく
逆らわずに
ただ去ってゆく。
しみじみした?
寂しいなんて
悲しいなんて

思い出なんて
深く静かで
風もやんだ。
おちついてゐる私。
別れに
尊い別れの涙を
薄暗い海の底に沈める人。
水晶の玉と並べる人。
でも
現在に生きること
一人になったことを
強く自覚し
流れ去る雲を見つめる。
ざわめく外界
山や海も泣き出し
白い壁はぬれてゐる
机の傷にも涙が一杯。
別れに何も感じぬ私。
遠い友
寂しい私。
そんな時友に出逢ったら
なつかしさとうれしさが
湧き上がってくる。

汗にぬれたハンカチをまるめて
握っていた手は 自分のもではなかった
庭木を少し植えた住宅が
個々の生活を中身に 立っていた
刈りそろえた生垣が
ずっと続く白いアスファルトが
唯 そのまま視覚に入っていた
――夜空と川面を 飾った
あの夜の 花火
帰りの道は
星が美しかった――
陽が落ちはじめ
うなだれていた 雑草を
赤く染める頃
ようやく 感覚をとりもどす時が
やって来た
だが 心の中にあつたのは
ザラザラとした
結晶だけだった

死んだと思つた人に逢つた時のように。
どこからと問う
されど答えず。
もう逢えないと思ひ
こうして逢うことが
不思議なめぐりあわせに思われて
その一瞬を限りもなく尊く思う
その感動が
私には悲しい。
もうすでに人は去つた
水も流れよ、雲も行け。
燃える思いをおさえて
さらば友よ／
まためぐりあうその日まで。

落陽

山崎公子

工場用水に汚染された重い流れを
見下ろしながら 素足をひきずつていた
七月の太陽が 容赦なくふりそそぎ
すべてが 生気を失つた昼下りだった
青マジックで 頭文字を書いた本と

妄想的自己判断

松村健一郎

高校生時代は短かった。
しかし、
妄想的な矛盾に踊らされた期間は長く
そして今も続演中である。
この矛盾は、
俺の心という最愛の奴を
苦悩と葛藤とで攻めつけ
いつも
巧妙にカモフラージュしてしまう。
マジメであらうとする俺。
マジメとは
個性喪失の最大原因であり
いやなカンジのするものだと思う。
フェミニストであらうとする俺。
女とは
一種の不可解なる種族であつて
時には
理屈抜きであしらうべきだと思ふ俺

いつも限界というものを考慮して
理的にふるまおうとする俺。

無配慮に

乾燥的分別でもって動こうと思う俺。
有益なる助言者たんとする俺。

無知無感覚な

被助言者たらんとする俺。

なりゆき静観者であろうとする俺。

常に自ら

自らの歴史を造ろうと思う俺。

年より上だなと思う俺。

年より下に思われたい俺。

.....

矛盾は

あらゆる空間に向かって枝を伸ばし、
天井を知らないようだ。

だが喜ばしいことに

今の俺には、

ひとつの矛盾しないものが、
深く根をおろしている。

道すがら

渡辺 章

夜って静かだなあ。

屋間は不断に通っている車もなくて、まるで南極の広い白銀の道を
歩いている様だ。

まんまるい、小さい月が、頭の上で黄色くふるえている。そして、
砂利をまいた様に、星屑がちらほらっている。

あの、ようやく見える様な、青い点の上にも、やはり生き物がいて
僕と同じように空を眺めているかもしれない。
そうしたら、この地球も砂利の一つぶなんだ。

それじゃ、地球の上を歩いている僕は、机の上のほりぐらいかな
もつと、小さいな。

だけど、今僕は歩いている。考えている。
どんなに小さくても、僕の存在は確かだ。
どんなに小さくても。

ちりにはちりの、小さな世界がある。

その中で僕は、思う存分、自分の空気を吸うのだ。

空を見ながら。

なしの葉の思い出

石原澄恵

なしの葉は暖かい思い出

暖かい思い出はあの時の思い出

あの時の思い出はさびしさにつながる。

八十五年のなしの幹の三年間の小枝には
未熟な花が咲いている。

二人で通った坂道に

こっそり咲いてたなしの花。

仲よくしてねと言った花

遠い日になる思い出が心の中を駆けた時

十字に結ばなしの葉が

限らない可能性を潜めた
全く革命的な人間になってやろう……。
そういうことだ。

しかし、これは

俺の究極目標なんかじゃない。
それは確かである。

俺がたどりつく終着駅は……

やっぱり矛盾じゃないかなあ。

しかし、それにはなんの根拠もない。

もうお別れねと言ったつは

なしの葉は冷たい思い出

冷たい思い出はあの時の思い出

あの時の思い出はよろこびにつながる。

三年経って散りかけた時

にっこり笑っているような。

二人で帰った夕日の道に

赤く映えてたなしの花

小さな悩みに身を沈め泣いていた時

私を上げまし続けてくれた花

近づく未来を話した時に

十字に結んで手を組んで

また会いましょうと言ったつけ。

十字に結ばなしの葉に

なしの葉に結ぶ思い出は

二人の未来につながるいく。

なしの花のまま別れても

きつと二人が会う時は大きな丸いなしの葉の黄色く笑顔で会いまし
よう。

なしの葉の思い出は二人の思い出

二人の思い出はあしたの喜びを呼ぶ

あしたの喜びは私達をなしの実にする。

光り

伊藤 豊

この暗闇の中にある
ある一つの光りに向って
われ前進するなり
しかし諸々の壁は強固に
われの前に立ちふさがる
だがわれはそれを打ち壊さねばならぬ
われのこの望みをとげんがため
この暗闇の中にある
この一つの光りが消えないよう
われは強固なる意志と根性とを
いつも持っていなければならぬ
われの今の望みをかなえんがため
そしてこの暗闇の中にある
いろいろの光りをしっかりと
つかまえてはならないのだ
この点から未来にかけては
そしてあらゆる場合にも
われは全精神と全肉体とをかけて

碧い闇

きらめく星くず……
ストリングスの
ミステリアスなささやきが
ダークブルーの空間をさまよい、
そして……
月は輝く希望にあふれる
フライミー・トウ・ザ・ムーン
この世の果てまでも……

碧いインクびんの中の
静まりかえった空間
深い夜

ラウンド・アバウト・ミッドナイト
ミュートトランペットも
乾いたトーンで訴える

僕は言い出しかねた

この静寂に……。

女

平野 和春

白茶けた土手が

その光りに向って行かなくては
われている限り。
ならぬのだ。

夜

望月 加奈美

夜半——目をさましたら
冷たい風が身にしみた
窓から空を見あげると
赤 青 黄……
さまざまな色の星が光ってた
夜の美しさ——
”きれいな世界もあつたのだなあ”

僕はセンチになったよ

松村 健一郎

(ムード派の為に……)
陽は音もなくおちて
もうここは
深い紫の世界
ディープパープル
しだいに広がる

視界の中にはいつた、
女は当惑した。
真冬の様な弱い光が
一人の女の影を写していた。
放心した様に立っていた。
女は黙っていた。

女体は、

風に揺られながら
ろめいをつないでいた
女の美しさはもはやなかった
そこには、ひっそりと腕く人間^{もが}そのものがあつた。

それでも

女は存在していた。

——去年の夏

美

北平 二郎

葉を隔てて輝くは
小さな透き通った露の王
道の小石の間に輝くは

小さいガラス玉
働く額に輝くは
小さなあせの玉
皆美しく
輝やくダイヤモンド

おとこの意地

俺は奴等に勝たねばならない
きつときつと勝たねばならない
奴等の道は出世の道
俺の道はいばらの道
だから俺は勝たねばならない
必ず必ず勝たねばならない
俺は奴等に負けてはならない
きつときつと負けてはならない
奴等の道は人生の花道
俺の道は一生苦勞の道
それでも俺は負けてはならない
何があんでも負けてはならない

角田末治

俺は役者を助けねばならない
きつときつと助けねばならない
今の勝者は必ず折れる
現実の世の中に
奴等は必ず折れる
だから俺は助けねばならない
きつと奴等を助けねばならない
俺は奴等に嘘をつく
みじめをみせまいと嘘をつく
だからみじめに「わ」をかける
それでも俺は嘘をつく
今にみる今にみる
奴等も必らず嘘をつく
俺に向つて嘘をつく
みじめをみせまいと嘘をつく
そんな未来を思い浮べて
俺は奴等に嘘をつく
誰にもかれにも嘘をつく
でもあいつにだけはばれるだろう
それでも俺は嘘をつく
あいつに俺は嘘をつく

オレの世界

坂本文彦

どうにかなるさ
一人で生れて一人で死ぬんだ
大体他人をあてにしようなんて間違っている
淋しくてもオレには自由があるんだ
そうすりや
オレにはこわいものなんかないさ

大体大人は愚劣だ
だからオレは大きくなろうと
もしない
オレはオレでいいんだ
そう、言い聞かした



いささか年寄りみた感想ですが、我々の行動はみな、そしてその総体としての人生は功罪半ばというところが本当ではないかと思えて来ています。そしていくらかでも功が勝つていれば、その人はそれなりの真剣な努力をして来たと云えるのではないかと思います。

どうも我々にいつまでもたつても見栄があつて、自分というものをいいものにみせたがります。ある人は人の思惑などかえりみる自分のほまれをうたい、自分の犯した誤りの方を忘れさせようとします。又気の小さい人はマイナスの面を少くしようと小心よくよくとしてたえずおどおどしてしまふことになる。又想像力の持主は自分の過去を抹消し去ろうとすさまじい策をろうします。しかし所詮振幅の差はあつても半ば半ばというところではないかと思ひます。

ただこう考えてみるとそれなら何をして同じだ、どうせするのなら好きなことをした方が得だということになります。それで結構でして、一度の人生毒にも薬にもなら

が、それはそれなりの良い面をもつのですが、せいぜい60点の出発をふんまえて、自分には可能性の夢はいさぎよくすてゆかねばならぬ道に歩み出すことが大切かと思ひます。その向上の努力はきつい精神力を要請されますが、思い立つた志をつらぬき通すことが俗にいう筋を通すことだと思ひます。

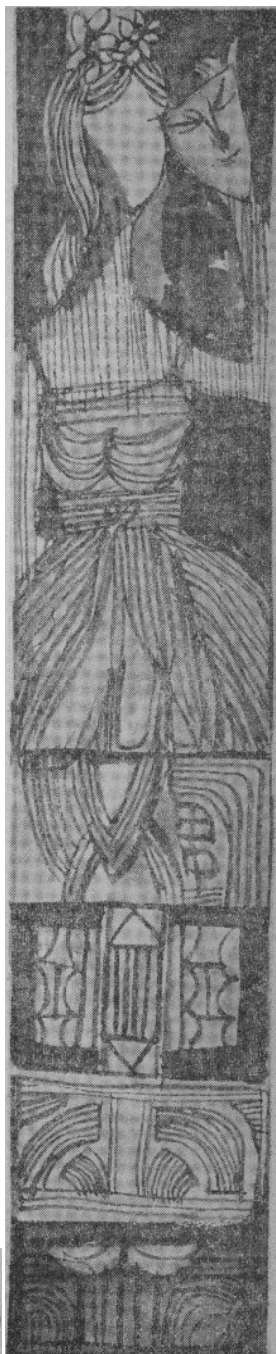
つい教師口調になつてしまいましたが、私など生徒諸君の前に出るとつい完成された人間をなどというおそれた考えにとりつかれてつい生き生きとしたところのないやな面をさらけ出してしまふのです。が、分別くさい顔つきの下にいろいろ思ひなやむことばかりでなくなくなりません。我々の小さな才覚で諸君によかれと思つてやること、どれほどかが役にたらずいることの多いを痛感します。

私も60点の教師は60点らしく力一杯やつてその努力中に更に1点を付け加えてゆこうと思つています。

某君へ

芦沢千洋

過日までの暑さもまるで夢のような静かな夜です。鈴虫なのでしょうか。虫の声も、秋の深まりを感じさせます。きれいな星ですね。君は今ごろいつた何を考えて夢みているのでしょうか。あの星はもう何年も前から光っているんだね。あらゆる人が、あらゆる境遇から見上げてきたんだね。でもみんな寂しいひとりひとりの人間なんだね。みんながこの星の下でおのおのの「幸せ」を頼っている。幸つてすこく身近にあるんだよね、きつと。僕が、君が、毎日通う道ばたにもきつとあるよね。なのに誰も気がつかない。世の中つて不思議なも



3

ぬより力一杯生きた方が勇ましくもあります。ただ我々社会の中に、歴史の中に生きる人間であるためにはその一つ一つの行動に責任がとれるだけのいさぎよい覚悟はしておかねばならないかと思ひます。功罪半ばと申しても何が功で何が罪なのかは不完全な我々がいちいち判断がつくものではないのですから、他人に社会に指摘されて始めてわかることが多いと思ひます。

良いことはほめられれば、あるいはそれだけでいいのですが、誤りに対しては厳しい責任を自分に課する精神力がなくてはなりません。残念なこと最近の世の風潮にはそれがかけています。

さてこれまでの話ですとプラス・マイナス50・50のところになるわけですが、それでは人間としての存在がさびしすぎます。これを少しでもプラスにするのは善意だと思います。善意にもとづく義理とか人情、人の世に脈々と続くその信頼感ではないでしょうか。それがあつて始めて表題にしました60点が生まれて来ると考えます。そこが出発点でそれ以上に1点でも2点でもつけ加える真剣な努力が我々を支えてくれるのだと思ひます。

若い人達とはかく100点をねらい、超人的能力にあこがれるものです

のだね。

これが君に書く最後の文となるかもしれない。結局この高校時代僕は君のように「優等生」にはなれなかった。君は立派です。学生の本分である勉強に自己を没却できたのだから。優等生の君と僕との差は莫大なものでしょう。でも自分は優等生になれなかったことを後悔もしないし残念にも思わない。否思いたくない。(僕も僕なりにこの高校生活で得たものがあるような気がするから)。

これ以上君のことを干渉するのはよしましょう。結局君は君、僕は僕なんだから。

今こうして高校時代をふりかえってみると、いろいろのことが思ひ出されます。一年のころは学校の帰りによく荒川の土手にねころんで夕日などを見ていたものだよ。山の彼方に沈む夕日を送りながらいつも考えた。(この毎日で何かが欠けている。どんなに楽しい時でも確かに何かが欠けている。いつも心の奥でかすかに風が吹きぬけるような)。当時はこんな寂しさは一時的なものだと考えていた。でもこんな気持はいまでも自分の心の奥にいつも宿っている。何かを待ちつついつも満たされない日々の中に自分の人生が過ぎていくかと思うとやりきれない寂しさが自分をおそう。君もきつと同様のことと思う。

二年のころは自分かつてなことが言つていたと思う。きつと「自分」というものを知らなかったからあのようなことを言えたのだしよう。そして三年の日々は君のご覧の通りです。きつと怠慢な受験生と思つたでしょう。それについての弁解はいたしません。好きなように解釈して下さい。ともかく君にとつても、僕にとつても受験に追われ忙しい三力年でした。もしもこの車輪の下のような束縛された高校時代で、なかったなら、君とももつと愉快にかつ力一杯いろいろの

乾 坤 一 擲

中村悦二

ことを話し合えただろうに、それを思うとちよつと残念だ。いまなきだしたのほころギなんでしょうか。ただ秋の夜はすはらしいですね。孤独が自分にひしひしと迫ってきます。今ごろ君は数学かな、それとも英語かな。ともかく頑張つて下さい。君は君の仮説とするもののため、僕は僕の仮説とするもののため最善を尽くす、それがお互いの道なのでしょう。

ただどうぞ覚えておいて下さい。先程も申しあげましたがこの星を見上げるとき、幼な子の純粹な寝顔を見るとき、僕は、君は小さなちつぽけな人間にすぎないということです。その小さな人間が毎日のもつと小さなことにいつもあくせく追いまわされながら日々を過ごす。せつかくの一つの生命が何か無駄のような気がします。我々が自己を主張する以前に考えねばならない我々を越した何か大きなもの——（たとえば愛）——がきつとあると信じます。そしてその恩恵に浴したとき初めて我々はみずからの生命を全うできうるような気がします。

ちよつと話が走つちやつたかな。ともかく人のことはとやかく言えないよね。人間には順位や価値などはつけられないよね。そんなに人間は単純ではないもの。お互いに他人の生き方も認め、かつ『自分の道』をガッチリ生きようやな。とりとめのない文になつちやつたようにだけといわんとすること少しでも解つて頂ければ幸と思ひます。最後にこん後の君の健闘を祈ります。

九月十日夜 芦 沢 千 洋
某 君

残されたような感じであつた。自分と同年配の彼が自分の持つてい

以上の考えを持つていのがくやしかつたのか、それともそのような彼が羨やましかつたのか。あるいは他の理由からか。いずれにしても何かすつきりしないものが心に残つた。そんな状態のまま彼と別れた。私は一人になつて考えてみた。＃目標のない世界！それはなんと空虚な実のない世界なのだ。しかし、そこに生活している人々にとつてはそこはなんの苦悩も感じない世界だ。しかしそこには其の楽しみや苦悩は存在しえない。私には彼の言葉が、渴ききつた喉をうるおす水のように感じられた。今度彼に会つたら胸をはつて言つてやるつもりだ。「俺は目標をはつきり決めたぞ」と。

三年間を顧みて

中村幸男

もうすぐ卒業というのにまだ入学したばかりという気持がなお続いている。というのも僕自身が三年間を怠つていたことを後悔するものがあるが、しかし、楽しい思い出となるようなことも多々あつた。

まず一番よかったと思つていことは、一・二年で（今でも時々）クラブ活動を行なつたことである。柔道という日本独特の、伝統あるスポーツを通じて、先輩後輩と親しくつきあうことができたのは、非常なプラスだと思つてい。『柔よく剛を制す』という精神のもとに毎日々々の苦しい稽古の中に、日本という国や国民の良さというものがつくづく感じられた。今や、アメリカ・ソ連等が色々の面で首位に立つているが、しかし、内容から見れば日本は決してそれらの国に劣つてはいないだろう。僕はそういうことを自覚してこれからもつと

目 標

松 井 忠

彼は私に言った。「お前の目標はなんだ」と。私は返答に窮した。しばらく沈黙が続いた。私はその間に答を見いだそうとした。しかしなかなか見つからなかつた。だから逆に聞き返した。「それではお前の目標はきまつていのか」。その時には幾分嘲笑的な気分が心の片隅に潜んでいたかもしれぬ。彼は胸をはつて答えた。「もちろんさ」私は「瞬」とまどいを感じ、何故かみじめな気持になつた。自分一人と

自信を持つて進むべきである。

その他に忘れることの出来ぬものに、強歩遠足がある。八十数キロに及ぶ道のりを、十七時間ばかりでデクテク歩き通したという喜びは又格別である。夜九時頃出発して夜通し歩くということも何かこぼで言い表わすことの出来ぬ、心を打つものがある。

結局は意志の強さがものをいうわけであるが、こういう人生の中で役立つに違ひない。

何しろ若い時の時間は貴重であるから、もつと惜しむべきである。そしてピチピチとした若いエネルギーを発散させて、何事にも精を出すということが、人間にとつて肝要なことではないのか。

部活動を顧みて

石川利彦

私達高校三年生は今までのいろいろな事を経験し今日までできた。しかしこの時期は人生の中で大切な時であると思う。だから充実したこの青春期を受験勉強だけで終えてしまふのは何となく心残りがつて残念である。そのためにはクラブ活動は必要であると思う。私はこの三年間一つのクラブに入り自分なりに部活動を行なつてきて今振り返り反省してみると「よかつたなあ」としみじみ感じます。楽しい事もあり仕事の上で辛い苦しい事等が思い浮かんできます。がしかしこの辛い経験をした事も将来はなつかしい思い出となつて自分にとつて何かに役立つこともあるかと思ひます。次に入部したときから先輩がたいへん親身になつてさまざまな問題について意見を与えてくれたことです。また親友をつくることができたのもクラブに入部したからだ

思う。先輩、後輩の関係友達との関係は部活動をしたことのない人には味わえない楽しい喜びに満ち足りた一時でした。二年の時私達が中心になって行なった文化祭や図書館だよりの発行は一生懸命活動して出来上がったものだけにその時の完成、成功したうれしさは何とも言えない気持ちでした。この三年間の部活動を通して協力精神・現実を直視しての実行・人間関係、人生の諸問題等、体験したことは私にとってどんなにプラスになったことか。

谷崎潤一郎の死をきいて

渡辺喜宏

先日、谷崎潤一郎が亡くなった。河野一郎などの政治家の死に、たいした感動もしなかった僕も、この文豪の死には感じるものが大きかった。それは彼等政治家の死が、僕にとって、政治という猿芝居の猿ひきの死にすぎなかったのに反し、作家谷崎の死は、僕の心の一つの灯が消えることを意味したからだ。彼谷崎は僕にとって現在只一つの信仰の対象である美の存在を始めて教えてくれた作家であったからだ。

僕は、そのころ―彼の作品を始めて知る頃―ひどい懷疑に陥っていた。僕にはあらゆるものが懷疑の対象であった。疑うことそれ自体すら疑いであつた。疑うことを「疑う」という一つの言葉にすればそれは確かなものであるから、当時の僕にとってすべては疑いの対象でなくて一つのカオスのなかにあつたといつていい。それまでのよりどころであつた実存主義さえ何かしっくりこないものとなつていた。それはむしろ僕がその思索についていけないからかもしれない。とに

たい私達は理想なくして生活してゆけるものだろうか。

ある人は理想主義者は現実を無視しすぎるといいます。そんなことはよく考えてみればあたりまえです。理想主義者は現実に対してなんらかの不满をもっています。もし不满をもっていないとしたらその人はもう理想主義者ではないのです。不满をもっていればこそこれからよりよい社会の建設に頑張るのです。しかしだからといってすべて社会が悪いのだと考えることは誤りなのです。なんでも社会が悪いといつてしまえば簡単です。私達は苦しむ必要がないのですから、責任を社会にすべておわせてしまつて自分だけは満足した豚の状態におられるのですから、理想もちません。ただ漠然と生活してゆくにすぎなくなつてしまうのです。私達は理想をもたなくてはけません。理想なくして住みよい明かるい社会はありえないのですから。現在の生活を充実したものにするために私達は理想をもち現実の苦悩と戦わねばなりません。

二百二十日

秋山義人

俺は星根に出た。

台風の去つた後の異様な雲が、主人の後を追ひ駆けるようにして流れて行く。

今日俺は風雨の一番強い時帰つて来た。しかし、俺はそんな時思つたんだ。「夕方六時頃一番激しくなるって言つたから、これ以上たてばなおいつそう強くなり帰れなくなつてしまふ」と、だから帰つて来んだ。

かく僕はあらゆる観念的なものの、に対して信がおけなくなつてきていた。そんな僕が手にしたのが彼の作品―少将滋幹の母であつた。そこに僕が見いだしたのが美だつた。それは感じられるものであつた。そこにくりひろげられる美しいロマンの世界。何の抵抗もなく入つていった僕は確かなものを感じた。僕が求めていたものは美であることを知つた。

美を知るには何の苦勞もいらない。ただそれが感じられさえすればよい。そしてそれが僕にとってはすべてなのである。彼の作品を読み進むにつれそのおもしろい深まつていった。それからの僕はただこの一つのを求めつづけてきているといつてよい。美に没入しきることが僕の念願となつてゐる。……彼谷崎はそれが出来た。彼は僕にとつて一つの偶像であつた。

理想主義

深沢 克

最初に、理想とは何かということから私達は始めなければなりません。理想とは理性で想像しうる最高最善の状態なのであります。それを標準として行動し、あらゆる事象を説明するのが理想主義なのであります。

今時、理想主義なんてダメだ。そんなもの實際の役に全然たつたはしない。こんなせせがましい世の中で理想なんて通用するもんかという人もあるかもしれません。しかし本当に理想は私達の生活にとつてつまらない／ものなのでしょうか。私達の生き方に対してなんらの指針をも与えてくれないものなのでしょうか。私はそうは思いません。いつ

このような中を歩いた事はあつたが、自転車でしかも傘をさして行くなつて初めてだ。南風、俺は南へ進む、風速と俺の進行速度が一緒に、この俺にのしかかつてくる。

「進んじよばいいに」。「そんなこんじゃ俺帰れんじやんか」。「傘なんかさしちよばいいに」。「そんなこんじゃ俺濡れちやうじやんか」。俺はやけになり傘をさして強引に進んだ。南から来る人は楽だなと思つた、が俺は南へ行く、家に近づくにつれて風雨が強くなつた（と思う。ほんだつて進むのが前よりえらくなつたもの）。誰か家の中から俺の方を見ている『こんな時帰つちよばいいに』が俺は平気な顔をしていた。傘がちよこになつてしまつた。「畜生！」乗りながら直そうとしたが、その間雨がしきりに俺をなぐる。（實際来る途中もうやられていたが）。「こん畜生！」俺は傘をたたみ前傾してスピードを出して早く帰ろうとしたが出せば出すほど風雨とも俺を妨げた。

「畜生！　なんだこんなの」もう俺はびつしよりだ。白っぽかつたズボンは濡れて黒くいい色になつた、が、はき心地が悪いつていつたらもう……。靴の中もびしょびしょである。俺はこれ以上濡れるのがいやでまた傘をさした。傘を前全面にさしその横から顔をちよこつと出して前方を見い進んだ（あたりまえの事だけださ）。

家までもう少しの時、急に猛烈な風が前から来たかと思うと急に後に回り傘を押し上げた。俺はちよつと隠れる場所を捜したがこれといつて見当らない、と思つたら近くに車が置いてあつたのでそこへ隠れた。回りを見たが後方で車の去るのが見える切だ。すぐまた家へ向つた。途中また傘をたたみすつとばした（そのつもり）……。あと、10 m！　5 m！　m！　着いたつと……。

俺はなんだかからかわれたようだつた。着いてから一時間位して風

も弱まって来たのだ。「畜生！ ついてないや」。
ふと空を見るとさっきの雲も何処かへ去ってしまった、今はすほらしく美しい月が俺を見ている。……きれいだなあ！
……これが中秋の名月なのか……
あの位置だと今はもう十二時頃だろう。

受験生活雑感

新津章二

夏休みには、よく全国高校野球大会の模様をテレビで見物した。焼けつくような太陽の下で白球を追って力のあらん限りを尽くして熱戦を展開する。どの試合にも、一分のすきもないほど強い気魄に満ちている。打者が、何としても打って塁に出ようとすれば、投手は、あらゆる手段をつくして打たせまいとする。まさに、実力と実力の対立である。

どちらの高校が勝とうと、自分にとってさほど重要なことではなかった。しかし、それにもかかわらず計画の時間を避いて敢えて見たかったのは特別な理由があった。それは彼等の持つ何ものも、ものともせぬ強いフアイトにおいてであった。彼等が自分と同じ年齢であることは一層、彼等に対する親しみを増させたのであった。彼等はこの甲子園の土をふむのでさえも、毎日猛烈な練習を積んできたのに違いない。―それにひきかえ自分は何だ。試験が悪かったといつては氣を落し、もうだめだと思ったりする。ほんとうに恥ずかしくなる。

彼等で優勝を望むと同様、自分の憧れはやはり大学である。大学に入りたい。それのみでこれまで勉強してきた。(もつとも、一年のと

きはそんな氣はなかったが)

自分は現実の逃避者にはなりたくない。現代の入試制度が正常ではないとしても、ゆがめられたものだとは思わない。むしろ我々を一個の人間たらしむる一段階であると思う。百獣の王、ライオンは、子を強くするために崖の下に我が子をつき落すのだと聞いたことがある。それ故に百獣の王たる地位をもつのに至るのである。大学は今迄冷酷な目で我々を傍観しているかも知れないが、それは我々をやがては自由な人間にするための母性愛であると思う。またそう思いたい。今の状態を苦しいとは思わない。勝つ者がいれば破れる者がでるのはしかたがない。自分は大学に落ちるかも知れない。が、その来たるべき日のために自分の力のあらんかぎりをぶっつけて見たい。そうして破れるのなら、彼等と同様、悔いと呼ばれるべき塵の一片も自分には残らないと思う。

台風の季節に

西山正樹

今年は全く台風の当り年だ。九月十五日までにすでに二十五号である。八月の十日頃が十五号であったから、約一月の間に台風十個が生まれたことになる。これは一日に一つの割合だから王のホームランよりも高率である。その台風のことごとくが日本に寄る力だからたまったことではない。台風は女性というから日本には色男が大勢いるのだ。など冗談は言つてはおれない。一回上陸すれば多くの人命が失なわれ、経済や産業の痛手も大きい。ことに秋の収穫期を迎えた稲やブドウ、リンゴなどの果樹が相当の被害を受ける。一年間、多くの労

働力をかけ、大切に育ててきた商品作物なのでから農民の人々にとつてほ全くやりきれないに違いない。

日本の台風の被害額は毎年平均して二千億円見当だという。台風の後、復旧工事を毎年チビチビとやるよりは、何年分かの被害額に相当するだけの金を、思い切つて投じて国土補強をした方が得策なはずだが

物価高の今日、家財がひとつ損害を受けても困ることだ。それにもまして、濁流をのがれて小さい子をかかえ、からだ一つ同様で避難する不安げな人々を見るのは誰にもつらいことである。毎年くる事のわかつている台風には政府は万全の対策をしてみらいたい。

サトウさんも、たかが台風対策ぐらい、と甘い考えではいけない。あの荒れ狂った台風の前には、少しばかりの抵抗は風と共に去ってしまふのである。

この三年間

中沢文明

「残り少ない日数を胸に……」のあの「高校三年生」の歌が実感となつてしまつた。この歌を歌っていたころは、ほんとにのんきであつた。

野辺山ではおもいきりあばれ、身延山では、しみじみ人生を語り合ひ、徹夜の会議に友情を温めた。

学校においては常に学問を第一？ にしながらも、心身共に鍛えんとするために、蹴球にあけくれ、一高健児を遺憾なく發揮した。

このような自分であるから、冬の厳しさ――特に一高では厳しい――

にもよく耐え？、みぞれなど降るときでも、自転車をとほして通学し、無情な鐘と共に過こしてきた。

これから先残された月日はわずかである。気ままな生活も引き締め時間を有効に使い、三年間の高校生活が悔いなきものとなるよう精進努力していきたいと思う。

孫子の言葉

依田恒彦

狂人とは我々のある一部の神経が肥大した人間にほかならない。そしてその可能性は我々にもないわけではない。そしてその異常性は我々自身の尺度ではかつたものである。

選ばれた支配者とは、すぐれた能力の持ち主である。そしてその大部分は人殺しと金利の能力である。"人殺し"とは必ずしも生物学的に命を絶つことではない。

民は常に忍従の生物である。生きられる保証がある限りは、そして生きるという事は必ずしも人間らしい生き方とは解釈されない。

資本主義であろうと、社会主義であろうと、二種の人間が存在する事は変りがない。つまり、支配者と被支配者である。そして支配者とはいかにして大衆をだますかに専念する種族のことである。

選挙とは資本主義に毒された政府の合法的策略手段にほかならない。そしてこの合法とは書類上において間違いない法の事である。

自殺は人生の敗北であるかもしれない。しかし、人生に敗北しながら自然死をえらんだ人間の何と多い事か。

女は煙草のようなものである。あるとすいたくなる。ないと寂し

い。

女は人生の一部である。しかし全てではない。少なくとも普通の人間にとつては。

女がそばにいる事は楽しい事である。しかし、いないことはもつと気楽な事である。

共産主義を好まない人間が少なくない。それでは彼らに向つて、共産主義についてしゃべつてみたまえといえ、彼らは一分としゃべつていられないであろう。つまり彼らは、共産主義が嫌いではなくて、ただそれに対して無知なだけである。

人生は一つの彫刻に似ている。どう彫ろうと全く自由である。しかし彫り直しは出来ない。

自殺は人間に与えられた貴重な権利である。そしてそれをいつ行使するかは各自の自由である。そして結果においても、生命のわずかな長短を生ずるのみである。

世界において平和を求めるのは、人が自分の影をふもうとするようなものである。それは身近にありながら決して、とらえられないものであるから。

世界を平和にする最大かつ唯一の条件。それは地球上から人間が消える事である。

監獄にはいつている人間は婆婆の人間より正直であろう。何故なら自分たちの罪をかくし通せなかったのだから。

人間は死ぬ為に生きる。そしてそれを早く悟った人ほど早く消失していく。つまり自殺しなかった人間とは悟りえずして神に召された人間のことである。

実行

橋本昭夫

何事をするにおいても、決心が必要なことは言うまでもない。しかしその後の実行という段になると足踏みしている場合が意外と多い。いや意外というよりはたいがいの場合そうありがちなものである。では何故実行ということがそんなに人間をして行うことを躊躇させるのか？ それは簡単かつ明瞭な事である。「努力」ただこの一語につきる。そこには当然苦痛と忍耐が必要であるからである。我々人間はなまけがちな動物である。その動物がそれから遠ざかりたいと願うのはごく当然の事である。しかしその当然の事をただ単に当然の事として見過ごしてしまうのなら他の動物と変わりはない。人間にはある欲望を満たしたいという気持が常に働いている。その欲望を満たす為めには当然人一倍の努力をしなければならぬ。この一見相反した面を持っているのが人間そのものである。この二重の面を持っている故に人間は悩みもし、苦勞もする。そして悩んで悩んだ後人間としての本当の喜びに接することができないのではないだろうか。しかし悩んでばかりいるのもこれはつまらないことであり、ある意味での人生での脱落者ではないだろうか。これはあくまで個人の考えではあるが、その実行に伴う苦痛や忍耐が大きければ大きいほど、その後の喜びが又一層大きなものになり、人生においての楽しい一つの思い出となる事を信じ一途に目標に向かって努力することだと思ふ。

時は金なり

大木勝彦

三年間なんて短かいものだ。ただ漠然と考えていると長く感じられるが、三六五日の三倍、一〇九五日……ただの一〇九五日しかない。一日なんでものは、朝起きればもうすぐに夜になるといつたぐあい、すぐ過ぎてしまう。それを一〇九五回くり返すのだから実際は短かいものだ。

ところであと五十年生きられるとして三年間の十七倍である。また年をとるにつれていつそう時間の経過を速く感じるようになるそうであるので実際は十七倍以下になるだろう。そうなれば、うかうかしてはいられない。今からでも時間の無駄使いはできない。とにかく若いといえる時代は私にとってあと二十年、ハッスルしてさっぱり死にたい。

回想、そして主張

新津 勉

新人生として喜びいさんで入学してから三年程たったという。実感を持たないのも、あながち私一人ではなからう。つい昨日というのもオーバーだから、つい一昨日ということにしよう。そんな気持ちなのだと、ところで、学年誌に書くとなると、やはり今年で卒業なのだから反省記めくのもいたしかたないことだろう。

「我が青春に悔いなし何て素敵な言葉であらうか。しかし我々は

人間であるかぎり、さう言い切れる者はいない。いたら、そいつは青年ではないのだ。あはれ老人や。失礼。

☆ ☆

「予備校化した学園」とはよく聞くセリフであるが私はそうは思わない。かの憎むべき旺文社のせいで大抵の者が暗示にかかったのだ。

私は将来心理学でもやったらおもしろうかと考えている。こんな状態は何と呼ばれるのだろうか。オット脱線だ。転覆する前に本題に戻ろう。さつき述べたように、このマスコミのせいで我々は灰色の高校生活を送ったと私は考えている。しかし、そう考えながらも疑問が生じてきた。それはいくぶんは、この位はマスコミのせいもあるが、要は我々自身が誤っているのではなかったのかということだ。

私の体験からしても、桜の花咲く入学式当日「六六七名の入学を許可す」の天なる声の次にたれたもうた、「皆さんは大学へ……云々」から調子が狂ったのだ。あの式では同窓会々長さんの祝辞が一番心にしみ入ったと思っているが。何にしろ、校長先生のお言葉により私達は二重に暗示にかかってしまった。あの頃は、今こそひげ面をしているが、紅顔の美少年・美少女であり、純情可憐であった。先生のお言葉なら何でも正しいと考えていたのだ。

それからの毎日は、空虚・倦怠の毎日であった。毎日毎日学校のチャイムも鳴り終わらないうちに、先を争って家へ帰る。そしてボンヤリと時を過す。参考書をひろげて、目だけは左から右に動かすが、心はあの娘からこの娘へ。入学して以来、女の子とは一度も言葉を交したことがないけれど、そんな毎日でした。しかしテストがくるとあわてた。料理カードにもない得意の一夜漬でお茶を濁した。そのくせ一点二点に目くじらをたてて食い下がった。ああ！ 悲しきわが心。し

かし、私もいまだ十八才。世間では青年だと考えるだろうから、私もその気になって少しは考えよう、青年らしく。日本の教育危機について。

大から小へ移るのが世の常だが、教育の危機について一番感じている我々でさえ、では私が文部大臣になって、または教育学を専攻して根本からこの現状を打破しようなどと考える人はいないようだから、私も諸君の意志を尊重して、小から始めることにしよう。まず身近な問題から。

まず現在の授業制度（課外は別として）であるが、これはこれでよいのだ。但し生徒が内職をしない限りであるが、問題は我々自身にあるのだ。まわりを見廻すといっている、青びようたんが、うじやうじやいる。顔も手もまっ白。太陽に一度もあたったことがないようだ。こんなことでよいだろうか。

全員スポーツをやる。始めは強制的にでもしてやることだ。クラブへ入らなくてもよい。サッカー同好会、バスケット愛好会を作つてやる。そうすればそのうちに「へたの横好き」ぐらいにはなろうというもんだ。

スポーツだけではいけない。文化方面も並行してやらねばならぬ。時間がないなどということは決してない。芸術に博愛に弁論に我々のエネルギーを向けよう。

以上二つの事を述べたが、もう一つどうしてもいわねばならないことがある。それは「白から考える」ということである。我々のなかで人生について、死について、宗教について、真剣に考えた人が何人いようか。我々には考える機会（みずから作るものではあるが）が非常に少ないと思う。そのために一週間位勉強を休んだとしても、それが

どうしたというのだ。
いままで混乱してつづつてきたが、おれは何を書こうとしたのか。要するに、充実した毎日を青春を送りたいということである。今は遅きにすぎた感もあるにはあるが。人生は長いのだ。では諸君、末長くお元気。諸君の御多幸を祈りつつ……。

夏の日の思い出

中 沢 保

七月の中旬頃からであったが、私は一人のアメリカの青年と夏休み中楽しく過ごした事があった。彼は、国際生活体験生として、日本に訪れたグループの一員で、来甲したグループの一人であった。

そして私は、その約一か月あまりの生活の間に、彼からいろいろと興味ある話を聞いた。彼は、私と同じ十七才の学生で、四年制ハイスクールの三年生であった。身長は一八〇を十分に越して、体格は学校のクロスカントリークラブで鍛えているというだけあって、がんこな肉づきをしていた。

彼の学校は、眼下にサンフランシスコ湾が望める、カルフォルニア州のサンカルロスという所にあると話してくれた。

そして、私が彼から聞いた話の中で、最も魅力を感じたのは、向こうでは十五才で自動車の免許がとれて、そして彼の学校の、生徒のほとんどが、皆自分自分の車で通学しているという事であった。又、現に彼もシボレーで、毎日通学であるという事を話してくれた。まったくうらやましい限りで、自転車通学の私にとっては、その違いに腹が立つのも当然であった。

こうして私は、彼から、それからそれへと、本当に興味ある、又

になる話を聞いて夏休みを過したのである。

彼を迎えて、楽しく過したあの夏の思い出は、まだまだ数限りなく残っている。

三年間の一日

今 井 一 生

夏の終りの雨の降る寒い日に、彼はぼんやり外を見ながら座っている。通りを自動車が無表情に右から左、左から右へと通り過ぎてゆく。

「おれ達は何をしてきたんだ？」と思いたくなるようだ。

彼は毎朝おふくろに起される。時計を見てまたね。午前七時四十分には飛び起きる。十分間で顔をあらう時間割を合せる。ここで朝食をたべる、たべないで「騒動」時間がないからいらぬ」「すこしでもたべていきなさい」

仕方なく、一口二口手をつける。八時四分彼の家を出る。わすれ物！あわててわすれ物を取りに家にもる。五分十五秒わすれ物をたずさえ再び家を飛び出す。遠くにバスが見える。バス停までの一五〇メートルを毎朝ランニング、タイムはまあそんなことはどっちでもよい。やつのことで八時六分のバスに飛び乗る。いつものとおりのひどい混雑ぶり。ハイヒールで足をふまれる「いてー」

バスが一高前に着く八時四十分三八秒又遅刻このバスだつてたまには間に合うこともある。学校で先生とにらめっこ、おじいちゃんの顔を一日中観ていてもおもしろいことはない。

三時十五分最後のチャイムが鳴るやいなやカバンをたずさえまたバス停までランニング、三時十六分辺地行に乗り込む、このバス停においても生存競争ははげしい。ぐずぐずしていると乗りそびれる。そして彼の車にゆられ、ねむりながら家に着く。

これが彼の日課である。くる日もくる日もくり返されるのである。

「あーあ、おれ達はこの三年間何をしてきたんだ」

「きつと何かしてきたんだろう」

雨が強く降ってきた

彼

石 川 保

彼は一人で砂漠の中を歩いていた。砂また砂人一人いない砂漠を彼は歩いていた。彼の頭の中にはこの砂漠を何とかして越したい、何とかして。目の前にはただ見果す限りの砂又砂。突風が吹き砂ぼこりが立つ、そんな中を彼は歩き続ける。頭上には太陽が燦々と輝りつける。汗が止めどもなく出てくる。やがて日は地平線のかたに沈もうとしている。彼は今日ここで止まって野宿することにした。夜になった空には星が輝き月が下を見おろしている。彼は夜空を見ながら考えた。果してこの砂漠が越せるだろうか。このまま砂漠の中で死んでしまふのだろうか。又別の事が彼の頭の中に浮んだ。ここでやめて後へもどろうそうすれば……。彼はここで寝てしまった。

夢の中で彼は砂漠を歩きやつと目的地に着く日がやって来た。前には目的地の明りが見える。しかし彼は先へ進めなかった。どうして足が思う様にいかない。ここで彼は目がさめた。彼は夢の事

を考えた。やっぱり目的地なんてないんだ。行っても行っても見果す限りの砂漠だ。しかし一過程の目的地はなくともやはり目的地はあるはずだ。その目的地に着くまではこの砂漠の中を前に前に進んで行こう。彼は又歩き出した。何があるかわからない、何が起るかわからない砂漠の中を。時には緑のオアシスがあり、時には強い風が吹き暴れ一夜にして困りが一変してしまうこともあるだろう。こんな事を思いながら彼は歩き続ける長い長い道を。

わが青春

伊藤輝夫

「青春」ということばはわれわれの日常の会話の中によくでくることがある。しかしそれが何才から何才までとはつきり決まっているわけではなからう。自分自身もそれについて知っているわけではない。だが青春のシンボルがチラホラ顔に見えるところをみると今が青春なのかもしれない。そして周囲の人々もそう考えているのである。

「わが青春をふりかえってみると」なんてまだそんな年ではないがもし高校時代が青春にはいるならその三年間をふりかえってみよう。

高校受験の儼「高校にさえはいってしまえば」などと思っていたあの時からもう三年の月日がたとうとしている。それでもやっと三年生になることができた。

入学した時から美術方面への進学を希望していた私だが、なかなか思い切りがつかなくてやっと決心したのは二年生の始っていた。「学科なんかできなくても実技さえよければ」とそんな考えで成績がよいわけはなかった。

直な歌であると思う。しかしこれは青春の混沌とした精神の発する幻想や感傷に過ぎないのではないか。このように幻想や感傷に浸っている物を深く認識することができない。我々がこのような状態から脱しようとするのは実に本能的と思われるほどである。

青春とは浮雲のような物であろうか。かつて万人の書物と言われるゲーテの「若きウェルテルの悩み」や日本の作家達のその種のものに強い共感を覚えたのであったが、今はそれ等は雲上での出来事としか考えられない。わたしはそれ等を讚美はするけど常にそれには無常感が伴なうのである。又幾ら山を越えても仙境などは見つかりません。

ただ我々は自然の偉大さに圧倒され、そこから逃げ出るのがやっとです。しかし「我々にも枕する所がないのであろうか」という溜息は愚言である。下腹に力を入れ凝視して行くのみである。

無題

原田久

ある夜の夢だった。

そ奴は

なんとなく白々しい一角に立って目を見張っていた。

その日は、驚愕と、怒りと、悲しみと、絶望に満ちていた。

そ奴はいつのまにかベトナムの住民に変わっていた。

そ奴は

騒音はするが、どことなく、＼びしっ＼としない所に立っていた。

そ奴の目は、意志か働いておらず一種の懷疑をもった目であつ

また一方学科のらくな大学をめざして受験一本やりの一高の気風に反発したい気持ちがあつたためもあった。（いくら反発するのでも成績が悪いのではみられたさまはないが）。そんなわけでこの道にはいつともう一年になる近ごろは、朝早くから夕方おそくまで石膏像に向わなければならぬはめになった。われわれの生活には土曜も日曜もなく月火水木金なのである。

一時はこの道に入ることを恐れた。しかし今はちがう。将来わが青春をふたたびふりかえってくれないない青春にしよう、そのために自分に与えられた青春は努力のみである。

ある日校長先生が体育館に三年生を集めて「高校生活は灰色でなくて緑色である」といった。しかし私にとって高校生活は毎日におわれた楽しいものではない。しかしすべてのものが将来につながっていると思うと、この一瞬さえもむだにできないような気がするだから、わが青春は未来につながった黄金の青春なのである。

東雲

柳沢英久

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みな美しき 与謝野晶子
幾山河越えさり行かは寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく

若山 牧水

この与謝野晶子と若山牧水の歌は人生の見方に於いて相反してはいるが、共に青春の心を歌ったものとしてそこにはみずみずしい生命の息吹を感じさせるものがある。前者は春の夜の夢のようであり、後者はその感傷の手によつて我々の胸を締め上げるものがある。本当に正

た。そ奴は、いつのまにかアメリカ兵になっていた。

そ奴は

ある島に立っていた。

そ奴の目は、強い願望と、はがゆきと、少しのくしみと少しのあきらめに満たされていた。

そ奴は、いつのまにか沖縄住民に変わっていた。

そ奴は

広い広い所に立っていた。

そ奴の目は、生き生きとして美しかったがどこか偏見の感じを帯びた目だった。

そ奴は、いつのまにか中国人に変わっていた。

そ奴は

薄ら寒い広場に立っていた。

そ奴の目は、ある程度の満足感のある静かな目をしていたが、その奥には、ある鋭さがあつた。

そ奴は、いつのまにかロシア人に変わっていた。

そ奴は

どことなく重みの感ぜられる所に立っていた。

そ奴の目は、昔を忍んでいるようであり、保守的で、どことなく教養に満ちた目をしていた。

そ奴は、いつのまにかイギリス人になつていた。

そ奴は、

暑いうつつとした所に立つていた。

そ奴の目は、過去の暗さと野蠻さを物語っていたが、希望にも満た目をしていて。

そ奴はいつのまにかアフリカ人になつていた。

そ奴は、

ごみごみとした所に立つていた。

そ奴の目は、目的の無いようなはつきりしなく、はたから見ではがゆいような感じのする目をしていて。が一種の安心感というものがあつた。

そ奴はいつのまにか日本人になつていた。

そ奴は色々な所に立つていた。

だが、そ奴の目は、満足感だけを帯びた事が無かつた。

そ奴は言つた。

「俺は何処へ行こうか……？ そうだ、消えてしまおう。」

強行遠足

佐野寿彦

足が痛む、だからといつてここでやめるわけにはいかない。まだ蜚崎を出たばかり出し、おまえ女か？ なんてひやかされるのとはずか

一面の霧となり、天と地とを結ぶ雨。その雨の一筋一筋は細い絹の糸。それはたぐつてもたぐつてもなお続いている無限の絹糸。

それを手がかりとして天に行きたい。

清い心を持った人。それは人でない人。その人々がすぐ雲の上の国。

そこには青い空があり、白い雲のじゅうたんがあらう。赤い太陽の光りがあらう。

ある日私は絹糸をたぐつて天上へ行くのだ。登るに従い、互いにキラキラ光りあい、肌の輝きを競う絹糸を横目にゆつくりと昇る、昇るそのうちに雲の床が見えてくる。やわらかくふつくりとして、綿菓子のような床。そこへぼつかり顔を出す。そしてそおつと頭をめぐらす雲のとばりがかかつていて見えない。夜なのだろうか。もう一度頭をめぐらす。すると……見える、見える。白い雲に色をつけた淡い着物にふつくりと身をつつんだ乙女。純白の雲のスーツをつけた乙女。それらの天使たちが白い大理石の噴水のふちに腰を下してやさしく微笑えむ。やさしい笑顔。清らかな笑顔。

乙女らの後にはくつきりとそびえる神殿。四本の大理石柱にささえられ、その白い先端が空の青さにくつきりと、まさにくつきりとそびえる。それは一段と高くそびえているのだ。その入口に通ずる千段の階段。それが雲の上へ、また乙女らの上へ淡い影をなげかけているのだ。乙女らのほの白い顔に、赤い光りがあたり、やさしく色よく。すらりと伸びたしなやかなからだを冷たい大理石によせて、乙女等はやさしくほえみかける。

私はそれをみつ……。

しい。むりをして足を進まず。もうすこししゃべる気にはなれない。出発の時、おれ「中込まで行くぞ」なんて威勢のいいことを言ったのに、又、それに応じた計画をたてたのに、今は、ただもう、早くやめること、これしか頭がない。歩いてても歩いてても、行く所まで行かないこのつらさ、歩くことが、ばからしく感じる。休んだとて、自然にたどりつけるわけにはいかない。今は自分だけ、最後の足をふりしぼつて、重い足は動く。

闇

数野清治

真夜中の十二時過であつた。家族の者はすでに寝静まり、ただ一人机に向つてペンを走らせているうちにペンの音だけが聞えてきた。しばらくすると頭の中をキーンと貫ぬく物があつた。書く手を休めると先程まで降つていた雨の音もなく、狭い部屋の中は音の真空中息がつまりそうであつた。すぐさま戸をあげると闇が部屋の中に入りこんできた。おもわず口からでた声は闇の中に吸いこまれていった。その時はるか彼方から汽車の音が聞えてきた。続いて車のヘッドライトが闇の中から現われた時、私は恐怖は溜息と共に去つていった。長い間騒音の中で育つた私にとってこの闇と音のない世界は、恐怖であつた。

雨・幻想

佐藤光一

新緑に煙る雨。青くくすむ雨。

現実を認識しよう

内藤治生

現在の世の中で「人生とはいかなるものか」「世界とはいかなるものか」と真に考えて、目的を持つて生きている人が幾人いるであらうか。

確かに、現在のように生存競争が激しくて、生きることが、せいいつばいの時代に、生きるために、直接関係のないそんな事に、時間を費し、ただ苦しむだけだ、と思われるのかもしれない。特に高校生は目前に、「人生における一つの山だ。」などと、言われる大学入試があるために、人のことなど考えられず、大学へ入つてからの事さえ考えないのが現実であらう。

しかし、現在の世の中は、十年前とは様相もだいぶ違う。ボタン一つで世の中が、破滅するように、世界は非常に縮まつているのである。現在すでに、大国をバックに、同じ民族が、血で血を洗う戦争をこのアジアで演じ、戦局はエスカレーション式に拡大しているといわれる。この現実に対する認識をせずに手をこまねいていてよいものか。世界の動き、国の動き、町の動きを見つめることもなく、ただ勉強、勉強に明けくれるぼくたち。それが許されているかに見えることを幸せには思うが、これでよいのか。我々高校生が目先の事に気を取られている間に、世界はどんどん進展しているのである。秋の夜ふけにふと思ふ。シユバイツァーのようにいかにつはな人間が現われようとも、現在の世の中は、一人ではけつして動かすことは出来ないのである。

……
イギリスの様に、国民の一にぎりだけが大学をで、国を動かすこと

は、すでに不可能なのである。

このような時代である以上我々は、目前の入試ばかりを考えるだけでなく、もっと大きい物を見るべきなのである。そうするためにも、自分自身の考えはしっかりとしないなければならない。生きる目的はつきりしていなければならないと思う。そういう思いがぼくの脳裡を横切る。ぼくは思わず筆をおいて立ち止まってしまおうのである。

友達へ

古明地 秀正

そう、あれは十数年前、僕たちは小学校一年生だった。初めて見た君の胸のポケットに其白い大きなハンカチをつけていたね。そこにはきれいな字で「〇〇あきら」と書いてあった。

はにかんでいたけど笑うとえくぼがとっても可愛かったよ。学校から帰るときいつも一諸だったね。ぼくが走ると君も走った。背中で、今にも本が飛び出しそうになっているランドセルの音が今も聞えるようだよ。俺が話しかけると君はまばゆそうなまなざしを投げかけて、黙って聞いていた。時々君をぶったね。ごめんよ。そんな時君は赤くなった頬に手をあてて、淋しそうに笑っていた。でも別れる時は必ず「さようなら」をいったね。だのに引越すとき、どうして「さようなら」をいつてくれなかったの。

もう高校三年生になってしまった。早いものだね。今あうときと大きいだろうな。そうきつと俺のようにヒゲも濃くなっているだろうな。

が一人いて、旅行者達にサービスして暮らしているようだった。

街道には、毎年多くの旅行者があった。そしてこの家に寄って休んでいくものもいたが、素通りして行ってしまったり、休んでいくものとまよっていたりする者もいた。様々であった。素通りしていくものは皆共通して、なにか真剣な顔つきをして、目もくれず、なにかわめきながら、走っていった。向うには、彼らをそれほどひきつけるなものがあるらしい。しかし、この街道を一端通った者は不思議なことに、だれ一人帰ってこなかった。(行先にいろいろの怪物がいて旅行者を片端しから食ってしまうということだった。) 時がたつて、西暦千九百×年その年は例年になく旅行者が多かった。しかし女はなげいた。近頃、旅行者は皆、自動車とかいうものに乗ってきて、だれも休けい所など必要でなくなったらしく寄っていつてくれない。これでは商売にならないというのが彼女の嘆きの大要であった。

そんなとき、よれよれの服をきた一人の青年がこの家を通りすぎようとしていた。彼は時代に逆行してか、はたまた時代錯誤だろうか、自動車なるものに乗ってはいなかった。珍らしく歩いていて。自分のこの二本の足で！彼の服がぼろぼろにちぎれているのは以前になにか闘争があったことを物語っていた。(いやいやまだ続いているのかもしれない。多分一生続くのではないだろうか) が、表情は明るかった。生き生きとしていた。そしてその家を通りすぎようとしていた。

女 「少し休んでいきなさい」。

青年 「おれは先きをいそいでいるんでそんなひまはないと思う。……

この辺に貸自動車屋はないか」。

女 「この先にあります。ま、まちなさい。(こいで女、汗をふく) それでは忠告が一つあります。手身近に話すと、この道を一キロほど

高校生活

小 沢 一 隆

僕の一高生活の時間の経過は、加速度的に速くなってきている。皆んなもそう言われると思いたることだろう。

あまり大学受験のことは考えないようにして来たが、僕のあらゆる行動にひそかに、極めてひそかなものであるが、その憂うつ性が忍び入り、一括してながめる時、大きくそれに左右されて来たことに気がつく。左右されたという表現より、この精神が大いに発達する途上で性格形成の一要素として、現在の僕が作り上げて来た。その陰の力はどんなに大きなものだろう。推量さえ許されないことである。

毎年毎年いわずに大学合格だけに心を奪われ、先輩達が卒業していった。多くのライバルにかこまれ、ごく小さな存在として……今僕もさびしいことながら先輩の例にもれず、少しの時間にあくせくしている。しかし、僕らそれぞれ精一杯すごして来たので悔いはないと思う。今はひたすら、皆んなそれぞれの希望が達成されることを祈るばかりである。

青春なるもの

志村 二郎

昔、ある街道の途中に、旅行者の為の休けい所なる家があった。その家は家といっても、掘立て小屋同様でみすばらしかったが、時代劇によく出てくるあの種の茶屋とは、ちがうものであった。そこには女

いくと道が三つに別れています。一つは自動車用に舗装されています。一つはとても険しい山道です。のこりは二つの中間です。(ここで急に語調を変えて) あなたはきつと、良い道を行くだろう。平易な道を、でもできることなら山道を行きなさい。

青年はなにもいわず、ただ反撥の色を見せながら小走りで行った。彼は半キロ程行つて車を借りた。更に半キロ、道は三つに別れていた。青年は少し、ほんの少しだけが、まよった。しかしすぐおもいなおして、快適な道を時速五千キロでとばした。いい気持であった。どんどん飛ばした。ふと彼女の言ったことが思いだされた。「あの女め！クソ女！」少し敗けおしみじみしていた。不思議な空間的時間が経過した。突然道が消えた。道がそこで切れていたのだ。車はまっさかさまにおちていった。「あー インチキだ。こんなことって、クソ、あるものか」。彼は果てしない黒い谷底に落下しながら、三つの道が再び一つの道となっていることを発見した。そして地球は平たいことを発見した。そしてあの家、休けい所の前に立て札がついていたのを思いだした。十八 Y・O・ラブ、ヴィナスと。

最も疲れた時

保坂 竹寿

十七才の晩春、友と二人だけの京都散歩の時の日記から 一。
静かに流れる西芳寺川にかかる小さな橋を渡るとそこはもう苔寺の境内だった。ひなびた土塀とつつじにはさまれる道も又愉快ではあった。長い石敷道の両側に美しい苔を見る事は苔寺をそこに見る事だった。洛西北部に位置するこの寺は「自然」そのものであった。寺は現

代の騒わがしい観覧者さえも寺の竹林の竹一本一本にしてしまった。ここでは一木一草一個の石それを眺める人間までが静けさという抽象名詞を具象化していた。

僕は静けさという言葉の中にはきびしさの意味も当然含まれるものと信じて疑わなかった。しかし西芳寺にはそれがなかった。この寺のムードは静けさの中に和らかさがあったのである。それはあたかも夕方における光の静けさと和らかさがかもし出す雰囲気のようにであった。

いや、昼の太陽の強烈な光と、余りにも暗い闇を作り出す夜との間にあるまろやかな夕方のムードと苔寺との雰囲気は完全に一致するのである。

この雰囲気はどこからきているのだろうか、それはすべて昔から来ていた。けつして強烈な光の下には育たない苔、ある適度の湿り気と陰鬱とを必要とする苔、それが地面一円を被っている事により、木陰からみれる日の光は春霞の中を通つてくる光のように和らかく変化してしまっている。

この和らかなまろやかな雰囲気にひたっている事はそのまま僕が母の胎内にいる事であった。ここではもう呼吸さえ必要では無くなっていた。もちろん食べる事も、眠る事さえも、又より重大な事は考える事さえもなくてよかった。それらは全部母であるこのムードがしてくれた。僕はただ母の為したそのまますけ入れれば良かった。僕の全てはこの雰囲気が支配していた。

この寺を作った当時、昔はこの様に素晴しく周囲を被つてはいなかったであろう。その時は木陰から洩れる日の光もより強烈であったに違いない。もしそのムードの場に僕がいたらば武士然とした、猛く勇ましい大将のごとき心持になったであろうに、しかし現在の苔寺で

そのような事を考えるのは不可能な事である。

しばらく後のベンチに座るとこんな考えが頭に浮んだ。"世の中にはこんなにも和らかい温かい雰囲気があるのに、都会の喧嘆の中で人生は勝負だなどとわめき立てて過当競争に陥っている輩の気がしれない。人生というものは、個人個人がどんな方法でよりよく生き抜くかというのが問題なんだ"と……。

蛇足

高校三年間で最も残念な事。

人をけなす事と、言葉のアヤと、卑猥な事にしか笑声をたてられなかった事、心から笑う事の出来る人間になろう。

思い出

深沢隆之

二年六カ月、まるで夢のように過ぎ去った。「夢のように……」この言葉は使い古された無価値な言葉と思ひこんでいたが、やはり思い出を語る場合には是非とも必要であるようだ。実際経験してみてもこの言葉の深みを感じるのではないだろうか。

今思うと、入学した当時は何とも言えない喜びにひたつて毎日毎日まじめに、有意義に生活出来た。

常に緊張にとり囲まれていて、先生方もこわかったし、又一高も今よりずっと大きく見えたように思われる。

しかし、二年の一学期、二学期になるとその緊張もやわらぎ、いかげんな生活をしばしば味わうようになった。勉強を怠つたというわけではない——時間はかけたが、能率はぐんと下つてしまった。

一

静かなりき

長田謹造

私の心は千々に乱れて、落ちつくところを知らず、私の心は何物かに、ひどく痛めつけられた。私の心には剣がささっているのだろうか。それは氷の剣ではないかしら。

山の端が紅いにそう頃、私は何ものをも持たない。静かなものだ。でも、それは、重くて厳しい。だれも知らない、私も知らない。ただ久遠を透かして父なる神が知る。想うとはてない。だれも近づけない。月の丘に夢がかかる。星の庭には、天子の歌が、静かな闇の滴の久遠。だれも知らない静かさの母。

私は恐れぬ千々痛激を、それでも怖い。人知らぬ静かさを、神と母と天子とのいる音なしの世。私は追う、それだけを。

私は帰ります。父なる母なるもとへ。

オバサマへ

守屋一博

オバサマ！ こんな名前を使うのをお許し下さい。オバサマが津田へお入りになって以来半年近くなります。しかし、オバサマがお話しになった私への強い影響はほぼ私の運命を決定してしまわれました。友人の一人からオバサマが佐野精神をもつて学風とするK大を受験なさると聞いて以来、一仏閣への愛着と共に私の進路を決定させてしま

これは、どちらが正しいなどと軽く判定する事は出来ない。自分とはとえ一高式教育法から外れていたにしても決して悔いはしない。自分の好きなように行動したから。

兵法の達人、官本武蔵が、「我事に悔いず」と言つたそうだが、自分はこの言葉が好きだ。もつとも武蔵のようにさとりを開いた人と自分を同様に考えようとは思わないが、自分の思い通りの事が出来たのなら、それでも悔いる事はないだろう。

われたし、世の所謂出世主義を徹底的に排撃させなされたのもオバサマです。先輩の一人はオバサマの印象を「場末の女給」と評しておりましたが、私には偏見に抵抗している一人の知性が感じられました。それは今も変わりません。

抵抗——この言葉ほど現在の私の魅力を感じさせる言葉はありません。そしてその運命の星がオバサマにはかならないのです。私はオバサマが決して挫折なさったり、転向なさったりならないと信じています。夜空に輝く北極星のように強い強い光芒を放ちなざるのを信じています。私はそれに導かれる下僕にすぎないかもしれません。しかし、オバサマの後輩達の進んでいる道——無目的に勉強し、ひたすら世の歯車に組み入れられようとする小市民的な出世主義——を進むより私にとって幸福であるのは疑いのない事実なのです。私はいくら傷つこうともその考えを捨てませんし、その為にもオバサマに強く強く生きてほしいのです。私の航海の方向をさし示す運命の女神として………。

秋の愁い

花野郁夫

外は雨が降っている。ギリッギリッギリッ。部屋の中では虫が鳴いている。虫の音を聞いていると子供のころのことがよみがえってくる。——朝早く母に起してもらって、お寺にクリを拾いにいった。雨が降ったあとなので、葉の上から時々ずくが落ちてきた。ゴソゴソ音がして誰かがもう拾いにやってきていた。私も懐中電燈をつけて拾

い始めた。クリは落ち葉の上に落ちているので色の見分けが容易ではなかったが、二人はひとことも言葉をかわさず黙々と拾った。自分はクリ拾いに来たのは、はじめてであつたが、黙って一粒ずつ見つけることがとてもうれしかった。空が明かるくなってきた頃、もうクリはほとんど拾われてしまっていた。彼は私よりもずっと多く拾って、そのポケットから落ちそうなくらいであつた。——小学校の三年生ごろのことだつた。今は、もうその木もなくなってしまったが、今夜はこんなことを思い出した。

雑感

千野宗雄

人間の本能は愛することを備えている。荒れ狂うリズムの下で激しく踊り狂う猿ども、手を回し、腰を振って、猿人未分化のかっこうで動き回っている。彼達は踊っている者は誰でも仲間だという一種の愛の観念をもっているらしい。だから仲間に白人がいようと黒人がいようと、少しもかまわないで、仲よく踊り狂っている。この状態が人間の本来の姿であり、完成なのである。

愛はイブとアダムの恋に始まり、キリスト教の信仰となり、ナイチンゲールの人類愛に発展した。シュバイツァー博士はある人が血を吸おうとした蚊を厚い手で打ち殺したのを見て、『私ならコップで蚊をとり逃してやるのだがなあ』と言ったそうだ。博士はどんな猛禽でも生命があるので愛をかけてやるのが当然であるという信念を貫きとうした人だ。

愛は同情、恋、慈悲といろんな形であらわれてくるが、これらは

訓練

弦間 秀仁

人間の物に接する態度というものは、決して一定したものではないと思う。例えば、前にはすこしも興味がわかなかつた物に、新たな興味がわいてくるというようなこともわかる。そして人間はなじむことによつてそこに生命を見いだし、人間としての安定を得るようになるのだと思う。しかしその安定を得るには訓練することが重要なことなのである。にもかくにも人間として生き抜くためには、良きものを訓練に訓練を重ねて自分の骨、血肉とすることであり、そうして獲得した体で世の中を見るのは実に楽しいことであると思う。人生これ訓練なりとあえていいたい。

眠るまで

竹下 清治

腕時計の音を聞きながら眠るのが好きだ。カチカチと耳もとで鳴る音、その昔は不思議にも気持ちいいで変る。カチカチカチと小刻みに聞えるし、カツカツカツカツと天に響く様にも聞える。六月、雨の音を聞きながら時計の音に聞かせる。のもし、秋の虫の音を聞きながら聞くのも又良い。しかし何んと言つても冬が一番一番良い。風の音それに乗って来る遠くかすかな汽車の走る音と汽笛、寒い夜ほどよく聞える。

みんな二つ以上の生命間に存在している。では地球上に自分以外の生命が存在していなかったら、愛は存在するだろうか？ 私は信仰という形で存在していると思う。人間は心に神という偶像を作り、それを信仰するだろう。これも一種の愛であろう。これらのことによつて人間を見ると、人間は誰でも愛をもっていることになる。そしてそれは本能的に備っていると思う。しかしこの愛をもっている人類がなぜ文明の生産物である原子爆弾を、広島、長崎で消費させ、何十万という尊い命を奪ったのか？ 爆弾をおとす際アメリカも考えただろうが、結果はおとしたのだ。人類愛が何かの力で敗けたのだ。人間の敗北である。何かの力とは私はまちがった教育だと思う。

教育は人類のために大きく貢献してきたが、その反面、目的を達するために、手段を選ばぬというマキアベリズムも産みだした。

言いかえると、教育は人類を繁栄させるが、あやまって使うと滅亡にもつながる性格をも兼ね設えている。そして後者が原爆という形で現われたのだ。

現在日本の教育は受験本位の勉強で、精神教育が疎かにされている。この状態が続く限り日本の発展は望めないだろう。悪くいけば日本滅亡にもなりかねないと思う。

話しはそれだが、現在世界は自由圏と共產圏とに別れているが、これは地球完成までの長い道のりの一地点にすぎない。

完成とは誰にでもある愛を主体とした教育を中心として人類愛に満ちた世界に築き上げた時である。その時こそ人間の最大な幸福である。

寒々とした駅、その冷たく美しい赤や青の灯や、暖くむつと体臭のする車内の様子を想像するのも楽しい。残念なのは夏のかわずの声か聞けない事だ。聞こえたらきつとすばらしいと思う。さていよいよ眠るだんになると時計をおでこの上にのせる、なるべく目と目の間に折り方が良い、頭がしんとして気持が良い。

無題

赤池 聖

ここは都会を何千里、はなれて静かな山の中、小さなほったて小屋に住み、草の香りに包まれて、自然の尊さに魅せられて、粗食にたえ体は丈夫に、平和を愛し、こせこせせず世のわずらわしさから離れて何をするにも干渉せず、人にも干渉しない。そんな生活してみたい。これが私の夢である。

しよぼくれ

今沢政秀

A C T I

「オレは駄目な男さ／」そこでオレは考えた。「大学が何んだ／」こんなことを思っているうちに雨の音がうるさく耳を打つ。オレ曰く「だまれガイコツ／ 馬の小便じやあるまいし、そうジャアー ジヤアー 降ることはねえだろう。もっとおしとやかにしてくれよ、たのむ「おー」、そのうちインスピレーションが湧きかかってきたときにオレ



白陽

幡野芳力

白い太陽が照る
色のない光
皮膚を通して直接内臓を照らす
枯葉が散る
白い
白い枯葉だ
色がない
ああ 白い世界だ
どこからかピアノの音が……

の脳裏を何かがよぎった。「はばかりに行きたいよう」。「カット／カット！ カット／ハバカリつてなあに？」 「……ギャフン／ 処置なし」 「どうも今夜はさえないなあ、何かいいギャグないかねえ、実際これじゃあサマになつちよらんよサマに」 「ぜいたく言うなこのうすら馬鹿（オレのこと？）」

とうとう時計の針も一時をまわった。「もう寝ようよ」「なに、もう寝ようよつてことはやつぱりおいらが眠つたいつてことかな？」 「アイヨ、むかしふるさとに古ーいことわざあつたネエ『馬鹿につける薬はないとネ』わかった？」 「さて寝床に入るかな」 「エッ？、ウツヒッヒッヒッヒーわかっている、わかっているちゃんとはばかりには行つてきたつてことよ、心配するねえ」 「ではパパもママも兵隊さんもお百姓さんもおやすみなさい」……………。

A C T II

これは現代社会に抵抗するある十八才の、なまなましい感情の記録（？）の二ページである。これを読んだ限りではこの一青年は狂っているかもしれない。いやこの青年は現代社会によつて狂わされたのだ。……………こんな男にだれがした／

脳裏には、はつきりとメロディが固こえるのに
音が聞こえない
音がな

なまだー

白い太陽
色のない光

いやだ
耐えられない

暗黒、暗黒だ

暗黒の世界をくれ

暗闇をくれ

なにも見えないだろうから
手さぐりで歩かねばならないだろうから
いつかまた
あの、紅い太陽が照るであろうから

挽歌

眠りしきみの横顔の

津久井文明

眉毛の上の傷跡に、幼ききを想い出す
野辺に遊んだ、たそがれに
二人で歌った赤トンボ
よいやみ深き晩秋の

冷たき空の月影に 空しい影が流れてく
たたずむ母の後見に
きみのうれいが 流れてる
眠りしきみの横顔に
朝の光の照りはえる 神なるきみを合掌す
金の光のその中にかがやくきみの白い顔

おお雀よ

おお 雀よ
目がさめたね
雨があがつたね
むくげが白く咲いたね
涼しい空だね
朝涼だね

おお 雀よ
飛んでこい
飛んでこい

田淵保雄

そして
わが胸の中で鳴け
おお雀よ

静

時は刻々と過ぎていく
人は深い眠りにつき
時計は十二時を打つ
静寂がつづく
ここにのみ静寂の世界が
あるかのように

この中にひとりいる
ペンを走らす音
犬の遠吠え
時折のきしみ
静寂は自然の中にある
時はすぎる
静寂とともに

コオロギ

金曜の朝「秋」があった

戸島雅彦

嵐の去った後であろうか
あたりは曇ガラスを通して見たような
何か鈍く
何かねむりの底に引きこむような……
そんなであった。

いらかは霧雨にしつとりとぬれ
木の葉は路傍の石と化し
路上の水たまりには
鉛が溶け込み
あらゆるものが重そうな……
そんなであった。

それらの中に秋があった
松林の林の奥にもあった。
松林をぬらす霧雨にもあった
松林を通う嵐にもあった。

そう コオロギの目にも「秋」は感じられた。

三人の人

ひとり

宮野政彦

オヤ また彼が弾いているよ
例の曲を 好きなんだね彼は
タッタッタッタッタッタッポン
アレ まちがった それもう一度
タッタッタッタッタッ ポン
アレ また
アレ 彼まだ弾いてるよ 気長だね
今度は静かな曲だね
なんていう曲
「ムーンライトセレナード」 「エッ」
「ムーン……ライト……セレナード」
「エッ」
「月光」 なんだ始めからそういえばいいのに、その曲なら知って
るよ？
ふ た り
彼また考えこんでる 体は小さいのによく考えこむね（関係ないか）
何を考えてるんだらう
彼 今日笑ってるよ エッ 大変だ。
病院に連絡した、家族の人に知らせた。
ついに彼も アッー
もっと早く彼を暖かい手でつつんであげてれば。「アレ オレの頭
大きくなった」

「わかった　なぐられた」　「イタイ、イタイ、イタイ」
彼　また考えこんでる
何を考えているのかな
ヒタイにしわよせて

さん　ん
あなたはなぜそんなに遠くへ行ってしまったんです
ただひとり
もう　もどつてきてくれないんですか
あなたが私を見ていても
私はあなたを見ることが出来ない

私の声が聞こえるでしょう
返事をして下さい

いつのことだったかな
二人で山に行ったこと
覚えています　楽しかったなあ
いつのことだったかな
二人で野原に花をつみに行ったこと
覚えています
みんな楽しかったことばかり
だけどみんな思い出
あなたはなぜそんな遠い所に行ってしまったんです

さつきの奴

三井正己

ある日土手を歩いた
枯草が互に触れ合いながら
ささやきあっていた
中のひとつが青ざめた私に気がつき
仲間に知らせた
いつせいにざわめきをやめた
ほんのちよつとの間であつた
又、私にはなんの興味もないかのように騒ぎだした
しかしさつきの奴だけは身を揺らつかせながら私に云つた
「おめえは、なんでそんな顔してんだ……？」
——若えんだろ——」
私はだまっていた
すると又、

「わざと苦しみに耐えているかのようにするな」
私はこのつまらぬ奴の言葉が身底に刺し込んでくるのをつくづく感
じた。



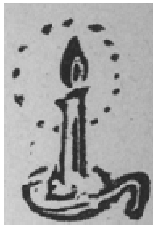
ただひとりで
僕はさみしいです
もう一度

元気な声を僕にかけて下さい
もう一度

ことば

花形直仁

創作された人でなく
い　き
呼吸している一人の人になりたい
だから
動きたくも
饒舌りたくも
筆を取りたくもない
と誰かが云つた。



失題

雨宮俊夫

九月十五日、外は雨が降っている。
明日は『あしおと』の原稿の〆切日。何を書こうか……。昭和三十年四月三日、入学式義務教育の九年を終え、新たなる希望と少しの不安を混じえた心で校門をくぐった。

それから今日まで二年六カ月。早い、早すぎる。もう高校生活が終ってしまふなんて……。いったいこの『二年六カ月』という数字は、何を示しているのだろうか……。この間に、僕は『進歩』したのだろうか『退化』したのだろうか……。

三年四組。沢登先生。生徒五十六名（内女子十一名）である。
一年の時男子、二年の時男女。三年で理科コースを選んだ。四組中一組は男女クラスと聞く。「三年は男子クラス」僕はそう願っていた。いや全部ではない。心のすみに「男女クラス」になりたいと思う気持ちがあったことはかくさない。しかし「男女クラス」より「男子クラス」を強く望んだ。しかし発表の日。あった。四組の出席番号一番……。下へ名前をおつてゆく。友の名も見える。……そして：「男女クラス」であった。H・R役員選挙……

昨年度一学期三学期と理事をやったが、歌を忘れたカナリヤのような理事として終ってしまった。二年十組であった。その二年十組の人が多くこの三年四組にいる。選挙。またなつてしまった。いやだ／昨年度の経験からである。理由は多くある。僕が理事にふさわしく無い

さを次の大会では、味わうまいと心に決心した。

動揺したアジアの中の日本

板垣和芳

最近のアジアにおいて、南ベトナム対民族解放戦線いわゆるベトコンとの戦い、マレーシア・インドネシアの対立、ごく最近に至つてはインド対パキスタンのカシミール地方領土問題から発展した戦争、インドネシア国家内のクーデター後における軍部対共産党の対立などが注目されている。これらは主なものでもそのほかにもアジアには戦争をはらんだ対立が数多くあり、その多くには後にアメリカ、ソ連、イギリス、中共などの大国がひかえ、さらには世界戦争をもはらんでいる。

この動揺するアジアで日本は調停国として各国から注目されている。先日新聞のベトナムに関する記事の中で、ベトコン司令部の一員が「日本国民のこの戦争に対する批判にひじょうな関心を払っている。そうして日本国民が我々を支持してくれていることを信じている。」と言っていたのを見た。またマレーシアのラーマン首相が「日本が積極的に調停してくれることを望む。」と言っていたのを見た。

このように日本は、アジアの友として調停してくれることを期待されているにもかかわらず政府は何らの具体策をも打ち出していないのはどういふことなのか。一つの原因として考えられることは、日本はベトナム戦争やマレーシア対インドネシア紛争の当事国であるアメリカ、イギリスの属する自由主義陣営に属していて、それらの国々と政治的、経済的に深いつながりを持っているために思いきった調停がでないものと思う。しかし各国の期待を裏切るのは、今後における

ことも知っていた。しかしことわり切れなかった。半分やけで引き受けた。しかし次の瞬間それは「やりとげよう」という気持ちに変つた。その僕を助けてくれたのが『H・R運営委員』である。心強かつた。ありがとう。任期は終つた。本当にありがとう。

あと六カ月、助走の最後の部分に入った。外は雨が小ぶりになつてきた。キンモクセイの甘い香りが、やわらかく僕をつつむ。

敗北

石川伸行

真夏の太陽がキラキラと輝いている。その下に青い水をたたえ、其白いロープがえんえんと続いているプールがある。いまそこで、人間と人間の戦い、いや自分と自分との戦いが始まろうとしている。胸が高鳴る。まわりを見渡すとおちつかないような選手が五・六人集まっている。「敗けたくない、敗けるものか。」自分の心がつぶやく。

「放けるかもしれない。」という不安が心の片隅に起る。もう戦いは始まっている。笛がなる。「ようし、やつてやるぞ」スタート台に立つ。そして自軍のペンチを見る。みんなが手をぶつっている。それに答えて意味のない微笑を送る。「ドン。」「うまいスタートだ。」とつぶやく。……タツチ。いるいる一人おれより早い奴が。敗けた、しかし不思議だ。敗けたくやしきよりレースの終った安堵感の方が先に立つ。記録の発表を聞く。トップと……秒差である。この時にやつと敗れたくやしさが全身をみなぎる。このくやしさはスポーツマンの特権である。そして「次の大会では、きっと勝つぞ。」というフアイトにも通ずるくやしきである。そしてこの敗北で味わったくやし

日本の地位を落すばかりでなく、アジアに対する貿易にも支障をきたすものと思われる。今こそ政府は、世界平和と国民の利益のため何らかの政策を打ち出してもらいたい、と願つてやまない。

思うこと

井上和男

一高生活もあと四カ月余りになんなんとしている。今年もまた例年の如く、書け書けと強制され、例年の如く出すのをしぶり、今日になつてしまった。しかしつたない文ながら、書かないというさきから、まずは現在の心境を書いてみよう。思えば一高入学以来いろいろなことがあったものだ。それらが今、頭の中に、回り燈籠の如く浮んでは消え、消えては浮かんでくる。最近になり、自分がひどくみじめなものに思えたり、一人、人生について考えてみるようになつた。結局、結論らしきものは得られなかったが、何か今に、自分の人間形成に役立つのではないかというような気もする。

あれやこれや思い悩んだことを、来年、あこがれの大学のキャンパスの芝生の上に寝ころんで、この雲一つなく澄みきった秋空をながめながらなつかしく思うことができるであらうか。

今の僕にとって、しなければならぬことは、残りの四カ月を、とにかく本当に充実して生きることだ。その結果、大学入試に失敗したら、その時は、いささよく浪人して、もう一度希望する大学をねらおう。友よ／来年、あこがれの大学のキャンパスで（会えたら）また会おう。

このごろ

坂本 まさみ

陽と陰、相反する語であるが、私の体の中にはこれらが気まままに同居している。陽気さが少しでも幅をきかすとこの世は春である。友達と話をすればガラガラ笑う。相手をからかい、こつちも笑う。その後に残るは空腹感と思い出し笑い。しかしこの快さも、最近はめっきり少なくなった。原因はほかでもない大学入試。実力が無いのに持つて生まれた楽天主義で「どうにかなるだろう。」というあいまいな語でごまかしているのだから、それがきかなくなった時の悲観は普通ではない。まず学校に来るのがいやになる。「休もうかどうかしようか。」と迷う。それもついには欠席理由を考えるのがめんどろになり、学校に来てしまうのだが……。このごろはいつもこんな具合だ。まわりの人がわずらわしくなり、自分のからにとじこもる。しかしそんな中で唯一の光は、五ヶ月後の結果にかけられたあの笑いのあとの空腹感だ。

死と無

江間 誠二

ユダはキリストを売った後自殺した。
彼がキリストを売った後自殺するまでの間に彼と良心との戦いで彼が完全な敗北を感じた時、彼が世の秩序を保つためにとるべき態度は一つしかなかったのだ。

ろう。それでもその時が来るまではむなし生営の営みを続けなければならぬのだ。何と悲しいことだろう。……
突然、Bは立ち上がって川の中に入っていた。そしてその木を抜いて持ってきた。Aは驚いて「かわいそうなことをする。」と言うとBは「いや、この木は白痴と同じだ。自分の運命も知らないし、自浄もできない。だから僕が救ってやったのだ、」と言ってじつとその木を見つめていたが、不服そうなAの顔を見てさらに言った。「神だから自然だから知らないが、この木を造ったものが今までこの木を生かしておいたのはうなづけない。もし僕の子供が白痴だったら僕はその子を殺してやるだろう。その子もこの松もきつて僕に感謝するだろう。」
「それなら土の上に植えてやればいいのに、」 「だめだ。この松は岩の上でしか生きられないのだ。それに死は必ずしも終りではない。場合によっては生より死の方が好ましいこともあるのだ。この世の中にだって死にたいと思っていながら死ねなくて苦しんでいる人もいるのだ。」 Bははきだすように言って松を投げ捨ててしまった。
「それではせめて川に流してやろう。」 そう言うときBは苦笑しながら拾ってきて川に流した。その木は強い夏の目ざしを受けながら流れていた。Bの顔は気のせいかな晴れ晴れとしていた。せみの声が心地よく山にひびいていた。

想い

上田 浩

家からちよつと離れた所に泉水がある。池にはもう魚もいなく、水も泥ついで底も見えずにさびれている。その昔今の地に越して来た

彼の死は世に対して彼のような行為が悪であるということを一層強く植えつけ、さらに民に善なる行為を要求している。

ソクラテスの死はあまりにも有名である。もし彼の死が無に等しいものならばこれ程まで有名にはなり得なかったであろう。

彼が死によってまでも我々に訴えようとしているものを誰が否定できようか。

彼の死が我々に与える感銘だけでも我々の生涯に与える影響には非常に重大なものがある。

死が無であると考えるのは生ける老のみの知るところであり、死が無でないことを知りえるのは戦いながら死ぬ老のみの知るところである。戦いながら死ぬ者に対して死はそこになんらかの解答と安らぎとを与えてくれる。

芦川にて

荻野 昭人

せみがかん高く鳴いている。芦川の水は冷たい。直角に切り立った岩壁がその冷たい流れを受けとめている。その岩壁にどうしたわけか一本の小さな松のような木が生えている。

さきほどからAとBはその木をじつと見つめていた。Aはこんなことを考えていた。この木は明らかに死刑を宣告されている。自分には何の責任もないのに――して言えば地の利と考えないで根を出した軽率さか――毎日毎日自分の寿命は縮まっているのだ。そして自分の根で岩を割ってさらに寿命を縮めている。いつ刑が執行されるかわからない。恐らく、自分の唯一の使命である種族を増やすこともできないだ

時家と共に作つたらしいが水の便が悪く見る影もない。しかし毎年十五夜の頃になると池の片隅に二・三本のききょうの花が咲く。いつごろからここにこの花が咲き初めたのか覚えていないがこの花の何ともいえない色に魅せられて以来紫色が大好きになつてしまった。ハンカチ、万年筆、バック等紫色の物を見るとやたらに買いたくなくなつて買つた。しかしいつのまにかそんなものに見向きもしなくなつた。自然の色にはとてもかなわないと悟つたからだ。（そんなものを買う金があつたら遊びに使おうなどと遊びぐせのついたのも一因だが）

九月生まれの僕はこの花の咲く度の一つずつ年を取り成長していくのです。今年ももう美しい花をつけたことだろうが見られなかった。

来春は大学のキャンパスに寝ころがろうとして（鬼が笑うかな？）家を離れ、ともすれば下がろうとする頭を上げて頑張（？） っているからだ。残り少ない高校生活を有意義に過も、来秋も又咲くであろうこの花を心ゆくまでながめたい。

無題

小尾 正彦

大型台風二十三号が四国、近畿地方を横断した。ラジオではその被害を伝えている。今日はちょうど中秋の名月である。昼間は雨が降っていたが夜になると乱れた雲間から満月が、前庭の木の葉の雨露をしっかりと照らしている。ぼんやりして月をながめていると、すすきなんかをかざつて月見した小さいころの十五夜のことがなつかしくほのぼのと思いだされた。前からラジオはなにかうなっていたがよく聞いてみると浪曲である。文集の編集委員山口君が原稿をもつてこいと

真剣に国を考えよう

敗戦と共になくなってしまったものに「愛国心」がある。

戦後たつたちつぽけな四つの島になり、その上アメリカ軍の軍事基地みたいになつてしまつては無理もない。

しかし国家に対する信頼と自覚は非常に薄く、又国民の精神的統一を欠いている。

これもそれも真に國を憂う氣持がないからである。これは国会議員だけに言える事ではない。我々一般國民もそうである。特に我々は將來のいい手として、もつともつと真剣に國の事を考えよう。もつともつと國際情勢や政治に深い関心を持とう。

花
な
ん
ば
ん

赤、紫、黄、色とりどりの可憐な実を、緑の葉の間からのぞかせている一鉢が、この夏中私を、そして私の家中を喜ませてくれた。七月の半ば頃、母が勤めの帰りに帰って大事にかかえてきたのであるが、その時花なんばんという名を知った。

直径二センチ位のつぶらな実は、はじめ淡い黄色の初々しい姿で誕生し、成長するに従つて紫になるもの、濃い黄色になるもの、鮮かな赤になるものとなり、実に美しく、「かわいらしい。」という表現以外にはない。如露で水を頭からかけてやると、一つ一つの実が生き生きと語りかける様に輝き、朝日に映える雫は、今日一日の生を喜ばずにはいられない感激を与える。そして夕方は、猛暑にじつと耐えながらしかもたゆみなく活動を続けた一日の営みを静かに反省し、安らかに

功刀芳郎

ないこいを迎えようとしている、そんな姿に「ごころうさま。」といったわりの気持で丁寧な水をかけてやるのである。

ささやかな生命が一夏を精一杯に生き、そして周囲を明かるく色とり、楽しませてくれた。この可憐な花なんぼんに、私は大いに人生を学んだ様な気がするのである。やがて葉が落ち、すっかり固くなってあの水々しい面影はどこにも見られなくなってしまうであろうが、最後まで大切に見守ってやろうと思っている。

生

数野詞治

神が人間に与へたる人生なるものは、たとへてみるならば地上を細く長く流れすぎて行く川である。この世に生まれいずることは、たとへてみるならば地中より水がわき出ることである。そして死とは広い広い大洋に水がそそぎこむのとまったく同事なのである。そして人生の両側には提防にあたる不動の絶壁がある。これはいかなる力を持つてもおしひろげがたいのである。岸に立ちて流水を見おろす旅人の目には、千年来高く積み上げられたものに反抗しているかのように映る。彼らは無能無才の不断の戦いをもくもくとつづけながら……：そうあの小さな顔の持ち主が……やがては彼らの墓場、大洋に出て行くのである。万物の霊長はどうだ。やつらは有能有才のすばらしいやつらだ。しかし岸に立ちたる旅人は、小さな顔の持ち主の前途に大いなる

— 99 —

勝利の歌を与えるであろう。彼らは自我をたち、ただ前進しているだけなのに……。偉大なる遊子は「克己」とのみつぶやいた。それを聞き、やつらは何を思ったであろうか。

思い出して見た

小林好雄

私の幼い頃の学校は、甲府のように開けていない。まだ村とよばれていた頃の学校だった。それでも児童の数は、同級生が、約百人いた。いなかとは言っても、東京に近いし、国道ぞいなので、それほどでもないようだった。そこに今でも住んでいるが、ちょうど、物事が、うつすらとわかり始めた頃、私は保育園にいた。当時の私は、弱虫だった、とは言っても泣きむしでもなかったようだ。だからけんかもできなかった。体の動きもにぶく飛びっこをしても、何をしても一番後になってしまった。その頃、保育園ではままことがよくはやっていた。建物のすぐ横がきれいな水の流れている小川だったので、そこで遊ぶ時間となると、よく皆でやったものだった。だが私だけは、いつも一人だった。どこへ行っても弱虫は入れてくれないようだった。そんな時ふだんは口も開いたことのないような友達に入れてもらったことをおぼえている。私は前にあつたかも知れないが、人から親切にされたことは、始めてではないかと思う。ただそういうことが、季節、時間にかかわりなく、幻のように頭に浮かんで来るので、正確なことは知らないし、まちがっているかも知れない。当時私は、皆より少し早目に学校へ行つたように思う。ある雪の降つた日だった。あまり早すぎたので、まだ雪がはいてなくて、こまつたことがある。建て物はす

この年は、今でも忘れることのできない事が一つある。それは、初恋である。少々大げさかも知れない。ただ不思議な事に、となり合つて座つた横の人を、小学校六年間を通して覚えていたのがこの二年生の時だけだ。そのとなりの人が女の人の人だったと言うわけである。彼女は、今は美しい純情な一人の女の人となっているがたぶん忘れてのことだろう。こうして思い出してみると、何もかもがなつかしく楽しい。知らない間に大きくなつてしまつたが、将来、今、小学校時代を思い出すと同じように、この高校時代も、楽しい思い出となるだろう。何かつまらないことばかり書いたようだが、少しでも面白く読んでもらえたらと思う。

ある一面

宿沢オサム

ふつと気がつくとき壁にかかっている時計が五時一分前を指していた。まもなくチャイムがなつた。全身の力がすっかり抜けてしまつた。今日もまた何枚の紙に印を押したことだろう。エレベーターは他の会社員たちでいっぱいだった。それで階段を降りた。六階から降りるのは容易ではなかった。表へ出ると、空がどんより曇つていた。会社から右に折れて二百メートルばかりいった所で建築工事をしていた。

どこでもそうであるように大勢の人が集り見ていた。ブルドーザーで土を掘り起こしている様子を見ているのだ。僕もつい引きこまれてしまった。ブルドーザーが大きな石などにあたり「ガチッ／＼と鈍い音をたててその石を真二つにしてしまう。ブルドーザーはまったく何もなかつたかようである。そんな様子を見るのは何とも言えないよい

ぐそばに見えるのに、そこからは道がないので雪の中を行かなければならなかった。雪のない日ならなんでもないのだが、思うように行かなかった。腰まである中を二三歩進んだが、これはダメだと考えた私は、又、家まで引き返したこともあつた。そんなことが過ぎて小学校一年生となった。この時が考えて見ると今までで一番傑作だったように思う。ともかく少々足りない所があつたようだった。いつも人とは違つたことばかりやつていたようだった。いつもボカソとして先生の話などは、全々聞いていなかったようだった。音楽の時間などは、ひどいものだったらしい。先生がオルガンの、前奏を弾いているのに少々その歌を知っていると言うことで歌わなくてもいいものを一人で大きな声をして歌つたようだった。又ある時は、むし歯予防デーに、歯みがきの練習をした。その時の絵を書かされたことがあつた。私にはどうしても書けなかった。後の人の書いているのを見ても大変うまくかけているのに、どうして私はかけないのだろうかと思つた。その結果思ひついたのが、まねをしようと言うことだった。そう思つたけれど、いくら人の書いたのを見ても、その通りには書けず、結局、くしゃくしゃのまま出したこともあつた。こんなことがあつてどうやら二年生となつて父に買つてもらつた赤っぽい皮のカバンもどうやらなれてきた頃、学校のそうじも、自分達の教室位は、するようになった。その時だったか村が市になったのではないかと思う。日の丸の旗を持つて歩いたことを覚えていて、この頃になると、苦手だった絵もどうにか書けるようになり毎日先生に言われて、夏休みばかりでなく普通の日も「えにつき」をつけるようになった。又、ポスターもよく書いた。あまりうまいものではなかったが自分自身では、内心満足していたようだった。

気分のものである。それから三十分もした頃だった。なんのはずみかブルドーザーの機械の一部が勢よく飛び抜けた。ちょうどそれが現場監督らしい男にあたつた。その男は一瞬にしてこの世を去つてしまつた。みんなそれに気付き、急に活気づいたかのように騒ぎたつた。僕はすぐにその場から去つた。早く家へ帰りたいかつた。「かわいそうに、どうしてあの男はあそこで死なねばならなかったのだろうか。生まれる前からこうなることは運命づけられていたのだろうか。それにしてもひどすぎる、

僕はいられない気持ちになつた。はやく家の人たちに話して少しでも自分のこの気持ちを和らげたかつた。夢中で家へと急いだ。――家の前へ着いた。――なぜか僕はいばつたような様子でいきおいよく玄関の戸を開けた。そして、自分でも気付かないうちに「さあ、今日はおもしろい話をしてやれるぞ。」とつぶやいていた。

音楽の悦び

鈴木義広

音楽、特に古典についてだが、クラシックというのと、「わからないから、つまらない」と言つて敬遠する人が多いが、「音楽がわかる」とは、どういうことなのだろうか？音楽がわかる、わからないとは、理論的にかつ演奏法についてうんぬん、と云うことが、わかるわけではないと云うことなのだろうか。もしそうだとすれば、これは大きな間違いである。理論的に、又は演奏法についてうんぬんとは、「音楽がわかる。」ということでなく、批評である。故にそれは鑑賞ではたない。鑑賞する事と、批評することは、根本から大いに違う。そして鑑

賞とはなにも、じつとすわってレコードを聴いていることでもないのである。そしてその聴き方は、どうあろうとも、「音楽がわかる。」とは、その曲に対して、何かを感じることである。例えば、ベートーヴェンの運命交響曲と田園交響曲を聴いて、感じの違いを認められるということ、それでいいのである。一般論としては、芸術鑑賞は全く各自の心、すなわち精神界においてのみ行われるものである。

これは人に強制することもできなければ、また人から強制されることも許されないのである。例えば、この曲は、かく聴くべしと命ぜられても、自らがそう聴けなければいかんともしがたいものであり、また命ぜられた様に聴けなかったからといってその鑑賞が間違いであったとかまた浅薄であったとかは論断できないのである。それは自らの理解力の浅いためもある。しかし浅いからといってそれを他人の力で深くしてもらうこともできないのである。与えられたものを、自身の現在の力の状態のすべてで享受する以外に途のないのが芸術の享受である。音楽を聴くことは自身以外の何者のためにするものでもない。それは全的自己肯定である。現在の自身の持つ力の限度において自己肯定を行うことに芸術鑑賞の感激と満足と愉楽とが得られ、この三つが感得され、それが芸術の理解となるのである。つまり芸術鑑賞は、全的な人間性をもって行われるのである。芸術を味わうことにより自己の人間的内容、もちろん精神的 content であるが、その力を知ることとは、大きな悦びであろう。

特に音楽会へ行つて感ずることだが、同一の曲を鑑賞し、その程度の違いはともかく、共に音楽の法悦にひたり感激の拍手をする際に、隣席が見知らぬ他人同志であっても、何か心の通い合うものを感じることがでかる。それ故に芸術の鑑賞とは、特に音楽であるが、真に、

らは友情関係などというものは生まれにくいし、他人の感情を害するだけになりかねないと思います。これが、利己主義の恐ろしい点であると思います。したがって、私は、場合に応じて利己主義を肯定し否定していくのが、一番よいのではないかと思います。

私は、時々、人間はいかに生きるのが本当かなどと考えて見ます。その結果は、人間は生物とは違つて無意味には生きられないのだと言うことになる。武者小路さんは、人間はまだ過渡期にいて、本当の人間の可能性を生かし切つていない、そして人間は今進歩の途上について自分たちを本当の意味での幸福にできずにいる。と言っています。これが事実であるかどうかは、はっきりわかりませんが、仮りに本当だとしたら、私たちは、この重大な時期にどのように生きなければならぬかを考える必要があると思います。私たちの一人一人の生き方が、世界に幸福を、または不幸をもたらすものになると言つても過言はないでしょう。すでにアジアには二つの重大事件すなわちベトナム戦争と印パ戦争が起つていますが、どちらも武力的解決を推し進め、平和的解決がなされていないのは、この科学が進歩している時代にあつて矛盾しているものではないかと思ひます。トルストイはわずかな火から大きな火事が起こるといっていますが、一刻も早くアジアの地に平和を取りもどすために、その戦火を消して欲しいと思います。

人間と現在

土橋 八郎

最近こんな考えにとりつかれた。つまり、「人間にいろいろなことがわからないのは、人間が馬鹿だからである」という考えである。

楽しいものである。

人口と資源

玉山 広明

世界には日本のように、狭い国土に多くの人口をかかえている国もあれば、広い国土にわずかの人口しかもたない国もある。また、重要な資源にめぐまれている国もあれば、それに乏しい国もある。このように人口と資源の問題は他国民を犠牲することなく、平和的手段によつて解決しなければならぬと思う。そのために、産業の進んだ国がその資本と技術を提供し低開発国の開発を援助して、その住民の生活水準を向上させながら経済的交流をはじめ、広く文化的交流をはかる必要があると思う。

自覚

上杉 恵子

私は、利己主義というものを好きでも嫌いでもない。それは、ある意味で、必要であり、また別の意味では、全く否定せざるを得ないものだと思います。具体的に言うとは、現在の社会に生きるには、それが当然必要だと思います。私たちは、環境の動物であるために、ある程度自分自身をその時代に合せていかないと、生きていくのに、むずかしいと思います。また、それは一面、自己の内面に閉じこもりがちなので、物の考え方、見方が狭くなる、すなわち、一方方向へ走りがちで、多角的な考え方が養われなくなると思ひます。そして、そこか

思考の発達過程を考えてみるに、小学校でわからなかったことは中学校である程度わかるし、中学校で理解できなかったことも高校では殆んど理解できる。逆説はこの過程を縮めたものにすぎない。だから、今認識できないことも後には認識できるのだ、言い換えると後に比べて今は馬鹿だと考えざるを得ないのである。こうして人類が進歩していった後はどうなるのであると考える時、恐怖がはね返ってくる。ゆうべ人魂を見たとか、深夜の寂しい道路上で十年前に怪死したはずの人に会つたとか言われてもわれわれは信じようとしない。しかし、後の科学でそれらが実証される運命にあるならどういふことになるのだろう。夏の夜話どころではなくなる……。

人間にはまだまだ理解できないことがたくさんある。しかし、過去という事実の上に立ち現在の理性を現在の自然に働きかけるとき少なくとも、現在の人間は恐怖から救われる。

恐怖だけがはね返ってくるのではないと言う人があるかもしれないが、人間が永遠の理想を追求するという性質を持つている限り、理想と現実との比較から恐怖が生じるのは当然ではないだろうか。

人類の生の流れの中の一瞬にすぎない現在を自覚することは、現在を有意義に過ごすためには重要なことだと思ふ。

荒野

時田 和美

荒野よ、吾が内なる荒野よ、我は汝を愛せり、そこにたえずみし哀愁と憂愁とを愛せり。喜びの節、悲しみの節、吾魂は汝に帰らんとす。

感動と涙をもちて。ああ、汝こそは吾が生起の地、生命の泉なり、我は求めんとす、汝限りなき荒野の地平線を。吾が歩みの達せざりしことを知りてなお我は知れり、汝の完成を知り統一に帰入しを。さればなお我は求めんとす、汝が地平線を。ああ、汝が統一のめでたさよ。そを照らすは、栄光なり。そを濡らすは慈雨なり、そを包むは恩寵なり。しかして汝に眼ふせし我は何者ぞ。汝は我に語れり、御身が生誕は善なり、高く、より高く登れと。御身は万物を愛せし、限りなき尊敬の念と共にと。今我は無常の一隅なるを知れり。御身はバベルの塔を笑うなかれと。今我は無知なるを知れり。御身は生の形成にあきたらず死せと、今我は森羅万象を持したり、否森羅万象に帰入したり。我にあるは思索と祈りを持つことなり。そは吾が体内を流れし数千年の民族と共に我を形造らん。ああ、荒野よ、知られざる太古より知られざる未来への力ある存在よ。吾があらゆる苦悩、あらゆる興醒め、あらゆる絶望は我に語る能わず、吾が魂の悲慘と迷誤にありて、吾が本然こそは汝荒野にあり。その昔、我は吾が死を窮極とせり。されば、我は死を怖れず。我はその静寂を愛せり、たとえ吾が肉は回転せし地球に横たわるとも、吾が魂こそは其の静寂に人らんと。されど今、そは吾が荒野に死したり。たとえ吾が肉は死すとも、吾が魂はなお遍歴せり。いざ帰れ、生命の不壊を知る心、忘却の途上にありしすべての聖なるものよ。荒野よ、汝限りなき因果にありて時間は立ち止れり。統一として洋洋として。我は吾が生を生きるべし、自らその調べを乱し、自らその調べを濁しながら、自らの調べを見出さんとす。そは吾が運命、否万物が理。荒野よその累累たる岩かげに淡くつつましく咲くものよ、我は汝を愛せり、その幸を願いて、若き荒野よ、老年なる荒野よ、汝自らを語れ。汝内なる荒野よ。

に我が身を振り返れば身を突きぬける何かを覚えるものだ。それは暖かい春の日に突如としてさし込む冷たい春風ともいおうか、僕にはわからない

社会性

大平裕子

社会性があるとか、ないとか人はあれこれ言う。私自身どうもあまり社会性がない人間と思ってすごしてきた。現に、人づきあいが疎ましく思われたり、疑問をもったりする。しかし、それ以上にそう思う自分の存在に疎ましさを感じる。

去年、クラブでキャンプに行った時も、皆が楽しそうにしているのに自分一人だけ背を向けて、寝そべって、ぼやっとしていたりしていたことがあった。そういう自分の姿を思い浮かべると寂しい。

ある友に、このことを話したら、彼女も私に共感を覚えるところがあるという。しかしやはり私のは特別その情が強いようだ。これは私のわがままからかもしれないが、もつと根本的考え方の問題だろう。

社会性について、ここに取上げたのも、成人しようとしている、そして、社会へ巣立とうとしている私だからだろう。

希望をもって、これからの人生を切り開いていこうとする私にとって、少なくともそうあるべき私にとって、この人づきあい云々ということとは少しむずかしい話だが、考える必要はあろう。

思うこと

土橋 洋

現代国語で「ばくの手帳」をやった。国語嫌いな僕なのに妙なこともしれぬ。しかしあの文章の一節がいやに頭にしみ込んだ。こんな一節である。「空气中でねらいを定める―撃つ―すずめは横飛びして地に倒れる―日分の腕前に得意となる―その瞬間彼の頭脳に何か冷めたものがサーとさし込んだ。」そのとき思い出したのは僕の小学中学校時代のことである。冬になると島を取るのが僕の商売（？）すずめ・ひわ・はと・ひよどり・つぐみ…。春は巢取りだ。卵からかえったばかりのひなを取ってきて家で育てるのは実に愉快なことであった。（小鳥の卵を取ってきて卵焼きにしたら……）ある冬の日・小学校六年の時、前夜からの積雪に食べ物はなく、はとが田畝に数羽降りていた。友と雪を投げた――一羽飛べないのがいる！二十メートル飛んで降り・飛んで……（僕は雪を握って追いかけた、憤悶の末とうとうそのはとを素手で捕えたのである。あの時の得意顔の自分・実に自分のしたことに誇りを感じていたものだ。ところがこの春、妹がある日すずめの子を手に入ってきた。「どうしてそんなことをするんだ、巢に置いてこい。」と言った。変なことだ。自分の行為に責任を持たないのに。その時頭の中には前の作者に通じるものが突きぬけたのに違いない。前日八海事件の判決が下された。長い年月の末主犯は死刑である。でも彼は叫んだ「無罪だ」と、僕は思う、彼には何か欠けているものがあるのではないかと。

人は何かしら無鉄砲になりがちなのらしい。しかしその一歩寸前

米国

米国は、広大な富める国を象徴して、ガソリンをたくさん食っていいから、より大きく、よりゆつたりと、より速くをモットーとしている。その象徴が大統領車、リンカーンである。また、この国の経済は自動車がささえている。GM社は世界最大の会社である。米国の代表車はシヴァレーであるが、スタング、キャデラッグ等も代表とも言える。

西独

西独はベンツやワーゲンのように、堅実さと世界に冠たる独人の心意気を示している。従って、鬼オポルツェ博士を生んだりし、ヴァンケル式ロータリー・エンジンを発表をしたのである。J・デューンが死んだのも、ポルツェである。代表車はむろんベンツ。「ハイル・ヒトラー」 「ハイル・ペンツ」

英国

英国車は、紳士の国にふさわしい。ロールス・ロイスはその象徴であり、伝説的である。また、スポーツカーは花ざかりであり、アストンマーチンは「007」で有名、J・クラーク等有名なドライバーが育っている。代表車はオースチンまさに苦悩する英国の象徴である。

仏

仏はシトロエン、ルノー等儉約家の仏人にびつたりである。特にシトロエン・2とVはスタイルは全然問題にしていな。大型車ファセル・ヴェガが倒産も仕方ない。代表車はシトロエン。

伊

伊はカーデザインの流行を作るといわれるとおりの流麗さを持っている。従ってスポーツカーが最も多く作られるのである。フェラー

リ、アルファロメオ、マセラティ等。代表車は、フェラーリであるが、人間P・ファリナともいえる。

日本

米国車の豪華さと加速性、欧州車の経済性とスタイルを加え、模倣により国際水準に追いつこうとしたのが日本の自動車メーカーである。従って反面今後に期待が持てるともいえる？。自動車を人ではなくて、機械が作っているのかどうか？。天皇の車をプリンスがつくるというが、すべて国産になるかどうか？。日本車にも誇れる特徴をもつようにしてもらいたい。代表車はないが、しつて言えばスバル（日本にしかない軽自動車である）である。

友達

中野勝弥

僕が彼と友達になる機会を得たのは小学校三年の時だった。僕はその小学校に転校して始めてのクラスに彼がいた。それから約十年彼と僕は相かわらず友達としてつきあっている。その間にはいろいろの事があった。喧嘩もしたしあんな奴友達じゃないと心にもなく思ったりもした。しかしそんな時にも彼に会うとどちらからともなく仲なおりをして今日に至っている。彼は今工業高校に在学しているが僕と同様大学進学を目ざしている。が工業学校の為進学の資料等がなく様子がわからないので時々聞きにくる。その時僕は冗談を言いつつも将来の事をいっになく真剣に話し合っている。時々彼は「おまんに会うと安心する」と云う、そういう時は常に「俺がのんびりしているからかあー」と冗談を言っているけれど僕とて同じ気持である。今日彼

まったく忘れられた。こうしているうちに眠ってしまった。……ジリジリ前から気に入らなかった音であるが、その朝もと同じ音で鳴っていた。ただその日はいつもと異っていた。いや彼女は、そう思（た。もうこんな時間なのかしら、どうも頭がさえない。どう考えたって十時間も眠ったとは思えなかった。だが事実、目覚し時計が鳴ったじゃないか。いや異う、そうだこれは、夢の中で目が覚めたんだ。「又彼女の頭の中では、エレキの演奏が始まった。（彼女うまいことを考えたねエー「まったく幸せだよ。」その後どうなったかは、読者の想像におまかせする。）

偶感

山下和美

将来について考える度に、私は不安になってくる。私はまだ自分の達したいと思う核心を感じていない。ただぼんやりしたものに向って前進しているにすぎない。自分の一つの信念ともいへべき物を確立して、それに基づいた生活をしていきたいと常に考えているのだけれどその信念を、まだ、しっかりとつかむ事ができない。だからいつもいつも不安で不安でしかたない。このまま、こんな状態で進んでいって大丈夫なのだろうか。「今はそんな事考える暇はない、さしあたって目標の為に全力を尽くすべきだ」と、心の奥底では訴えているのだけれど、こんなあやふやな気持ちで大学入学を志し、後悔しないだろうか。でも私がこれについての結論を出すには、あまりにも私の視野が狭すぎ、考える余裕がなさすぎる。勉強をしつかりすべきか、人生についてもっとと真剣に考えるべきか、とつさ的に私は勉強を取る。なぜ

が来た。例のごとくあれやこれやと話していたが暗くなりたので「明日は俺が行かあー」と約束して帰った。

こういう風につきあひながら僕は彼を一生の友として大事にしていきたいと常に思っている。

夢

奈須 一

もう二月も終ろうとしているのに、いやに寒くて、外は霧がたちこめてたが、彼女はそのため服を、ちゃんと身につけていた。男物の厚手のブルオーバーとニットのストラックス、その上に、トレンチコートを着ていた。

彼女は十八才、K高校の三年生であった。ドライで、とてもかわいい子だ。明日は、大学入試のためか、とても家には落ちついて、いられたなかったので、町の喫茶店へ行った。（だが、こりやまずかったスネー。だってここから、彼女の不運が始まるんだもん。）

あの盲腸の先までしびれるような、エレキの演奏を聞いていると、彼女は、その落ちつかない気持を忘れることが出来た。ホットドックを食べコーヒーを飲んでるうちに、又々、不安が彼女の心をおそった。――明日の事が頭に浮んで来たからだ。！飛ぶように家へ帰ると、九時半だった。明日は早いから、とにかくベットでもぐり込んだが、眠れたものではなかった。眠らなければ、と思えば、思うほど頭の中は、さえて来て、時計の音は、ビルの工事場で打つリベットの音を9.5cm/sで録音し、4.75cm/sで再生しているように、高くひびく。しかたなくさつきのエレキの旋律を頭に浮べると、いやな事は、

か勉強をして、突き当る所までいけば結論が出せそうな気がする。大学へ入学してからの方が、こんな窮屈な、狭い生活の中で無理に出いた結論よりも、もっと伸び伸びと明るく前進的な結論を得る事ができると信じている。私はこの欠点の多い社会に負ける事なく、根気強く精一杯、人生と社会の欠点にぶつかって、自分のこうと思う生活へ開けるまで全力を尺してがんばろうと思う。それにはやはり、自分自身の信念をしつかりつかみ、しっかりと、足が地についた生活ができるよう、邁進すべきであると思う。

アジアにおける日本

成瀬俊久

近ごろの日本は、外交問題に対して消極的であるようだ。

南ベトナム紛争・各国革命政府の承認・中国と中共等のアジアにおける問題についても、日本は外国の様子をうかがってから態度を決定することが多い。また進んで、解決策を提案するようなこともない。

いつまでもこんなことでは、アジアの他の国から信頼されなくなる。

戦後二十年、日本は産業経済とも大きく躍進して、世界の大国と肩を並べるようになった。また地理的にも国力からいっても、アジアをまとめ指導していく立場にある。

この辺で日本は自分の考えを積極的にアジア及び世界に示すべきだ。そしてアジアをがっちりと団結させ、アジアから戦火を追い払いアジアに平和を確立すべきだ。

そうすることが日本の使命であり、また世界平和につながる道であ

ると思う。

最近の日本

橋本 明

今の日本は狂っている。

まず、今の役人の余りの無責任さ。東京都議会の腐敗や小林議員の違反は、最も印象に残っているだろう。さらにもっとこまかい事がたくさん起っている。身近な所では、家の付近でつい最近、下水管の工事を行ったのだが、仕事が終わったあとの実にずさんさ、道はあちこちに土が盛り上がりでこぼこであり、マンホールの口が、道の高さよりも二十センチも高い。こんな仕事の仕方がどこにあるのだろうか。

次に放送番組について。今、野球のシーズンであるが、各放送局は毎晩ナイターをやっている、少し気違いじみているみたいだ。「歌って踊って大合戦」とかいふ番組が大モテであるというのを聞いて驚いた。歌う方とはかく、踊る方は、品がないというか、常識はずれというか、全くやっている者はどういう気持か知りたい、又それを見ておもしろがっている聴衆も実に質が低下したものだ。又「これがクイズだ」という番組で、完全に出来れば、一人なら六十万円くれるという。こんなことだから、働こうとせずにこういうものに熱を上げるものばかりふえていくのだ。

次に今の歌手が、少しかつこうがよければ、少し変わった声であれば、歌のうまさに関係なく金が入ってくるということも問題がある。こんなことじゃ、つまらない歌手ばかりふえてどうしようもない。歌手になるのに、ある一定の基準をもうけるか、又試験などした

言うが、今は「思うはやすし、表現はむずかし。」という心境である。

ほうとうの味

宮崎 康

毎年草むらに虫がなきたす頃になると、きまつて思いだすのが、ほうとうの味である。その味には、何となくものわびしい秋の味がある。ちよつと奇異の感もするといえはするのであるが、僕の家なぞ共かせぎで（かせいでも金が入るわけではないが……。）よく帰りの遅い日がある。中学校の教師をしている母は、受験の課外とかで、特にその日が多い。それで夜七時ごろ帰ってきては、すぐ夕飯の仕度にとりかかる。以前の様にもっと早く僕がやっておけばよいのだが、何だかんだと理由をこじつけ、やらないでよく、そこで服もきかえないで母がつくるのがこのほうとうである。もつともその作り方はこの武骨な自分でもうまくつくれるほどのもので至つて簡単ですぐつくれる。ものの二十分とたたぬうちにできあがる馳走に待つてましたとはしをとる。真白にあがる湯気にフーフーとふきながらがむしやらの口に入る。

秋のわびしさは、何が原因なのかわからないが、虫の音を耳にするに無性にさびしくなるのは事実だ。ほうとうの味と、秋の味との本質的な関係なんて自分は知らぬが、何かそこにはすがたい因縁があるように思えてならない。それは単に虫がなく秋にほうとうを食べるという、単純な事実からくることかもしれぬが、考えてみるに、因は、あのほうとうからでる湯気と、それを吹きながらすすむ趣とにあるらしい。そのかすんだほのぼのとしたそれでいて感傷とも言うべきもの

らよい。

次にツイスト・サーフィンと流行してきた踊りというか何というかわない踊りが、今では、スイムとかゴーゴーに変わってきた。人によってそれぞれ好みがあるかも知れないが、どう考えても、ゴーゴーなんというのはいただけない。まるで気違いが集まって乱痴氣騒ぎをしているとしか思えない。どこがよいのだろうか。

いろいろだから並べたが、まだいろいろ限りなくある。

そこでもう一度言いたい。今の日本はどこか狂っている。

実現させること

許山葉子

人間の望みに、それを実現させるための実行力が、いかに伴わないかが痛感される。いくら望みが大きくとも、それをなすための前段階の行動をしつかりやらねばいけない。それにはself-Commandが必要だ。つまり「こうしよう」と思ったら、その意志に自分を縛りつけないといけない。人間の人生とは、自分との闘いであることが、実感としてわかった。今までは、やたら大人やえらい人達が格言めいたことを言ったり、特に「克己」ということは良く使われていたの自分では「克己」という言葉が大嫌いであつた。しかし、今では、そういうことが本気で言える人は、ある種の迷いからは脱して、精神的安定へ向かいつつあることがわかる。だが、まだ「克己」とは意味が違う。自分を押えるなどとはいやなこと、いろいろある中で一番本筋の意志に自分をしぼりつけない。他の本筋でないものを押えるのではなく、それを切り捨てる。「言うはやすし、行いはむずかし。」と

をもつ姿は秋のそれと似かよっていいでもない。この秋は、まだはとうをたべてはいないが、食べるときはひとつ、秋とほうとうとの味をじっくりかみしめながら、食べることにしよう。

柏戸と相撲

山下晴夫

僕の好きな力士は柏戸である。中学の時から一貫して力士は柏戸を応援している。何故好きかと問われればまず第一に彼は不運だからである。調子が出てくるとすぐ何かケガでもして休場となる。少しもケガをしなくてやたらに強い大鵬にはどうも応援できない。元来僕は弱者にくみする主義である。しかし大人には割合この型が多い。大鵬を応援する人は大抵長島が王のファンである。そしてそれには子供と老人が圧倒的に多い。

好きな第二の理由は相撲の質である。大鵬の計算づくの取口より柏戸のやたらと突走る無鉄砲士の方が僕にははるかに魅力的なのだ。柏戸が負けるときは決つて「うつちやり」である。勝負あつたと思う瞬間にくるつとよけられて負けてしまう。北葉山には続けて四回くらいこの手でやられた。やられることがわかつているなら注意して二度とその手に乗らなければいいのに、何度でも最初と同じ無鉄砲をくりかえし負ける。だがそれでも好きだ。

僕は相撲を見るスポーツとしては一番好きなのだが、たいがいの友には、野球の方が興味あるらしい。僕には野球場でプレーを見ながら興奮してビールピンをぶつつけるような人の気持がわからない。見せ物として金もうけのためにやっている野球をみて気げんをそこねる例

は多いらしい。実際僕の聞いた話に巨人がまけると翌日一日中プリプリする人があるそうだ。これに対して相撲の場合には負けても別に何とも思わない人が多い。相撲にはヤジという野蠻で下品なものはない。余裕があるのである。相撲は正面からぶつかっていくのである。相撲は正面からぶつかっていくのでみていて気持ちがよいが野球は投手が相手に打たせないようにひねくれた球を投げる。全く意地悪だ。相撲が好きな理由はまだいろいろだが、最大の理由は勝負が済んだときの態度である。どんなにぶざまに土俵の上にくるがされた力士も一礼をしてから土俵を降りる。全力をつくして勝っても負けても最後にチョコンと頭を下げる。われわれはこうありたいと思う。

若き思い

長谷部 貞夫

今こうして落ちついて思い出してみると、この高校生活が矢のようにはやく過ぎてしまうような気がしてならないのです。ことわざにも月日の過ぎるのは速いが、なかなか月日をすごしてきただけの価値は得られないものだ。というようなことがあります、その通り、少なからず疑問がないわけでもありません。それでもまた一方では、進学進学とみんなともに割合よく頑張ってきたのだから何かがえられたのだらうという気持ちもおこってくるのです。ではなぜそんなに頑張ってきたのか。進学のためと一言でいってしまえばそれまでですが、それに加えて別の思いが多少なりとも常に心の底にあったように思えるのです。ぼくたちはいわゆる戦後っ子。今年は戦後二十年をむかえ、よいことまで発展してきたものだと思うとともに、戦前の苦しみをさぞ

しまうか、忍耐して前進するか、二つの道が与えられている。やめてしまえば確かに楽になりある種の一時的な満足感を得られるだろう。しかしそれと同時に自分の気持ちの奥底に後々までも、これくらいのことがまん出きなかったなんて、という後悔の念のようなあるいは失望感のようなものが残るだろう。もしやめずに前進すれば遠くまで行ったというあるいはがんばり切れたという満足感あるいは一種の自信を得る。ここでいえることはこの時得る満足感、あるいは自信というのは前者のそれとは比べものにはならないということだ。この強大な満足あるいは喜びというものを得るためにした忍耐というものは並々ならぬものであることも確かだ。このように忍耐なくしてはより大きな満足、あるいは喜びは得られない。この忍耐することがいかに大切でありかつ重要な意味を持っているかは、このようなスポーツばかりではなく事業にも学習にも何れについてもいえることだ。誰が楽をして大事業を成しえただろうか。いったい誰が労なくして博士になりえただろうか。彼等はそれぞれ相應の努力をしているはずだ。

忍耐が大きければ大きいだけまた喜びもそれだけ大きいものだ。忍耐なくしては大事は達成できない。将来に大きな希望を持ち、すこしばかりのことではこたれない忍耐強い人間にならう。

ジョン・ラスキン曰く「忍耐は意志の徳の中にあって、もっとも美しく、そして尊くまれなものである。忍耐はすべての快樂の根本であつてまたすべての権能の根本でもある。人の将来の希望は忍耐によつてのみ達せられる。だから長い労苦に耐えることのできないものはその希望を失うことを意味する。希望を大きく持つてそして忍耐よくあれ」と。

苦しかったであろうと推測しても本当の苦しみは僕らにはわからない。今アジアではさかんに戦火を交えている所があるが、あの様な戦いを報道で知っている僕らにとつて戦争を知らなかっただけで本当に幸福だと思わなければならないと思うのです。父母は時々、今の人は兵隊にゆくこともないのだから勉強で少しぐらい苦しんでもよいのではないか、というようなことをいいます。僕にも本当にそのとおりのように思えるのです。時代の差はあれ、若い僕たちは何か若い時期に苦しんでおくことが大切だ。そして今僕らにできることといったら勉強なのではないか、と思つているのです。こんなふうに考えてみましたが、同じ考えの人がいるでしょうか。さて、僕らは今一つの苦しみからぬけ出ようとして頑張つてゐる。真剣な姿はよくいわれるように本当に尊いものだと思います。この若い時期に苦しんだ姿を後になつて思い出した時にきつとよい思い出となるように、今からでもさらに頑張つてゆこうと思います。こうした努力は成果よりも真剣に努力した内容の方が大切だと思うのです。

忍耐

古屋伸二

「忍耐」とは読んで字の如く「耐え忍ぶ」ことであるといつてしまえばそれだけのことであるが実際言うは易く行なう？は難しいことばである。では「忍耐する」ということはいつたい何を意味するのだろうか。それは「層大きな喜びあるいは満足感が期待されるということだろう。この事を身を持って味わつたのは三度の強行遠足を通してである。足にはマメが吹き、体じゅうがいたみ睡魔が襲う。ここでやめて

夕方

保坂憲治

夏休みも終り、に近づいたころ、だいの仲よしの少年と二人で学校へキャッチボールをしに行き、汗びつしよになるほど、せいじっぱい投げ合つた。あたりは夕方らしい涼しさがあふれていた。土手の上で親子二人ずれで楽しそうに夕涼みをしていた。なつかしい母校は、学校にいたころとかわらぬ雰囲気でつつんでくれた。山の方をふと見ると田舎でよく見た駒ガ岳が夕焼けで赤く染まっていた。思わずもつとよく見たいと思い、二人で自転車に乗つて荒川の土手まで一気に登つた。くたびれ、息がきれた。ちょうど田舎の山に登つて見たときとまったく同じ気持ちにかられた。ほんの数分で山の赤は黒紫に変わりみえなくなつた。橋の上にも前の道路にもいろいろな人がのどかに行きかよつていた。ひさしぶりに外出してこの土手に立ち、ここの空気に触れるまで別世界にいるような感じを受けた。過収のこと現在のこと未来のことを考えてみた。急に心の底から勇気がわいて來た。

高校生活

佐野路子

高校生活の第一歩は入学式から始まつた。学校に対する第一印象は「ぼろ校舎だなあ」であつた。すぐ外ではバレーボールをやつていていつもさわがしい。おまけに、夏は暖房、冬は冷房。よくハッキンカイロを持つて通つたものだ。でも、その校舎がつぶされるとなると、

思い出まで消えてしまいそうでさみしい。二年になると教室が本館に移った。暑さ寒さも少しは和らぐかと思つたが、大したちがいはなかった。そして三年。毎朝三階まで上るのが一苦勞だ。

三年間という長い高校生活の間には、楽しい、なつかしい思い出が数かぎりなくある。その一つが強行遠足だ。今年もその時期が近づき教室での話題になり始めた。入学して始めての強行遠足は、とても不要だった。雨で中止になってしまえばよいと思つた。でも歩き出すとさっきまでの不安は消え去った。しかし、足どり軽く出発したものの弘法坂にさしかかる頃になると、足どりが重くなってきた。順位などどうなつてもよいと思つた。足の裏が痛み始めた。後から後から人が来るので、しかたなしに歩いた。惰性で歩いているような感じだった。また、清里、野辺山間がとても長かった。道がまつすぐなために一層、そう感じたのだろう。目的地がすぐ目の前に見えても、なかなか到着できなかった。野辺山で前進停止だった。そのことと知ると、急にもっと歩けそうな気がしてきた。「よし、来年はがんばろう。」そう思つた。だが、二年の時は、出発してすぐ坂道があつたりして、清里までしか行けなかった。今年は、もっと手前までしか行けないかもしれない。しかし、高校生活最後の強行遠足なので、全力を尽し、楽しい思い出をまた一つ残したい。

三年ももう半ば。皆、大学受験の勉強に追われている。受験が近づくと不安と、大学生活への夢をいだいている此頃である。

苦しい心

前田 弘

三年になつた頃から、僕は考える事が出来なくなつてしまつた。或

深刻ぶり

Y・MAEDA

君にあやまらなくてはならない。恥じなくてはならない。所詮むりなことだったんだね。

でもあの時は嬉しかった。家に帰つた時も、姉にも母にもちよつぷり威張つてみせたものだった。それが少なからず、君に精神的な負担を負わせるものであり、不快を思わせるものであつたんだから……。前にも幾度もあやまろうと思つた。だけどその勇氣もなかつたんだ。

僕は弱すぎた。この三年間を振り返る時、なんの進歩も認められないのだから。いいかげん極まる日々を送り、自分を忘れて他と比較ばかりし、あせつて、逃避して、悪循環を生じ、生きていたいのに死にたいと思つてみたり、人間として、人間でないような状態をずっと続けといたのだから。それらが一遍に暴露された時、何も感じなくなつた。電話でおふくろの声を聞いたら、無償に泣けた。はじめて自分のために泣いたと思つたら嬉しくさえた。その後は今までに一度もなかつた位、さっぱりしていた。

君は益々不快に思い、バカけていると思ひ、「おまえはいたずらに深刻ぶりすぎる。」と言つてくれるだろう。よくわかるよ。僕はこれをよい勉強になつたとします。

君の御健闘を祈ります。

る事を考え始めると頭骸骨が急に縮んで脳を圧迫し、それがために大脳は全然活動する事が不可能になつてしまふ。そんな状態がここ半年余りの間続いている。つまり、今僕がまあ何でもいいのだが、「死」という事を考えているとする。僕はたぶん「今死のうが百年の後死のうが死んでしまふのに変わりはない、死を恐れるのは愚かな事だ。」という考察をなすだろう。しかし、大脳は数分に於いてこの結論に達するが、それ以後十分考えていようが一時間考えようが、この思考はこのままで、前に進もうともせず又、元に戻ろうともしない。つまり思考停止の現象がそこに起る。

日々めずらしい論議に暮らしている諸君には、この状態がいかに苦しいか、お分りの事と思う。人から思考能力をとり除いたならば、もはやそれは人間たり得ない。つらい。いいようもなく悲しい。

失なわれた思考力——一般的な考える力——をとりもどすべく努力するのだが、事態は、悪化こそすれ、決して好転はしない。平々凡々たる人間として生れた僕にとって、精神的な孤独は何物にも代え難くつらい。受験を目前に控えた今、こうした事に苦しまねばならないとは天は何と無慈悲なのだ。

日に日に狼狽の色は濃くなつて眼前に重苦しく垂れ下がる。払いのけようにも相手は無形の魔物である。焦れば焦る程拡が閉がる。ああこんな時人はどうすべきなのか。君教へ給え。このままの状態があと一年も続いたら僕は今持つてゐるすべての希望を求めねばならない。

今の僕にとって最も重要なのは試験ではなく、いかにして早く元通りの自分になるかという事だ。それが解決されないうちはすべてが空しい。早く元に帰りたい。此頃はそればかりを案じて日を暮らしてゐる。

イギリス乞食

諸角 強英

イギリス乞食——もちろんローリングストーンズのこと。彼らの黒っぽいフィーリングはもともと黒人R&Bファンであつた僕にはたまらない魅力だ。ミックとケイスのすばらしい作詞作曲に加え、リパールナンバーワンのミックの歌声はビートルズなんかとはくらべものにならない。ビートルズなんて御子様向きの子守歌をエレキで大きい音で演奏してビートを加えたただけだ。それにリンゴのいやらしいわし鼻やポールのギョロギョロしたでつかい目玉のどこがいい。ポールがあるなにすてきなジェーンと仲が良いなんてくやしいじゃないか。それにくらべてローリングストーンズの♫&♫はずつとすばらしい。実力だけがものを言う世界だから、もうすぐ彼らが世界のポピュラー界の第一人者になるだろう。最近キンクスやゾンビーズみたいなローリングストーンズ王者のかなりく「サティスファクション」はアメリカであつというまにミリセラを記録した。根強い人気を持つ彼らにどんな良い歌を歌つてもらつてビートルズなんかこの世から消してしまえ。

このごろのこと

中沢 志げみ

不都合を感じなくなつた。馴れてきたといふのであろうか。このごろ外に対する心境が以前にもどつてしまつたのを覚える。一カ月前ま

ではあらゆるものに不都合を思ったものが。その時の自分は積極的であって能動的であった。それが又以前ずっとそうであったように受動的（とは他からの働きかけを待つとかそれに反応するのみ）な自分にもどってゆく。自分が過去いかにそうであったか。つまりいろいろな活動に加わりたいたいと思っても希望者が大ぜいでそれらの全々知らない人と交わるのがひどく気づまりで間が悪さを感じるので、いや多分はこの日本人的な恥しいという感情、これは自分を人前でよく振るまわせようとしたり、欠点を表わさない為に自分を防衛的にからにとじこめさせたりするのだけれど。そういう恥などという全く無意味な、そんなもののためにわずらったことが後悔されるようなもののために、自分でやりたいと思った。多くのことについて指をくわえて見ているに終ってしまった。そしてそれで何の得をしたなんてことはなくて、むしろ大いに友情を暖める事も楽しさを味わう事も失って損をしていた。何をやることもなかったのである。そして今、とりかえしのつかない、高校生活をもっと有意義に過せばよかったとばく然と思わせるのである。

ダークグリーン

山口 富夫

秋も深まって此頃は夜ともなるとしんと冷えてくる。そして僕の高校生活も終りに近づいている。いや、僕の本当の高校生活はもう終ってしまったのかもしれない。そして、自分の高校生活を顧みる時は満足であるし、自分の分まで送ってきた日々に誇りを持つている。「自己満足にすぎない。」と言われてもかまわない。

無

山田 七利

せつばつまった。あしおとの原稿を書かねばならない。でなければあすL・H・Rで書かすという。しかたがない。このちようど一カ月ねばつたが、しかしこれ以上ねばつてもしかたがない。

記録は一生のこるものであって、へたな文章しかかけない身はつらい。一年のときもそうであった。二年のときもそうであった。しめ切りまでねばつて書かされた。いやいやながら書かされ、やつぱり書かねはよかったと、雑誌を読んで後悔する。いやいやながら一生のこる記録を書かされる。最高につらいことである。みんな、なにかと理屈をつけてかいているが題がない。雑誌の存在を否定するのではない。この雑誌の存在の価値はいうまでもないことである。が生活において、たのしかつたこと、くやしかつたことで長い年月がたつて、記憶がうされる。これがほんとうのあしおとであるか、足おとは、過去をふりかえっているものであって、わすれたものは、ただの過去である。われは単調にして、十月現在までを過ごしてきた。さしあたって、てつとり早く書きたねは、足おとにむけた。ぐちだけである。

これもただの過去としておきたかつたことだが、将来、これを読んで、へんにぐちをいつたんだなあとと思出しさせられるのも足おとの価値というものか。

あすH・Rで書かされるのはいやだ。せつばつまった。夜がふけていくのは最高潮である

高校に入学し、ハイ・Yというクラブに入り私は今までとまったく違つた世界に飛び込んだのである。しかもその世界は、私に色々な問題を提起し、夢と希望を与えてくれた。

皆が勉強をしていかであらう時に、僕は泡を飛ばして議論をした。人生について、宗教について、友情・恋愛について、社会問題について、我々の生活について……。また夏休みには、泊りがけでワーケーションに出かけ私達の労働を必要としている人達の為に働き、秋には文化祭、そして部長改選で大いに悩んだものである。それは、本当に苦しくもまた楽しいものであった。僕は、そこにおいて多くの事を学んだ。絶対に教室では学べない事を。そして、多くの友を得た。

自分の罪に苦しみ、自分の弱さに悲しみ、社会の矛盾に腹を立て、人間が人間を殺し偉大な自然を破壊しているのを知って憂い、そして自分の将来に希望を持ち奮起した。

今は、その苦しくも楽しい意義あるクラブ活動から身を引き、いやな受験生活にある。

しかし、自分の夢を実現させるための大学であり、その大学へ入るための受験勉強であると考えた時、本当に不安ではあるが、その中に希望がわき、「頑張らなくちゃあ、」と思うのである。また、たとえ今年が大学をすべつたとしても、決して後悔はしない。まして、クラブ活動をやりすぎましたなどとは絶対に言わない。なぜなら、クラブ活動をする事によつて、教室では得られない多くの貴いものを得たしまた自分の将来を考え夢と期待を持つ事によつて、現在の勉強にも希望を与え、励ましてくれているのであるから。

雨の夜に

横内 照枝

時々すさまじい音をたてて雨が降っている。窓の麻にはね返る音が妙にうるさくひびいている。「今晩は神経がとがっているのかしら？」三時間も同じことをくり返して、何も書けない自分に嫌気をおこさずにいられたかつたためだと思ふ。

私は自分を客観に描写しなかった。他人が私を見るように……しかしあまりにも難しい。自己を否定し、自己の醜態をペンを持つてみとめなければならぬことは今の私にとって耐えがたい。そればかりでない。心に不忠実なる表現力で形もない自分を表現することは書かないことよりもっとおそろしい。

このごろ自分というものがどこかにいってしまった。自分の批評もちろん他人の批評もあらゆる日常の出来事に対する自分の考えをしつかりと持てなくなつてしまつた。だんだん広がっていく大きな世界を知つて、自分はただ一つの微粒子だと気がつくとき、はかない自己の存在に大切な心をもすててしまふ。友人は私は個性が強いという。このごろその言葉が私の心をなやます。心の無い私のぬけがらを見て批評されることは友人に裏切られたほどにつらい。しかしすべて自己の責任だと思ふ。ほんとうの心をかくし、大衆の中に没しようとする中庸の悪徳なのかもしれない。自己をすべての人から同じように見てもらいたいと欲する虚栄心なのかもしれない。その悪い心に気がつく時、ふと自分自身に帰る時、耐えがたい寂しさにおそわれる。そして自分自身を投げだしたくもなる。でも正しく自己を生かしたいと思

う。

そしてもう一度純粹なる自分自身にもどりたいたいと思う。赤裸々な心で友人にぶつつかっていきたい。虚栄心も飾りも何もいらぬ。透明なる心のままで自己を表現したい。

庵に落ちる雨がある人には小鳥の足音のごとく、ある人には音楽の流れのごとく異って感じられるように、人間は小さな微粒子でありながら比類のない個性を持っている。それを忠実に表現すること、自己に対して、他人に対して最も正しいことだと思ふ。

荒れくるう雲のすき間から朝日がさしこむ……。

九月十五日 朝

「からまつの林」

吉岡義博

私の家の近くに丘があつて、そこにはちよつと散歩するのによい松林がある。私はそこが好きで、時々氣晴らしに行くのである。

春、三月の頃、しばらく病氣で家にとじこめられた後、久しぶりにそこへ行つてみた。小春日和の午前だった。丘の頂上、林のつきる所に古びた神社があつて、下から一歩一歩上つてゆくと、石の階段やこけのはえたとりが私を嚴肅な氣分にさせる。その階段の一つに腰をおろしてほお杖をつく。目とじているといい氣持だ。からだいっぱい暖かい光があふれている。こうしているといやな事も辛い事も忘れて、甘くやわらかい夢がわく。

夏、真昼だった。

松の木陰は涼しい。社の縁に仰向けに寝ころんでいる私はせみの声

で我に返る。人々に忘れられてしまつたようなこの林では、人に出会うことはめつたにない。しかし自然は良い友だ。そのまま空を見つめていると、あの入道雲がムクムクと大きくなつてゆく。私はもりもりフアイトが湧いてくる。

秋の夕暮れ。

夕やけこやけの赤とんぼ

追われてみたのは いつの日か

夕暮れのすず風が枝をわたりさらさらとなる。夕日に染まつた赤とんぼが、時きたりとばかり一斉に飛び始めた。とんぼの羽からは秋の歌がきこえてくる。私は今、丘の頂上から西の空を見ている。空は金色から赤、やがてうす紫へと移つてゆく。大きな幹の間から見える箱庭のような盆地にちらほら灯がともるころ、汽車がマツチ箱を連らねて走つていった。紺碧の山々は耳もとで夜の訪れをささやく。ふと見上げると、いつの間にか一番星が光っている。もうすぐあの空はダイヤモンドや真珠でうすめつくされてしまふだろう。

私はこの林が好きだ。この林は私の心のやすまる所なのである。すばらしい景色とさわやかな空氣の中で静かにものを考える時、無類の幸福感がわいてくる。

私はこの林が好きだ。

秋 風

依田秀夫

まぶしいばかりの太陽も輝きをおとろえ、いつの日か校舎を巢立つ日がやつて来た。心に残るは先生の御恩ばかり。虚弱な意志に犯され

た私の心にブスブスと鋭いメスをさし込み、一つ一つの言葉は私

や私達の心の裏まで見通しているのだ。私はそれに何一つ答えたであらうか、何もできずにおる。自分を恨んだ。しかしいくら恨んでみても過去は遠い日となり今はない。いまわしい思だけが私の身体にびたりとはりつき動こうともしないまま、あてもない高くけわしい山に登つていく。山頂にたどり着きさえすれば緑色の人生が待つておるのだ。先生のザイルにすがりつき、なんとかなるさと思う心が私の足をひっぱる。そこには氣力などと呼ばれるものは何もない。呼んでも答えぬ枯野と化した私の心にそつとつめたい秋風がさしこむばかりだ。



迷 妄

安 藤 一 安

虚無に満ちた その瞬間

微かな真理の灯に 照らされ

心の奥深くに 絶対が 尾を引く

絶望が 虚妄なのは

精神の貧しいから故

希望が 虚妄なのは

やはり 自然を 探究する故 なのか

単なる利郡の

連続の要素に 過ぎぬ

奇跡を 願う

曇天の憂鬱な眼差により

生の観念を 神に託す

細やかな榮譽を 求めるため

異相を 寧ろ 好み

小さな悦楽を 守るため

悲観論者となるを 堪える

だが 夕焰の幻想により

白昼夢は 打ち 破られ

再び起こり得る 自然の輪廻を

銀河系宇宙の果ての 太陽の

出現により 眺望するまで

ただ 安堵を 祈るのみ

得体の知れぬ 体躯に 宿る

窮極の本能 また

非凡な心を 所有し

渡世するも 悲しいと 知る

靈魂の躍動により

乾坤の戦慄を 捕らえる

理想を 奏でる

精神の迷妄の 目前により

忘れ得ぬ人

雑木林の間 長く続く径

霧が立つ中に、幻想の様に現われる。

大自然の広大さ 小さな存在の

前橋藤也

彼が居、僕が居た。

風の音は、繊細な神経を伴い

林の中を走りぬける

微妙なる葉の動き

美しいのは自然かそれとも彼自身なのか

朝霧はまだ晴れぬ

青い澄みきった大空を望むのか

彼も僕も

長い沈黙……

遠く隔たった今なおそつと現われるのは

それは彼

やはり忘れ得ぬ人である。

ぼく

ぼくの夢

いつでもどんな時でも夢を持ちたいという夢

ぼくの自我意識

みんなは自我が強く「自分は」「自分は」という気持が強すぎる。

ぼかなくせに。

ぼくの処生法

中村正人

夢を持ち、高遠な理想を求めしかし自殺しない自分の卑劣を

反省し他人の卑劣を憎んで、しかしそれを暴露しない。

ぼくの尊敬する人

ぼくより正しい人（もしいたら）

ぼくの好む人

印象と性格と行動とが一致する人

ぼくの信ずる事

人間は幸福である。（なぜなら、自分自身に堪えきれない時は

他人に話せばよいから。）

キャッチボール

斎藤茂樹

今日も夕やけの空にボールを投げる。

力一ぱい空に向かって投げる。

無限の彼方に吸い込まれるように

見えなくなる。

自分も空に吸い込まれるような感じで

ボールをみつめる。

刻々色彩を変える空に向って

くやしさをたくしたボールを

力一ぱい投げる。

けれども彼は言葉なくただ投げかえす。

「くじけるな」と呼びたげに





5

感 雑

彦 美 山 秋 主任 組



たものではない。目は血走っている。老人幼児優先は全く忘れ去られている。一方、車内の降りようとしている乗客をみてみよう。折角奮闘して手に入れたのだからその座席への愛着は捨て難しと云った風情でなかなか立ち上ろうともしない。発車時刻が近づきあわや乗る人が乱入するかと思われる寸前、ゆうゆうと立去ってゆく。又、談笑し、タバコをくゆらしながら最高によこした座席を後に最低速度で降りてゆく者もある後から乗る人のことなど全く忘れられている。つい数刻前、前記のような無様な周章頭狼をした者と同じ人間だとは到底思われない。兎に角こう云った事は少し人出が多い時など、どの駅でも見られる光景で、私が列車通勤をしていた時、いやという程見せつけられ又経験もしたことだ。

当時は車輛が足りないからだ。列車本数が少ないからだとか、ローカル線だからだと云っては、やれ国鉄が悪いの政治が悪いのと手前みよ的な批判をし憤慨したものだ。今客観的に静かに考えてみると、それとは別に又人間のさもし根性をみせつけられたような気がして何とも堪えられない気持だ。どうして人間はこうも近視眼的に自分のことだけ、近いことだけしか見ようとしなのだろう。又こんな話もよく耳にする。自転車車の二人乗りをして警察官にとがめられた時「泥棒は俺だけではない」式に逆にくつてかかりポリ呼ばわりする若者があるという事だ。どうして素直に自己の非をわびる気にならなのだろうか。やはり「自分だけは」特別と云う自己本位の考えによるものであるのか。こんな者に限って不良にたかられた時など仰天し血相変えて交番へとびこむ輩だと思ふ。相手をよく確める事もせず、「お巡り様々」と呼んだ。「ポリ」になったり「お巡り様々」になったりでは警察官の方こそいい迷惑である。もつと自分の事だけでなく他人の事、遠い将来の事が考えられないものかしら。とに角今日の若い人達に特にこのような事を考えて貰いたいような気がする。本当に。公共の物を大切にしたり、他人に思いやりを持ったり、又、十年先の大木を夢みて苗木を育てたり、宇宙をかけ廻る将来を語ったりなど、何れは成長し、先頭立って日本をになう運命をもつ青年達にこんな事を強く期待する者の一人だ。

思 像 仏

宏 谷 甲

廃仏毀釈もようやく薄れた明治十七年、夢殿の秘仏救世観音は米人フェノロサによつて開扉された。そして彼は言った。「世界に唯一なる彫像、最も魅きつけたのはこの製作の美的不可思議であつた」と。

この時以来、日本人の仏像に対する眼の色は青く変つてきた。仏像は宗教的崇拜の対象から、芸術的鑑賞、美術史的研究の対象となつたのである。仏像をロダンやマイヨールの彫刻を見る目と全く同じ眼で見える様になつたのである。最近は何にそれが著しい。現代という人間の精神まで機械化してしまう社会から逃避して、古寺の深淵な美しさに魅かれる人が多くなつたのである。しかし、彼らは仏像をただ一個の彫刻としか見ない。一体、宗教芸術本来の目的はどこへ忘れ去られたのだろうか。仏像は断じてただ一個の彫刻ではない。無論、宗教芸術を、宗教を離れた芸術として批評することも可能である。しかし、それはあくまでほんの容姿に触れただけであつて、その真髓まで達してはいない。それは無意味である。日本人にしたところが外国の宗教芸術を真に観賞することはできない。東洋と西洋とが、仏教とキリスト教という相容れない思想に浸透しているからである。フェノロサは後に仏教に帰依したものの、秘仏開扉当時はまだ一人の外国人人として他国の彫刻を鑑賞したにすぎない。つい最近までの人々は敬虔な気持ちで寺に参詣し、仏像の静かな冥想に精神の救いを求めたのだ。今ではその寺でさえキリスト教的観念をもつて合理化され、あたかも博物館の風を呈している。そして仏像を拝観する人々も主観性を失ひ、評論

家や美術史家の、仏像に対する賛辞を無批判に受け入れ、その質辞の奥底を流れる思想の深さは無視されている。

芸術とは、本来人間の感覚によつて創造されたものである。だが、創作意図を求める人にとつてその芸術性は軽視されるのと同様、芸術を鑑賞する人にとつてその創作意図は無関係なのかも知れぬ。つまり残念なこと現代の多くの人々にとつて「仏像」などという言葉はむしろ彼らの感覚的鑑賞を阻害するものだ。だから無意識のうちに仏像の表面だけを眺め、耽美的な気分にと溺れ、その背後に流れる思想などとは無頓着である。私は仏教に帰依する者ではないし、他人にそう勧めるつもりはもうとうない。ただ仏教の芸術を観るには仏教の精神を通して、キリスト教芸術にはキリスト教を、イスラム教にはイスラム教でその芸術を噛みしめ阻害することも必要なのだ。梅原猛は仏像の観賞法として、第一に浪漫的観賞法、即ち仏像を対象とした叙情詩を綴る方法。第二に実証的観賞法、即ち美術史に基く仏像の様式論をあげた。いずれにしても、仏像を観るためには、仏教を理解し、自己の心で触れることが大切なのだ。その点で私は会津八一の仏像観賞がたまらなく好きだ。彼の歌には心の温かみを感じる。

仏像とギリシャ、ローマの彫像を比べてみると、その骨子は仏教に対して古典文化とキリスト教である。古典文化は「健全な精神は健全な身体に宿る。」で象徴されるギリシャ彫刻に代表される。その口もとに浮ぶ幾分硬さのあるほえみをアルカイック・スマイルと呼ぶ。

一見、仏像の微笑に酷似している。元来仏像の微笑はこの笑いがインド・中国を経由して発展し、日本に輸入されたものであるが、良く見ると全く異質なものであることに気づく。ギリシャ彫刻は自然に一になろうとする目的のほんの一部を唇に分け与えたのだが、仏像の微笑



清水喜美男

どこからともなく
起伏のある声が聞えてくる。
あれ、今度はくつ音らしきものが…
あんなんだか夢をみているようだ。
雲にのって東海道新幹線を走っているようだ。
あれ、ちよつと静かになったぞ、
あれえー、こんどはばかに若さにあふれた声だぞ。
おかしいな。
何か遠ざかるうとしているぞ。
どうしてかな。
ふたたび新幹線でまっしぐらに雲の中に…
そこは静かな楽園だった。
と、突然音があつた。
そこにあつた。
はつとしたとたん雲に割れ目ができて、
机におでこをぶつつけた。

歩み

雨宮俊彦

カチカチカチ……………
全てが眠っている夜も
彼一人はせつせと歩み続けている。
何の煩いもなく、何の束縛もなく、
ただ単調なる歩みを。
生の神秘も死の恐怖も彼だけは知っている。
だのに表は働く人の形だけだ。
時々疲れたかのような大きなのび、
ボーン、ボーン……………
彼の心は乱れを知ることなく、次の行為へ。
単調なる、しかも苦悶や煩雑を解決してくれる行為へ。
彼は豪奢や高慢を知らない。
虚栄心も知らない。
知っているのはただ時の流れだけ。
そして私達に語りかけている。
ほら、耳をすませてごらん。
聞こえるでしょう、声が。
カチカチカチという……………。

にはずつと荘大な理想が集中している。釈迦の教えである。仏教の理想は肉体を解脱することにより精神の救済を得ようとするところにある。キリスト教はむしろ肉体と精神の一体化を図ることにある。思惟像について考えてみよう。弥勒菩薩と「考える人」、これほど東西の思想の差を感じさせる像はない。弥勒菩薩は未来の仏、知性の像である。釈迦の死後五十七億六千万年になった、釈迦によつて救われなかつた衆生を救済するために現われる。その時彼の眼前には苦悩にあえぐ衆生の地獄図が展開されているはずだ。しかしじつと冥想するその口もとには絶えず微笑が漂っている。慈愛の昇華した崇高な姿、言わば精神を客観化した像である。「考える人」は論理の追求に倦み疲れた男性の困苦の像だ。彼の顔は苦痛にゆがみ、怒りを、悩みを、悲しみを全身にさらけ出している。それは生命を客観化した像である。何という思索の違い。この違いは、恐らく仏教の「生死無常」とキリスト教の「生の肯定」という相反する立場から生じたのだ。釈迦は厳しい修行の末悟りを開いて仏陀となった。その死は自然死であり永遠の安らぎである。それに対してキリストはどうか。まず彼は絶対的神の子である。苦行修行する必要はない。その死は劇的な裸刑による殺人であり、永遠の復讐（正義の追求）である。
私は東洋人の立場としてではなく、世界の理想として弥勒菩薩の思索をとりたい。誰しも永遠の復讐より永遠の安らぎを望むであらう。
慈悲慈愛の思想、それ故に私は仏像の思索に憧れる。その口辺に漂う微笑は怒りを、悩みを、悲しみを、憐れみを、慈しみを、そしてついには諦を集約した永遠のほほえみである。

悲しき我が心

原敬二郎

僕のアルバムの上二ページの左下に6×6のすこし黄色がかつた写真が張つてある。それには三人の子供が写っている。右は僕、左は親友の広君、中央に、従弟の淳ちゃん。僕と広君は、小学二年生、淳ちゃんは、三つの時の写真です。
昭和三十三年、小学校に入学して一月も立たない、四月二十七日日は、たった六年余の生涯に終止符をうち、二度と返らぬ人となつてしまったのです。憎むべきは、交通事故です。
皆さんの中には、病気で親又は兄弟を失なわれた人がいるでしょう。その人達を失なつた悲しみ、惜しみは、実に大きいものでしょう。しかし、それ以上に、不慮の難、つまり交通事故で人を失つた悲しみ、惜しみは大きいと、僕は思うのです。何となれば、医学の進歩により、病気による死亡率は減少しつつあると思います。しかるに、交通事故は、交通の発達に比例するがごとくに増加していることは御存知でしょう。数学的に言うと、前者は、 $\frac{1}{n}$ のものが負であるのに対して、後者は、 $\frac{1}{n}$ が正なのである。

交通事故の主なる原因は、運転者に慎重さが欠けているところにあるようです。よく新聞に、「無免許ダンブ突つ込む」とか「無免許オート死の暴走」などと書かれた記事を読むと思います。しかし、僕に言わせれば無免許だろうが、免許を持っていようと、事故を起こせば両者には差異はないと思うのです。端的に言うと、「無免許でも、社会に迷惑をかけなければ良く、持っていて、迷惑をかけるような者

はだめだ。ということです。又このような運転者を作り上げる主な理由は、公認〇〇教習所等が、二万円出せば免許証を貰えるなどという気押を、植えつけるような、宣伝をするからいけないのです。それと同時に、今の筆記試験が、単純すぎるのです。確かに、受験資格の規定の中に、「精神異常者は受験できぬ。」とありますが、法令と構造の試験から異常者を落せましょうか、落せません。このように、公の所ですらも、慎重さが欠けているのに、やれ、交通安全宣言、酔っ払い運転禁止等と騒いだとして、効果が上がる筈がありません。要するに、社会全体が、慎重に行動するよう心がけることです。万物の霊長である人間にできない筈はありません。僕は孟子の『性善説』を信ずるが故にこのことを考えるのです。

社会問題のもう一つに、我々と同年配の青少年の自殺があります。よく彼等は、こう言います。「もう一度生まれ変わって、出なおすのだ。と、しかし、どこにもう一度生まれ出るという保証があるろうか。ある筈がありません。愚かな事です。僕等は彼等のように、人生の落伍者とならぬよう、お互いに努力していきたいものです。

最後に、僕は、生後十八年間、無事に過ごせたことに感謝するとともに、人類の進歩に大きく貢献した。偉大なる犠牲者と、愚かなるかな偉大なる落伍者に涙を流したい。

以上の事を、このちっぽけな、一枚の写真を見るたびに、僕は考えるのです。

最後の挨拶

野沢正史

敢えてアメリカナイズが原因と断定しないが、エレキちゅうもんが

脱落者の決意

伊藤 豊

おい、どこから落ちたんだい。え、いわずと知れた人生航路。なにおまえ年いくつだ。ほ、当年十七才。な、なんだと、まだ先が長いではないか。まあいいから聞いてくれい。私は当面の主目的として自己の充実ということを第一に考えておるつもりです。それでまあ今までの不合理をなくそうとして朝の早起きを習慣づけようとしてやってみました。前日の晩寝る前に「明日は早く起きよう」をと覚えて寝た時の成果を期待できなかった。寝る前となえた言葉がよく身にしみなかったのか、寝る前の元気が寝言といっしょに消えてしまったのか、意志というものは幼少の頃からきたえ上げられるものか、それもわからない。それではいつ脱落したのだ。今のおれには責任はないではないか。だがそんなことを言っていたのではこれからの人間としての進歩は望めない。まあなんちようにか望みを捨てないでやっつけていこう。

死について

藤島康由

自然の野山に群れ遊ぶ鳥獣は、その死にのぞんで、みずから人の眼にふれない深山幽谷の奥ふかくで安らかな眠りにつくものとされていきます。ところが万物の霊長として誇っている人間は、古来から死について、どのように考えたのでしょうか。まず方丈記の作者鴨長明は「行

ボロボロボロと、思考を破壊する様な雑音を大量生産すると、自分の知能がモンキー程度と知ってか知らなくてか「シビレル」とかいう個性の無い共通の反応の下に、自然に帰り過ぎて良く言えば素朴に常識的に見れば動物的に情熱の放态を行う人種がはびこって居る。

翌日は体が痛んで寝ていたともなれば、滑稽を一步でて荘厳と云うのだろうか。

理性と思索を伴った「青春の謳歌」をお願いしたい。そんな時には絶対に推理小説をどうぞ。メイスンだボワロだクイーンだなどといってもやはり最高はホームズさ。

「緋色の研究」「バスカビル家の犬」「またらの紐」「ダロリア・スコット号」——未知の静穏なる事 ロンドン 市の 休日 如く ハドスン 河の 上流は 凡て 雌雉 住むと 語れり 蠅取紙の 保存は 生命 ある ものを 危険なる 状態より 直ちに 救いて よく 脱出せよ。どれを取っても面白い物ばかり。芸術のための芸術を目せし彼の活躍は時代の隔りを全く感じさせず、とかく毎日変化なくダラダラと平穏無事に暮している人間の多いこの世間と対峙して、その全心全精を傾ける集中の美を満喫させてくれる。他の事、特に女性に対して全く無頓着な所は、かえって人間的でワトスンと調和して何となく人を引きつける雰囲気をかもし出している。唯面白くだけでなく何か考えさせられる所がある。

五カ月ばかりの活動期の後の冬眠期の心の糧となることを今から楽しみにしている。

蛇足——人は心が楽しければ終日歩いてもいやにならないが、心に憂いがあればわずか一里でもいやになる。人生の行路もこれと同様で、つねに明るく愉快な心を持つて君よ、人生を歩め！

く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず、淀に浮かぶうたかたは且つ消え且つ結びて、久しくも滞ることなし、世の中に在か人と住み家とまたこのごとし、（中略）朝に死に夕に生るる習ひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より来りて何方へか去る」といい、また真宗中興の英僧蓮如は「それ人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おおよそはかなきものはこの世の始中終まぼろしの如くなる一期なり、さればいまだ万歳の人身をうけたりという事をきかず「生すぎやすし、いまにいたりて誰か百年の形体をたもつべきや、我やさき人やさき、今日とも知らず明日とも知らず、おくれさきだつ人は元のしづくすえの露よりもしげしといへり、されば朝には紅顔ありて夕には白骨となる身なり」といい、人間のはかないありさまをのべている。またローマの詩人プロペルチアスは「にわかに死滅すること苦痛なきものなれ、ながく死を恐怖するはかえって耐えがたきものだ」と、またモンテーヌ随想録には「諸君が死ぬことを知らなくともそれは決して心配するを要せぬ、自然はその時に臨めば十分よく諸君に教えるであろう」と言っている。つまり死というものは自分自身の身に迫るまでは全然わからないものである。しかしその死を超越することを目的として生れたのが宗教なのだと思う。真溪涙骨は「死はおそろしくないです。おそれたって仕方がないとあきらめています。では死後の世界は？ ひつきよう不可解です。それで安心されていますか。なやみ苦しんだって仕方がないものは仕方がないとあきらめるより外ありません」といつているように、我々は死にさいして諦観に徹しなければならぬと思います。トルストイも人生は死を前に控えたとき、初めて厳粛に意義ふかい、まことに豊かな楽しいものになる」といつています。

死についての考え方を少し調べましたが、結局我々は「アキラメ」に徹して、不可解な「死」など考えず、楽しい青春時代を大いにハッスルして行きましょう。

仲間へ

武井孝雄

「高校生」。何て明かるくて気持ちよい言葉なんだろう。この言葉には若さがある。満々とたたえる「活力」の泉からは我々の無垢な夢と希望が乾き汚れた社会に無限に流れ出る。が、しかしあまりの汚れにその水は、たちまち濁水と化していく――。「負けるものか。」我々は戦う。この無知で微弱な心身に微少ながら精いっぱい知恵と勇気をもつて、我々の後には若い仲間が続いているんだ。「負けるものか。」負けてはいけないんだ。誰かは言う。「言われなくともそんなこと知ってるよ。だけど俺達に何ができるんだ」。「無駄なことだよ。」「単純な奴だな」。それでもいい。誰かがいつかしなければならいんだ。今、我々には青年の目をもつて社会をよく見よく聞いて我々なりの判断により新時代にたちむかう義務が課せられているのではなからうか。私はそう思うのです。――

高校生活も、いよいよ終着駅に近ずいて来ました。次に乗る列車を決めなければなりません。私は「何行」の何という列車に乗ればよいのでしょうか。とても不安です。だからいつも自分で自分を「負けるな、がんばるんだ」。何て励ましているんです。みんなもがんばって下さい。さようなら。

『たばこ屋のおじいさんが昨日二時頃死んだよ』と聞かされました。僕はたばこ屋のおじいさんが杖をつきながらゆっくり歩いているのを見て浮かべました。僕は本当に死んだのかなあと思いました。僕はうちのおじいちゃんに『たばこ屋のおじいさんが死んだよ』と知らせました。そしたらおじいちゃんは『ああ、たばこ屋のおじいがか』と聞いたので、僕は『うん』と答えました。おじいちゃんは『おれの方が勝ったぞ』と言って少し笑いかけてました。そして『あいつとおれは一つ年でああ、このめえ、おれんちの、ほれ、ここへ来てな、おれと長生きの競争するじゃんけりっていつてなあ。とうとう死んだか』といいました。僕にはおじいちゃんの笑い方はいつもの笑い方と違っているように見えました。

夜の空のように

渡辺康三

通案内人は一人もいない。
暗い下と、薄暗い上と。
いやいた。……いや違う
黒い所、赤い点、見えない面、
明るい物、黒い所。
棒が、一本、二本、三本、もつとある。
二本の灯が、消えた。又ついた。
黒い物はじくさぐくに通る。
しー、静かに。
声は大いはりで空を走る。

問題

内藤 浩

最近よく「戦後二十年」という言葉が言われるが、今日ほど日本において平和で、平穏な生活を送れる時代が過去何世紀かにあつただらうか？

戦前の事はよく知らないが、交通地獄、公害などということはないにせよ、今のごとく、文化、社会の向上、個人の自由の保護などはなかったらう。

スモッグが何だ。通勤ラッシュが何だ。株価の低下が何だ。そんなものは物価高で均衡を保っているのではないか？

今日マスコミにおいて、たとえば新聞については、広告、ラジオテレビ番組、家庭欄で紙面をうめ、社会面は些細な事をさも大事件のごとく書いてある。（もちろん毎月ではない）ことから時世がうかがわれる。

しかし、これはやっぱり国内だけのことである。世界各地では、毎日くだらない戦いが続いている。我々にとつて最も重要なことは、この平和に満足せずより平和にかつ全世界へ広める事ではなからうか。それが問題だ。

おじいちゃんの笑い

渡辺康三

僕はお客さんが来たので、店に出ました。そして僕はその人から

音が飛び出した。

音は猛威を振う

………

皆、隠れた。

道案内人は一人で現われた。

『どこへいらつしやるのですか』。

『はい、あの遠い星の星へ』。

星は、静かに去っていった。

思いつくまま

石原秀昭

慣れくらい始末の悪いものはないが、又これほどありがたいものも少なからう。

僕は小学校四年の時、現在の住居に移ってきた。この大きな特徴は家のすぐ裏にお墓が続いていることである。以来、家にくるたいていの友は、「夜こわくないか？」とたずねる。実際僕も初めのうちは墓石のあい間で点滅しているあの三三の鉄塔の赤い文字を見て肝をつぶした。そして少なくとも小学校へ通う間は、あまり良い感じがしなかった。しかし、九年間近い生活による慣れのせいであろうか。今では、夜わずか一米とはなれていない所で窓をあけて勉強していても別だん恐いとも思わない。そればかりか、真赤な夕焼け雲を背景に薄暗くなったお墓のたたずまいを見るとき、又、夜満月にてらされてかすかにうかびあがるありさまに、四季折々の変化に、これこそ其の日本の姿であり民族の心のふるさとであると感ずるまでに至った。

そこで当時なぜこわがったのか。なぜみんな薄気味悪い感じをもつのか考えてみた。

小さい頃は、成長の一過程として（よくわからないが）些細なことをこわがる時期があると思う。しかし成長してもなお恐ろしいという感じをもつのは一種の先入感ではないだろうか。僕の場合、ある程度の慣れによってその先入感が薄くなりありのままの姿を素直に見ることができた結果だろう。

このような例は非常に多くある。

まったく知らない人に会った時、私達は一目見ただけでその人について何かわかったような気になり、それが長くつき合った結果まったく間違った見方であつたと思うことがある。このように先入感は無意識のうちに働いて、ある物の本当の姿を知る上で、とてもマイナスにしている。

学問に、すべてあらゆることに先入感をなくして真実を素直にとらえることは、難しいことであるが重要なことだと思う。

彼

角 田 裕

つい先頃、中学一年のときの友人の訪問を受けた。彼とは時々会っていたが、実社会にでて働いている彼は、会うごとに目ざましく成長しているようだった。そして、今度の彼の訪問は、私に大きな刺激を与えてくれた。彼の言い分はこうだった。現在の自分の仕事に対して将来の希望が持てないことと、それだけにどうしても地に足をつけてやっっていけない、ということが一つだった。私のみたところでは、彼

た。僕自身、入学以来こんなに月日が早くたとうとは、夢にも思わなかった。

一年のときは入学したばかりで、ただ漫然と過ごしてしまつたような気がする。先輩の勧めもあつて、ハンドボール部に入学した。そこにはきびしい部のおきてもあつてくに一年生は苦しかった。

しかし暗くなつて、ボールが見えなくなるで、グラウンドを走り回つたり、なくなつたボールを友と一緒に探し回つたりしたことは、今考えてみると何か心に残るものがあるようだ。

そしてまたたく間に二年がきてしまつた。心にゆとりがでたのか、ベートーヴェンに傾倒した。小説も多く読んだ。

ゲーテ・ロラン・ヘッセやヘミングウェイの青春小説を読んでは感動した。

僕は周囲の人からよく「まだ子供だ」と言われる。が、僕自身でも時々そう思う事がある。

時には小説の主人公になつたような気がしたり、現実には自分が心に抱いている女性を小説の中のそのように理想化してしまつたりした。またハンドボール部も僕にとって一生忘れがたい。合宿のあのつらさ、きびしさ、しかし苦しさの中にも楽しさはあつた。

そして初めて終点まで行つた強行遠足、楽しかつた修学旅行等々思ひは尽きない。

「光陰矢の如し」でもう三年。

受験受験でここまでできてしまつた。

受験生活もある意味では僕にプラスとなるであろう。目的のために努力することは大切だと思う。僕たちに残されたものはあと五カ月、着実に頑張つていこうと思う。

は決して多感な男ではなかつたし、忍耐力のない男でもないように思う。たぶん、その仕事に性にあわないのだから。第二、現在、親に対する感謝の念でいっぱい、それをどう表現したらよいかわからないと言つた。もともと家が貧しく、中学の頃は、ともに月謝も納められなかつたことに対する不満が、今、実社会に出て親のありがたさを知つた時の気持も、薄々ながら理解できるような気もする。さて、第三のこと。これが私にとっては大きな驚きだった。彼は、自分には夢がなくて困つた、と言つた。

何故か、とその時考えた。そして、話をすすめていくうちにその原因がわかつてきた。私達、学生ときは周りに同年輩位の人々が多いから、友人もつくりやすい。そして、自然とお互いに話し合う機会も多くなろう。そんな時、それぞれの夢がつけられ、またふくらんでくるであろう。だが、彼にはそれが無い。もちろん、彼のうちの環境もあるが、彼の話によつて、改めて、新しい面からみた友人の存在の意義を認めたような気がした。今、私には親しく話し合えることのできる友人が三人いる。高校生活は彼等によつて充実していると言つてもよい。

この後、「受験」と「死」について書きたかつたが、一つは今書いた事と同意義となるであろうから、またもう一つは時期的に早い感じがするからやめることにする。

三年間を振り返つて

清水保富

入学したと思つたら、もう最後の強行遠足の時期になつてしまつ

最後に、一高において僕がもつとも強く感じたことは、すべての面が男と男のぶつかり合いであつたということである。

青春の理想像

清水茂久

ニヒル（虚無）とデカダン（顛廃）——この二つのことばは、少なくとも我々青春時代においては否足されるべきである。「若い」という特権をもつた我々が、これらを肯定するかぎり我々自身の進歩向上は無理である。

なぜなら、前者は我々青春においてもつとも重要である行動の否定であり、後者は「若さ」の象徴でもある思考の否定である。

ここで少年犯罪者を例にとつてみよう。

彼等は完全なエゴイストであり、客観的に物事を観ることができない思考の否定と解せねばなるまい。

次に青年の自殺、ノイローゼを例にとつてみると、彼等もまたエゴイストであり、かつ行動を否定しようと試みていることにほかならぬ。我々がここに実存する「若さ」を持つ限り、これらは我々にとつて全く無用であることが、明らかである。

「ジャン・クリストフ」「ベートヴェンの生涯」——これらを読んだ人も多いだろう。

これらは人類の生涯の真実の記録である。「ジャン・クリストフ」——それは「二十世紀に生きたベートーヴェン」とよく言われる。ともあれ、ジャン・クリストフもベートーヴェンも自分自身の道な

さいばらの道を突き進んだ最高人類——つまりもともと人間らしい人間にほかならぬ。「ジャン・クリストフ」の大河小説のなかでも、「ベートーヴェンの生涯」の中でも彼等に絶望はあつても、虚無や頹廢はみじんもない。それはまさしく、ライデン（苦惱）とフロイデ（歓喜）の連続であれ。彼等はやがてくるだろう歓喜のために、悩みそしてたかつていただけである。これこそ我々の真の青春にほかならぬ。ロランは「ベートーヴェンの生涯」の中で、「私は力や思想の勝利者を英雄とは呼ばない。自分自身の心情において偉大であつた人々を英雄と呼ぶ」と、英雄の定義を述べているが、まさにこのとおりで、これ以上議論の余地はない。こうなってくると、英雄とは我々——とくに青春において——は全然不可能のように思われがちだが、決してそうではないことが明確であらう。

ベートーヴェンの第五交響曲、第九交響曲を聞いた人も少なくないだろう。

第五交響曲——それは運命と闘うベートーヴェン、いや全人間の苦悩と歓喜である。それはフィナーレで、心情における勝利となつて表われている。第九交響曲——終楽章の大合唱。それは実に、シラーのベートーヴェンの、歓喜ではない。真実に悩み闘つた人々の全部の人類の歓喜であり勝利にほかならぬ。

ともあれロランとベートーヴェンは我々が青春時代にもはや虚無や頹廢を否定して、ただ真実に生きるべきを教えているのは、明らかである。

ここで現代に戻つてみよう。

我々はとかく古典——ここではとくにギリシャローマのようなものではなくて一般的なもの否定し、現代のみを肯定しがちである。それ

にはいろいろな理由があるだろう。

まず古典については、それはこちらから探し進まねばならない。相手はこちらの御機嫌はとつてくれない。とくに青春においては、古典がわかる、わからないは問題外である。我々は普通、数学の公式や定理理科の法則などは、目を皿のようにして覚える。これらもやはり我々がある程度探しあてて、自分から突つこんでいかねはなるまい。古典もやはりそうである。

人類の生涯の歴史についての普遍性をもつた法則である。それにくらべ、現代というものは我々が黙つていても、向うから御機嫌うかがいにやつてくる。だから一時的に大衆に受け入れられてもすぐに権威を失う。

週刊記事やベストセラーやポピュラー音楽が一年以上も続いたということは、決してない。それらはなんの普遍性も持ち合せない。それにつけ加え、現代の機械化され、組織化された生活は、人間を一個の歯車の様にする。それから開放された人々は、何かそんな気分を忘れさせるもの、現代に実在している自分というものまでも否定するような、そうしたものを好むのは当然であるかもしれない。つまりここに頹廢的なものが登場し、一般大衆に好まれるのである。このように考えてみると、現代的なもの——とくに頹廢的なものばかりを肯定する現代人（青年）の気持ちもわからないでもないが、ここで大きく「物を言う」のは人間だけの持つ理性である。

現代、とくに我々青春において、現代的なものと古典的なものとどちらが価値あるかは、ちよつと考えてみれば、全く明白である。前にも述べたように、現代的なもの——これらのすべてがすべてそうではないが——は間接的には退廢あるいは虚無に結びつき、古典的なものは真

実の生涯の記録に結びつくのははっきりしている。

ロランやベートーヴェンが現代の頹廢的作家やポピュラー作曲家より、思想いや心情において、ずっと偉大であつたのは理性ある人ならだれでもが認めるところである。

最後に、これはあまり関係ないかもしれないが、日本人の根底をなすと言われる「哀愁」とか「郷愁」とか言うものはここで言う虚無や頹廢とは全つて関係ないということを述べておく。

若き忠一君の悩み

間瀬敏明

戸山高校でも甲府一高と同様に毎年文集を作っている。一年の時忠一君が僕の事を書いたのでお返しの意味もあつて二年の時僕は忠一君のことを書いた。お互いに文集を交換しあつてゐるのだが去年彼の事が書いてあるのを見て彼が少しばかり怒り、今立は又僕の事を書くというので僕も忠一君の事を書いてみることにする。以下は忠一君がヴェルテル（実はゲーテ自身をモデルにしている）と同様に婚約者がいることを知つた事により初めての恋を失ふたというその相手の女の人の誕生日である九月六日に語つてくれた忠一君の人生観のダイジェストである。

◎大学時代について

「何も実務的知識を待なくともよいから広く世界を自分の澄んだ瞳で見つめ、物事の大筋を海よりも深い思慮深さで汲みとることに努力する。そしてよく働きよく遊びよく勉強する」。

◎職業について

「汗水たらしてたかだか高級官僚になりあがつて人の金を使うことに慣れるよりは、同じ勉強にしても朝日新聞社の有能な社員として海外に雄飛し、日本経済の将来と自分の仕事の関係について煩悶し、又は国際機関の公務員として人類史の新段階に献身する事の方に数段の魅力を感じる。そして僕の友人もそんな奴ばかりである。」

◎結婚について

「結婚するのは二六〇二八才の時、相手は同じ年か又は三才位下の人まででそれ以上は違わない方がよい。もちろん恋愛結婚。京都の人がよい。たとえば偶然君と同じ西京堂で修学旅行の時おみやげを買つたが、君と同様僕もあの店でアルバイトをしていたらしい女の人のようなタイプがよい。すごくやさしい人だったね。自分の家より金持の娘は絶対にいや。僕は次男だから夫婦二人だけで暮すことになるし、お手伝いさんはおけないので料理の上手な人。料理の下手な人はいくら美人でもいいやだよ。それに僕は字が下手だから字の上手な人がよい。結婚する女の人が一番大切なわけだから字の上手な人がよく陽気な人がよい。子供は男女男女の順に男女二人ずつ合計四人が理想的」。

◎今しみじみ感じている事は

「歴史は偶然の集積である」ということだ。

◎何才まで生きたいか

「約七十才まで生きたいね」。

どうせ僕の文などを真剣に読む人が忠一着以外にはいるまいから、忠一着の語つた事を忠一着のために何もくどく書く必要もないのでこの程度でいいだろう。この程度なら今年は忠一着も怒るまい。

ここまで書いてくると忠一着は失恋はしたが希望に満ちた正義感に

あふれた青年のように（万一僕の文を読んでくれる方がいたらその人には）感じられたに違いない。ところが彼は非常に悩んでいる。では忠一君の悩みとは何か。このつづきは又来年のお楽しみ。ご精読ありがとうございました。（許可なしに転載、複製する事を禁止しません）

一高生活をふり返って

志賀雅人

一高生となつてから二年四カ月。『ながらへばまたこの頃や忍ばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき』のとおり、今思ひ出しても赤面するようなへまや、辛いことが多かったはずなのに、今はなつかしい思い出でいっぱいだ。

一年の新学期、毎日の学校にいわれもなく気疲れしたこと。山岳部でいい気になっていたら、夏山で山岳部の厳しさをいやというほど知らされ、急に低姿勢になったこと。友達と八ヶ岳高原（ヘスキー）について、雪の降る夜の高原で得意？のヨーデル。友を騙して初恋を白状させたことなど。一年の時の思い出はつきない。しかし最も楽しく、これが一高のよさだと感じることできたのは二年の時だった。一年の男女クラスから薄ギタナイ男子クラスへ、最初のうちはお先真暗だったが、だんだん皆と打解けるに従い、男子クラスの真価がわかってきた。なにしろ女子がいないから色気拔きのやりたいほうだい。そして同じ悩み（ガールフレンドが欲しい等）をもつ同胞としての意気投合。先生方もいろいろな話をオフリミットでして下さるから、授業も大変味のあるものとなる。この真価の最も発揮されたのは修学旅行の時だ。こんな楽しい有意義な旅行は我々のそれ以外にない、と声を大に

くさいものとは思われず、一高時代の思い出をこの文集へ記する勇気はない。それで、記憶の新しい夏休みの事件について、事件といつても表面上何ら変化はないが、書こうと思う。

身体の弱い私は夏ばてを避けて、健康保養のため諏訪のある山寺へいった。大学生が三・四人と浪人生含めて十余人の受験生との十五人近くの団体生活であった。その他は快い環境で、最初に山の上に登ったとき、こんな詩が湧いた。

青く茂る大木に	我が悲しき
岩間をぬう水の音	少年の血は
静かな森に	この地にてのみ
うぐいすのなく	慰めらるる
はるかなむこうに	いま一たび胸を駆け
諏訪の湖の	この大気を吸おう
かすかなさざ波	

しかし、一週間もすると互に敬遠しがちであった友達どうし、パピ一の如くじやれ狂い始めた。馬鹿話にも夢中になった。が、その行為に一種のわびしさを感じざるを得なかった。本来の自己を喪失しているとは思われなかった。いったい、馬鹿騒ぎをする自己は何者なのか。こんな思ひのくり返されるうちに、もはや皆の仲間入りに困難を感じはじめた。そこに至り「団体生活の中の個人生活」ということが問題となり、観念的に考えていた事が痛感せられた。総じて、一般社会においてもこうしたことが問題となるのではなからうか。

私一人、話の途中で抜け出して山道を逍遙するとしたら、また一人机に向うとしたら、友は何んと感じるであろう。だが、自己を偽って調子雲口わすのは私にとってあまりにも苛酷にみえる。一体いかにす

したい程だ。なかには悪党がいて、コショウを二キロも旅館中に撒き散らし、文字通り蜂の巣をつついたような騒ぎをひきおこしたりしたが、見学も旺盛な研究心のうちに行われた。そして最大の収穫は、少々エゲツない次元においてであるが、男同志の裸と心の触れ合いができたことだ。なんだコイツらもオレと同じじゃないかということがわかったことだ。サッカー大会においても、体育の球技にしても我々のクラスの団結は、先生方の認められるところであった。三年になる時この級友との別れが辛かったことはいうまでもない。

三年になつてからは、心の触れ合いなどという暢気な事は、という雰囲気支配的で、僕も又そうあるべきだと考える。

僕が不思議に思うのは勉強で辛かったことや、他の辛苦の思い出がほとんど流れ去ってしまい、楽しい思い出に置換されていることだ。二年の一学期、国体で十日も学校をあげ、そのあとの成績不振に悩んだことは確かなのであるが、ほとんどどう悩んだか思い出せない。修学旅行などにはありありと思ひ出すが。僕という人間が少々抜けてできているからかも知れないが、『楽しい記憶は、辛い記憶を淘汰する』というのが、一高生活をふり返って痛切に感じたことだ。

何年後になるかわからないが、辛かった受験生活の思い出をなつかしく噛みしめる日が来るだろう。楽しみだ。

少年の私

渡辺 孝

一高生活もあと六カ月となった。ここに至るまでいろいろな事があつたであろう。しかし、それらの回想のどれをとつても、卑劣な愚痴

べきか。一方相手自身も団体生活のため犠牲を払っているのかも知らない。それと同時に思ひ出されるのは、太宰の道化、漱石の孤独である。人間社会はすべて道化であり、人から人へ掛け渡す橋はない。会話でも、己れに誠実になればなるほど孤独の淵に追われ、己れに虚偽であればあるほど寂しく破滅の道に向う。すなはち 一郎の如く、誠実に誠実にまた自己の殻へ落ちるならば、『人間』でなくもはや『人』となり絶対的壁に突き当たることは不可避か。葉蔵の如く道化を強く強く感じるならば、結局はあの廃人と化さねばならぬのか。

今高校生として、また特に山ではさらに狭い社会に存していた。だが一度大人になるともはや自立の世界である。社会の荒波は今よりもつとめと強くしぶきをあげる。そして、道化、孤独は現実問題へと移る。どんな理由か自身解らないが、近頃の傾向としてお互の交渉を避け、自己に生きるまた独善的なものが一層増した感じがする。そんな私に自身疑惑の念をいだいているのだが。

しかし、ともかく今の私達は未来に比するならば途方もなく幸福である。まだ残りつある純粹さで自己主張も楽しい。あるときは清き乙女の面影にひたり、あるときは未来の自我像を夢みる。これこそ青春であるうか。ああいつまでもいつまでも、少年の私でいたい。ある人は言うだろう。「現実逃避ではなからうか」と。しかし、これこそ現実であり、少年への憧憬であるのだ。

矛盾のあるところに	青春の血は
青春がある	万物に向う
矛盾と戦うところに	この純粹な戦いは
青春がある	なんと美しいことか

某年某月或週間

山本秀彦

五時半起床。我がシャックに火を入れる。朝のひとかせぎ。朝の音楽もまた気持ちがよい。二十分ほどたべる。それから庭に出る朝の空気がすがすがしい。葉の先には露がたまつてキラキラ輝いている。この間まいた種が芽を出している。それから今日の用意をする。残りの所をやる。七時、朝飯を食べる。かばんを自転車の前につける。二十七分、一日が始まる。朝の風を切り進む。三十五分、自転車をあずけ駅に急ぐ。ホームの一番うしろまで行く、まん中辺で汽車がくる。四十二分発車。十二分甲府着、橋をわたり北口にでる。二十五分校門前。真つすぐ部室に、いつもの顔がならんでいる。なんといつても一番たのしい所である。四十分チャイム。教室に急ぐ、一校時、英語。もちろん特別教室である。教科書なんて堅苦しい物じゃない。テレコで能力個人別全く機械化。読めて書いて話せる英語である。読む物の雑誌新聞、名作原書、案内と。絶対役立つしくみ。

イヤ語なんてなんのことかしら。次に算数、もちろん電子計算機有り。計算証明そんなもの数学のすべてじゃない。バズルこれこそ、本当にたのしい数学である。その他数学史、数のふしぎ。eのびンボウテイシキがなんだってんだ。次にいこう。物理。なに事も実験と観察第一。オシロスコープは言うにおよばず。大スクリーンでの勉強。目鼻手、総動員で、次に化学これこそ実験が一番。なにしろ実験室をつぶして教室にするなんてこたあ絶対ない。科学実験資料図書などで一つの校舎をなすくらいあたりまえである。自発的に出きるようにできてい

「人間失格」について

鶴田和彦

すばらしい魅力だ。やみの中を動きまわっている繊細な神経を、バサッ、バサッと見せつけている。異常性をもった魅力だ。

すじの持つ面白さだけでも、十分楽しめる作品と思うが、それ以上に私を強く引きつけたのは、複雑な現代社会に滅びんとする葉蔵の姿に、自らの幻影を感じ取ったからにはかならない。

自己を人間失格の子と呼び、あざわらう葉蔵、すなわち作者は、そうして裸の姿を嘲笑の中に立たせることにより社会に対する反発を試みているようだ。

歩むことのない社会の進歩は人間に過度の精神的疲労を与えるが、人類はそれに適応するよう変つてきている。科学の威力の前で、それに圧倒されぬ自己を作り上げてきている。複雑で、みにくい対人間関係の間にあって、自己を生かそうと努力してきている。だが反面、自分を偽って、社会に適応しようとし、真の自分を失い、そしてそのことに気づかぬものも出てくる。

葉蔵は、あまりにも現代人すぎた。そして彼の神経は敏感すぎるほど敏感だった。彼は彼自身の虚偽をしじゅう意識せずにおれないその意識が彼を苦しめる。

葉蔵には自愛が失われている。生の喜びの根源である自愛がない。これはそのまま人間失格を意味すると同時に、或る種の現代人の悲劇

る。次が国語。名作を読む、聞く。漢字記憶マシんなんてのがありやいいが、昼、給食、セルフサービスバイキング式。時には自分でも作る。体育二カ月間でバドミントンコックチフなんてシヨボクレたのじやない。プール・コート完備、シャワー着替室はもちろん。歴史。資料をふんだんに使う。だれも内職なんかしやいない。八田式解説。逸話は十分入るじやんけ。芸術。もちろんこの時間に数学や英語などするはずがない。ピアノ、三D百Wステレオ。ちようこく室。最新機械をそろえた工作室、e.e.o.。じようそう教育がなんだって大事ですから、帽子もかぶらずサンダルバキで年中遅刻。そんな生徒は一人もない。一教室五十五人、ただしこは合同研究室。文化祭は一週間それだけやれる十分な生徒会活動。試験、そりやありますが一夜づけなんかじやだめ。筆記試験なんて古い旧い、といつてもやはりたのしかあないね。まあこのへんで今日の目的まちにまっただお時間。むかしのクラブ活動とかいう、これは最高である。年間四万七千円これはシリコンダイオードと雑費也。みな三通や三技くらいは持っている。ここで話すのはたいへんたのしい。学校に来てもらクラスよりずっとこの方がいい。先輩後輩同輩いいやつだ。Kよく知つてる。Iおぼけは氣にいつた。I・A・H・U・F将来の自己の夢が持てる。それに進んでゆける所。OMクラブに入つてもいつまでもこの仲間とだべりたい。クズ屋回り又愉快。FMマルチわかんない。けどやる、作る。発電して整流して蓄電してLとつないでオツシロで減衰振動を見る。さてこの辺で下校。

学校はたのしい。又きびしい。こつちの強調がちよつと不足したが今は五時半だ。ひょうたん島が見られない残念である。帰りは上りちつとこたえる。家につく。六時八分。それから食べて入って幽明境を異にする。某週間終り払おやすみ仇

と思う。

自愛。私達が生きていくに、これほど大切な愛はない。私達が自己の能力の限界を知りながらも、こうして生きているのは、自愛あればこそである。愛なしに自己を見る時、その酷さや欠点は無限の絶望を呼ぶかもしれない。そういう人間は、おのずから破滅する。

自愛は、社会から自己を守る唯一の武器である。

私は、幼い時から自己を隠し続けて今日まで来た。それが社会に対する良い道だったとは思えない。だが、一度別の自分を作ってしまうとそこから抜け出すのは不可能に近かった。私には常に二つの自分があった。そのことは小学校時代から私を苦しめてきた。しかし近頃、人間が多重人格の要素をもつこと。ほとんどの現代人は多重人格ではないかと考え知って、そのことに拘泥する愚かさに気がついた。

私はそんなふうに、幼い時から苦しみながらも其の自己を失わず、信じ切ってきたつもりだ。それは自惚、自信、否、自愛があったからだ。

自己を偽る。それは苦しみや寂しさを与える。だが心の中に真の自己を持ち続けていれば、その気持は幾分救われるのだと思う。

真の自己を知っているものなら、現代社会における自己の虚偽に苦しまざるを得ないであろう。そういう人間が現代の悩みをもった現代人といえないうか。

だが一方、自己を偽る人間はその反動として自己暴露を欲する。唯一の友を求めたり、日記を書いたりすること、そしてありとあらゆる芸術は、言い換えれば自己暴露の欲求であると思う。欲求は、何かの形で飛び出さねばならないのだ。

葉蔵には自己がなかった。だから自分の虚偽に他人が気づくと、ど

詩

杉原清則

正直を言うと、僕は今まで詩というものは、あまり好きでなかった。今ままで続んできた本や教科書の中にあった詩の中で僕を引きつけたものはなかった。と言うよりは、僕はそれらに心をひかれなかった。だが、こういう事は僕のクワズギライが原因していただろう。つい先日、雨がしとしと降る午後、ある雑誌に載っていた英詩を寝そべりながら何気なく、くり返し読んだところ、だんだんと興味がわいてきた。そこで解説と辞書を片手に意味の分らない単語をひき、それでも分らない所は適当に想像することによって補い再びくり返して読んだ。この詩のリズムがメロディーの美しきがおぼろげながら味えた。こうなればしめたもの、またくり返し読んだ。

解説には「詩は言葉で組み立てられた音楽である」とあったが、まさにその通りだ。そうこうしているうちに詩の背後にある薄いペールが次々にとれていき、光景がだんだんハッキリしてきたように思われた。このような詩が好きになったという経験は全く始めてだった。その詩は、春の訪れとともに、丘の周辺に現われた変化をうたったもので、米人のEmily Dickinsonの”An Altered Look about the Hills.という誌だ

An altered look about the hills
A Tyrian light the village fills
A winder sunrise in the morn
A deeper twilight on the lawn
A print of a vermilion foot
A purple finger on the slope
A flippant fly upon the pane
A spider at his trade again
An added strut in Chanticleer
A flower expected everywhere
An axe shrill singing in the woods
Fern odors on untravelled roads
All this and more I cannot tell
A furtive look you know as well
And Nicodemus Mystery
Receives Its annual venlv I

「春が来ると、丘の周辺の村を古代紫の光が満ち、朝は、前より大きな日の出……」から始まり、春が来た時の動物、植物の様子がえがかれ、「森で歌っている斧の鋭い音、だれもない道の土のシダのにおい」、こうした事が毎年くり返えされるという詩です。

この詩全体に春のみずみずしさ、さわやかさが感ぜられる。秋雨がしとしと降る日に、ついこのあいだのように思われた目が春が目の前に一面に広がってくるような気がした。

6



癌発生乃原因及其治療法

間瀬敬明

うしたらいいかわからなくなってしまう。彼は、そして、偽りの自分に直面する。彼は、その偽りを知りすぎるほど知っている。彼が現代社会に適応するには、もつと愚かな人間か、あるいは、自愛に満ちた人間に生れ変わるよりほか方法がなかっただろう。

この小説はいわば現代人の手記である。
葉蔵の姿のどこから、私達は自分自身のかけらを見つけて、ほつとし、または眼をつぶるに相違ない。

人位而無則貴欲有而日朝子兵不寡穆忍王過仁尼日我人匡濯讓不候短公
段將於而其馬朱驥伝君拳蘭杉与江其公衛二俱有武能始有止然亦月之甚
万灼極人尽扈在緑黄為月棲水覆春重夕境嘗川入官平一樹尼在牙浮多術
知山在也之為思見聞国孝告正尻貴寡不樸山者群醉山伝人面從立穎戦与
父方陵相其從七台日而何万性大有処元首国之損亦海処東効果絶大為人
強麗未月新



強行遠足が終った。意義ある行事だったと思う。はじめにY君の話を書こう。五年程前の強行遠足は松本に向って秋の信濃路を一昼夜にわたって歩きつづけたのであったが、そのころ私のクラスに在籍したY君は松本までの百余キロを歩き終えて、足をひきずりながらやっと家にたどりついた。家でお母さんが出迎えたとき、お母さんはわが子のいたいけなその姿をみて、思わずY君の肩をかかえて泣きぐずれたというのである。Y君も胸がつまった。長らく忘れていた熱い涙が頬を伝わった。

私はこの話を聞いてお母さんの気持と、Y君のそのときの心情がいたい程によくわかった。一昼夜を歩きつづけた疲れは心身をまるで他人のもののように感じさせていただろう。不屈な意志のかぎりを尽くし切ったこととからくる快い満足感と安らぎはたゞ寛げるわが家だけを欲していたことだろう。夜の寒さと睡さに打ちかかって、ようやくたどりついたわが家なのであ

った。お母さんはわが子の目に何が訴えられ、何が欲せられているかを直観的に察知したのであった。母の涙をありがたいことだと思ふ。そしてY君の咽び泣きも尊いものだと思ふ。これは強行遠足がもたらした収穫ともいえよう。Y君の人生の中にお母さんの愛の涙は生きつづけるだろうし、お母さんの心の中に、わが子のけなげな精進の姿は一つの安らぎを与えたことだろう。

※

夜も更けたころある横印所に私がボカンとしていると、後ろから私の腕の上膊腕部をぎゅっと握って、「先生！」と誰かが言った。N

強行遠足に寄せて

組主任 渡辺 弘

君だった。

「くろうさんです。」

「疲れたかい？」と私。

「小諸までですよ。」とN君は意気さかんである。検印をすませて暗い夜道に消えていった彼の後ろ姿にはさすがに疲労の色も見えていた。私はN君のことを思った。教室でほとんど目立たない生徒の一人であるN君。まして日頃、私と親しく言葉を交わしたこともないN君であった。だが、私の腕に残るかすかないみは私の心に彼の日頃の心情を刻みつけた。

これも強行遠足なればこそその経験であつた。日頃、疎遠になりがちな、いや疎遠のまゝで終りそうな生活、の中にぜひとも必要な機会であるように私には思えたのであつた。

× × ×

こうして筆をとっていると、あのしたたるような紅葉の佐久往還をひたむ

きに歩いている一高生の姿が思い浮んでくる。あの遠く長くつゞくのは人生の道そのものではないかと私は思う。

今年歩いた人、昨年、一昨年、あるいはずっと前に歩いた人々

——果てしなくつゞく人影が見える中に私はY君を思い、N君を思い出している。そしてA君、B君、C君などが次々に思い出されてくる。

ひたむきに歩く後ろ姿に向つて、竹内てるよが歌つた詩の一節をなげかけた。

「最後にたつた一つ、人生への愛と誠実」それが大切なのだと。

詩

流れるもの

大木節子

さびしい手は鉛筆を動かす
すきとおった光が
鉛筆を照らす
夜は深く、静かに流れる。

ああ、いつか

虫けらは山へ登って行った。
高い山にあこがれて登って行った。
ごつごつした石をのり越え、
坂道をあえぎながら
山の頂に立ったとき
ちっぽけな虫けらは、
大つぶの涙をながした。
さびしい涙を、

仰げば、空はますます高く、広がった。
白い雲が悠々と流れていた。

沈黙の中、鉛筆は動き、
秋風はそうそうと
かわいた心に
流れ込んでくる。

きょう一日を

相沢佐代子

きょう一日を
きょう一日を
きょう一日を
悔いなく過したい

自身に満足ができる一日

腹立たしさを感じず

どこからともなくさしてくる光に

ほのかに心がおどる

自身に満足ができない日

希望が私から遠のく

灰色の雲がややしく湧きおこつて

重く心にのしかかる

果てしないこのくりかえしから

明るい光のさし入る日へむかつて

悔いなく過したい

幻想の世界

藤原章彦

いつまでも沈むことのない太陽

真珠色に輝き

細片をまき散らすフィヨルドの海面

この世の中にただ一つ残された世界

だれも入ることを許されぬ世界……

しかし／

ついにこの若者がそこに立った

あの太陽の光をまぶしいほど受け

はこらしげにフィヨルドの海面に影を映し

た

彼のクチビルはかすかに振えた

歓びであるのか

悲しみであるのか

だれも知らない

それでいいのだ……

もう一度彼は全身に力を入れてそこに立つ

た

＼あの太陽が

そしてあの海面がある限り

私は生きぬくのだ＼

微笑

前島良男

舗道に横たわる

黒々とした

俺のほろにがい影は
今日も道を歩みつつある
移りゆく 時計をみつめながら……
優しく ささやいてくれる
微笑に向って

小さな 小さな 小さな木の葉が
数限りなく うずまいてる中を
木々をかけて
動いていく
俺のほがらかな影は
今日も道を歩みつつある

過ぎ去ろうとする日々を思い起しながら
……
限りなく 抱擁してくれる
・未来に向って

この雑踏の中を

影の微笑

俺の微笑

つらいんだ

山本裕二

寂しさが、苦しさが

空虚な心の中かつらいんだ

うわべだけの楽しさ
うわべだけの笑い
うわべー心の砦、うわべ
うわべという砦を

誰も崩そうとしない
崩したくったって崩せないんだ
きつと、砦の中の心は
誰もみんな同じなんだ
さびしいんだ、つらいんだ
それをうわべでごまかしているんだ
うわべなんてなければいいんだ
生きたいんだ真実に！

静寂

樋口和子

静かな夜だ

竹の葉のそよぎも聞えず、川の水音も聞え
ない。

ただ枕辺の時計だけが、かちかちと正確に
音をきさんでいる。
まったく静かだ。

遠くから自動車の音が近づいてくる
昼ではわからない重い深い音だ。
その昔は私の落胆した心を重くしめつけ
る。

又だんだん遠のいていく。
でもよく響くと思っていいたら
そのうちに夜にすいこまれてしまったよう
にまた静かな暗やみにもどった。

思い

田中正文

女 近くへ寄るな

私はお前に用はないのだ

お前がどんなしぐさをしようとも

私は惑わされはしない

私はこうして一人で考えていたいのだ

秋風が私の想いを乗せて南へ行く

私は君を何と呼ぼうか

しみ通るような青空

深くうるんだ湖

それともやさしく歌う小鳥……………

それらはみんな君のものだ

私は君にすべてのものを与えよう

すっきり夜はふけた

天空には無数の星がきらめいて

私はまだながめいている

もう そろそろ寝るとしよう

そして 南風を待つことにしよう

つぶやき

保坂とし子

おんなのこがひとり

やまのちゆうふくからしたをみおろしてい

ました。

そしてひとりごとをいいました。

もうすこしのぼらなくては。

そしてまたのぼりはじめました。

すこしずつのぼっていききました。

やっとちようじようにつきました。

そのおんなのこはつぶやきました。

「努力……。」

若き人々に

日野尿道夫

人よ何を憂う

いたずらに、君の心を悩ますことなかれ

君には君自身の尊い目的があるはずだ。

友よ何を憤る

いたずらに他人を責めることなかれ

他人にも君と同じように心があるのだ。

人よ何を楽しむ

いたずらに時を浪費することなかれ

君のためにも君以外の楽しみを持ってない人

の

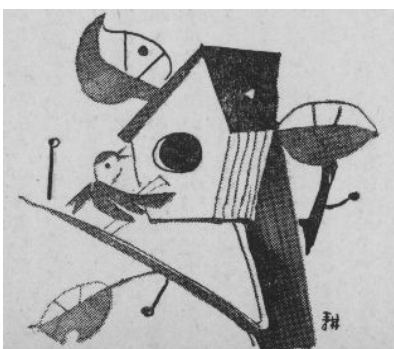
ためにも。

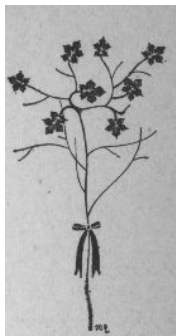
君には君の理想があるはずだ。

その目的に向って進みたまえ

君自身のためにも

人類の平和と幸福のためにも。





夕顔

雨宮千永子

夏の夜、外に出てみて、垣根のあたりがほのかに明るくなっているのに気がついた。それは夕顔であった。それは暑さを忘れさせるような裏白の花である。形こそ朝顔と変りはないが、特有の、しつとりとしてまたモダンな美しきを持つているものだ。

この清楚な花が開きはじめるのは、ちょうど、ギラギラした太陽が西に傾き、涼しい風が吹き出すところである。黄緑色の固くむすんだつぼみの先端が、かすかに乱れて揺れ動く。活動は腹だたしい程慎重で、よじれが、丹念にひとひねりずつ解けていく。やがて、先端は、正面から見ると、まるでかざるまのような形になる。その中心の空洞が、非常にゆつくりと大きくなるにつれて、手際よく折りたたまれていた裏白な花びらが這い出して来る。つぼみは、りつはな花になろうと全

身に神経をとがらせ、薄っぺらな花びらさえ破りはしない。そして約四十分後、夕顔はおもむろに満開になる。開き終った後も、つぼみの時の折り目が生々しい。それは、折り紙の切りぬきを開いたかのように、整然と刻まれているのだ。庭の片隅の一個の花ながら、何という繊細さであろうか。

毎日をあわだしく終えてしまう今日の生活の中で、自然の神秘の一端に気づく時、私は思わず感嘆の声を上げずには、いられない。

愚痴

市川義彦

最近の世相をながめると、大学へ大学へとネコもシャクシもなびいている。

そして、青い顔の美少年や美少女達は、SUN SUNとふりそそぐ太陽の下で、個室に閉じ籠り、りつはなエゴイストになるために？ 切磋琢磨しているのである。

それほどまでして、進む大学とはいったい何であろうか。本来は、学問に純粋に興味を持つ人、あるいはその他の特別な職業に就く人達のための大学である筈だ。ところが現在

楽しかったこともなければ、苦しかったこともない。ただ『平凡な毎日を過ごしてきた』の一語につきるが、自分はそれを当然のことと思い、自己満足すらも感じている。しかし複雑である。現在も、同じ気持だが、時には目前に、あの大学がちらついている。願わくば、受かりたい。もし、そこに入れたならば人間試験の好機と思ひ、思う存分勉強したい？ 四年もさつとすぎ、待つものは、あの商事会社。入社してまもなく、海外に派遣される。そこで、はなはなしい活躍をする。位はぐんぐん昇る……ああ、何と痛快なことか／早く世界を駆けたい。この弱国よ。しかし美しい国よ／

ふりかえって

丸山明美

先日、バスの中で小学校時代の恩師に出会った。「もう三年生なのね。この三年間楽しかった？」と聞かれ、「はい」と心の底から答えることができた。思えば、あまりにも短く感じた高校時代だった。忙しい日々がみるみる過ぎてしまった。でも今静かに目を閉じると、あの楽しかった一日一日が走馬灯の

ように、脳裏をかすめる。この間、私は何かかけがえのないものを得たような気がする。今までの「自分だけの殻」にとじこもっていた私が、少なくともそれからぬけ出ることができたように思う。多くの友人、そして考え方に接し、自分の狭い考えを少しでも捨てることができたのではないかと思う。ある時には、全体の心が通じあつた楽しいクラスの一員となることができたし、又、時には納得のいくまで、友人と話しあつたこともあつた。そして、友人の長所を率直に認めることができたことは成長の過程において大きな収穫だと思ふ。短かかった三年間ではあつたが私自身精神的に少しでも成長することができたのではないかと思つている。

時

早川仁郎

流れ流れ時過ぎてー

あれよあれよと思つている間にもう『大学入試』とままならぬ頭を無理やり回してライオンと戦つているような今の僕、高校生活に入つて以来の三カ年自分は何をしてきたのだらうか。ただまじりと時を過ごし勉強らしき

では『サラリーマンになるための大学』の感が多分にある。ネコもシャクシもとは、そのためである。これは大学が悪いのでもないけれど旺文社が悪いのでもない。みんな社会制度が悪いのよ、と言つてしまえばそれまでである。しかし、皆さん、私は言いたい『政府は何をやつとるか。』大学の定員を、少しばかり増しても解決する問題ではない。もつと広い視野に立ち、鋭い洞察力を持つて、根本的な改革を、行なわなければならないと思う。かけがえのない青春が、ただサラリーマンになるために、暗い室内で過ごしされる事は、あまりにもばからしく、愚劣でナンセンスでいやらしくて、Hで、へどが出そうである。

このような世相の青年諸君が、どんな人物に生長してゆくか、ワタクスはスパイである………とはえらそうに言つたものの、所詮は劣等生の愚痴だった。

過・現・未

田 辺 宏

あと六、七月で一高生活も終わろうとしている。今までのことをふりかえつてみると

らぬものを行なつてきたにすぎない。僕の中学時代の友達（就職）で技術を身につけた三年間の成果としてさきほど名譽ある知事賞を勝ち得てますます腕の磨きをかけている。僕はと言えは『今の世は何が何でも大学を出なければ』という世間一般の考えに漏れずして高校に入つたものの将来の進むべき道も決つていない不安定な風船のような状態にいる。自分の好きな道で着々と腕を磨いている彼が羨ましい。

誰の言葉であつたかこんな言葉がある「この世に生まれたからには大冒険をすべし。」そうだなや宇宙時代であつて月旅行のできる日も近い。夢を大きくもち未来の満足のゆく日々を過ごすためにもセミが殻を割つて行くたえまない努力をして、自由になる。その努力期である今に力強く耐え抜いていこう。

友

代永光春

中学校時代を思い出してみると、勉強のこととはほとんど浮かばない。課外が終り、夕焼に染まつた秋の日が愛宕山の向こうに沈んでいくとき、評議会が終り、学校の門を出、自

動車教習所の水銀灯をよこに見て、薄暗くなつたぶどう畑のあいだの道をとぶようにして家に帰ったとき、又愛宕山の途中でぶどうをとつて食べたとき、悪友？良友？いつもだれかが、ぼくのそばにいた。高校にはいつて数

カ月、最高に過ごしにくかった。それはこの年代に最も必要である。「心のおける友」がいなかったからだ。他の者たちが、樂しそうに話しているのを見ていて自分で自分がみじめになった。授業を受けていても、自分一人の貝殻にとじこもっていた。皆話しくいやつだと自分勝手に思っていた。一方自分のこのクラスにおける存在価値を疑った。そして無視されている人間のはじめさが痛感された。たとえばクラスがえをし数カ月過ぎたとき「そんなやつはいたかなあ？」といわれるようになることが恐ろしかった。だからせめて自分を理解してくれる友だけはつくつておきたかつたし、それだけを目標にしていた。身延山のとき友らしき者をつくる機会に恵まれた。それと同時にになにかにつけ友のことを考え、高校生活の意義を少しずつわかりかけてきた。そんなことがあつて以来三年になつた今でもチャンスは絶対に逃がさないように心がけている。もっともただ黙つてそれを待

っているだけではなしに、常にそれにむかつて努力し続けなければならないことが大切であるが。

九ひきの虫 名取 孝

九ひきの虫、何の事だろう。教えようか、それはね、仲の良い兄弟の虫さ。それはね、同じ趣味を持った虫。そしてそれはね、重要な使命を持った虫さ。昔は三十ひきもの仲間がいたんだよ。でも彼ら九ひきのほかは皆途中で逃げちゃつたんだ。彼ら九ひきの虫はね、皆、まあ、まあさ。ちよつぱり整髪料なんかつけて。こつくもなくなね。そうそう一ひき変わったのがいたつて。え／＼どんなのかつて、それがね、すごくゆつくりなのが。何しろ仲間に入るのが一番遅く、しゃべり方が又、一番遅いんだ。でも上達日数は一番早かつたんだ。彼、兄弟きつての超余裕派なんだ。だけど、やつぱり彼も兄弟の重要な構成員だよ。彼、うまく余裕をまき散らしているんだ。彼らの趣味はね、落ち着く事が第一なんだ。でも一ひきだけが落ち着いたつてだめなんだよ。常に九本の網

が一本の強い、曲っていない、からみ合っていない、網でなければならぬんだ。彼らは美しいんだ。だつて彼ら、もう一本の網の一分子となりきっているんだもの。彼らおもしろいんだよ。すごく、いたずらが好きなんだ。時には彼ら自身の足のようなものを互いに傷つけるんだ。そして又皆なでそれらを直しているんだ。楽しそうだね。彼らはね、短い月日だつたけれど、他の虫には得られない大切なものを得たんだよ。おそらく、いや絶対これからの長い生涯大いに役立つところのね。彼らの団結心、友情心、全くみごとなものさ。うまく表わせないんだ。きつと解るやつもいると思うけどね。彼らやつと使命を果たしたんだ。彼らの新しい弟や妹達に与えたんだ。彼らその使命を渡す時、心の中でこう言つていたつて。「弟達よ／＼妹達よ／＼強く大きくなれ／＼そして俺達以上に太い網を作れ」てさ。彼ら九ひきの虫は、彼ら自身も又彼らの網をさらに太く強いものとしていく事だよ。

秋の夜

秋山敏徳
秋が来るとほととずる。

もう六時ともなると外は真晴だし、虫の声もじつと聞いていると何十種類ものように思われる。秋は夏と比べて空気も澄んでいるし、第一むやみに暑くないのが有難いが、特にこの間の十五夜の月はすばらしかった。太陽でむしかえされた後に出てくるものと違つて雨にぬれた屋根に反射している様子は、人並みに「池をめぐりて夜もすがら」とでも口に出そうな美しさであつた。今夜は月も出ていないし、さつきまで雨が降つていたが、それでもあいかわらずうるさい位に虫が鳴いている。どうも近くで鳴いているようだと思つていてと机の下からすず虫だか松虫だか分らないが一匹飛んで出てきた。源氏物語の「なにがしの院」とか言うのも今夜のような暗い夜の様子であつたらうか。じつと聞いていたらだんだん目が重くなつてきた。

秋の夜

古屋哲子

「ひとり燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる。文は、文選の……………」。

一年の時習つた文をふと思ひ出した。たし

か徒然草の一節だと思う。これを実感として感じたのは、今年の夏休みのこと。ふとしたことから源氏物語を読み初めた時だつた。

毎日少しずつ読みながら、自分も遠い昔の京都にいる様な気がした。むこうから束帯をつけた殿上人が牛車に乗つてきた。きつとこれから宮中に参内するのだらう。こちらからは文使いが手紙をもつてやつてきた。あの手紙を読む人はどんな人だろう。

こんなことを空想しながら読んだので、なかなかかはか取らなかつたが、夏休みが終るころには終りまで読んでしまつた。そして「もののあわれ」を理解し、本当の古典にふれた様な、そんな少々得意な気持ちになつたものだった。そして、やはり受験生の悲しみだろうか。「少しは古文の勉強に役立ったかしら。」と考へてしまつた。

そして今。机に向かいながら、ふと源氏や夕顔を思ひうかべ、「いつか原文で読んでみたいなあ」と、一人ロマンティックな気分になつて、秋の夜である。

山

井上直美

涼しい風に誘われて、ふと顔を上げると、

空に輪郭をはつきり表わし、悠々とした山が見える。幼いころ背にいつぱいの太陽を浴びて山や野原を駆けめぐつた思い出が多い私だけに、あの山は昔の私の姿の思い出だ。あのころは今と比べると随分思ひきつたことを平気でやつていた。日が落ちて、暗くなるまで無心に歩き回り、母の顔を思い出しながら、いちもくさんに家へ飛んで帰つたころの気分がなつかしい。……今は別の意味でのそんな気分を味わつてあわてふためいているところだ。……しかしこれは、自分の中の他の自分に行動を制限された日々を送っている私にとつて、遠い昔の思い出である。今の私は自分の好きなことも思ひきつて出来ず、なにかに束縛されているような状態だ。そんな自分があるのころに比べると、なんとなく哀れにも見えてくる。何も考えず好きなことをためらいもなくすることが幸福であるかどうかは別として、もう一度あのころの生活を向えることができたなら、あの山に登つて心ゆくまでの解放感を味わつてみたい。

親しい友

向山嘉代

「向山さんと付き合つていて、何の得が

あるのかしら。」とあなたは、何度も思ったことでしょう。全く、私があなたから吸収することばかりで、あなたが私から得るものは何もなかったでしょう。中学三年間、精神的にも、学校生活においても、全く頼りに、しつつけ、何でも『あなたでなくては』ということになっていた私は、高校も同じ学校へ、入ることができました。入学の時、同じ組になった時は、もちろんうれしかったのですが予感というのかしら、別々の組になることは全く考えていませんでした。けれども、まさか、また高校三年間も、同じ組になることができますとは思っていませんでした。学校生活の大半の六年間も、あなたのような人と過ごすことができたのは、運が良かったからでしょう。

一年生の時、子供っぽいというのかしら、あなたが、他の人々と楽しそうにしているとやけた（？）ものでした。そして私は多くの人々と楽しく交わっていいこうとしながら、できない性格のようで、あなたのいるそのグループに、なかなか入ることができませんでした。

私のこんな性格をみて『いやだな』と思ったことも、しばしばあったのですが、そ

れを態度はおろか顔にも表わさず、私を導いてくれました。これからは、こんな面も、私があなから学はねばならないことかと思えます。今、こんな私を六年間も、ひっぱってきてくれたことに対する、感謝の気持ちでいっぱいです。

無題

今村 務

おまえは何になりたいんだ！

おまえは何をしたいんだ！

おまえはなぜそんな事が出来ないんだ！山の頂上に登って「バカヤロー」とさけんでみるよ、きつとサツバリするぜ。そして、あのデッカイ宇宙を見て見るんだ。おまえの命がどんなにチツボケなものであるだろう。おまえはそれをもっともつと有意義に使うんだ。大事な時間をおまえは目先の事にしか使っていないだろう。おまえはもつとそれを未来のために使うんだ。おまえは深く悩み、考え、苦しんだ事があるか！ おまえは人の前で「おれはこうやってこうしてやるんだ」「おれはこれでこうやって行くんだ」とはつきり断言できるか！ いつでも他人を見、他

ら卑俗なる国語の普及に日も夜も足らず、蓋し文部省の亡国語教育に協力するか、その美化と純化とは忘れられ国語をだに満足に語り得ざるは、げに奇怪無比の文化国なるかな。

「現代日本を歌う」 (佐藤春夫・遺稿)

黒板

辻 順次

国語という科目を習っている以上、一度ぐらいいは文章を文章たらしめるような文章を書かなければ申し訳ないと思つて、近頃思うことをまとめてみると、大なる意気込みをもつて書き始めたのだが……。

ぼかんとして授業を受けながら、先生が黒板に向つてスイスイと書いていくのを茫然と見送つてこんなことを考えた。あの黒板の端から端までを僕の全生涯として、これまで過去十七年間の記録をそれに白いチョークで書き込むとしたら、それは黒板の何分のいくつまで白く満たされるであらうか、と。

この一年、僕の身辺に僕を一変させる、あるいはつくづく思い知らされた事件・経験が数多く起こつた。世間で言うように確かにこの不安定な世代にあつて、このような事件が

僕の心に大きく働きかけてきたことは、僕としても大きな意味があつたとみている。そしてこの期日がこれまでで一番黒板の幅を広く取らなければならない時期であらう。

しかし、黒板は人の手によつてむやみに消されるかもしれない。このことを今度の経験によつて強く知つた。一番良いことは黒板の最後まで白く塗られ、完全だとして自分の力でそれを消すことである。

最初に書いた文章を思い返してみよう。やはり、あの意気込みも空しく敗れ去つた——つまらぬ歌手の歌に魅了されてゐる時のこと。しかし文章を書くことのむずかしさを知つた。これからは文に慣れることをしなければならぬ。そして僕の黒板に書ける文章がより洗練されるように。

無題

堀口守雄

電車通学三年で、数多くの危険を知つたがその一つに、乗客のあまりに用心しすぎることもある。長い間のつきあいであるのにもかかわらず、彼らは表面に親近感というものを表わしたためしない。まあ、満員電車の場

人と同じでないと不安になる。おまえはデパートの商品なのか？ どいつを見てもみな同じ。ちがうのは顔位？ おれほそんな人間になつてほしくない。もつとパライティイーに富んだ人間になつてほしい、そう信念、目的観使命観とかの「何か」をもつて努力し、悩み苦しめ、時には喜び、悲しみ、怒る。人間らしい人間になつてほしい。最後に以前に読んだ印象に残っている記事に乗せる。

※

国破れて山河あり。秀麗なりしを背は腹に代へがたく産業大に興り、空にスモッグという毒霞立てこめ、清流は毒液をまじえて死魚を浮べ、大臣はトランジスターのセールスマンを兼ね。官庁とホテルと都には高樓多きも、土一升金一升一疊庶民は枕するに処なし。我ら不毛の野に住まぬまで食うに糧なく砂漠に生きねど飲むに水なきを如何せん。物価倍増にあえぐ家に慈母を職場に送つてさびしき子らはみな非行少年となりゆくとか。知らず、国の前途を憂ふるは誰れぞや、テレビジョンやラジオやアンテナ林なしで家々に行きわたるぬ。一億白痴化とは言はじ、もと賢明なるにあらねば「着ものは着れる、物は見れる、彼女は来れる。わりかしイカシハッスル」とや

合は別として——そこでは四肢はもちろん首をねじることも困難である。

男性が話を始めると、人々は耳を傾け、それからながめる。女性が話を始めると、人々はまずながめる。これは老若男女を問わない。そしてながめがお気に召すと耳を傾ける「なんじら、何かがおかしかつたら、この中にかくされた真理を捜すべし。全然おかしくなかつたら、聞かぬふりをするがよい。」

道

橋田ゆかり

朝夕、ある時は友と、ある時は一人で通つた道。でこぼこであつたあの道、でも今はまわりの景色もすっかりかわつてゐる。まわりはかわつてもまだ私は歩きつづけなければならぬ。あすもあさつても……。嵐でぬかるみになった道。かわききつてほこりの多い道。いろいろな障害物も今はアスファルトとなり一掃されている。でも新しい障害がふえた。自動車がスピードをあげて走る。私はそれをうまくよけながら、またそのスピードについていかねばならない。するとますますスピードをあげる。まるでもう手のとどかない

一年の時から歩きはじめたこの道、まわりは様々に変化した。困難が時には楽しみに、楽しみがにがい経験となった。でもそれらはみんなこの道に残してきた足跡だ。終りはまだ遠い。だから後をみずに、前を向いてこの道を前進したい。

小林敏公

夜もだいぶふけたと思われる頃、古寺の本堂で一人机に向つてゐた。三十畳敷以上もあるようなあの部屋はガラシとして何一つない。障子を隔てた向うの部屋には位牌が並んでいる。机の上のスタンドがいやにまぶしい。その光に向つて飛んでくるのか、障子にパタン、パタパタと虫のあたる音がある。右手の林からか、左手の谷からか、あるいは裏の山からか、ギヤーギヤーと無気味な鳥の、おそらく鳥だろうが、鳴き声が聞える。ときどきさらさらと風が吹きぬけ、「草木も眠る」という形容がびつたりする。空虚が恐怖を呼ぶ。

机の上のラジオに手が伸びる。「番町皿屋

他愛のない、小さな事かも知れない。

新聞は一面、二面を読むだけ、他は教養に溢れた本をとか、学校の勉強のみにしか興味のない御仁には、馬鹿らしい話の種。

かく言う私さえ、こうも種々なマスコミが発達した現在、三大新聞どれを見ても何の違がある訳でなし……と思う。

それに教育関係者の多く、例えば我クラス担任渡辺先生、一年の時のハギ原先生、皆、△新聞の愛読者（？）でいらつしやるらしい。H・Rの時など時々口にお出しになるのは、いつも△新聞の記事。又、この新聞の『天声人語』が、大学入試頻出という事実。ああ、△新聞に鞍替したい様な気持……。

してみると、私のM新聞への愛着など単なる慣れに過ぎないかも知れない。

今日も明日も、M新聞を読むのは、何よりも、我家の長、兼、大蔵大臣の父がM新聞をA新聞に換える必要性を感じない為だ……。とは最初の書き出しと、ちよつと違つたかしら

小林哲朗

人々は嘲りの目をもつて彼を見ていた。

数という怪談は……。」ラジオの音を低くする。障子をそつと開けて外へ出てみる。廊下を歩くとギーギーと音がする。外を見ると裸電球が暗闇を鈍く照らしている。本堂の前にもうそくの灯で浮び上がった、とうろうが見える。

部屋へ戻る。まだ怪談の話が続いている。「牡丹燈籠は……」いつかテレビで見たことがあった。「二人の女が籠を降り……。」障子の向うに吊るしてある籠のほうを見る。

「燈籠に灯をともし……。」「さつき見た燈籠が頭に浮ぶ。戦慄が背筋を走る。どこかでまたギヤーという声が聞えた。その夜は勉強がはかどったつげ。

飯田登志江

バスの中で目をつむると、それは音とおいの世界になる。様々の音と様々なにおいと声も音になる。町では光も音になる。

ある日、冬、私は人の住まない山へ行った。そこは非常に静かだった。山へ行けば必ず山に満ちている、木と枝のにおいがなかった。枯葉のにおいもなかった。道のかたわらの残

「奴は馬鹿だ」と、人はいうかもしれない。彼の名は×としておこう、いつも 背をまるめ、うすよれた豆たんを片手にもち……：ポサボサの髪、ぼんやりあけた口、どこをみているか解らぬ瞳、これが彼の姿である。なんでも隠さずいふ彼。自己に忠実で、飾り気のない彼。純粹な魂をもった彼——いつまでも進歩のない彼は確かに馬鹿だ。しかし自己に忠実なのと、嘘のないことは僕のおよぶところではない。

いつも「オレとは関係ないんだ」と、いうように、そっぽを向いていた。「ああ、腹がへつたなあ」「眠いなあ」「早く家へけりてえなあ」、
「勉強はやだなあ」と口ぐせにしていた彼

彼の言葉は生きている。言葉と行動がいつ
しよでそこには真実があるからである。しか
し彼は余りに生活的すぎる。余りにもか
くすぎる。彼の世界は余りに……………
すぎる。

荒居正次

つくづく思うことだが、人それぞれ、みな

雪は氷りつき、カラカラに乾いていた。一つの塊をけると、ポクンところがあった。その乾いた氷のように、そこでは、音にもおいても氷って乾いてしまったようだった。余りに静かでそこでは、地球は回転を停止してしまつたようだった。そして突然、林の間からバラ色の光がさした。朝日が登つたのだつた。

人が住んでいるところは、どこも人くさい。私は山姥のようにそれを喚ぐ。音においてはバスの中では特に強く、私はそれを、時には嫌悪し、時には夢のようにそれにひたる。

堀井由美子

私の家ではこれと言う理由もないのに、いえ、ないから五、六十年ずつとM新聞を取っている。家の誰もそんな事に矛盾など感じはしないばかりか。密かに愛着さえその新聞に持っているのではないかと思う……。けれどこれは私の家ばかりではないらしい。何故つて、小学校の頃友達が新聞の事で小さな喧嘩をしたのを覚えてゐる。互に家で取っている新聞を最上のものだと思い込み、相手に何とかならせ様とした挙句だった。

いい人だと思ふ。まじめな人は、たいがいの人から、まじめだといわれて喜ばれる。また静かな落ち着いた人とは利巧そうで人には迷惑もかけず喜ばれる。しかし、近ごろ僕は人々からきざで不良ばい奴だといわれる人々も、彼ら以上にいい人だと思ふことがしばしばある。僕の友の何人かも彼らに属するかもしれない。が、非常に明かるく若さに満ちあふれている。彼らは、よく僕の自転車をいたずらしたり、帽子やカバンを隠したりしてはじめたりした。また、ある時は真つ向から悪口を言ってくれた。今は無き友は、僕にうまいことを言つて別れてしまった。

「苦しい時はお互いに笑って切りぬけよう。
しかし、冷静さを失うな」

今年の夏休みは一人静かにいろいろと考え悩んでみた。川端康成は、「芸術がわからないことに幸福を感じないけれども、自然や人生のわからないことに幸福を感じる。」と教科書で言っていた。が、この時ほど、「試験のできぬことはどうでもよい。人生のわからないことはほんとうにいやだ。」と、思ったことはない。「現に僕は人生のわからぬためにかくも悩み、ただ茫然と遠くの山々をながめているのではないか／＼」しかし、よく考えて

みるに、「生きている限り、迷うに決まったものだ／＼」と昔の人々が言った言葉を僕は信じているし、また実際体験もして理解している。やはり、僕は人生がわかつているのだ／＼人生とは、人がわからずに悩み続けるうちに終わるものだ。そんな「人生」を与えられた僕らが、悲観したり諦念の気持ちになつたりしてはそれこそ大変である。僕は僕なりにある「人生」に邂逅し、今ここに生きているのだと思うと愉快であるし、また将来どうなるかと思うと、なおさら愉快である。

思うこと

上田淑子

楽しいことのあとに考える。またきつといやな事がおこるのではないかと。そしてそれにびくびくしている私。そんな時寂しくなる。何のために生きているのかと思う。苦しい事やいやな事に堂々とぶつかってゆく人になりたい。いくじなしにはなりたくない。だけれど好きな友達という時はそんなことは忘れてしまう。だから友達といつしよの時はすごく楽しいしうれしい。でもどんなに好きでも夕方になれば家に帰ってしまう。私はまた

い、そしてそれをそう変えうるならば孜孜はむしろそれを歓迎してよいのではないだろうか

苦悩を出でて歓喜に到れ／

悪童

河野清二

「逆立ちして、でんぐり返つてみたい、身体のみずみずまでぎゅつと力を入れたい、あんなに光っているけど内部は快く冷めたい、そんな雲だ、入道雲って」

お寺の鐘が鳴り響くし、買ひ物籠の少女が通る。どこまでもつづく長い道。

早く帰る

友達と別れて古自転車雑音の雑音が妙に大きく聞こえる長い道、一人つぶやいた。

「父の背を、母の肩を」

涙の出るほど楽しかった家路、父に母、それに友達を入れた家族団欒の姿が目に見える

心づくしから、出されるままに煙草を口にしてみる。「ヨ、大統領！」の声に大きな笑。

舌がもつれ。甘酒一杯又もつれ。飼犬さえ

寂しくなる。そして考える。ピーナツみたいにあつた子ならいいのに。そうすれば学校でも一諸だし家でも一諸にいられる。二人ならどんな事だつてこわくないしどんなに心強いだろう。びくびくしないで暮らせる。でもこれではないこと。やっぱり一人なんだから。そして神様はそのかわりに二人分の勇気をくださったのではないかしら。きつとそうにちがない。だから一人でもびくびくしない方がいいよう。

苦悩

米山孝之

なぜベートーベンをそんなに敬愛するのかと尋ねられたならば、ぼくはこう答えるだろう。彼は言わば「苦悩の道を突き進み、それを克服した人」にはかならないからと。確かにぼくは彼の曲を好きだ。しかし、その前に彼の人生倫理を顧みてしかる後に「うん、すばらしい。」というのがぼくにとつて適切な音楽のみかたではないだろうか。

我々に苦悩の種が到来したならば、我々はそれをいかに処理するか。そうだ、我々はそれを迎え打つ他に良策はない。悲しむ？否

にも吠えられた。

金魚

武みづち

あの目の自分。ただ一瞬の感傷を味わった時。それはなつかしさともいえるような感激だった。金魚って美しいものだなあ／＼の心が彼らに呑み込まれてしまうように感じた。

清らかすぎるほどに澄んだ水・柔い布のような水草は新鮮な酸素を与えるのにふさわしく美しい色相だった。その中で楽しそうに踊る彼ら、通りすがりのその中生物との出会いには不思議なほどに私の心に慰めを与えるように思えた。すばらしい世界があるのだなあ／＼しかし、そんな思いをいだく自分の存在は不可解だった。哀れに思えた。それは、自然のロマンチックな魅力が多少たりとも制限された毎日の生活の中において、いやおうなく心の奥深く押し込められた何物かを震わせたのにちがいがなかった。

あの時の慰めるような青空。そうあのかの幸福そうな微笑。そしてあその燃えるような赤い花も。すべて、すべてが私の弱いに満たされないう憧憬と空虚さを残していく。

そうすることによっていつか何が得られよう。逃避する？否、そうすることによって、いつか何が得られよう。――彼らは卑怯者であり墮落者にほかならない。我々は険しい山を登るが如くその苦しみを乗り越えなくてはならない。あえぎ続けたあげくにその解決策を見つかるべくしていろいろの物に手をつけ読書し、体験し、考え、又諸先輩の意見を仰ぎ、そしてこそ始めて我々は思いもよらぬ、正しいある物を捜しあてるのだ。たとえそれがいかなるものであろうとも真に人間らしく生きたい――と求めて求め得たものなら

かまわないのではなからうか。そしてそれが苦悩の後のそれであればこそなおいつその喜びではなからうか。

人類は苦悩することによって進歩し、発展してきた。経済的に又思想的に。フランス革命は窮して階級という物を自覚したプロレタリアートによって引き起こされた。又その他の国の革命も反乱も同様なことが言える。以後のそれに於いてもそういうことが言えるのはなからうか。

我々は苦悩することによってそれから立ち直るべくして飛躍が起る。そしてもし我々の苦悩が到来してもそれを飛躍の手段とみな

その後迫ってくるのは、整然とした文字の列に忠実であろうとする理性の、不完全な強さだけでしかない。その横暴さに堪えられないことも多いが、せめてもうしばらくの間許せる自分でありたい。あの金魚はかつて見たどんなものよりも美しかった。そして私もあの金魚のようだった。これも無意味な感傷にすぎないのかもしれない。

星空の下で

保坂美智子

その夜、私はぼんやりと空を見上げていた。無数の星が一面に散らばって何ともすばらしいながめであった。それは、大きく限りなく広がっていた。こんなに大きな自然を意識したのは珍しいことだ。私は自分の体がスーツと吸込まれていくような気がして、あわてて足下の石にしがみ込んだ。冷たい石の感触が気持ち良かった。

この雄大な自然に比べて、何とちっぽけな自分であろうか。毎日のこせこせした生活が思い出される。それこそいつも同じ事の繰り返しである。少なくとも私において「進歩」などという言葉は通用しないようだ。ある時

突然に、「あなたは何の為に生きているのですか？」と聞かれた事があった。もちろん、私には答えられなかった。毎日をただ漫然と過ごしている私にとっては難しすぎる問題だった。しかし、よく考えてみると、私の存在意義などどこにも認められないような気がする。しいて言うなら「無用の用りであるかもしれない」。

空にはまだたくさんの星が光っていた。あんなに小さな星でさえも、精一杯輝いている。私もあの星に負けてはいけないのだ。毎日をもっと大切に、自分自身をじっくり見つめる私でありたいと思う。

家に帰りたい

白倉和子

現在の私が、最大の喜びは何かと聞かれたら、きつと、家に帰ること、と答えるだろう。土曜日の午後や祭日の前日、帰りの汽車の中で本に目を走らせながら、父母にあれを話そう、これもという風に楽しい思いで心がはずむ。一時間余りで家につく。父母のいるここです。私は思いきり背伸びをして日頃のうつぶんを晴らすことができる。前は十人近い

た家も今は父母二人だけ。時々兄夫婦と私が帰れば、少しは寂しさも除けるが。たまに帰る私を、汽車賃がかかるからあまり帰ってくると、と冗談を言いながらも父母は歓迎してくれる。父母の下で私は生来の自分を取り戻して、庭を駆けまわり、歌を口ずさむ。

こんなこともまる一日とは続かない。日曜の夕刻、野菜の入った重い袋をさげて再び甲府へ向かう。又一週間の下宿生活を送らなければならぬのだ。こんな時、もう甲府へ行くの、やんなつちやつた、とよく母にこぼす。ましてテスト間近かの時や、模試のある時などは、あと二週間も家に帰れないと思うとひどく悲しくなる。学校にいる時はよく友に早く家へ帰りたいとこぼす。受験生のくせにこんな甘ちゃらいこととどうするのだ、と言われれば、返事に困ってしまうだろうが。過去何回か、下宿生活はもういやだ。いやこれくらいのことなんか、と心の戦いを繰り返してきた。でも、もうあとわずかなのだ、私の小さな主婦と学生との二役を演ずる生活は。

家庭人

田中静男

二年の時、倫理の先生が、「私達は家庭人であり、日本人であり、世界人ではないではない」とおっしゃったことを覚えている。

つまり、りっぱな家庭人でなければ、真の日本人、又世界人になる資格がないという意味だと思う。先生は特に「家庭人であれ」と強調したことを思う。私達はおうおうにして幸福を快楽と間違えそれを追い決める。しかしそれらは全然異なるものである。快楽は非人格的であり、排他的であり、持続性がなく感覚的である。勿論それは家庭には見出し出されない。それに反して幸福は人格的であり、多元的であり、持続性がある。そして家庭に見出し出されるものである。つまり先生は生活の価値は幸福が最高の価値であるといい、幸福主義を根本的な倫理的立場において、そして私達が人生の大部分に存在する家庭においてそれを開拓することを希望したのである。最近、家庭の崩壊、家庭との斗争、いろいろな家庭について問題になっているが、親との不和は戦前の生活の古い伝統を受け入れぬ私達に

も責任があると思う。私達のもっているものとそれを和合してこそ新鮮な幸福が得られると思う。後に悔なく親孝行したいものである。

大いにやるべし

穂坂勝命

快く清里高原を歩いていった。暗闇の中にも八ヶ岳がずっしりとすわっていた。ぼつぼつ脚が痛くなり出した。冷え冷えとした空気を胸いや肺にいっぱい吸いこんだ。自分の前後には誰もいなかった。「走れ」と誰かが言った。でも脚がその命令通りに動かない。困ったが、「ゆっくり歩け」と又誰かが言った。

歩いた。少し急ぎ足で歩いた。東の雲が色づいてきた。じつくりと歩いた。いつの間にか視界が開けた。張りつめていた気持ちと和らいだ。大部時間が経った。時間が経つにつれて脚がひどくはれてきた。しだいに歩き方がおかしくなった。つまりピッコをする様になった。その為後から次々に追い抜かれた。又追い抜かれた。誰も励ましてくれる者はいなかった。まてよ、いたいた。電卓の中から手をふつてくれた女学生がいたつね。その励

まさに反して脚はますます痛み出してきた。これでもか／これでもか！しかしだめだった。ついにダウン。ヘトヘトに疲れ切った体にムチ打つのは気ばかりであった。肉体への望みは全く崩れた。「よし、きつと来年こそは…」明くる年も失敗した。

「自分の力の限界を知れ。」この言葉をきくと自分に分らせる日がくるに違いない。その日の為にも、精神と身体とを十分に鍛えたい、いやその後も努力を続けるべきと思う。強行遠足に感じた偽わらざるところである。

考えたこと

村松万佐子

かつてある人が「かりに第三次世界大戦がおこるとすると、どんな兵器が使われるか。」とたずねたら、アインシュタインは「次の大戦にどんな兵器が使われるか知らないが、次の次の世界大戦が何で戦われるか、ほぼ分かる。それは石とコン棒であろう。」と答えた。と云う。我々も次の大戦は、地球上のあらゆる物を葬り去ってしまうだろうとは分かっている。なのに戦後二十年たった今でも、一部

地域では戦争が行なわれているのである。また兵器管理の軍人の軽はずみから偶発戦争が起る可能性がなきにしもあらずである。そこで現在一番大切なことは、徹底的な軍縮と平和運動の広がりだと思ふ。過去を見れば、それが徹底するはずがないじゃないかと云う人がいるかも知れない。しかし我々は、人類が滅亡するか繁栄するかの交差点に立っていると云うことを、よく考えねばならない。平和は世界中の人が望んでいることである。人々は平和を望む、静かで根強い心を持つてい

るはばである。私は、その数知れぬ心が全部団結した時、はじめて真の平和が来るのだと思う。そして軽々しく「第三次大戦には、どんな武器が使われるだろう。」なんて云う人もなくなるだろう。私は、人間とは目先の利益だけを追う者でないことを信じている。

濁天下望狂風

塚谷次雄

天地混沌内 善惡興亡号
日既不照陰 本専随勢豪
潤皆貪暫寿 独在野憤怒
三顧源伸夢 志地煞天罡

（一）とば

学年副主任 島津 正美

「日本人は日本語を話す」何のへんてつもないありふれたことである。が、もしわれわれが今日を限り日本語を話すことができない状態に追いこめられたとしたらどうであろう。ことばは単なるコミュニケーションの道具ではなく、その国民、その民族の生命であるとは考える。自分の国のことばを失った民族は最早や、民族として国民として独立の存在を失ったと同然であろう。それにつけてことばの尊さと戦争の惨めさを教えた西欧の作家の短かい物語りの一節を送ろう。

十九世紀フランスの最大作家の一人アルフォンス・ドーデ（一八四〇～一八九七）が一八七二年ものした短篇集「月曜物語」の最初の頁を飾る傑作「最後の授業」の内容の一部である。

ドーデは南仏ニームに生れ十七才にしてバ

リに建て、文筆生涯に従事も、積世に数々の名作を残したが、その主なものは、月曜物語、風車小屋からの便り、アルプスのタルタランアルルの娘、サフォ等々すでにわが国にも紹介されている。

この物語りは、晋仏戦争（一八六九～一八七二）でフランスがプロシヤに破れ北部国境地帯にある、アルザスとローレンの二州がドイツ領になる。あすからドイツ領になるアルザスの一小学校で四十年間教壇に立つ老教師アメルと小学生フランツを登場人物とする、母国語を永久に話すことの出来ない民族の最後の授業風景を描いたものである。

「その朝私（フランツ）は学校へ行くのに非常におくれてしまった。アメル先生から過去分詞を暗記してくるようにとの宿題が出ていたし、その一語をおぼえておかなかった私は、先生からひどくしかられるのが恐しくて、一瞬授業をサボって……」

という書き出しではじまるこの物語の中に次のような節がある。

「校舎の屋根の上では、はとどもがグウ、グウ鳴いていた。私（アメル先生）ははとの

声を聞きながらこんな風に一人言を云った。」「ドイツ人はあのはとどにもまたドイツ語で鳴かせるのではないだろうか？」

私が民族にとつて母国語がどんなに大切なものであるかと云うことは、ドーデのこの物語りの中の次の数節から思い出しているのである。

「いまやプロシヤの人々はわれわれにこう云う権利を持っている。なんだと！おまえたちはフランス人であると云い張るのか、それでいておまえたちの「ことば」を話すことも書くこともできないではないか。」

次の一節こそ大事なことだと思う

「たとえ一つの民族が奴隷の境遇に陥いれたとしても、この民族が自分の国のことばをしつかりと心に忘れずに抱えているならば、それは丁度この牢獄から抜け出すための鍵をもっているようなものだ。」

われわれは日本人として日本のことばを大事にしつかりと身に抱いて、奪われたり忘れたりしないで行こう。

一九六五 十月二日



7



一寸一言

組主任 矢崎 豊

愈々諸君も高校生活に終りを近づけ、間もなく社会人として、「前」の扱いを受ける時期が到来しました。今まで数多くの事を学んできたのも、これからの社会生活を豊かな、円満な、稔り多きものにするためでありましたが、勿論必要な事の全てを学んだわけではないし、また身についたわけでもありません。したがって、今後とも大いに勉強せねばならぬわけですが、私は、この機会に、諸君のこれからの人生に、最も大切なことの一であり、今までの生活環境ではあまり重要視されず、したがって、教育も、勉強もあまりしなかったのではないかと思われる処世上の問題について、少しばかり記して、参考にしてもらいたいと思います。

さて、よく父兄の方々より聞くことですが、諸君は考え方や、進路の問題等について、父兄と相談しないばかりか、中には自分のことは自分で決めるからよいと主張しておる者が相当おるようです。

点の連続

生原 尚

スタンドのスイッチを静かに押す。

あたりは一瞬暗闇に包まれる……。

月の青白い光が、窓越しに僕の顔を照らす。

じーと耳をすませる。なんと無心な鳴声なのだろう、秋の虫は。今を我が世と歌っている。しずかに目をとじてみよう……。

秋の夜風はさすがに膚にしんみりと感じられる。そのままの雰囲気の中で、そのままの姿勢で、僕は今、僕の人生を考えずにはいられない。

僕の人生はこれからどう展開していくのだろうか……わからぬ。僕の人生にはどんな楽園が待ちうけているか、どんな苦難が待ちうけているか、すべて全く未知数である。僕は今まで信念をい

勿論諸君は未成年者であり、経験の浅い点より考え、家族、教師、先輩の助言を必要とするのは当然であります。未成年者とか成人とかは、あくまで人為的な区分で、人間は一生未完成のものだという点が、より重要な観点であらねばならぬと考えます。年をとってみると、若い時代の未熟さに気がつくものです。将来、実社会の一員として、実務についた時、先輩や同僚、時には後輩の助言を、すなおに受け入れ、特に反対の考え方を、深くかみしめてみる雅量を養ってほしいものです。世間でよく「教員あがり」は、使いみちがない」と言われますが、これは知識が知識に止まり、社会の一員としての経験を積む機会が少なかったか、または、経験しようとしなかった者が多かったためではないかと思います。従って、どうしても独善的になって、一般社会人とは異った雰囲気を持つようになったのでしょうか。諸君の中にも、自説を主張して譲らず、時には、議論にならぬ感情的思考を、大声で主張するような人もありますが、前述の、使いものにならぬ教員あがり、似たようなものではないでしょうか。今の年頃では、若い者だから、として許されるし、特に学校では教育中という理由で、笑って、すまされてしまうものですが、明日からの社会には通用しません。高校で何を勉強してきたのだ。とも言われるのが関の山です。若いうちは、世間の常識は、大人の世故にたけた世渡りの術か、ことなかれ主義だ位にしか思われぬものです。事実そういう事例も多いのですが、しかし、その一部には、永い人間の歴史が築いた、尊い智慧が含まれている事を理解してもらいたいものです。

誤解なきよう、つけ加えますが、決して、他人の言うなりに、または、世間の思惑のみを考えて行動せよ、というのではありません。最終決定は、あくまで、自己のものであり、またあらねばなりません。その過程では、よく他人の考えを理解することに勉めてほしいものです。おわりに、若い諸君のもつ多くの夢が、夢想到終ることなく、立派な実を結ぶことを期待してやみません。

僕たちはある未来への達成すべき目標をもって進んできた。そしていずれにせよこの大目標を達成することが、後になってふりかえって見た時、あの高校時代、いや一高時代が真に充実した、意義あるものであり幸福な時代であったと思わせるような気がした。あと六カ月、高校生としての立場をしつかりと自覚した態度をもって、悔いなき高校時代をおくるために、最後の勝利獲得をめざしてがんばりたい、と思った。

使命

小林 峻一

大戦後二十年たった今日では日本もこのようになりつは南国となった。その復興力はドイツについて秀れたものであったが「のどもと過ぎれば暑さを忘れる」であるうか、今やインドとパキスタンとの戦争は深刻となり南ベトナムとベトナムとの戦いは世界の注目の的となっている。そしていつも経済援助という形で世界の三大国が後押しをしているので終りたい戦争も仲々終れない。

本来人間は闘争好きであらうか、それとも平和主義的動物であらうか、もし前者としたならば平和は単なる闘争のための静養期間にすぎぬ。国と国との戦いにおいて敗戦国ほどじみじめなものはない。日本人はこのことをよく知っているがともするとこの繁栄を過信し昔の夢を思い出そうとする。そんな気配が近頃の日本には感じられる。特にわれわれ若い世代は戦争の恐ろしさを知らない。幼稚な考えだが事実私など戦車やミサイルなどをみれば「日本はもと強い国であって敗北などということとはちよつとした誤りに過ぎなかった」と考えることがよく

と社会の荒波は僕を飲み込んでしまいうにちがいない。今の僕は余りにも弱すぎるのだから……。

僕は持ちたい、人生に強く生きる信念を。どんな苦境にもめげずどんな慰めごとにもおぼれないために。そしてくねっていても、まわり遣していても、不連続点のない人生をおくりたい。人生は点の連続である。しかも真に充実した点の連続でなくてはならない。

このころ

清水 憲治

一高における二年間、それはまったくいつの間にか夢のように過ぎ去ってしまった。テスト、テストでおいまくられ、まったく中学時代からえがきつづけてきた一高への憧憬的な僕のイメージはアツというまにつぶされてしまっていた。そして、来る日も来る日も楽しさの裏には一高生がみな持つようなひとつの苦しさを背負ってきたような気がする。しかし、一高へ入学してからの二年間ぐらひはみな一高というすばらしい伝統を持つ学園への未知なるあこがれと期待とそして優越的な意思を持ち、まったくバシヤウマのように突き進んで来たかのように思われる。

しかし時は刻々とすぎ、あと一年、いや、もう六カ月ほどになつてしまった。残された一高生活、大学というものの前に存在する高校生活はもうほんのすこしで終わろうとしている。一高入学以来、

ある。こうした考え方は戦争再発の可能性を大いに含んでいるがまた一方敗戦から立ち直る一つの原動力となつたろう。日本は今や大国である。アジアで行われている二つの戦争を黙って見ているわけにはいかない立場にいる。その一つには日本は戦争に関しては世界一の先輩といつてもいい過ぎではないし、また世界一平和主義国だといつて言い過ぎではないからである。

平和は万人の望むところであつて決してぜいたくではない。

僕の心のナットコール

深沢 保憲

ナット・キング・コール。僕が心から愛した歌手の彼は、去る二月十五日四十七才という若さで、肺癌のため亡くなつてしまいました。その甘くハスキーな、また、独得のささやきかけるような歌は、もう日本では、見られないのだなあ、等々何かしら漠然たる悲しさが、僕の心を、長い間おおいました。しかしこの経験は、「懲らされてこそ教育」という面で、僕の精神を鍛える大きな糧となつたことは、いうまでもありません。それは、僕の精神の上で、自己を甘やかすな、人生は峻烈なんだ、といつも語りかけているコールの死だったからなおさらです。

コールはまた一九四七年黒人教会牧師の子として生まれただけに、敬謙なクリスチャンでした。それだけにかれば、里人差別を唱える白人の暴漢に迫害を受けても、決して過激な態度を示しませんでした。そして迫害にもめげず人種差別反対を唱えつづけました。そんな人間コールが、ともすれば、すぐ怒りを顔に出し、またあきらめが早

い僕にとつては、たまらない魅力でした。たまらない魅力といえは彼の歌ほどのものではありませんまい。「プリテンド」、「トウヤング」「スターダスト」「コンリーワン」「ラブ」……どれもこれも、心の底からのものです。言語の不自由さを通り越した、心の歌です。これからは、青年時代にもっとも大事な、二つのもの、すなわち友情を彼の人間性で、恋愛を彼の歌が僕に与えてくれたのです。また彼の歌は気分としての青年（精神をおき忘れ、感覚の上でわめき散らす人）に「わめかず沈黙を、沈黙こそその人の一生を決定づけるんだ。」といっているかのように歌いつづけます。歌の中の歌である、彼の歌は、いまなお、万人の心に生きています。彼の歌はこれからも、永遠に生きつづけるでしょう。

偶 感

堀 内 信

二彼はもう高校三年であつた。大学入試のため月に一・二回模擬テストを受けていた。それをやつた結果入学出来れば安いものだと考えていた。その瞬間、それを受けなくてgood数回の金を貧しい人々のために使い、合格したらどんなだろうとも思つてみたりした。二、彼は星を愛していた。一度でもよいからその数億度の感触に達してみたかつた。それで彼は最も愛する星に向かって進んでいった。しかし不幸なことにその星は青白い一本の線とともに彼と同じ速さで遠ざかつていた。だがしかし！彼は安堵の気持でその星を見つめていたのだ。遠ざからないという……。

三、彼は人間の死など恐怖ではなかつた。

不可能に近い。ところが、空気よりはるかに屈折率の大きい水に近づけることは可能であるかも知れない。つまり水中では「透明人間」となれるのだ。下等動物であるクラゲはそれが海中にいるとき、その存在を認めがたいという。この例より一歩進めると「透明人間」とは一種のクラゲ状態だと把握できる。ここまで話を進めると先刻の「透明人間」に対し魅惑、戦慄は薄らぎはかなさ、あわれさが増大する。つまり透明人間はかくつまらぬものだと理解できる。

メ ッ キ

岡 光 臣

腕時計今ハンドを換える。金色の光が「活動的な感じ」を与える。さらに、時計の機械音は正確になっている。今買ったばかりのようだ。三年目、茶・青・黒皮と変えている。これはその時一番良いと思う色を選んだはず……何を意味するのか。

茶は本当の新品、うれしい気分に合わせている。黒く汚れて青に変つた。青は静かな気分だつたが止金がこわれて交代。黒は平凡な色だが大変落着があつた。これは裏あてがとれて自滅した。

何だか試験の成績を示しているようだ。現在はそうありたいと頼っている。メッキが心配だ。

いた ち の 尻

山 田 時 男

沈黙考数刻、幾多の試みもむなしく、愚生の頭脳いつこうさえず

ただそれを感じなくなるのを恐れただけであつた。

透明人間の原理

裾 津 家 久

SF小説界ではすでに古典に属し、つい最近まで映画・テレビにも話題を吐いた中に『透明人間』がある。文字通りそれは他人には姿形が見えない幽霊的存在物だが、その本人にとつては、断乎一人間であり並みいやそれ以上の機能を備えた、はたから目れば魅惑的かつ恐怖戦慄たる人間である。さて、テーマに一步近づこう。はたして「透明人間」なるものがこの世にいるか？いないであろう。それでは現代の飛躍的發展をとげた科学技術の力をかりて作り出すことができるか？できまい。そう十中八九答えるだろう。では本当に作れないか。この命題には根本的に光の概念がつきまとう。次の実験を思い浮べてくれたまえ。ここに一つのガラスがある。もちろん空気中ではその存在を試めることができるが、ある液中に入れよう。結果は予測できる。つまり、一段とその存在を認めにくくなるであろう。これは物理学で言う、いわゆる反射、屈折関係で、液体とガラスの屈折率が近くなればなるほど見にくくなり、まったく等しくなるとガラスの存在を認められなくなる。しかし、この現象は透明体について言えることだ。ところでこの現象を人間に応用したのが「透明人間」ということになる。幸いな事に人間を含めた生物の細胞は透明体に近いという。問題は血液のヘモクロピン色素、皮膚のメラニン色素などの色素を透明体に変化させ、しかもその機能を失わぬことだ。次に空気の屈折率にできるだけ近づくように透明体の屈折率を調節すればよい。しかしこれは

して、ついに傑作生れず、やむなく提出を断念し候う。

ここに己が頭脳の限界と詩的情念の貧困を知り、限りなきさびしさと、義務怠慢の痛苦に襲われ候うも、書かずして出さぬに非ず、書くこと能わぬがゆえに出せぬこの現実を温情もつて賢察下されたく候う。

文化の伝統かおる一高に学んで三年、文章一つものに出来得ない非力を悲しみ候うも、思うにペンは一本にして、百個の玉は支えがたく候うゆえに、愚生はペンに代えて。パチンコを研究し新らしき人生航路に立ち向う所存。曰く卒論は——玉の落下速度と反発係数について——。

ああされどいま一高を去るにあたり、「あしおと」への慕情わが想念を支配してやむ所を知らざり候う。雖然、騒然、整然——濃淡強弱賢愚とりどりの一高生の足音を「あしおと」よ、永遠につたえてくれ。

後 悔

無 名 氏

It is no use crying over spilt milk.

私は今までのところ、後悔なしに物事をできたためしが無かつた。それは、二つの当り前の落度によつたと思う。だがそれらは人間の価値をも決めるものだと思うっている。

一つは物事に着手する前に、それに対して熟考すること、もう一つはそれを強引に成し遂げること、この二つである。

このようなことは誰でも考えている当り前のことであらう。ところが、実行している人はごくわずかであると思う。そして、生きていく

分には、この実行は必要とは限らない。だが、彼等に臨終の際「これで私の一生に悔いはない」と言えるであろうか。

私は次のことは、一個の生を受けた人間として、少くとも、なすように努力しなければならないと思う。よく考えて目的を定め、次に、その目的に向かって一途に進むべきだと。

秋

竹内 暢夫、

もう秋だ。最近少し不安になる時がある。果して来年三月はどうなるだろう？ いつもこんな気持ばかり、どうしてもっと早く準備をしなかったのか。正直に言って二年迄は受験対策。そのしわ寄せが今に来ていのかも知れない。でも高校生活の最高の思い出はやはり二年の時の、よく遊び、よく討論（？）したことだ。だから、夜、家族が眠ってから一人机に向って居る時に、寝息が聞こえると早くすませて眠りたいなあいつも思うものの能率は上らず毎日が辛い。そんな時、決まって楽しかった二年の時が頭に浮かぶ。こんな固苦しい教科書、参考書などから早く解放されたいものだ。でも逆に考えれば、今からが、我々にとっては、最も重大な時期である。この残る数カ月の勝負に是が非でも勝ちたい。ただその一心に闘志を燃やして頑張っている昨今である。

思うままに

前田 淳

このごろ以前読んだ本の主人公の事を思う。彼はいつの世もが産出

「じゃどういう所に。」

「勉強をもっとすればよかったし、クラブ活動も活発にしたかった。でもそんなことよりも良書を多く読み、音楽に心深くひたり、友と深く交わり、人生などについて深く語り合い、そして何でもいい何かに心の底から感動したかった。」

「なんだそんなことなら大学に入ってからだつてできるじゃないか」と彼は

「ところがそれができないんだ。」と答えた。

「どうして」キリギリスはすかさず聞き直す。

「それは高校時代というものを考えればすぐわかるさ。彼の考えとは『この時期は子供と大人の境目、いわば大人への準備期である。それゆえこの時受けた感動はその人の一生に作用すると言っても過言ではない。精魂こめて読んだ本はその人をみがき、全神経を傾けて涙までも浮かべて感動した音楽又その他の芸術はその人を美しくし、友と我を忘れて論議した人生観というものは一生の思い出となる。しかるに大学時代にこれらをしたとしてもさほどいいはないように思える。しかしその時は既にもう遅いのである。おそらく大学でベートーヴェン、ブラームスを聴き、又漱石、康成などを読んだとしても印象としてはやはり高校の時ほどのは受けないであろう。この原因としてやはり高校時代の心の純真さというものがあげられると思う。』というのである。」彼が答え終わると、キリギリスは「それじゃそのような悔いをなくすにはどうしたらいいの。」「そりゃ過ぎたことはしょうがないとしてただ一つあるんだよ。それは残された日々を力いっぱい過すことさ。」「なるほど、それでは君がそうできることを祈るよ。」

しうる又いつの世もが要求している所のごく平凡な人物である。しかし彼は虚栄心を持たず、その境遇に処し、その信ずる所を行ない、それで満足し安心して勉強し運命に安んじ運命を開拓しつつ生き、着々と努力実行しついに自分の望み（技師になる事）を達成したのだ。

どうも自分は計画が実行できなかったり、「あのときああしておけば」という後悔が多すぎると思っている。これは精いっぱい力の限り生活してこなかったためだろう。事実そのものはどうしようもない事なのだから、それをおそれることなく強い意志をもって力いっぱい生きることが大切なのだろう。

又ある本に「桃の木の花が咲き、実がなるのは桃の木自身のためであると同時に人をも喜ばす。はしばみの木はたぎに切られてはじめて人に喜ばれる。」と書いてあった。自分は自分をも又他人をもよくする人間になりたいものだと思います。

秋の夜

望月和典

あーあ／＼もう高校生活もおしまいか。ふと急になんことが彼の頭に浮かんだ。と同時に彼はなんとなくさびしい気持になったらしく、夜のやみを見つめていた。彼の頭の中には三年間のなつかしい思い出が虫の音に引きずられて、いともあざやかにえがき出されていた。

突然鈴虫が彼に「高校生活は楽しかったかい。」とたずねた。彼はもちろんといったそうに首をたてにふった。次にキリギリスがたずねた。「高校生活に悔いはなかったかい。」これには彼も困ったらしく当惑していたがやがて首を横にふった。

そういつてキリギリスは又美しい音色で鳴き始めた。そばにいた鈴虫もそれに従った。

会話は終った。彼は三年間の思い出を又ふり返っていた。楽しいこと、悲しいこといろいろだった。でも今はそれらが一つの思い出として美しく輝いているのである。我に戻ってふと彼は時計を見た。〇時×分だった。彼はその雰囲気を離れてそして床に就いた。しばらくは又楽しい思い出にふけていた。そしてしだいに深い眠りに落ちていった。

星のきれいな、虫が美しく鳴ぐ、ある秋の夜のことであった。

思う事いろいろ

各藤 哲夫

今年の十五夜——中秋の名月は雨にふられたが、八時半ごろうすい光を見せた。雨上がりの月は冴えていて、それに雨雲の時々かかるのは最高である。涼しさがなお一層落着きを増す。この単純な美は日本ならではのである。日本人として生まれてきてよかったと思う。

人間といふものは、自己のいままでのうちで最高の時を、本来の姿をみたがるものである、と思う。例えば、ある一つの人目を引くようなことをすると、いつまでも注目されているような気になることがあるであろう。人間などといふものは、元来大変小さいものである。自分一人いなくて世の中が存在しないわけではない、つまり小さいのである。こんなことを思いはじめたのは、二年の時のあのクラスの一人員として過ごしていたころのことである。そう思うようになってからは、大変気が楽になった。極端に走った、人に迷惑かけねばなにをし

でもいいと思った。しかし今は極端と中間との間にいて自由である。

二年の時は楽しかった。クラスの奴らがそろっていたし、失礼だが我々の生徒としての観点からいって、先生までそろっていた。それで二年の時はよく勉強をしなかった。それで今苦労している。しかし後悔していない。その代り恥しいが人間的には変わったと思っている。

夏休みに田舎へ行った。勉強をしにいったわけだが、実際勉強したつもりだがそんなにできなかった。その代り自分といふものがよく分かる気がしてきた。静かな所で一人で暮してみるのもいいんだと思う。これは楽しいままではいかないまでもいいやない出ではないだろう。

人間大切なのは、どこで身を引くかだと思う。高校になってこの時を大きく間違えた事がたった一回あった。その時の自分を思い出しみると弱の字が当てはまる。実際、出ることでより、引く方が難しい。どこで身を引くか、これがわかればこの人は君子である。

最後に、もう三年も九月半ばである。あと九、十、十一、十二月のみである。追い込みである。しっかりとやろうと思う。この言葉ももう二度といわぬようにたった今ここで区切りをつけた。——つけた。以上のことは自分自身への言葉であるからわからないかも知れない。わかれば幸である。

若者らしく

山下汎樹

現代国語の時間のことである。小林秀雄の「歴史について」で先生はその「歴史」の意義を規定しようと言って、例にジャガイモの歴史、草の歴史、カニの歴史、その他いろいろあるといった。カニの歴史、

我が風の国際的地位のためにも当事者や関係者が一日も早く戦場から会議のテーブルにつくように努力してもらいたい。

戦争が存在することは、私達にとって悲しむべきことである。一日も早く平和に暮らせる日が来ることを期待する。

現在考えること

市川明夫

ものは考えようとはよく言ったもので、ちよつとしたこと、なんでもないことまで、こちらのうけとり方によってずいぶん違ってくる。他人が自分になにかするとか、言うとか、そんな風なものでも、その人がきらいな人であったなら、同じことをしても、こちらにとつてはずいぶん違ったものに見えるし、また反面、こちらの考え方しだいでは相手の行為がよくも悪くもみえてくる。大げさに言えば歴史上のことであっても、考え方しだいで、どうにでもなるものではあるまいか、歴史は創作するものであるとなかにでていたが、そのうけとる人、その人のうけとり方でかなりかわつたもの（もちろん主観的であつてはいけないのだが、しかし）その人の考え方によって、ある事件に対しても、その人なりに見方が違ってくるものと思う。それと同じでこの世の中、自分たちの境遇、考え方によってずいぶんかわると思う。灰色の受験生活、そういわれているものにしたって、おとなたちがそう言うから、僕たちもまねをして、そう口にし、灰色だと思っているのではないのか、灰色だと思つてることが灰色ではないのか、僕は受験生活が灰色でないとは断定できないが（もつともこの世においてこうだと断定できるものは数少ないだろう）人生において、こうひとつ

その「カニ」という言葉を聞いた時、胸をさされたようにドキツとし、さみしくも感じた。「カニ」それはいつからだつたらうか、カニという動物の動物としての存在、いや「カニ」という言葉さえも忘れてしまつていたような気がする。

カニの他にも、私たちには幼年時代の思い出、いや生涯を通しての思い出であるかもしれない。自然の要素を数多く忘れてしまふこともある。しかし何かのきつかけで、ふとそれを思い出したなら、大いに物おもいにふけるうではないか。ただ自然の美におぼれることなく、人間として、自分自身を育てるためにこの遠い道程のため。

平和の探求

大石俊治

「平和は何にも代えがたく尊いものである」この言葉は、私達がしばしば耳にし、また私達の心に深くきざまれている。

しかし現在の世界を見るに、アジアだけに例をとつても、ベトナム問題、カシミール問題、台湾問題など多くの問題がいつはでるともなく山積みされている。アジアの一角に於ては、一日として銃火の交じわらない時はない。これらの問題は多く複雑であるが、この根本に流れているものは、資本主義と共産主義（アメリカ対中共、アメリカ対ソ連）の思想上社会体制の違いから起つている。これら二つの思想の究極の目的は、人類が平和で安全でかつ豊かに暮せることにある。手段は違つても目的が同じならば、もう少し高い立場からならんかの解決策を講じてもらいたい。特に日本は、アジアに於て唯一の先進国であり今や日本は大国である。また、日本は善隣友好のためにもさらには

の目的に向つて、いっしょうけんめいになる、ということとは、その人が好むと好まざるところにかかわらず、得るところが大きいと思う。もつとも受験というようなものが無いのにこしたことはないが実際問題として、すぐそこにあり、僕たちが当事者なのだから。そうして晴れて志望校には入れたなら、たぶんどんな人にとつても長い期間であつた準備期間をとおして、目的を達成したということは、その人にとつて大きな自信となると思う。灰色の受験生活、たしかにだれにとつても苦しいものである。だけどその中で結ばれる友情、部活動を通しての人間の結びつき、かえつてそういう環境の中で、つよくうかび上つてくるものだと思う。灰色の受験生活といつては、結局はその人の感じ方によるのではないか、灰色と思うと灰色、その人にとつても、灰色ということはやつぱりつまらないことだろう。灰色でない、そう思つたら、その人にとっては灰色でなくなるだろう。あたり前である。そういう風に考える。なるべくなら、この短い人生、つまらないこととはなるべく少くしてすこしいきたい。自分の気持ちの持ち方しだいでは、どうにでもなるものだと思う。人生とは何か、生きるとはそういうことを考へて、楽しくなる人は数少ないだろうと思う。いや、考えれば考えるほど人生のはかなさ、生きることの無意味さが強く感じられて、気を沈め、だけど人生そういうなことばかりではない。短いあらうが楽しいこともいっぱいあるだろう。だけどその楽しいことも、人生ははかないという事実の前には、楽しどころではないだろう。しかし、短い人生、はかないということにおされてしまつて、気が沈みっぱなしではつまらないではないだろうか。人生の目的、そんなものは、偶然生れてきた生命にあるうはずがない。そういうことを考え、沈んだ気持ちになつて時間をすこしいて何の得があるうか、他からみ

ても、進歩はないであろう、それよりも、もともと与えられた目的というようなものはないのなら、自分で目的をつくりだし、それに向って、いっしょうけんめいに進んでいく、そういう考え方をしたらどうだろう。いろいろ考えて、だいたいこんなことを考えていると、悲観的になってくるものだけれども、いくら悩んでみてもはじまらない。自分も愉快ではないだろうし、まわりにいる人たちもそう感じるであろう。いくら悩んでも、人生はいやだなと思ってみて、事実自分という人間がここにいるのだし、それ相応の環境の中に住んでいる。存在している。結局その中で自分なりの目的をつくり、それに向い、その中で楽しみたいものを楽しんでいく、それで満足していく、そう考えた方がりこう（といつてはへんだらうけれども）ではないだろうが、自分の考え方しだいでもなんでも、ほとんどのものが考え方でかわってくると思うが、自分が楽しくなるように、そう考えていった方がいいと思うし、実際、生活が楽しくなってくるだろうと思う、そういう考え方でいいのではないだろうか、僕は今現在そう考える。

可能性の追求

新藤久和

最近「可能性の追求」ということを考えるようになった。人間の生涯というものはすべて可能性の追求に帰するのではないか。人間が苦しむことも、思い悩むこともその原因にどこまで対抗しているか、その人の毎日毎日をもって実証していくほかはない。その過程において追求できなかったもの、放棄したものを称して人生の落伍者というの

であろう。可能性を真に追求するものは勤勉である。だから勤勉な人が好きだ。そして家の職業上大人への不信感がつのった。これは小さい時からであったが――そしてそれに伴う享楽のごときを異常なほどまでに忌み嫌うようになったことも勤勉な人に好意を持つことに一層拍車を加えた。いずれにしてもこの性格はこれから先も続くであろう。しかし勤勉な人に憧れる反面、次第に遊んでいる人を見るとなんとなく嫌らしさを覚えることの方が強くなってしまっている。これは恐いことだ……。

僕には小学校以来の大きな夢がある。その夢を達成する第二段階が訪れている。どうしても達成したいことだ。これからは一心にこの夢の実現を追求しよう。

台風シーズンに思うこと

林 幹雄

今年もまた台風の手前となり、もうすでに二つの台風が本土に上陸している。その一つはほとんど日本本土に影響を及ぼしその被害は予想以上のものであった。つづいて大型台風が後に控えて本土をうかがう模様であり、今年もまだ大きな被害がでそうである。

台風が来る時期にはいつも考えることであるが、このように恐ろしい台風をなんとかできないものであろうか。むずかしいことだとは素人目で見てもすぐわかる。また科学的に見ても台風のエネルギーは原子爆弾の十万倍位にはなるそうである。しかし、このままでいいはずがない。何とかしなければならぬはずである。さし当ってどうしろと言ってもどうにもなるまいが、おそくも今世紀内には台風の進路

を変えることができるくらいにまでいってほしい。長期計画を立て、国民の力を結集してこの問題を考えることが大事であろう。今後もし

何んら施策もなされなければ、この問題は永久に解決できないだろうし、毎年何人かは死なねばならないだろう。台風は毎年同じ時期に来ることがわかつている災害であるだけにくれぐれもなんらかの対策が立てられることを望みたい。

自然

内田憲正

私は毎朝五時半には起きる。睡魔はその心地よい綿の海から私をとらえて離そうとしないのだが……。乳色の霧が裏山一面を覆い、淡い

緑はいっそうその静を深くしている。雲は厚いが暗くはない。魚の背びれのような山の端が、明かるい一本の線を引き始めている。当然聞えてくるはずのテラーのリズムカルな響きも、しつとりと濡れた霧に吸い込まれてしまつて聞えてこない。今日は特別なだろう。動なる世界の静は、静なる世界の静以上になにか心にしみ込むものがあるようだ。

初夏の山はすばらしい。そのエネルギーな姿態は底から湧き上つてくるような力と、強烈で大胆な緑に包まれて、いっそうその若々しさを誇っている。春の山もすばらしいが、初夏の山とは比較にならない。私がまだ若いので、こうした山に共鳴するのかもしれないと思つてもみたが、老いも若きも野に山に跳ねまわるところをみると、やはり初夏の自然はそれだけの魅力をもっているのだろう。

そよ風にさわられて、白い葉波が谷から尾根へ、尾根から谷へと伝

わつていく。白い動脈血が脈打つたびに、夏山がむつと生き物のように揺れ動き、今度はブドウ園がサラサラと小さきみに震える。それに合せて私の心が調子よく踊る。まるで万物の大舞踏会のように。

晩秋の山がいちばん悲しい。冬の山にも感じられぬわけではないがそれには偉大なエネルギーをその奥底に秘め、今はじつと春の訪れを待つて、その生なる活動をおさえている胎児のような、神秘的忍耐が強く感じられるように思う。葉のすっかり落ちた木の梢は、暗いねずみ色の膚を冷い木枯になでられ、その残骸がむなしく舞い乱れるとき、私は自然のあまりの過酷さに腹を立ててみたりもする。

しかし私はやはり自然が好きだ。人である以上だれでもそうなのだろうが……。母なる愛に包まれてしばし煩しき生への執着を忘れるとき、私はいつも深い安堵の情にひたることができる。

私はかつて十八年の問生について深刻に考え、悩みぬいたことは一度もなかったように思う。私を取り巻く自然が、私をして深刻な問題を考えさせなかったのかもしれない。それに私は、生来早合点する傾向があることも隠せない事実だ。たとえば、私が志望大学を決めたのが中学二年の頃で、学部についてはもうだいたい以前のことになる。それに学科だつて中三の頃には決つてた。もちろんここに至る途上では、いろいろ雑念が入つたわけだが、そのたびに私はいつも人間の人間たることを忘れ、自然の自然たるものに我が身を託したものだ。そして自然の子として己れを省るとき、そこに新しい勇気が湧き上つてくる。結局のところ、私は今でも同じ希望を持ち続けている。私は、大学へ入つたら遊ぼうなどとは思わない。私は今以上に勉強しようと思うし、またそれが当然なのではないかと思う。大学は学問の場であつて、決して遊びの場ではないのだから。そして自然をながめ、自然

にひたることそれ自体を喜びとして学問に励んで行くべきではないのだろうか。

思うに、自然の中に生れ、自然の子としてその母なる愛にはぐくまれている私に、自然は偉大なる力のひとかけらを与えてくれた一道を、其すぐに突き進むことを教えてくれているのかもしれない。そしてこれから先、いろいろな迷路に迷い込んでも、結局またものと道を探り出し、その道を進まざるを得ないのだろう。生なる流れに逆わず、自然におのが身を託すとき、おのが身ははじめておのが自身になるのだ。

山はもうすっかり明かるくなり、初秋の緑がまた一段とはえて美しい。さっきの霧はどこへいったのだろう。

季

馬場富夫

自分の好きな季節がやってきた。秋の空は広いんだ。青い、青い、青空を、じつとながめていると、十億年の彼方まで、いやもつと遠い果てまでも、行つてしまふようだ。そしてふと我にかえるときどきがある。そしてちっさな自分をながめると、やはり青空は広くかつ美しい。冬といったら寒いのがいい。寒いときは寒いほどいいんだ。春になったたら犬と遊ぶ。動物はぼくの友達だ。そして、夏は嫌いな

事である。ここに「成せば成る」の理屈がわかつていても勉強はどうもだめ。こんな状態なので授業中は先生方に迷惑をかけた事をおわびしたい。「すいません」。「だがわがおかしな性質より学習以外の生活はおおいに楽しいんだ。しかし生活態度はいたってまじめで前科もなく彼女もでませんでした。（このでけないは誤解しないでください。）これから先、私がどんな人間となるか自分にもわからず、不安と期待の混じったものであるが、人生でつかく生きるように、心掛けたいと思います。しかしどうも大物には、なれないようである。こんなまとまりのない文をかくのも国語をしつかり勉強しなかつたのもさることながら、文才のないのも確かである。頭頂部をもつて、頭をしぼったが、できないのだから、ここまで字をうめるのが精いっぱいであつた。

高校時代

深沢正彦

高校に入学したのが、ついこの間のような気がする。それなのに今もう、卒業がまじかにせまっている。「早いものの」形容がびつたりする三年間。「高校時代をどう過ごしたか？」と先生に問われたら僕は、答えることにこまるだろう。それというのも、体だけは、一人前になったけれど他に何一つとして、満足に過ごせたものはない。一年の時は、高校とは中学の延長と考えていたから、いろいろな無邪気ですれにクラブに専念していた。勉強はもうろんお留守。そして一年がすぎてしまった。二年になる。この一年間は中学の延長とは考えなくなったが、あいかわらずであった三年。ついに高校最後の時がきた。

テーマなし

塚山彰夫

秋風の肌寒い夜、窓から見える甲府盆地の色とりどりの小さな光
下方に広がるブドウ畑の黒々した原。秋の虫が鳴く中で自分がどんな人
人間なのか？。自分にもつかみ所がない。ましては他人の目には「変
なやつ」に見えるだろう。さて朝七時たたき起され朝の一連の用事を
すまし汽車が駅内にはいつてから家を出る。（存じ勝沼はスイッチン
バック）今年の四月からの汽車通学まったくしんどい。

車窓の風景も見あき、目をとじる。塩山ここからラッシュである。回りの席を人がうめる。おつさん・サラリーマン・女学生毎日ちがう。これはあたり前だが今までそれらの人々の顔を見た事もない。目とじていたからか、いやわが小心なるが故であろう。とにかく町を歩いていても人と目があうことはめつたにない。だから知人やかわいい子も見のがすのが常で失礼な男と思われているだろうが、わが性質どうしようもない。甲府駅、ここがすごい混雑。のろのろやつと北口へ出る。ここから学校まで短い足をフルに使い、早や足でどんどん追い抜く。これは、せつちに加えて、一年半のクラブ活動できたえた足のおかげであろう。わが高校生活をふりかえりクラブが大きな地位をしめた。私が勉強嫌いなのでクラブに甘えて勉強らしいものをした事がない。いや今もその習慣で自覚まったくなくてあと少なくて一年半の受験生活が続くのである。ここに自分の精神的根性のないのを悩んでいる。勉強する気持になれる薬がほしい気分である。しかし満足できる事はないクラブのおかげで体力の限界にいどみ、中込へも連続で着けた

早いものである。この一年は、少しは入試ということを考えたがすべてうまくいかない。やつぱり僕はだめかと思う。……ざつとまあ、こんな具合いなのであった。修得したものといえば、クラブでの先・後輩との交わりで、人間的なものを、ほんのちよつぱりだけである。今ここで、僕がみなさんに「みなさんは、いかがでしたか？」と問うたならば、みなさんは、どう答えますか！きつと有意義だったという人が、大半だろうと思います。が、内には、ほんの少しの方は僕と同一意見の人もあると思います。その人は、自分みたいな人がここにもいたと思って、がっかりしないでガンバってください。僕もガンバリます。

高 校 生 活

田中 正二郎

高校三年間を経て、前二回の学年誌には有意義に高校時代を過そうなどと、偉そうなことを書いたが、ついに……。毎日毎日ばかに混んだ電車に押し込まれ、授業をうけ、また帰る。単調な毎日を繰り返して三年。

自分にいま少し心のゆとりと、積極的性質があったらと思う。ただ自分としてクラスにいや、学校全体に皆がもつと話し合えるふんい気があったらよかったと思う。休み時間などに、社会のこと、人生論などを話し合えたら、友達の見解、自分の意見を話し合うことで、互いに相手が理解しあえ、もつと楽しくすごせたとと思う。「三毛の使用の方が問題になったが、多くの人の心の中に早く帰ったほうが良い、という心が働いて、話し合う機会をのがしていると思う。残念なこと

に、自分自身その心が働いてしまったが。しかし今の高校では、キビシイ大学入試を前にしては無理ないとも思う。早くいまだ少し余裕ある高校時代を送れる時代がくることを望む。

不思議な時期

神宮寺 俊夫

「高校三年間」この時期ほど不思議な時期があるだろうか。中学から一種の憧れの様なものをいだいて入った一高であるが、その期待もしばみ大学という字に変わっていつしまった様な気がする。しかし今考えてみると全く当然の事である事が分った。一年の頃は、「どうして大学へ入る必要があるのだろうか」などというつまらぬ事を考えていたものだ。そしてそのつまらぬ雑念の為に試験の前の晩に勉強もしないで考えていたものだった。しかし二年三年と進んでいき、多くの受験雑誌や実際の大学を見るうちに無性に大学へ行きたい様な気がしてきたのである。それは何か高校で出来なかつた事を大学に行けば十分に出来るであろうという期待からかもしれない。しかし結局は二年二年と悩まされてきた雑念の為である事はほぼまちがいない。全く人間は悩まなければある事に対する大きな進歩をみる事は不可能の様に思う。しかしこれは決して自分がそれによって成功したと言っているのではない。結果は今からの事であるから。もう一つ思う事は俗にいうガリ勉の連中についてである。彼らは多くの友達とバカの様な事を言ったりして騒いだ経験はあまりないであろうと思う。人間は一人で生きていける動物ではないのであるから私としてはその様な事が望ましいとは思わない。これは決して負けおしみではない。むしろ

ち、偉大な毛思想を継承したい」「外国でもすり切れた服を気にしない。」「隣国に全く異質の国の出現は驚異ですぞ。

猿の国は奇妙な事がよく起る。二十年前までは神様だったが（雑だ？）戦時に活躍？した幹部がシャーシャーと××隊（全体必要だが）に復帰し（メシのためか）。機密をもらすサービスもする。元に復帰した中で最も出世した一人はA級××で首相になった、東大出の秀才（安保の見方によつては現代の井伊大老）典型的な不能率の官僚国家、大切な選挙と首相選出に聖徳太子が大活躍し、コネは入試から就職、はては大臣になるまでも、まいったよ／大学入試、これぞ世界に誇れる激化ぶり。青春のガンである。（さからうな）。十代の思想の幼稚さの原因で、ある種の宗教団体、右翼左翼の団体に若い人が多いのはこのためかな？ ああ、あさましき人類よ、おまえたちは内部に矛盾を生じ、崩壊するだろう。永遠の社会にいつになったら着けるのかな。すべては後生の偉大な歴史家、思想家が判定し、解決するだろう。

人の価値

笠井 貴久男

人間の価値は何によつて、決まるのだろうか。一人の人間が地上に現われ、そして、没するまでのあらゆる要素が有機的に、結合されて決まるとするならば、それは、一個の芸術である。しかし、未完の芸術である。なぜならば、完成された人間は、存在しないからである。言わば人間は、生涯をかけて像を刻む偉大な彫刻家である。しかし、その反面、この偉大な彫刻家は、最も非能な愚かな者であることを、認

めさましい学力をもつていなくとも、多くの人々と楽しく適合していく事の出来る人間の方が広い意味での人間としての価値は高い様に思われる。今からその可能性のある人達に言いたい事は好んで悩み、友達を多くつくる事である。残念ながらぼくには本当によい友達を見つける事は出来なかつたがその様な事のないように。

人間不在

田中 健二

「ギヤー」と異様な動物的な音が響き、太陽のギラギラ輝く東南アジアのジャングル。カアーボーイが、必死になって異常なほど腰の拳銃を、ベトコンというモグラに乱射している。そのむこうで獅子が怒って、二回ほどほえたら、黄塵がきれいに上った。離れた高い木の上で猿が何かにおびえながら、騒ぐだけでなすすべを知らない。カマとハンマーを持った赤いきつねは何か叫んでいる。この戦い反帝の神話になれるか。と、はるかヒマラヤの平和な地上の楽園でインド象があげだした。昔はカアーボーイと獅子は非常に仲好しだったが、民族解放の甘言のもとに中華共産思想の支配と拡大と、単純かつ狂信的な反共のものと半植民地化とで衝突。この善悪は立場の相違。獅子は民族の英雄―技師、皇太子、ジンナーの子―を巧みに指導しながら、眠りからさめ、古傷を治し、百獣の王となるために、立ち上がった。かつて獅子にひどいいたずらをした猿はあまり反省の色はなく、のんきにまたニソジンを掘り出した。獅子と猿のある人達のひとり言「僕は一流の大学と会社へ行って松下幸之助のような金持になりたい。」「外国で肩身がせまいから、勲章復活を」「人民と国家のために役立

識しなければならぬ。なぜならば、彼は像を刻みつつも、それを意識していないからだ。そして、ヴィジョンをこの世に再現すべき、大理石は、刻々と消失しつつあることを知らない。多くの人間は、必然的にこうした運命をたどるのだ。然るに、人間的価値の大小は、「像を刻む意識」にかかっている。価値ある人間とは、最も広い意味にむける「自由、平和」の願いをこめて像を刻む人であり、逆な人は、「争い」の像を刻み、多くの凡人は、何れをも刻みそこねるのである。

理想と現実

広瀬 耀

何かある問題に出くわし、やがて、それがたやすいものではないと知ると、我々はすぐに「理想通りにならないかなあ？」と言い、その問題に対し、一通りの努力も惜しみ、ただ、その現実を嘆き、そこから逃避してしまわないか。

我々は、ややもすると、すぐに現実から逃避して理想に走りたがる傾向がある。何もここで、理想を持つのは、いけないというのではない。理想を持つのは、大いに結構である。理想の無い現実家には、真の幸福とは、およそ縁が遠いであろう。彼らにあるものは、利害関係、成功、不成功であつて、心の中に生まれる幸福感を、彼らは知らない。

しかし、また、現実を忘れて、やたらに理想ばかり追うのはよくない。現実は大切である。現実が無かつたら、我々の理想は、うどの大木のようになり何処まで大きくなるかわからない。しかしそれは、結局ふくらみすぎた風船玉のように破裂してしまうだろう。もし、我々

の苦しみや、努力を待たずして、しかも、すべてがすべて理想通りになり、理想通りの生活が送れるとして、はたして、それが幸福であると断言できるであろうか／＼ もし、あるとしても、それは無味乾燥なものであって、僕はそんな幸福は信用しない。苦しい現実を克服することによって、はじめて、幸福になり得るのではないのか。

我々、若者は現実をみつめねばならない。現実とは空想的理想に相反する。時には無情であり、また時には残酷である。しかし、現実是我々の実力を生かし、人生のよき修練の場となるであろう。

我々、素晴らしいエネルギーを携えている若者は、ジャズを聞き、踊り狂い、あるいはドライブをして、若さを発散させるだけでなく、苦しいかもしれないが、もっと、そのエネルギーを現実の世界へ向けるべきではなからうか。

以上のこと、もつともらしく、えらそうだけれど、自分が改めて認識したことを述べてみた。

人と人間

二葉 加代

人と人間の差異は何か。人には「間」がない。故にまぬけ。こんな答えはだめ。私は「人間」は広い意があると考えます。「人間ですよ／＼」この句について考えると。まず「畜生ではない。」意があるでしょう。つまり最高の動物・唯一の理性的動物としての人間です。考え悩み楽しむ所に人間だけに与えられた生活がある。しかし私はこの人間を忘れがちです。他人本位な、時間に追れた日々、自己を失った生活です。犬にも劣った、この生活を反省し、この人間を自覚し実

眠れぬ夜の歌

内藤 素久

夜。すべてを包みかくす夜。それは僕自身ほんとうの人間にもどれる時である。真昼、太陽の下でさんさんと輝やいたすべてのものーおそらくそれらはすべて虚、あるいは無に等しいであらうーをかなぐり捨てた裸の自分が容赦もなく非難をあびせかける。

まず僕は問う。今日までの一日「日」を。この地球、いや大宇宙を織り成す一つの法則ー生命の法則とでもいうか！に反してはいないか。僕は答える。それが運命さ。『運命』『静かに考える。そしてそれは一つの都合のいい話にしかすぎないことを常に思う。けれどこんな時には他に答えるすべが見つからないのだ。僕は常に嘲けられている様な悲しい問を背おって生きている。』生きる？！そう、生きているのだ。何の為に？。……！？ この問に対しては何人たりとも答える事は出来ないだろう。人類発展への貢献をする為。結構。だが人類も不滅ではあるまい。不滅ではないものに貢献して何の役に立つのか？ この時僕の頭の中に一抹の不安が。やがて僕も死ぬだろう。いかなるものからも切り離されて、冷たくなつた僕は冷々とした墓石の下に入らなければならないだろう。いやだ？ 淋しいじゃないか。クリスマスだって、正月だってありやしないんだ。夜よりも静かで、暗くて、深くはかり知れない暗やみにとざされているんだ。いやだ／＼

この刹那、この刹那こそが、僕自身いや人間というものの弱さ、はかなさを暴露する時なのである。こんな時にこそ僕は歌う。大声で、

ああ、青春よ／＼

ああ、うるわしの薔薇の咲く頃よ／＼

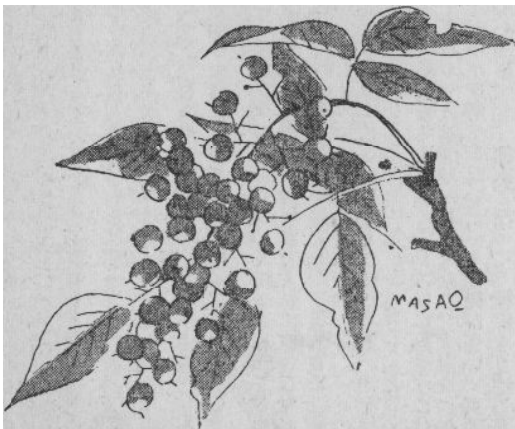
やがて眠りの神が枕元に来て暖かな手でそつと六千六百二十三回目をなでてくれた。

行する所に救いがあるのではないでしようか。次に私は暖みを感じます。互いに励し、たすけ合う。博愛の心を持ち、思慮深い人間です。この人間らしい暖みを各人が持てば、この社会は理想以上のものになるのは必至でしよう。でも、今の社会はこの人間があまりに少なく、

偽善者が多いのではないでしよう。宗教・教育・家庭あらゆる場でこの人間を養育していくべきでしよう。次に不完全の意があるでしよう。いわゆる「弘法筆の誤り」と「猿も……」（いや、あの人、そ

う）「猿」でした。ここに、いくら努力しても完成は望みえないというあきらめを感じますが、よく考えると、この人間が歴史の原動力ではないでしようか。失敗がゼロ。このゼロへの挑戦が人生広くは歴史であると思います。他にも多くの意があるでしようが、それらをすべて含んだ人間に近づくには、何をなすべきでしようか。私は自分の持つ可能性を出し切る事と思います。可能性は義務につながる。自分が他人社会に対して幸福にしてあげられる力をもっていたら、それを成す事は人間である義務となるでしよう。食べ物を持つている人が、うえ死にしそうな人を見すごしてはいけません。このために私は可能性を可能性として存在するものとししないで、実行できるものにしよというのです。一個の人間のもつ可能性をすべて実現するには余りあるでしよう。だから一生努力し、努力を重ねてもしすぎる事はないのです。私が考えるに「努力」が「人間」なのでしよう。寒さにふるえた者ほど太陽を暖く感じるし人生の悩みをくぐつた者ほど生命の尊さを知るでしよう。十七才は一度だけ。青春を有意義にすごしたいです。しかし、受験生活はしんどいですね。

ああ／ 世界を動かさんと欲するものは、まずみずから動くべし。





8

語学の中でも、英語は特にむずかしいと言われる。たしかに、大家といわれる人でも、少しは解ってきたような気がしないでもないなどと言っても、なかなか英語がわかると認めるようなことはない。勿論、これは程度問題であるが。

三年生は、比較的むずかしい教科書を学習してきた。生徒の立場にたつと、その苦勞がよく分かる気がする。しかし、その勉強ぶりや、理解力には、感心している。私の様に、戦時に若い時代を過した者にとつては、入試の是非は別として、現在のように充分勉強出来る時代に生きている生徒諸君をうらやましくさえる。

語学は、何といつても、そのことばに接する量に比例して上達するものである。この面では、入試に追われて、教科書以外に落着いて読書する暇がない現在においては、語学は大きい打撃をうける。読むものは、教科書と入試に直結した参考書や問題集にかぎられる。骨格だけで、肉をつける余裕がない。これが、入試における理解力の不足となり、役に立たない英語と非難される原因となるのであろう。語学力をつけるべき絶好の機会をのがしてしまうのは、残念である。

語学は、樽をおして、坂道を上るようなものである。途中で手をはなすと、樽はごろごろと下りはじめる。手をはなしても樽がおちないような、第一の頂まで、とにかくいきたいものである。

学生時代に、「寄らば訳すぞ。」式態度をつよく戒められたものである。英文とみると直ぐに日本語に直さずにはおかない態度である。結局、日本語に直すにしても、その課程についての注文であらう。入試問題が長文になり、大意をつかむ傾向にあり、この面ではかなり改善されている。国語でも、現代文の問題でなかなか理解出来ないと嘆く生徒が多い。英語について要求することが余りに高すぎるのだらう。その結果、刀折れ、矢つきて心ならずも、拙訳となつて、模試をうけることに劣等感を味わうことになる。しかし、これは教育制度全般から考えるべきことであつて、学習者個々の能力が無いというわけであつて、学習者個々の能力が無いというわけではない。選抜の手段として、強引に使つていと云つた方がよい。

これからの大学生活、実社会の生活の中で充分能力をのほす機会があるのである。心配無用である。語学は種々の学習の鍵である。どうか、その山頂をきわめるべく、不断の努力をつづけてもらいたい。

この文を書くのが、丁度強行遠足の直前になつた。黒々と横たわる七里ヶ岩の長いこと、信濃境の農家のかまどの火のなつかしき、柿の栗の豊かな色彩、純心なるひたすらなあゆみなど、二十余年前の記憶がよみがえつてくる。



雑感

組主任 保坂知己



人生への門出

藤本幸永

災難

雨宮弘治

一年の時は、二、三度自転車がパンクしたことがあつた。それ以来一度も、パンクしたことがなかった。これはクギが道路に落ちていることが少なくなつたとも思える。だから、最近、パンクのことなど考えたこともなかった。

ところが、きょう。パンクに出くわした。それも、普通の単純な天気（雨なら風を伴わない）ならまだしも、きょうというきょうは最悪であつた。なぜならば、台風の影響があつて、風・雨ともに強かつた。しかも、風の為傘がさせなくて、風が強まりつつあるときであつた。

一刻も早く家にたどりつきたいときであつた。学校から家までの半分の距離まで来た時、後のタイヤがゴツン、ゴツン、ゴツンという。パンクらしい症状を起こし始めた。雨にぬれながら、ポンプで空気をつめれば家までもつだらうと思つたが、それでもタイヤをみると、そんなまよやさしいものではなかった。この前の台風の時にも使つたと思われるような、あまりさびいてない一寸クギが、タイヤにブスリささつていた。それも、ゴツンゴツン之いう症状まで気がつかなくなつたから、全部タイヤの中に入つて、かさの部分だけしかみえなかつた。やつとのことでそのくぎをぬき、自転車屋にたどりついた。シャッの袖からも帽子からも水がしたたり落ちた。ラジオが台風の影響の強まりつつあるのを告げていた。一刻も早く家にたどり着きたい時であつた。まさに『災難は忘れた頃にやつて来る』ということわざを実証させられたという感じであつた。

希望と大志を抱き、
今、母校の門を出んとす
糸をたぐれば
三年間の思い出が
走馬燈のように
目の前に浮かんできて
つきることがない
思い出よ
永遠に私達の心の中に生きよ
卒業して行く我等の前に
新しい朝が待っている
そこには、真実の一道が続く
若人よ、希望を抱き
未来への道を進もう

すばらしいもの

田口幹夫

一高の行事の中でもっともすばらしいものだ、と感じたものがある。それは徹夜で行われる行事、すなわち強行遠足である。なかでも特に、一年の時のものが今でも強く心に残っている。夜九時、まっくらの時学校を出発して、野辺山へ着くのは明け方であった。夜通しで起きていたことさえない僕が、夜じゅう歩き続けるのは、とてもえらいことだった。そして松原湖に着いた時に、ついにここでやめようと決めてしまった。足も痛くなっていたので腹をすえて相当の時間休んでいた。しかし僕が休んでいても、ほかの人は前へ前へと進んで行く人達ばかりである。越されるとは残念だ、と思って、また立ちあがって歩きはじめようとした。が、足が痛くてうまく歩けない。しかし足が痛いのをこらえてよいしょ、よいしょと進んでいった。この時とはとてもえなかった。今までで、いちばん苦しい経験をしたのはこの時だったといつてよいであろう。強行遠足がなかったら、この苦しさを感ずることができなかったと思う。この経験をさせてくれた強行遠足。すばらしいものだ。

今思うこと

松木 毅

今の僕の生活は、8時15分に起床、顔だけ洗い、朝食もとらずに、学校に駆け込む。それも先生の5分程遅れて来るのを見込んで行くの

である。それ故、時には勘が狂って遅刻したりする。まったく、大きな声では言えない様である。授業が始まると、時々先生に指されるが答えることができずに、恥をかき、自分の学力のなさを痛感させられる。家に帰っては、テレビを見ることはあっても、新聞の政治欄などには目もくれない。机に向つては、やろうと思う事の半分もできずに居眠りを始める。まったく劣等生の代表というところである。これと似たような生活を高校三年の今日まで続けてきたのである。

クラブ活動もあり積極的に参加しなかったが、ふりかえてみると、クラブ活動とは、非常に楽しい思い出となるものである。出来る事なら、だれもがクラブ活動に入り、高校時代の良き思い出としてもらいたいものである。もう高校生活もあと半年となり、大学受験の日もだんだんと近づいて来る。今までの生活を大いに反省し、残された高校生活を悔いのないものとするよう、努力したい。

無題

井口 潔

「高校生になったらクラブ活動で頑張ろう。」と思って入学してまもなく入部した。毎日頑張った。すこぶる楽しかった。自分の望むところができて満足であった。学習の方には我ながら自信があった。過剰であった。それがあだとなり、不勉強も手伝って不本意なところに甘んじなければならぬハメになってしまった。天下の名門も熱望から切望へ、それから絶望に至ってしまった。「スタートさえなければ上位をまちがいなく走る馬なんだがなあ」と、あるいは「『井の中のカワズ』だったのかなあ」と考え込む。そして三年間を棒にふった。

いやそう考えるのは大きな誤りであろう。人生を長い目で見た限りにおいては。しかし少なからず現在に於いては真実なのである。三年年になって再度、目標に新たな希望を抱き日々精進の道を歩む。過去の自分を反省しつつきょうもまた二歩、一歩確実な道を進む。それがどんなにけわしい道であっても苦しいことを知らない。生まれて十七年という間に苦しかったことを知らない僕。それ程無神経なのか。僕の考える限りに於いては僕の未来には偉大なる何物かがあり、そこではじめて苦しさを味わう。それをのり越えた時はじめて僕の真価が発揮できるのである。そしてその時、棒にふった二年間を心からよこんで生かすことができるであろう。かの偉大なる、尊敬すべき政治家であったケネディは言った。『およそ一個の男子として、祖国の自由と憲法を守るために苦しみ、倒れるのであるならば、苦しみすぎるということはないのである』。

僕の異なるところである。

はち

秋山孝男

この二年半、まったく「はち」には御縁があった。心おどらせての入学式の日、まっさきに目についたのが「はち」である。教室には私と同様「はち」に縁のあった友がいる。ただし男子ばかりである。それゆえ、この「はち」は、力強く、たくましい「はち」となった。一年間この「はち」のもので、大いにさわぎ、ちよっぴり学んだ。野辺山にいった時も、身延山に行った時も、この「はち」は、僕達といっしょであった。共に力強く、たくましく一年を過ごした「はち」に

縁のある同僚と別れたあの日、これで私も「はち」とはお別れかと思つた、しかしそうではなかった。「はち」が私を氣にいつたのであろうか。またも「はち」と共に一年間過ごすことが決定した。しかし前の「はち」と異つて、ぼくの心をうきうきさせる「はち」であった。この「はち」のもとでなら、もう一年「はち」でもいだろうと思つた。この「はち」に縁のあった、同僚の中には前にも私と共に力強くたくましい「はち」のもとで遊び学んだものも数人いた。しかしその同僚達もぼくと同様たくましく力強い「はち」のもとであったようにあばれ、さわぐわけにはいかなかった。「なぜかって。」この、心うきうきさせる「はち」の同僚に女子がいたからである。やはり男である。修学遊行、校内球技大会と、この「はち」のもとでたのしく上品にすごした。そしてこれらの同僚と別れ、ことしこそは「はち」以外のところへいってほしいだろうと思つた。しかし三たび「はち」のもとで一年間をすごすこととなった。しかしあまり悪い氣はしなかった。なんといつたつて「はち」は未開きで縁起がよい、ぼくと同様よくよく「はち」に縁のある友も一人いた。この「はち」はふたたび力強さと、たくましさを取りもどした。それにもう三年生、勇ましささえも感じた。今この「はち」のもとで大いにさわぎ、高校生活最後の年をたのしんでいる。諸君はこれらの「はち」がなんであるかすてにおわかりであろう。チクリとさすあの「はち」ではない、そのとおり、七に一を加えた「やつつ」のことである。すなわち私が三年間「八組」であったことを意味している。ここでもう一つつけ加えておきたいのは何も高校生活において「はち」に縁があったわけではない、この世に生をもったその日が「八日」すなわち「はち」なのである。

希望いっぱい

保坂哲也

僕等は今や十八才。これから二十世紀後半という、人類の存在について最も変化があると思われる時代に飛び込んで行くのである。自分をためす材料は無限にあり、僕等を必要としている。しかしそれらはかつてのものより今の人達にとっては重大でかつ困難であるために、今のように自分をなだめすかしているような生活をしている僕等には不可能に思えてくる。しかし今からが大きな望みを抱き、青春の本当のエネルギーをたくわえて行くことが必要ではなからうか。そうしてはじめて、校長先生が言われた「君達の青春はみどり色である。」という言葉を卒直に受け入れられるのではなからうか。まだ自分の青春を悔やむのははやすぎる。今耐えぬく事をやめてはいけない。機械の機械になることはあきらめから始まるのだ。僕等は討ち入りのあと切腹するのならば別だが。

分裂症気味

宮坂紳一郎

今から書くことは約一学期間のことを僕は手帳からぬき出してみたものだ、だからこれを九倍するとこの三年間が出て来るかも。

灰色、赤、そして青、僕はやつと五才、パチンコ、十七才はダメ、宝くじ、あせらずゆつくり、重荷、何も考えない、消ゴム、靴下、校長、メガネ、それから担任と俺、二十六秒六のストップウオッチ、計

て、結晶は、ぼんやりと過してしまった。あの頃の思い出の中で、後悔するに当たらないものという、身延の合宿だろう。外は雨で条件

は悪かったが、それを打ち消すかのように、激論をたたかわず、紅潮したその顔は、若人の意気で燃え立つかのようだった。恥かしいことだが、私は小度胸のために、結局、一言もいえずに終ってしまったが私も思い当る話がないでもなくて、日頃の劣等生たる私が、仲間と同じ世界に立っているという喜びにひたることでできたのも確かにこの時であった。

あの頃のもう一つの忘れ難いものという、応援団ブラスバンドにはいったということがある。良きにつけ、悪しきにつけ、手を取り足をとりにして指導(?)してくれる上級生に、接し得たということは、この三年間を通じての最大の収穫であると思う。思い起してみると、真面目(?)な上に単純な私は、寒い朝も、よせばいいのに、冷たい楽器を手にしては、あの大きな金属製の物体が暖まる程、練習したものである。それ程、夢中になったのを、一度として後悔などしたことはないのだから、今私が劣等生なるも、いたって当然なのかも知れない。

こんなわけで、「我が道を行く。」式に三年間を過ごしてしまった私ではあるが、思い残すことが一つある。新しきよき時代に、ひとりのガールフレンドさえ、もつことができなかった事である。恋とは恐るべきもの、とはいっても、授業が私を追いかけ回す様だった毎日を片時にしろ、明るくさせる様な恋を見たものだ。それができなかった私は、やっぱり内気でいくじなだったのか。

私の高校時代、どうやら後味の悪い思い出が、多くなりそうだ。この位にしておこう。私：劣等生………奇跡を信じましょう。

算尺がゆるくなってきた。早寝早起き、準備、ネオンが赤い、炎色反応は緑、ポップコーンを食べる。ケンカは日本語、コカコーラとシルヴィーバルタン、長い雨、ポツンピチャ、今空が青いのは悲しいから雲がとても厚い、用務員のおじさんが黙って紙飛行を拾っている。皮肉屋は僕だ。絶望感はない。ねむい、自毛が一本ある。水道のカラン。エビゴーン、白い牛乳はうまい。若い蝶が目にしみてとてもうれしい、速くへ行こう、僕はたった一人の雀、雀だつて逃げる、苦しい、青い空、あのはげ頭め、ほう歯が欠けた。暑い、アンバランス、青い蛇、禁煙で書いてあるのに、雲を呼ぼう、その一步を知らない奴が世の中には意外と多い、虫をつぶす。心臓の動悸、僕は空っぽ、誰にも支えはしてもらえないから、ロジックな空気、薄す曇り、日進月歩、幼稚なものも大人びたものもつまりは人間のなす業、勉強もしないで政治など、健康な人間の位置づけ、そんな気はないんだがやはり本能かな、汗、パンツをとりかえたい、今日は三りんぼう、憤りのない僕は十八才じゃないね、オデン屋の鐘が言つてる「そんな事俺の知った事か」とにかく今が大切、先生の冗談も今の俺には皮肉に聞える。

笑えない、久しぶりの映画と涙、学生としての姿勢、自分がいやになるのかな、気力なし、蟬は可愛そうだ、一週間の光の為に十年以上を土の中でくらす、僕はついてる、その点で。

頑張らなきゃいけない、人は一生に一度位何かに夢中になつてもいいものだ。

(劣等感の)：思い出すまま

斎藤省三

高校一年生：あの頃は若かった。遊ぼうか学ぼうかとさんさんともめ

精神分裂症

橋爪元司

この三年間充実に過した日はたいへん少なかった。一日もなかったと言ってもよくらいだ。印象に残るものは、何一つないのである。いつもこの作文を書く時には、今度は何何をしてやろうという目標だけは持つのだが、今は持つことがおつくりのような気がする。なるようになれ、ケセラセラだ。

しかし月日のたつのは早いものだ。背後には受験というおもしろくもないものがあるからよい早く感じられる。この月日の立つのを遅く感じることが出来るには、どうすればよいか。ぼくにはどうにもできないようだ。しかし、これをするのが合格への道だと思う。なぜなら、後に何か楽しい事があるかのように、大学への希望と期待に満ちあふれていて二瞬一瞬を充実に過してける証拠にちがいないと思うからだ。

反省

内藤雄次

一高に入学してより、すでに二年半になろうとしている。大学入試も間近に迫り、今までの不勉強を後悔する日々が続く。刻一刻と運命の時が迫り来るのに対して、これといった手段がないのは、ほんとうにつらい。私には、まだ入試の真の厳しさが分つてはいないようだ。

でも近ごろはだいぶ身にしてみてきた。一、二年のころには、一年ぐら

い浪人して、入れたらよいだろうと考えていた。でも、最近その考えが変つてきた。どんなことをしても、浪人をせずに、と考えるようになってる。もつと早くこの考えに到達していたら、と思うと残念である。とにかく、一高に入つて、不十分ながらも勉強に心を傾けたのはよかった。

ある孤独なる者の独り言

宮沢雄二

俺は今確かに何人かの友達と居るはずだ。だのになぜこんなに孤独感に襲われているんだろう。俺はやはり孤独が好きなんだろうか？確かに自分「人である時ほど、自分が自立していることが良くわかる時はない。しかし俺は孤独な時ほどかえつて人間というものが好きになる。しかし人間が好きになればなるほど個人というものが嫌いになる。

そんな俺に近づいて来る奴はだれでも、俺の敵なんだ。「浮び上がるためには、まず沈まねばならない。ならば個人を好きになるためにはまず個人を嫌い個人への望みを一旦は絶つことが必要なのか？

俺は天邪鬼的性格を持つている。人がこうだというと必ずその逆を考えている。

だから人間を、個人を嫌っているのか。

[Einsamkeit・du mein Heimat Einsamkeit]

詩

俺

小牧 一民

頭でつかちの青びようたんが
きょうもまた一人押し出されてゆく
泥水を扱い全身が汚染している
その醜態はまさに地獄に魅いられた
一匹の獣である。
灰色の生活に酔い 自分に敗れ
回りを照らしてくれる唯一の灯も
自からの手で消してしまふ
同類の友と戦い
敵となり悪魔となつて勝利を得ようとする
そして敗北者となつては小虫にいたり
勝利の晩には百獣の王と化す
真を知らずしてただ「虚の勝利」を取るために
暗闘をさまよい挑戦してゆく
狭き門をぐぐり抜けようとして
自分を小さくする
あいつも泥にまみれて
遠く流れていくだろう 流水のごとく。

丸木橋

坂口和彦

激しき流れに、丸木橋がかかっている。

ぼくは、それに足をかけた。

進もうとしてもこわくて進めない。

一瞬の油断は死を意味する。

しかし進まねばならない。

もうわたりきつたものもいる。

目につむるわけにはいかぬ。

そうだ。落ちつくんだ。

さあ、落ちついてもう一歩だ。

人生もこの丸木橋のようなものではなからうか。

落ちついて着実に一歩一歩進んだものが最後に笑うのだ。

ぼく達はこれからの人生を真面目に一歩一歩進もうではないか。

・・・・・・・・・・・・・・・・

嵐

佐藤吉元

東の空から、むしろ黒に近い灰色の雲が、風にフツと吹きちぎられて、そのところどころに、日の光はとてもないけれど、明るい空をのぞかせて、駆け足でやって来る。先刻から続いている雨滴がそこかし

こを打つ音楽は、嵐になくってはならない嵐が木の葉をたたきつける音の欠けている今も、少しも私をたいくつさせはしない。あたりがしだいに闇につつまれて、きのう、西の山ぎわに、晴天を約束する赤と金の帯を見たころには、嵐をむかえる仕度に、あわただしかった家々も準備をおわつた満足にほつと一息して、いま始まろうとする嵐の夜を少し不安げに体を堅くしてじつと待っている。――私にとつて嵐の夜の不安は、しかし、生命をおびやかされる恐怖というよりも、夜への漠然とした畏怖とでもいうべきものだ。そして、むしろ嵐の夜に不思議な親しみさへおぼえる。それは人の感覚をはるかに逸脱した得体の知れないものに對する尊敬の念であらうか、大自然の力に對する、その中の小さな人間のよせる信頼であらうか。吹雪の夜にベチカの側でひざの子に物語をきかせている若い母のいるへや。そんなあたたかさをも私は嵐の夜に感じるのである。そして、このあたたかさ、親しさの故であらう。嵐の夜に私はふだんよりもいろいろな事、生命やら存在やらといったものごとをたくさん考える。これは、嵐の夜のたのしみであり、かえつて、嵐の夜に親しみをおぼえるゆえんでもある。

――不安のうちに眠りについた家々は、すずめの声に目をさます。壁に窓わくの影をビシッと打ちつけているまばゆい光、葉の先にのこつた露がその光を受けて七色にかがやいている。雲の一片さえない、青い明るい広い空は、すべてきのうまでとは、まったく別の世界のものであり、地面にちらばるところどこころ土にまみれた小枝や木の葉さえ新世界とみごとにけあつてゐる。ようやく目をさまし、戸口に立つたこの世界の住人達も、この世界の明るさ、空の明るさと、雨にあらわれた新鮮な空気とに、思わず大きな深呼吸をして、きょうほ、何か良いことに出会いそうだと思つてゐるのである。

夏の散歩道

千野 一男

夏休みのある一日でした。朝起きて部屋の窓を開けるとすがすがしい、さわやかな朝風は、僕の絶ゆまぬ若さをどうにもならないほどに魅惑してならない。どうしてなんだろう／何がそうしているのか？ そうだ。何かすはらしいことが自分に降りかかって来るに違いないと思つた。すると心の中から「外に行こう、散歩はステキだぞ」と僕を刺激した。何かステキなことがありそうだななどと思ひながら、自転車のペダルを走らせた。町から町へスイスイと自転車は走る。グリーンヘルト、町並木、商店街あらゆるものもいつも見られるありふれたものだけれども、全くすはらしく新鮮であつた。これはすはらしい発見だつた。気を良くして、自転車は、油をさしたわけでもないがいつもならなかなか進まぬ道もスラスラスイスイと気持が良い位に進んでしまふ程であつた。何事についても気分の良い時はうまくいくものである。勉強もそのとおりだろう。

進路

田中清隆

おれは建築や土木の方面へ進むことに決めた。なぜそれらを選んだかという、会社の事務のように一日中机に座つて仕事をするのは自分の性に合わないし、好きでもない。また自分をそれらのいづれから荒つばい中で、おれの気の弱い一面を強く（この場合の「強い」という

とは、授業中に内職をして気配の感じ方を訓練したり、眠つて日を休ませることらしい。この実践者も多いから我が校の合格者数も増すだろう。

向山 隆

本校の生徒、特に三年生の大部分の連中は、大学に入りたらしいくそれ故に勉強しているような顔をしているが、連中の考えていることは自分のことも考え合せて大体察しがつく。つまり勉強しないでも入れる学校はないか、ということだがそんな学校はあるはずがない。

そこで日本国の政治家の皆さんのお力を一寸お借りして新しく大学を五十校ばかり新設してもらふと万事とまではいかずとも二、三事はOK。本校のみならず全国の学生の夢がかなえられるということになる。ところがここで日本ならではの問題が一つ。あまり金がないのに天皇の家は建てるし、自衛隊は養つてるし、汚職はするしというので学校までは金が回つてこない。金がなくては学校は建たないし、「えらい時勢に生まれてきちゃった。」と思つてもどうにもならない。悪いことに使う金じゃないんだからもう少し考え直してくれてもよいと思ふし、又そうした方が高い知識を身につけた？人が多く社会に出て自衛隊なんぞによる力の均衡によつて支えられている平和よりも一歩進んだ平和が訪れると思うんですが。

ことはあまり好ましいものではないが）したいという願いからでもある。

ここまで言つてきたことでは、単に自分の性に合うとか、自分を強くしたいという理由で、それらの仕事に真に好きということではないが、しかしおれは建設現場があると、見に行つたり、出来上つたビルディングを見るのがいくらかではあるが楽しいから、やはりそれらが好きということになるであらう。

こんなわけで今はそれらの仕事につきたくて、はりきつて（！）勉強している。

最後

原 重昭

私は作文が苦手である。そんなわけだから暇がないという典型的現代人は、斜めやいや横に読んでもらいたい。横の方が短かいもの。この学年誌の原稿の最初の「最終締め切り」は、二十日くらい前だつた。それから幾度か「最終締め切り」があつたが、先生の語調からこれがほんとの最後らしいから、やつと書く気になつた。一般に、最上級の修飾語句のついた言葉は、割引いて考えた方がいららしい。先ごろの新潟地震の時も、「全」という言のあるうわさはほとんどどうぞだつたそう。今、私達は入試のことで先生と個人面接をしているが、先生はたいしたものでも最上級の修飾語は使わない。まああえて使うとすれば、「絶対落ちるだろう。」ぐらいになる。割引いて考えれば、試験当日、自分の頭がさえるか、天気つまり明るさと受験番号の具合により目がさえるかすれば良いということだ。後者のための試験勉強

夜空

山本武彦

九月、空のすみきつた夜に外に出て、空を見た。望遠鏡を空にむけて、あちこち、動かしていると、星団の薄明が目にはいつてきた。門灯で見にくかつたが、その光をさえぎつたときに、目の前にバツと、あらわれたのだ。それは、其黒い壁に、たくさん穴があいていて、その壁の、むこうがわの、つめたい光が、その穴をとおして、こちらに進んでくるようだ。それはだまって、しずかに、つめたく光つていた。この様子は、なんとも、いいようなない美しきを持つていた。このときのことを、今になつても、忘れられようか。

散歩

小林幸博

朝まだ薄暗いうちに、荒川の土手に、散歩に出た。だんだん奥行きを見せて来る。明け方の景色を見たかったからだ。

時間がたつにつれ、空の色もだんだん白がまぜられ、暗い青から、ついに白色へと変わつて行き、世の中が、少しずつ広がつて行く。

朝の空気は、昼のどつかりと重苦しい暑さを全く感じさせない。ただ、細い道に、まわりからのぞき込んだ草が、足にまといつき、それについた露がかかつて、くる節のあたりがかゆいのだけが小にくらしい。

川は、長く降り続いた雨で、一層早さを増し濁った流れが、とり残された砂州を小きみよくよけ、兩岸の曲線にそって波を立てている。

歩きながら、こんなことを考えた。今、自分が何の苦しみもなく、スーッとこの世の中から消えてしまうことが出来たら、そして自分が存在したとか、誰の記憶にも残らなかつたら……。しかし、すぐに馬鹿らしいと思わせるもう一人の現実主義の自分が、姿を表わす、そして言う「早く帰って勉強しろ」と、この言葉の前には、本当の自分も、よいけなことを考えて、散歩などしている余裕が見せられなかつた。(七月のある日の日記から)

津田君

佐藤 衛

津田君は「希望をもつ。」という言葉に常に不安をいだいている。「いやだいやだ」といつているうちに希望がなくなつた。無闇に希望をもつてと言う人は畢竟「ダルマは倒れても倒れても立つ。」と言う人にきまつている。そして町中を胸を張って歩く。フツと気がつくとあたりがけむい。窓をピシッと締めて皆赤い顔をオーバーの中から出している。タバコを吐きながら話をしている。津田君は席を離れていそいでデッキに立つた。風は非常に冷めたいが一人心持ちがよかった。ただその時も汽車は走りつづけていた。



忘れたいがため旅に出向き、旅は絶望からの逃走であり、自殺の代用となることがある——なんていつた恐ろしい目的をなにかもって旅に出たんじゃない。

足の向くまま気の向くまま、それに汽車に乗りたい気も手伝つて、その旅の目的をキザにカッコずければ、孤独を楽しむため、「秋は孤独を愛する季節」とやら、こんなのやめたと……。ともすれば黙殺されてしまいそうなちっぽけな駅に僕を落として黒い長い物は何知らぬ顔でいつちまつた。あとには二本のレールが光り、そこを駅員が横ぎつたあととひっそり……。やがて僕も寂しいあてのない田舎道を歩き出す。この道はきつと果てがない。でも自分だけの道、人生という奴には果てもあろう。玉手箱をひもとけば一筋の煙が立ちのぼり、たちまちにしてそれはおのれを白髪の老人と化し、やがておのれは白馬となり海原遠くへ飛び去る……。となると俺はどうせならこの道を楽しく歩まねは損だと悟つた。二人で手を取り合つて、歌を口ずさんで歩まなくちゃ、今俺はどうすれば手を取り合えるか知つてるじゃないか。現に今、僕はこの道で手を取り合っているんだから。でもあんまり楽しすぎて困るだろうな。だってこの道にだけはまわり道がなく、休憩が出来ないから……。

肯定できるものを

内藤敏夫

良友は、

自分を否定することしかできないのか。

自分は、自分で肯定できる

無題

望月和典

今日の夕刊にもプロ囲碁十傑戦の話題が載っている。どうも朝日新聞はプロ・アマ囲碁十傑戦などを主催するなど将棋より囲碁の方が中心らしくて、碁にこれまで余り感心のなかつた僕には、ちよつと退屈である。先日の林海峯新名人誕生の話題も「若くして坂田名人を破るとはすごいものだ」と思つただけ。どうも碁は僕にむいていないらしい。二年の夏休みにも碁を覚えようとしていたこの大学生のところに二三晩通つたがだめ。そして、中学時代あれほど好きだつた将棋の方もやる気がなくなり、教室で将棋をやっているのをみても、そのとおりであつた。ところが、困つたことがおきた。どういうわけか、秋が来たというのに、むしろように将棋がやりたくなり、それにつれて、囲碁までやりたくなつてきたことである。もう十月も終りというのに、困つたものである。この気持を、四月までとどめておこうと決心した次第である。はたしてこのカレンダーが、六十六年になるか、六十七年になるか、わからないが。

所感

雨宮勝美

ある秋の土曜日、ちよつとした旅をしてきた。きつとこれでも旅だと言えるでしょう。かなり歩いたし、汽車にも乗りましたから。何年ぶりかでした。——人は人間から遠ざかりたいがため旅に出、自己を

何ものをも持っていないのか。

毎日毎日否定している。

否定された自分は、

しぼんだ風船のようになる。

否定するからいけないんだ／

それじゃ、

肯定するだけのものがあるというのか／

作り出せ／

自分の力で。

自分で肯定できるものを。

無言の励まし

小林 弘

C Q Ham Radio誌の三月号がきた時だつた。来月からはとらないことにしようなどと思いながら、何かおもしろい記事はないかと二、三枚ひとまともに捲くつていた。その中に一枚の写真を見つけた。ひとりの人が、何か自分で作つたらしい器械をすぐ手前におき、片手を前方のオシロスコープに伸ばして波形を観測している写真だつた。そしてその写真の下にこう書いてあつた。

<大学の研究室で実験中の筆者>、

これを読んだ瞬間ドキツとした。自分が何か漠然と思つていた事を突然はつきり見せつけられた感じだ。写真がまぶしいように感じた。

この写真と一行は、どんな励ましよりも、だれの話よりも直接に大学

へのあこがれの気持をかきたてる。これほど強く大学へ行きたいと思つたことはなかった。オシロスコープに現われ短形波の印象が残つていて僕を励ます。大学に入つたならまず大学のオシロスコープの前に行つてお礼を言うだろう。

信念を持つ

相沢 一徳

僕はどんな思想に対しても、すぐに受け入れ正しいものとしてしまふ。これは自分自身がはつきりした思想や信念を持つていないからだと思う。いつもその時の流れに乗つてどこの思想家にも同感してしまふ。いわば思想の風来坊なのである。

ところで世界の立派な思想家達は、自分自身の信念を全うしてきた人達である。そしてほとんどが他の思想とは違つた、又反対のものに行きついている。たとえそれが今の世界に合わない。

そこで僕は思う。人に非難されてもいい、なにか一つの信念を持つて生きていこう。

その瞬間

中山 浩一

「ラストコール、男子百メートル決勝」

スタートラインに立つ

異様な気持が心に迫る

ゴールと立っている地面を

たいから汗が流れて目に入る。ヨシ／捨身の中内刈りだ。トウツ／手ごたえがあつた。相手はよろけてしりもちをついた。だが場外、さんねん。中央へもどつた。相手も疲れているがおれもくたくたである。がっちり組んだ。エイツ／おれは一本背負いをかけた。決まつた。「技有り。」審判の声がはつきり聞こえた。しめた。すぐ横四方に入つた。相手も必死になつてあばれる。25秒がとても長く五分くらいに感じられる。ピーツ／ふえの音が聞こえた。勝つた。そう思うと汗がふきだした。

一高柔道

佐藤 明

汗とほこりに満ちた日々は終つた。今日からは自己への闘いだ。そんな新たな決心を胸に一步一步進むと幾多の先輩の言葉が浮かんでくる。「コラ、佐藤……」ときびしい言葉がとぶ。びつしよになつた顔を拭くとまた相手に向つていく。それは苦しい練習だつた。ちやうどそんな日々の間にある人物を僕は見つけた。小柄な身に秘めたファイト。それはいかなるものでも制する力を持つてゐる。他高生何するものぞと鼻息は荒い。その勇姿は皆を大いに励ませる。また僕自身感心するのは彼のタフなることだ。朝早くから勉強に務め家の仕事に精進する。彼は今の一高生に欠けてる面を多く有している。そのひとつがクラブ活動への積極的参加である。先輩として後輩のめんどろを見る表情はきびしい。時には泣き出す者さえある。しかしこのような苦しさの中に固く先輩後輩の絆が結ばれている。こんな姿が今こそ大事なのではないだろうか。

泥棒のように見比べる

スタンドを見る 蜂がうようよいいてる
また目が地面をスタートラインから

ゴールまでを掃除する

深呼吸をし、もう一度スタンドを見る

今度は人間がいた

「位置について」

目が地面をにらみ、地面が目をにらむ

胸がときめく

用意

身体に電気を流したようだ

息を吸いピストルを待つ

一〇……………二〇……………三〇……………

肩の筋肉がピクリと動く

後足を蹴らないかに

ピストルは鼓膜を震わした

試合

清水俊夫

ヤツ／ すさまじい気合が飛ぶ。目と目を見合わた。相手は長身である。(おれはやられるかもしれない。)そんなことが脳裏をかすめたとき、エイツ／気合もろとも右内股がとんできた。しまつた。しかしらくもこらえた。次の瞬間大内刈りが：あぶなくのこした。今度はおれの番だ。右から背負い投げ、決まらない。おれはあせつた。ひ

悪魔

矢ヶ崎 一三

うらめ。うらめ。

おまえの悪魔をうらめ――

いいえ、うらめないのです。

恐怖に、不安に、

おののきに陥れられたのに。

幸福をうばわれてしまったのに。

のろえ。のろえ。のろつてやれ――

いいえ、のろえないのです。

胸をつぶされ、恋をするのも絶たれたのに。

殺せ。殺せ。殺してしまえ――

いいえ、こわくて殺せません。

それに、悪魔を殺して何になりましょう。

殺せば、幸福はもどるのでしょうか。

それならいつそ、愛してしまえ――

いいえ、愛などまつびらです。

悪魔が愛に価値するのでしょうか。

おまえが死ぬしか道はない――

いいえ死ぬなど考えたくありません。
死んだら僕の負けなのです。

おまえはいつたいたいどうするつもりだ？
一
愛にも価値はない。

殺されるにも価値はない悪魔に、
いったい何をする必要がありますよう。

僕は悪魔が自殺するまで待ちます。

悪魔がさとするまで待とうと思います。

ああ父よ、

僕はゆるされるのでしょうか。

愚 想

田 辺 譲 二

この頃ある事をしばしば考えます。それは人間の頭ではどうにもならないことがあります。その意味は何だろうかと思うことです。それに意味などはないのかも知らないけど意味をこじつけようと考えます。

例えば人は食物を食べて出す。材料は違うかもしれないが毎日毎日食べては出す。あきずによくもまあ……。それに必ず寝る。いくら眠るまいとしても頭がいうことをきかぬ。男と女が生まれること。種族を存続させるための生殖。はては大自然の運行、時間など不可能ということがたくさんある。

これらはいつの世になっても相も変わらず——不変——である。

のこと。

ここではもつとSF的なを考えてみるなら、紀元X世紀にわが銀河系は他の島宇宙と衝突しようとしていた、地球人類は広く銀河系に広がっていて、統一国家をなしていたが政府は衝突について楽観視していた。なぜならこの銀河系では中心部ではともかく、周辺では星が非常にまばらだからである。しかし周辺が接触した時に起こった大爆発は、政府に大きな衝撃を与えた。調査の結果により、その島宇宙が反粒子から成り立っていることが判明し、わが銀河系は破壊を待つばかり。ついにこの世の最期、従って、地球の最期がおとずれた……

もつとスケールの小さいものとしては、紀元Y年、地球人は四く五光年の範囲を征服していた。この間地球人はそれらの、征服地の住民達を奴隷のごとく取り扱っていた。しかし地球は地球人の数千倍の能力を持つ宇宙人によって見守られていた。この宇宙人達は地球人の思い上りを快く思わず、強大な力によって地球をこの銀河系からまっ殺することにしたのである……

人為的なものでは、紀元2年、世界はますます軍備競争に明け暮れし、ついには究極兵器である反陽子爆弾を完成、数年後には、太陽系全体を破壊できるほどの量が貯えられたのであった。そして宇宙船の事故をミサイル攻撃と錯覚してついには、地球は反陽子爆弾の攻撃によって大爆発を起こしてしまった……

以上のようなのを読むと我ながらいやになるのだが、人類の知恵が現在では想像できないほど進歩して以上のような作用を抑制できるよになることを期待しようではないか。

永遠の時間——想像できない昔から思いも及ばぬ未来へ続く時間に比べれば、私達の一生——オギヤーからチーンまで——なんかはさしあたりすずめのまばたきに等しい。本当に一瞬という言葉が適する。エジプトのピラミッドが二千年もの昔に建てられ、人々の目をうばうというインカの遺跡、エッフェルタワー、ルーブル美術館のモナ・リザ、いずれもすべてくだけて灰になるのは必定です。モナ・リザなんかはもうヒビが入っているような。永遠に残る様にと願って造ったものだってあのありさまである。永遠に続く時間を見ると、この一瞬の世に生まれ合わせたばかりはなんという偶然でしょう。ポーカーのロイヤルストレートフラッシュよりもずっとずっと。そんな世の中で憎みあったり、殺し合いをしたり怒ったりするのを思うとかたはらいにくる。話がそれってしまった。

我々の一生はまさに一瞬だがいつの世にあつても男女が昔からのあの不可能な営みをくり返している。（メガトン爆弾がものいわぬかぎり。）人類の生命は無限の帯のごとく続く。まるであの不可能なことをくり返して、永に挑戦しているかの様である。きつとこれは永遠への挑戦に違いない。

地球の最期

谷 戸 文 広

地球の最期については、昔では太陽がだんだん冷えて最後には、この世は寒さと暗やみの世界となるだろうと考えた。しかし、今日の発達した天文学においては、地球は膨張してくる太陽によって飲み込まれてしまうことになっている。もつとも、こうなるのは何十億年も先

太郎に告ぐ

川 崎 光 洋

太郎、よくがんばった。振り返って今日までおまえが登ってきた道をみてごらん。随分登って来たものだとしても感心するだろう。そのとおりだ。時にはわき道に足を踏み入れたこともあったが、そのたびにすぐ気づいて、とにかくここまで道もまちがわずよく登ってきた。その間におまえは、たのもししい若者に成長しているではないか。

しかし太郎、ここで休んではいかんぞ。

ここでその肩の荷を下ろしてはいかんぞ。ほれ、前をみてみろ。この山よりさらに高い山がそびえているじやろう。あの山はいままでとちがつて、ちとてごわいぞ。気をしっかりしめて登らぬと遭難もしかねないぞ。そしてな、おまえもいままでの経験からわかっていると思うが、決して急いではいかんぞ。しっかりと足を踏みしめ、確実に歩を運ぶのだぞ。急げば必ずつかれる。頂上へ着くまでにたおれてしまふぞ。たおれてもだれも助けてはくれぬぞ。最後に頼れるのは自分だけだ。自分の力で登るんだ。

今までおまえが登ってきた道は道標もあり、わりあいならかな道であった。しかし太郎、山は常にそうだとはいざらんぞ。いやそうでない方が多いのじや。これからは道がない所もあろう。その時は自分で道を切り開いて行け。木の下枝に足をとられるではないぞ。その時こそおまえがもつとも慎重に行動せねばならぬ時だ。

とにかく頂上へ達するまでは気をゆるめてはならんぞ。道端の色とりどりの花がおまえの気をそるかもしれない。しかしそんなものに眼

を奪われてはいかんぞ。おまえの眼を向ける物はあの気高い峰々なのだ。花を摘むのは頂上をきわめてからでよい。頂上へ達するまでは苦しめ。その苦しみを通りこしてこそおまえは一人前の男となるのだ。太郎よ、おまえにはその力がある。そして最高峰をきわめて、くれ。それができるのは太郎、おまえだけだ。さあ食糧は十分持ったかな。水は十分用意したかな。靴の紐をもう一度しっかり締め直せよ。では太郎、元気で行け。これからの道は険しいが、体を大切にな。さようなら太郎

『いのち』を読んで

佐野健三

この作品は、「先生と私」、「両親と私」、「先生の遺書」の三部からなっている。上、中で述べられている。先生と私との出会い、あるいは私と私の家族、世間一般の様子は下の「先生の遺書」において最高調に達している。先生の遺書においては先生の生いたちと両親がなくなつて相続における親類のものとした態度からだんだんと人間が信用できなくなり世間に愛想をつかしてしまふ。そして最後には自分に關係したことで友人をも自殺においやり、その自分もやはり自分が世間に愛想をつかしたようにその中の一人であることがわかり愛想ずかしをしあるいは厭世観が自分の内面へも及び、ついに自殺にまでおいつめられ、そしてこの自殺において先生の人格が完成されるのである。この最後の先生の自殺は読む人だれにもなつとくさせるものであり、そこにはこの先生が持つきわめて潔癖な性格がうかがわれそしてそれは作者自身がよく自分の内面を觀察して出来上がった作品という

徹して他のことにはまったく無関心な学者が多くなるのは危険なことである。すべてその根底には人間性・人類愛が有るべきであり、なければならぬ。この核兵器の時代においては偶発戦争も起りえるし人類は常にその恐怖におびやかされなければならない。これらの危険の除去には多くの難題が横たわっているが第一段階としてはすべて政治家から科学者・庶民に至るまで核戦争の恐ろしさを知りその平和利用に専心すべきである。折しもベトナムやカシミール問題などが起こりいつそれが中ソと米英などの衝突の発火点になるかもしれない。このままでは幾十年、幾百年の後にはきつと核戦争が起こり人類がこれまで築いた文明も白紙とくして原子時代ではなく原始時代がおとずれることになるだろう。

若さと経験

渡辺 稔

西洋料理の食べ方を知らなくとも、決して恥じてはいけない。それよりもその食べる事を楽しくする事が大切である。と、ある人が言っていた。料理マナーばかりではない。何だつてそうである。我々人間は限度があつて未経験なことがたくさんある。だから恥ということを恐れてはいけない。

恥とは相手は知つてゐるが自分は知らない。つまり未経験ということである。経験していれば恥はかかないのに。そうである経験なんて偶然である。一個の偶然がその人をより成人に近づけて、これが重つて成人になる。――成人とてもまだ未経験なことが多い！

しかし成人になつてしまうと、自分でなくて他人が成人として見る

ことが出来るか

作者はこの作品の広告文に「自己の心を捕えんと欲する人々に、人間の心を捕え得たるこの作品をすすむ」と言っているように人間の心の描写が非常に細かく、読んだ後で自分の心をみなおさせるような作品である。我々は何か行動をとるのにその行動がうまく行つたかどうかの良し悪しのみを論じて心の問題などおろそかにしがちであるが、ふと心の問題を考えたとき心の呵責に悩まされ非常にづらい思いをすることがあるので私は心の問題もおおいに大切にすべきだと思つた。

思うこと

天野朝馨

原爆落下当時の広島のフィルムを見ていまさらながら近代兵器の残酷さを見せつけられた。壁に黒く焼きついた人の影、焼けただれた戦闘とは無關係な人の群、これが近代科学の発達した一面を表わしているとは残念である。人は万物の霊長などといっているが自からを滅ぼすための道具を膨大な費用と頭脳をつかつているような愚かな動物は人間以外にはいないであろう。ある科学者が原爆について質問された時「原爆があつたからこそ、第二次大戦後の平和は保たれたのだ。」と、かたつたことがある。これは一面では確かに米ソの力の均衡とそれへの恐怖のためしかに一役かっているのではあろうがこの科学者が核兵器を肯定していることは重大である。このようにその研究目的には盲目的で、人間性を忘れ研究の為の研究に没頭していることは恐ろしいことである。たとえばアインシュタインのように原爆の製造には協力しながら後年核兵器反対運動を進めた人があるようにとかく学問に

から若い時より大きな恥になる。

ここで我々を考へてみるとまだ若い。だから恥をかく、つまり未経験な事を体験するのは当然であるし、成人にならんとする過程・努力である。我々は若い、この言葉を武器に、自分一個の人間をつくらう。

人間の生命の価値

深沢幸雄

我々は人間の生命の価値をどのように考えたらいであらうか。ある者は人間は万物の霊長であり、その価値は物に比しては考えられないといい、ある者は人間の生命ははかなく、地上の一塵にも満たないという。このように全く相反する見方が可能であるということはまだ明確に人間の生命の価値を規定することができないことを示しているに他ならない。

だが、僕は自分が人間である以上人間の生命の価値がけして微妙なものであるとは思いたくない。むしろそれに至上絶対の価値を与えてい。そしてたとえ我々人間が自然の力に翻弄され隸従させられたとしても、我々の思惟、行為すべてが自然の当然なる結果であつたとしても、人間だけがもつ宇宙の無限や自然の真理に立ち向う姿はやがてはそれらをも超克し従属しうる力を有する姿であると僕は信じた。

常に真理を求明する努力を続けて、人間の価値は全うされ、大きくは、人類発展の方向が示されるのではなからうか。

東ローマ帝国の滅亡

土橋健治

くさり

金角湾は遂に鉄鎖で防備された。皇帝と共にわずか九千人の兵がいる外は機敏な海賊隊長のジュスチニアと七百人のその部下が二その船を用意しているだけであつた。これに対して都の城外には、ハンガリー人であるカル・マニア人であるかわからないウルバンといわれる技師の鑄造に成る千二百斤の石の砲丸を發射する怪砲に援護された精銳無比のトルコ軍が、今にもこちらに向かつて総攻撃を始めようとしているのだつた。城壁の内では、あの東西教会合同問題の際に、ラテン人（西ヨーロッパ人のこと）に服するよりはむしろトルコ人に味方しよう」と言い張つた僧侶と人民とが今はそうは思わずに後悔しているだろう。

一四五三年四月五日、敵軍の王スルタンは自ら軍の前衛にたつた。が、かれらの再三の突撃もみな撃退された。しかし、使用する地雷のため、城壁のいたる所に破れ口ができた。五月十九日、最後の総攻撃が開始された。皇帝は一軍を指揮して敵の本軍の攻めよせるカシウス城門を守つていた。末だ夜の明けぬうちに恐ろしい白兵戦が演ぜられた。敵・味方いり乱れまさに地獄の光影であつた。二回にわたる猛烈な敵の突貫も見事に撃ち退けられた。

ところがどうしたとか、港に向つて地下に設けられた秘密の非常門（ケルコボルタ）が前晚忘れられて開鎖されずにあつた。ここから

五十人のトルコ兵が入つて来て防備兵が入つて来て防備軍の背後を衝いた。防備監督の任に當つていたジュスチニアは重傷して石畳の上へ倒れた。

そこで皇帝軍は大混乱に陥つた。敵は荒れ狂うが如くに突進して来た。今は最後と陣頭に立つた皇帝も、この恐ろしい乱戦の中へ巻き込まれてしまった。皇帝の最後の言葉として伝えられているのは「朕の最後を見届けてくれる者はここにおらぬか！」というのであつた。

五月三十日午前八時・勝ち誇つたトルコ王スルタン・ムハメッドはコンスタンチノープルに入城し聖ソフィア寺院に詣で、「神以外に神はなく、マホメットはその予言者なり」とのコーランの句を唱えて祭壇に登つたのであつた。

コンスタンチヌス皇帝の死体は後に、紅の皇帝の靴によつてそれとわかつた。スルタンはその皇帝の首をアウグステオンの柱上に掲げ、もはや皇帝はいないということを市民に示した。かくて、アウグストゥス皇帝以来千四百八十四年におよぶこの大帝国もここにおいて、名実共に全く廢れた。

感想

望月義時

私たちは自分の思想を他人に強制する権利もなければ、可能性もない。

現在ベトナムでの内戦はアメリカ資本主義と中国共産主義の衝突である。中共はベトナムと共産主義化しようと狙つているが、この事は思想の強制を意味している。つまり中共のベトナム共産化はベトナム

太陽について

宮本兼明

① 太陽について

今東京で古代エジプト展が開かれている。それに関係するわけではないけれども、古代エジプト人は太陽神ラーを崇拜していた。たぶん太陽がなければこの世は其暗、生物も育たない。自分たちが生きていけるのも太陽のおかげ、というような単純な理由かららしい。すくなくとも僕はそう信じている。そのような彼らの考えもわかるような気がする。ぼくたちが生活出来るのも太陽のおかげである。——それに太陽が地球に与えてくれるエネルギーは莫大である。その何%かを利用すれば、もつと快適で文化的な生活が、出来ると思うんだけどー。そして最も重用なことは、希望を与えてくれることである。だれも太陽を見て泣く人はいない。（歌の文句みたいだけど）あのガラギラとした情熱的な輝きを見れば、きっと、心の中に力がわいてくると思う。むしろくしゃした時は、太陽を見てごらん。スカーツと晴々れするよ。

② 水について

去年の夏一カ月ほど東京にいました。とにかく水不足の時だったんでひどかつた。でも住んでいた所の水は、地下水をくみあげて使っている所で、そのうまいこと。いろいろな所で水をのむけれど、甲府なんかなかなかうまい方です。だけどそこは甲府以上にうまかつた。とにかく流し台に苔がはえてくるくらいだから、初めは腹の中にはえるんじやないかと思つたりしたが、とにかくうまつた。それでも長年生

活している所の水の味は忘れられず、甲府駅につくなり腹一はい味わいました。今の人は、すぐコーラ、ジュースなど飲むけれど、水もいもんです。

③ 青空について

今、九月青空のきれいな季節です。長い間空を見たことありませんか。見てごらん。とにかく青空は、絵に表わせないと思う。おなじ青色でもあのようにすい込まれるような透明さほ、出せないよ。今からひまのある人は、青空とにらめっこしてみな。むしろくしやした時はスーッとすし、それに自分が分かるよ。

新聞

菊島慶彦

新聞は公正中立でなければならない。しかし必ずしもそうではない。ある全国紙はベトナム戦争の初期には反戦を強く訴えたが、野党側がベトナム戦争反対を闘争目標の一つにしたためか、その訴えが弱くなっている。これは新聞を闘争の手段に使われるのを恐れたためかもしれないがこれは真の新聞の姿ではない。記事においても二面の方が一面より重要と思われる問題が載っていることがある。だから新聞を批判的に読むこともたいせつではないだろうか。

萩原憲明

大海の磯もとどろによする波

青き海の小島に飛びちる泡をなめる姿が実朝の心だった。

数学ノートより

河西道明

戸戸をあけていて、ふと、一体この戸は「瞬も止まらずに」よどみなく動いているのだろうかという疑問を持った。「運動」「変化」という現象はそれ自身が一つの矛盾を内包している。哲学者ヘーゲルは、それを次のようにいつている。運動というのは静止をつなぎあわせたものではない。たとえば点が運動しているというのは、その点がある瞬間にはここにあり、次の瞬間にはそこにあり、...ということではない。運動している点とは、ある瞬間にあると同時にないともいえる。これらの性格をとらえるには極限の概念を導入せねばならず、ここにニュートンによって微積分学が成立した。ところで数学について、その本質は何かという論争が一九三〇年代におこった。ここで登場したものの中に公理主義というのがある。そもそも公理とは数学の論理体系がそれを土台として形成される仮定とされている。このような仮定の瞬間を設けると、それからあとの論理は、それ以外の仮定は使わずに全く論理的に演繹的に組立てられる。これが数学である。その公理系や推論に用いられる論理法則は、人々がそれを約束として承認しさえすればよいのであって、それに、たとえば直観のうらづけがあるうとなかろうとかまわない。むしろ直観から完全に切りはなすべきである。このように言うとき数学は誰かが勝手に公理系をつくり、それを土台として構築したもの、というふうに考えられるかも知れない。しかしこれはまったく誤りである。実際にそのような仕方ではつくりあげら

われてくだけてきかけて散るかも

沢鳴りのような松風の吹き上がる頂きに立つて見つめていた自分の姿が浮かんできた。実朝と自分とは違っているが、この点で同じだった。遠く鎌倉の三代將軍実朝は、年二十を越えたばかりであったという。彼の背後には、政権を狙い彼を殺さんとする北条氏が潜む。將軍職を務めんとする実朝に暗雲は常にのしかかってくる。そんな彼には海原は穏やかでなく目は自然と岩に白い飛沫をあてては散る波に向かう。そこには壮快さでなく寂しさがにじんでいる。

またある時は、洪水に悩む衆を見て、一人堂に入りて祈念したという。"八大竜王あめやめ給え"。一筋に祈る姿は、あの哀れなにげんが神を求める姿同様限りなく美しく見える。路上で泣くみなし児にも涙を流した。それは単純な人生主義ではなかったと思う。特殊な境遇にあつて、そうした光景に彼自身の不遇さを浮かべたのだろう。慈悲は彼自身も必要だったのだ。

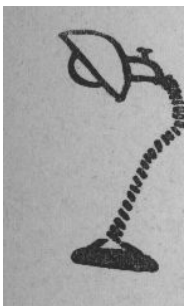
箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や

沖の小島に波の寄るみゆ

彼の悲しみは調べとなつて伝わってくる。だがそれは、単に青春の嘆きでなく、天折せんとする不幸を暗に知りながら、それをわねかえし、未来に何かを求めて現実を生きている若き將軍の悲しみのように思える。

定家を師としながらも、歌の格調は違っている。実朝にとって歌は歌のための歌ではなかった。激しい世にあつて、若き個性を奥に叫びつつける彼には秀歌でもなく、単に万葉ぶりでもなく、内に秘めた愛いが深くこめられたものなのだ。歌は彼の唯一の心の慰めであつたのだろう。

れた数学の分野などとは一つもありはしない。公理系は、実は、客観的な法則性をもつと高度に抽象化したものにはかならない。……さらにブルバキ（一九三〇年代の後半、フランスの一群の数学者がニコラスブルバキという仮名で集団的な研究活動を始めた。その業績は公理主義の方法を厳格に適用すること、正確な論理配列、極限まで一般化すること、注意深い用語の選択というような点に特徴がある。）は「公理主義的考えでは数学は要するに抽象的形式、つまり数学的構造の貯蔵庫のようなものである。そうして、なぜそうであるのかはよくわからないが、実験的現実のある相がこれらの形式のあるものに、一種の前世からの因縁のように、ぴったりに合うということが起こるのである。もちろん、これらの形式の大部分が、はじめははっきりした直観的な内容をもっていたことは否定できない。しかし、これらの形式が潜在にもっているある効力が発揮できるようにし、さらに新しい解釈をうけ入れる余地をつくり、同化の役割を完全にはたせるようにしたのは、まさに、この内容から、その形式を意識的にひき出したからである。……公理主義が数学に与える統一は、形式論理の整備、生命のない形骸の統一とは異なる。これは發育ざかりの有機体の栄養に富んだ樹液であり、ガウス以来のすべての偉大な思想家たち、ルジャーン・ジリクレの公式にしたがつて、つねに『計算に思想を注入すること』をめざす人々が意識的に働いたための、研究上の柔軟な多産な武器である。」といっている。



頭異否痛

中村達雄

一、国語の時間思つた事

日本には評論家がみちあふれ、彼らは入試問題のかつこいな材料を提供し、新聞のあるページをゴタゴタと埋め、雑誌に暗躍している。批評って何だろう。彼らは何のために生きているのだろう。

二、玉川上水の人間

人間、失格。もはや、自分は、完全に「人間」でなくなった。いまは自分には、幸福も不幸ありません。ただ一さいは過ぎていきます。自分が生きてきた「人間」の世界において、たった一つ真理らしく思われたのはそれだけだった。

三、〇〇〇〇

早くも一高三年「たまにはましなこともかくか」と思ったが、日ごろ考えもしない事を書くのはとてもむずかしい。試験の時は「五〇字なんて少ないじゃんけ。」なんていつているのにこうなると五〇字はおろか、三〇字だつてうめるのに一苦勞の青息吐息だ。だれかが書いた本をひつくりかえし見たり、家にあるへたな文集をめくったり、しいには辞書を見たり（実は見なかったんだけど文の調子がいいんでね）してかいて、字数をかぞえて「これじゃ原稿用紙一枚にもならない。」などと思つて何か付け足し、再び字数をかぞえて変な文章をずうずうしくも、いやながら提出する。

書くつてどうもむずかしいね。読んでみて漢字が少いのに気がついた。「いいやいいやまあいいや。」これじゃ大学も入れるかどうかからんね。

君は今

(I・O君に捧ぐ)

内藤全之輔

人知れず遠き都に住むという

君が於母影いつこにか求めん

若葉の訴えて色青く

光の映えて温かき

人は春日に遊べども

春への恨み我消えぬ

梅の香ぞする平屋には

住む人なきと人の言う

物音もせず君が家

日ごと時ごと訪ねども

ただ一枚の紙切れが

春風受けて揺るるのみ

堅く閉ざした雨戸には

友の住み居しかげもなし

涙にさそわれ思へばか

月の光を浴ぶるまで

湖に遊びし思ひ出も

光失ひ秋暮れぬ

その男

金丸義敬

確か二年前の夏の事だつたと思う。何所行きの電車かは忘れたが、その電車の中で僕は一人の男に興味を持った。それまでは、その男の存在さえ気に留めなかったのだが、ほんの小さなことから僕の記憶に残るようになったのである。

僕が本にあきて顔を上げた時、その男は汗をふいていた。彼の使っている手ぬぐいは、すでに使い古されたぼろの手ぬぐいであつたが非常に清潔に見えた。それで僕はその男を注意して見た。アンダーシャツ一枚にカーキ色のズボン、それに運動靴といふかつこゝうのだが、それが全て使い古したものであり清潔だつた。又彼の態度には少しも卑下しているところなどなく、いかなる同情をも拒否しようとする強い意志があるように思えた。

その時僕は『ああ、いいなあ』と思つた。そして、ようやく理解したと思つた。つまり「貧しさ」に必要なのは「同情」ではなく「理解」である。

安定した人間は「貧しさ」に同情するが「理解」はしない。何故なら「同情」する方がたやすいし「同情した」という行為に対してたやすく満足が得られるからである。だがそれは「貧者」に対するごま化しに過ぎない。いや人間そのものに対するごま化しなのかもしれない。現在の世界においてはこのごま化しがいたる所で行なわれている。

あれが君との別れとはいや人知らぬ誰か知る

平屋の前は舗装され

回りの家も美しく

見るかげもなく荒れぼてり

「平和」とつけし僕の名は

君のもとなる僕の名ぞ

ああ、我が友よ、今いつこ

未来への希望

武井 勉

二度と再び我々のものとならない時代への空しい後悔とか憤慨をやめよう

あたかも仕上がった建物を見つめるように

過去を見つめることをやめよう

過去是我々の自由にならない

我々を自由することもできない

過去は未来の土台にすぎない

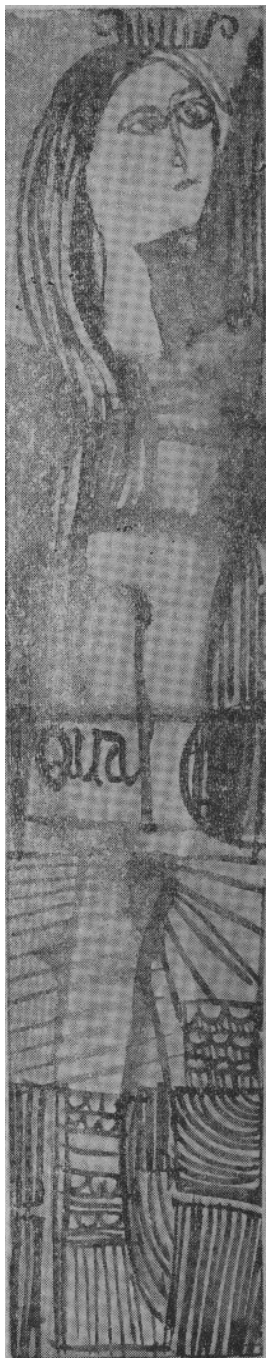
我々の目的は未来にあるのであつて

過去にあるのではない

未来にこそ希望があり自由がある

未来こそ我々の勇気と活力の舞台なんだ

ある日の朝 こんな事が頭に浮んだ



9

『ある冬の日の午後のことでした。ある町のうら通りの日だまりにこどもたちがあつまっていました。みんながもちよったマンガ本などを読んでいたのです。おとなが四・五人やつてきました。すごいカメラをもった人がいました。「おおい、みんな／ 元気に遊ばなきゃあいけないぜ。こどもは風の子っていうじゃあないか。おじさんがTVにうつしてやるからナ」こどもたちはとびまわり、はねまわりました——道はちよつとせまかったけど——。

タごほんのとき、おとうさん、おかあさん、それににいさんやねえさんにもここにしながらこどもたちの話をきいていました。それから二日、三日というもの、このあたりのTVは、朝から晩までつきっぱなしでした。うかつなことに、こどもたちはカメラマンから、いたい、いつ放送してくれるのかき忘れてしまったからなのです。みがしては大変です。

とうとうこどもたちの姿がブラウン管いっぱいにうつしだされました。おもて通りのほげしい自動車の波と交錯しながら、忍者あそびをする健ちゃんや正坊の顔がでてきます。アナウンサーがしやべりだしました。「道路でこどもたちが忍者あそびやボール投げをしています

もう1つの世界

飯島 忠

荒涼とした広がりの中に立っている。木一本ないただ広がつているだけの世界。私はない。私の影もない。ただ広がっているだけ。

二年の秋に強歩大会で市場まで歩いた時に野辺山のすそ野に行っただけのことがあった。あのなんとも言いようのない気持のために、私は長い道のりをただ歩いた。へんにまがったごっこつした坂。道のまん中に倒れている朽ちた木。音もなくしのびよってくる白い霧。息苦しかった。いく入もの人が道端で休んでいた。水も飲みたかった。しかし頑張るだけ頑張ろうという気持が私を立ちどまらせなかった。明け方の野辺山付近の秋の山は、紅葉した木と、葉の落ちた木々とおおわれて、老人のような頑固さと淋しさを持っていた。私はその胸の上を歩いていった。山の年老いた息づかいが、私の足にはつきりと感じられた。「フウフウ」それは苦しうにうめいた。私の足は、もう感覚が失われて、機械のようにただ前進していた。ふと見ると、周囲の山々がなだらかな傾斜をもって連なっていた。大きな空がその後に果てしなく続いていた。私は空の中に飛び込んで霧の中をどこかむこうまで泳いで行きたいような気がした。道は曲りくねって、丈の高い草が揺れていた。走った。リュックが肩にはねた。駅が見えた。横に野辺山がどつしりとすわっていた。先に着いた人が、ひなのように並んでいるのが見る。ちよつと急いだ。足の下で茶色の道が笑った。到着。リュックを投げだして、横の野辺山のすそ野の所まで走っていった。あたりはなにもなく広い。もやがあたり一面にかかっているだけ

情景 A

組主任

八田 政季

す。ほんとうにあぶないことです。この子たちの両親はこの姿をしらないのでしょうか。交通戦争の一つの原因がこんなところにもあるのではないのでしょうか……」夜ふけの番組が「問題」をなげかけます。となりの部屋ではこどもがぐっすりねています』

新聞の投書欄からヒントをえたわたしの原稿をよんでワイフが笑いました。

でも、ほんとうはわたしはこんな「おはなし」はきらいなのです——むやみに淋しいのです。わびすぎる「お芝居」です。「人はパンのみにて生きるにあらず」と

おやすみの前にお母さんから教えていただいて、「神さま、パンだけでなくてバターもつけてちょうだいね」ってお祈りをしたアンデルセンのこどもたちにほほ一ずりをしたいのです。

それにもまして、焼きはらわれたジャングルの片隅に抱きあったアジアの母と子のことが気にかかるのです。

「墨でかかれた虚言は、血でかかれた真実をおおいきることとはできない。

だった。あたりのあい色にかすんでしまった山の姿に、まるで墨絵を見ているような錯覚にとらわれた。手を腰にあてて胸をはってみた。その時私は突然自分のまわりに広がっている世界を発見した。ただ無限に広がっている沈黙の世界だった。「人間は宇宙の中にあつて極めて小さいものだ。しかし人間も又一つの宇宙を成しているのである。」とだれかがいっていた。人間を中心にして、まず彼達の家があり、国があり、青い海が、太陽の周りを回っている星の群れが、そして夜にまたたく遠い星がある。また彼達の内にも、原子核をまわっている電子の極微の世界がある。人間は、その内にも外にも無限の世界の中に存在するものなのだ。それを考える時、私は自分の物的存在が信じられなくなる。

これまで長い間、私はこの広がりの中に自分のいる位置をみつけようとしてきた。読書もした。また経験を通してそれを得ようと様々な問題に手を出してみた。けれど今の私は現実の世界と夢の世界の境にいて、現実の苦しさに追われてすぐに夢の世界へ逃げていく卑怯者なのだ。

しかし私は私なりに努力してきたつもりだ。その結果は決して望ましいものではないけれど、私は後悔はしていない。もし私の過去がrippanなものであったとしても私は過去を自慢したくはない。私は明日と明後日のことだけを考えていきたいと思う。又、その立場に於て最善を尽す者こそ最後の勝利者だと信じている。そしてまた心の内に、明け方東の山のうつつすらと明るくなるころの美しさを思いうかべているからである。山の濃いあい色の上に浅黄色の雲がたなびき、透明な朝の光が空二面に漂よっている光景を。

一高で心に焼きついたことがら

長田寿彦

桜のほころび初めた四月、希望に胸をふくらませ、着なれない制服、真新しい学帽をつけ一高の門をくぐりました。

その時、本校の校舎がなんとどつしりして、落ついた感じに思えたことか……それから校長先生の入学式の言葉が印象深く感じられた。又一年の時の教室の印象はすごい校舎なので目からはなれない。又生徒の品のよさそうな顔……今は、あやしくなったけど……。

次には、テストのショック、これが今まで続いて来た。そのほかにも修学旅行の楽しさ、まだまだたくさんあるけどその中で一番心に焼きついた行事は強歩大会である。ぼくは、この行事に大賛成している。なぜならば、強歩でまじめに歩いている人は苦しいしめめも出るしかもねむけにもおそわれるがその条件の中で黙々と前進する姿は本当に美しいものだと思う。

しかも、このことをぼくなりに考えると一種の人間のあゆむべき道をあらわしていると思う。人生には、舗装された道もあれば、険しいでこぼこな細い山道もある。又下り道もあるはずだ。この道を疲労とまめのでた足で自分一人で一步一步しっかりとあゆまねは先に進まない。

自分の体力の半分も使わないうちにやめたい気持がする。そういう気持でいたわけではないがぼくは中込まで行けなかったがぼくの体力の続くかぎり歩いたつもりだ。その地点が松原湖だった。人生でも、もし目的地までいなくても、自分の最善をつくして行きついた所が

をえて、満足し、戦いの苦しみを通して後の喜びを味わったにちがひなからう。我々も信濃路をできるだけ遠くまで、自分の限界まで、歩きとおし心からの満足感、喜びを味わえば、この行事も有意義なものになり、我々の将来に何かの形でプラスになるだろう。

雑感

中嶋久子

私は、どうも文章を書くのが好きでないのに、＼あしおと＼に載せるための原稿を書いてくださいと言われた時、今度は出さないでいようと思いましたが、最後なのでそうもいかない。そこで、まずい文章ではありますが、思いつくままに一つ書いてみました。

このごろ、私が感じていることなのですが最近テストばかりで、何かと言うとすぐテストです。それがいけないと言うわけではないのです。ただ、本来教師自身が将来をすすめていく上の、実態を把握するためのものであったのが、余りにも変貌してしまったことにあるのです。私たち、中学校から高校に入学するために、何度となく無意味に思われるほどテストを繰り返させられ、さらに大学へ行くための準備としてこれから何度かテストを受けなければならない。私達はテストを受けないで、背を向けることは出来なくなっているのです。そうして、テストをするたびに、平均点を気にし、一点でも良い点が取れていることにほのかな喜びを感じ、それより少ないと落胆する。そのように一点でも二点でも人よりよいに取るために点取り虫にならざるえない状態になってしまったのです。そんな一点や二点は心理的生理的なものによって多少変化するものであるから、気にしなくても

どこであれその時の満足感はいくらでもないだろう。

この時生じる、満足感、苦しさは学校で先生達が、自分の目的をなしとげた時の満足感、受験の苦しさはこうなのだと教えてくれても、体を通じたこれらには決して及ばないと思う。一高で教えてもらった学問も大切だと思いがそれよりまして実践から生じた満足感又、ある目的を成しとげるための苦しさがいかにすばらしいものかなど心に強く焼きついた。

これらはぼく個人としての考えだけど一高生の中には、多数の同意見の人がいると思います、他の学校でも学問は学べる。しかし強歩のすばらしさは決して味わえない。この点からも一高に入学でき、又三年間勉強できたことなどを大変ありがたかったと、今この文章を書きながら思ったのでつけくわえておく。

強行遠足に思う

深沢一洋

また今年も強行遠足の行事が行なわれる。夜どうし歩いたあとの高原の早朝はすがすがしいものである。しかし、なぜ我々は重い、痛む足をひきずりながら、眠いのをこらえて歩かねばならないのだろうか。自分の限界をためし、根性をつくるためだと思う。

《ミングウェイの小説である「老人と海」には、老人がただ一人、小舟に乗って大魚と数日間、日夜戦いつづけてやっとそれをしとめたが、浜へ帰ってきたときにはフカによって、その大魚は骨だけになってしまったことが書いてある。老人の努力はむだであったのだろうか。彼は自分自身の限界をためし、大魚との力くらべ根くらべに勝利

と言うものの、この一点の差によって、よくなることもあれば、悪く

なってしまうこともあるから大変、いいかえれば、この一点の差が、人生のコースを決定してしまうと言っても過言ではないと思います。

なぜならば、大学受験を除いて、日本の社会は、まだ学歴偏重の傾向が、大会社、官庁などに残っているからです。このようなことによって、人生が決まってしまうてよいだろうか、つくづく考えさせられてしまいます。これでは、頭でっかちの、お化け人間になるより道はなく、今日言われている人間形成なるものとはほど遠い感じもします。

本屋に、行ってみるとよくわかると思いますが、「××ドリル」「学習の友」「実力〇〇集」などと言われる補助教材が、全学年にわたってくまなく市販されているのを見ても、いかにテストが重視されているかわかるでしょう。これでは本来の教育とはどんなものか疑問を持たずにはいられません。もし学校で勉強するだけで充分だったらそんな教材も今日のように市販されはしないだろうと思います。そんなところにも今日の教育の欠陥があるのでは……。

ある雑誌に「昔は、教科書が主食、補助教材がオカズだったが、最近では、教科書一に対して、補助教材は五だ」といつている点を見てもあきらかな感があります。このように、テスト、テストの中に於てせつかくよい人材がわれわれの間にいたとしても、それを掘り出してくれるよき指導者＝教師が、このような事務的なテストだけで、われわれを判断してしまうならばわれわれにとって大変不幸なことだと思いませんか。

何だか統一に欠けた文章になってしまいましたが、まずこの辺で筆をおくことにします。

考えること

斎藤 正夫

前から考えていることだが、猫も杓子も大学へ大学へと行く、まるでものけにでもつかれたように。——この現象を不思議には思わないだろうか……。僕もたしかに大学へは入りたい……。現在の大学は就職のための肩書きであろう。

僕は現在の日本において教育（ここでは精神的な面が入っていない教育のことである）ということに異常なほどに関心が払われすぎていると思う。〇〇さんの子は××大学に入ったそうよ、とこんな言葉をよく耳にする。それどころではない。幼稚園にも名門があつて親が徹夜でならぶありさまではないか。一流大学を出ていなければ「コネ」でもないといひ会社に入つて金を十分にもらうことができないのだから無理からぬ話であるが、このことが「教育ママ」とかいふ変な人種をつくり上げているのだろう。こんな小さな時からこの状態では人間性は失われて、うれしさも悲しみも味わえなくなつてしまうだろう。現在でさえ「一億総不感症」といわれているのだから。

だいたいにおいてあんな紙ベラの五枚や六枚で人間の全てがわかるはずがない。ある有名大学の教授は学校差がありすぎるので内申書は参考にしていないそうである。近頃ようやく政府も重い腰を上げかけて「能検」とかいふものを作り上げたが、たまらないのは我々である。大学へ入つてもその生徒の成績（ここでは学問のみで精神的なものを含めない）を調査するのだそうだ。

このような受験地獄をつくり上げたのは何か？それは資本主義にち

新聞を読んで

斎藤 雪男

ベトナムで全面戦争の危険がなくないうちに、インド・パキスタンで、カシミール紛争が起り、国際連合安全保障理事会の停戦決議を尻目に、全面戦争にはいつた。理由はなんであれ、戦争は避けねばならない。特に、アジアでの戦争はやりきれない。しかしアジアには、至るところに時限爆弾が埋められているようだ。朝鮮半島・台湾海峡・インドネシアとマレーシア・イスラエルとアラブ諸国。また中印国境でも、今度の紛争をきっかけにまた火を吹く心配がある。原因はいろいろあるが、特に東西間の強国のイデオロギー的対立や宗教的対立や人為的境界線などが、特筆すべきものではなからうか。なんとかして、これらの紛争を一つ一つ解決していきたいものだ。そのためには、「国際連合のもつ世論の力すなわち道義の力だ」といいたい。理想と現実とは、あまりにも違いすぎる。いままで国際連合の調停の成功した例の多くは、米ソ二大国、特にアメリカの武力及び経済力の直接間接の介入によるところが少なくない。しかし紛争解決のためには、国際連合のもつ力を、あるがままに評価して、しかも一歩一歩その権威を高めるよう努力すべきである。また日本も、インドネシアとマレーシアの紛争に舞台裏の折衝も十分にせすいきなり飛び出して、ひきこみのつかない状態になつてしまつただけで、それよりも日本としては、貧困に悩むアジア諸国にできる限りの技術援助、経済援助をし、少しでもその生活水準を高め、紛争の原因を除去する地道な努力をすべきだと思う。またわれわれも、国際関係の峻厳な現実には

がない。

新聞を眺めながら

太田 隆雄

この数日采の新聞を見ると、戦争関係の記事が、ここは居心持がよいといわんばかりに一面のトップに腰を据えている。

我々の感覚からすると、戦争なんて馬鹿馬鹿しくて、たとえやりたいなと考えることはあつても、国としても、又個人としてもやりはしないだろうし、でもしないだろう。

戦争にしても、個人の間の争いにしても、個と個、我と我的対立である以上妥協するのは困難であろう。でも、小さな争い、例えば友人との間の意見、思想、行動などの相違によつて争うことは、ある意味において大切だと思う。なぜなら、相手と離れ、自分一人になつて、争点の原因をよく見極め自己を内省し、相手の真情を読みとろうとする余暇ができるからだ。感情に走つてはためである。

多くの場合（極端な場合を除く）自分の持つていた物、あるいは主張していた事の中で欠点を削除し、相手の中に自分になかつた美点を見つけている事が多く、相手も自分もそれによつて負う所が多いからである。

多少の飛躍はあるだろうが、もしも事があつた時には（好ましい事ではないが）自他合一にして考えてみることも無駄ではないと思う。それにつけても、この考えが現在の社会状態の中に応用できるというのだが、でもそこまで考えると空想の域に達してしまふ。

もつと関心を持つべきではないのだろうか。同じアジア人が、建国の苦悩をしているのに、だまつて見ていて、いいのだろうか。

「二年」「二年」「三年」

深 沢 稔

「二年」……希望に胸をふくらませて入学？

ぼくには、上に誰もいなかったから、高校生活を知らない。クラブへも入らず勉強のしかたもわからない。どちらも失敗だった。ぼやあつとしていたうちに「一年間が過ぎた。この一年間何をしたのかと考える何も無い。白紙だ。」

「二年」……高校の中核の二年……ようやく生活がわかってくる（もう遅い）四月からクラブへ入る。楽しく、苦しかったが何となく自信がついてくる。勉強の方も一年からの不調が続いている。しかしなかなか内容的には良かった。まあまあそのうちに。

「三年」……いよいよ最上級、大学入試の時になる。いぜんとして芽が出ない。クラブも夏休み前で終つた。「入試の天王山」の夏休み終わつて見ると何もなかった。まあそのうちに。二学期に入り、あせり出す。考えてみると、まあまあ生活だった。しかしまず不合格が来年三月にまつているだろう。

あと少しで

窪田 隆夫

あと少しで三年という短かい期間が過ぎてしまふ。今ふり返つて僕

の心に強く残るのは、何でも話せる友がいたことだ。それによりてどんなに人間的に成長したかは言うまでもありません。それに恵まれたことに友が女性だということだ。女の子の友達がいると、あらゆる面でうまくないと「ダレカサン」が言うけれど、この際にも全然関係ない。それに一番苦しい今の時期も、それほど苦痛を感じない。僕は今幸福だ。今、今の時が幸福だ。親の友がいたということが、この俺にどんなにプラスになったか、この三年間をふり返って感じられた。

転 石

斎 藤 斉

三年の歳月は今、流れ去ろうとしている。いったい自分はその三年間に何を学んで来たのであろうか。これだといって示せるものをもたない。何もかもが中途はんばであつた。勉強もしなかったし、ほかの活動をしたのでもない。ただなんとなく、何の抵抗もなく過ぎてしまった。三年間だった。「受験」僕はその字のもつ偉大さに敗けてしまったのかも知れない。結果は五ヶ月後に出るはずだ、合否かと。

「高校生活」

竜 沢 時 人

長いようでもあり短いようでもあつたこの三年間を振り返って見て感じた事と言えば何とも言えない「無念さ」である。何という思い出もなく、ただ単調に学校と家庭との間の行き帰りで終ってしまったような気持がし、それが今になって、あの時、ああすればよかった。

親友はできないものであるという一般的常識も己に一度のチャンスを与えた様だ。がそれもこんな弱い自己のために、遠い存在のものとしてしまった。
つまり、去年校長が話されたすべてが、だめであつたということである。

この様に俺の三ヶ年間という高校生活は、後悔の一語に尽きるものである。しかし俺は若いんだ。絶対に、二度とこの失敗をくり返さない。むしろ足がかりとして、昨日よりは今日、今日よりは明日と一歩一歩前進して、後悔のない様、精一杯生きようと思う。

雑 感

市 ひろみ

私は夏が好きだ。何をにおいても、いたるところのあの豊満な線にまさるものはない。

特に山は良い。私が昔から特別に親しみをもってきたあの山は、数えきれないほど緑をもっていて、人にはとても、支配できそうにない。生きた世界を持っているから、不思議だ。その空気は少くとも人を、ロマンチックで、ちょっと感傷的で、そして非人間的にする要素を含んでいる。何のこだわりも不安も恐れもない。随分さわがしくて、それでいて静かなひんやりとした別天地だ。鳥や昆虫の樂園があるからそこは陽気で楽しく、清らかな水の谷間や、ぐんぐんのびて山道を隠してしまう草木や、素朴でかわいらしい野生の花があるから、そこはすばらしい。住む人は誰もいないで、この上なく心をなぐさめ、満足させて、ちっぽけな邪心や、つまらない思想をもみ消してしまうから、

た、こうすればよかったと、くやまれる。それは多分に高校生活の単調さが原因しているのかもしれないが、つまるところ私達が余りにも大学入試という言葉に追われ、心のゆとりを持たなかった事が原因しているのではないか、もう少し心にゆとりを持って若い高校生活を満喫すればよかったと言う気持がしないでもない。だと言って現在私達の状態において、学業を切りはなすこともできず、そう思いながらも残り少ない半年間の高校生活を少しでも良い思い出たらしめんと努力している。

回 顧

高 柳 幸 夫

高校時代に俺は何を得たか。こんな疑問への答えはすこぶる不満足なものであつた。

クラブ活動においては、当時は精一杯して、悔いが残らないようにしたつもりではあつたが、結果はあの心臓が破れる様なえらさからものどが乾いてどぶの水を飲んだ経験からも何も得られなかった。近頃よく使う「根性」という言葉。自分には、この根性があるとひそかに自負していた。それもクラブ活動をしたという名目のもとで。ところがいざやめて、大学入試への準備にかかってみるとそうではなかった自己を見た。この時、俺は自己の弱さというものをいやという程感じた。又勉強の方でも、クラブ活動をしているという特権的感情に溺れもつというなら自ら自己を溺らせて、まったく適当にしていたものであつた。

友人関係も然りであつた。

それは、不思議で、しかも偉大だ。けれども、それは、そういう有頂天が、永遠に続くことを願わせるから、危険だ。そして、何かうばいとられて、弱くなってしまいそうな気持になるからあぶない。
確かに山の緑はすばらしく、人の心をやわらげ、有頂天にする魅力をもっている。

しかし、およそ人が、少くとも私が、いつまでもそこに、悦惚状態であこがれを持ち続けていられるような所ではないだろう。

文章を書くということ

天 野 正 仁

国語の問題でよく「……について記せ」というのがあるが、私がいつも驚嘆するのは、私では三口で終ってしまう様な答を数行に渡って書く人がいることです。その人は私が一言で終ってしまうことが不思議だ、といっている。自分でも私の答は余りにも簡単すぎると思うのだが、行をかえるほど長い答はどうしても作れないのだからしかたがない。だから五〇字以内とか、百字以内で記せという時などはマスを埋めるのにとっても苦勞する。

このことは私の作文ぎらいにあると思う。私は強制されないかぎり文などは作ったことがないので、私の文は小学校以来の幼稚な書き方です。論文調の文は一見立派で、高校生でもこの様な文は書いているのですから私も書いて見たいと思うのですが、どうしても書けませぬ。

誰か立派な文や試験官に好感を与えるような文の書き方を教えてくれる人はいないだろうか。表現力が重視されている最近の傾向からど

素朴な人

小林美智子

私は武者小路実篤の本のある一節を読み返した時、ふと兄のことを思いだした。その一節には、次のようなことが書いてあった。『我等はいくらでもしたいことはあるのだからすることを許されている範囲内で、先づこつこつ仕事をすることだ。第一は他人から教わることは全部教わることだ。しかしそれは頭から感心して教わるのではなく一々自分の血や肉にして教わるのだ。自分が本当だと思ふことだけ本当だと思えばいいので、わからないことは、わかる時まで待てばいいのだ。わかりもしないことをわかったふりすると、その人は本当のことがわからない人になり、何事でもごまかさなければならなくなる。本当だ、本当だと、つい嬉しくなり、夢中になり、魂と魂とがふれあうようにはつきりわかつた時に、本当にわかつたのだ。その他の時はその人の血や肉になつたのではない。』私は素朴な人が好きである。つまり、私のいう素朴とは、自分を自分以上に見せようとしない人である。私の兄は、そんな人にあてはまると思う。わからないことは、わかわからないとはつきり言う。そして自分が間違っていたと知つた時、すぐに間違っていたのは自分の方であるという。その相手が妹の私であっても、妹に対し、兄貴の面目にかけてもと、虚勢をはつたりしたことは一度もない。そしていつも自分を透明な容器の中におくのに、なにかしら底知れない深みを感じるの不思議である。あちこち隙だらけのように見えるのに、こちらに、めつたな事を言わせない厳しさがあ

ぼくの思ったことと似たことを実験していることを読んだ。その施設はすばらしく、国家からの援助のすぐれていることを知り、共産圏の偉大な一面が現われていた。

ぼくは、その時ぼくの考えたことも、まんざらではないと思う、何と何く気持が、スカットして、満足した心地になった。少しうぬづれているかな？ まぐれ当りだな。

最後に、ほくはソビエトの学者たちが、この実験を成功させ、価値ある成果を残されるように祈り、希望をよせている。

夢の花びら

斎藤栄子

夢つて楽しいものだ。何かで読んだことであるが、夢こそあはれにいみじく覚ゆれ！。

まったく同感。夢って精神分析の方では、何だとか、かだとかにならぬらしいが、むしろかしいことは、わからないからよそう。世の中が、空気にもにぎり、川も濁っている時だから、せめて夜の夢だけは、楽しくなくては大層まない。昭和のはじめごろ、夢二という名の画家がいたそう。その名にふさわしい絵をかくのかと思っていた。ある時、何かの本で見たら、やせて、肩のおちた、しょんぼりした姿に、泣きそうな顔をした女だった。夢見のわるい時代だったから、あんな女が夢二の夢に出てきたのだろうか。

あんな女が——と書いていたら、思い出した。あの源氏物語「夕顔」の女。源氏の君の夢にあらわれて、ふつと消える女。あそこを授業で勉強していた時、ぞーっとしたつげ。

るのも不思議である。以前、兄にひどく叱られた事があった。その時は、くやしくて涙がとめどもなく流れ出た。しかし、しばらくして私は、「にいちちゃん、ごめんなさいね。」と、あやまりに行った事がある。私にも言いたいことはあったのに、そうさせたのは何だつたのだろうか……。結局、素朴な人に対しては、こちらも同じ透明な容器の中にはいらざるを得ないのではないだろうか。

まぐれ当り

石原源彦

ある日のけったいな出来事について書いてみた。

まず、ぼくの考えた事から書いて行こう。疲労とは、つかれることくたびれることである。スポーツ・勉強など体を使うことはなおさら寝過ぎて疲れることがある。どうして疲れたと感じるのだろうか。

すこし化学的に考えるために、疲労に關しての本を、ちよつとめくつてみて、ぼくかなりの結論を簡略に、まとめてみた（しかし、正しいかな？）。

身体内で起きるすべての変化は、必ず中枢神経系統に影響を及ぼす。したがって、中枢神経系統の機能の変化を研究して行けば、疲労の程度を正確に突き止めることができると思う。しかし、疲労の発生には、寒さや暖かさ、雑音、振動、放射線、超音波、空気の新鮮さなど、さまざまな要因と、その組み合わせが影響しているそうである。

これを研究して行くことは、非常な困難と忍耐が必要で、その上に莫大な金を用いなければならない仕事で、ぼくの出る幕ではなさそうだ。そして、いつの日だったか、何かの雑誌でソビエトの学者たちが、

むかしの女は、夢をよく見たのだろうか、さらしな日記の女も、しばしば夢を見て書いている。

わたしも夢だけなら、むかしの女に負けたくないからだ。これもと
 思う気持は気持で、どれもこれも見果てぬ夢。高校をおわる目も近づ
 いているというのに——何とか、夢を追いつづけていつて、その夢が
 七色の虹のように、わたしの前途に輝いてくれたらなあと思う。それ
 には、眠っていてもダメなんだ。眠って、夢を見ていたんじゃない、夢
 は消えてしまうんだ。つらいけど、指も痛いけど、夢・夢・夢。それ
 こそ、夢は楽しいものなのだ。

ぶどうの話

小河原正夫

僕の家にはぶどうの木があります。デラウェアのかわいいやつなんです。去年は実がたくさんつたけれど、全然色がつかないで食べられませんでした。

今年はどうでしょう。僕がどんどん実を切り落してしまつたので、真赤に色がつくでしょうか、それとも葉を切りすぎたので、やつぱり食べられないのでしょうか。僕はそんな事を気にしながら、今日もぶどうを見つめます。

毎日ぶどうを見つめていたら、僕とぶどうが良く似ているのに気が付きました。ゴツゴツとした影もそうだし、青い葉をくそぶんぶんにばりばり食われてしまうのも。まったく僕と同じです。

事を知らないのが、又僕とぶどうの共通点なのですが、僕だけ頭の方から食われると云うのが、たった一つの相違点です。そして又、僕だけ食われたカスを、自分ののおしりから出すと云うのも……。

今日も僕の思うぶどうは、秋風にふかれてふらふら棚をゆすつています。僕も又ふらふらとしながら、そんなぶどうをじっと見つめているのです。

そして今年もぶどうの季節がやって来ました。けれど僕の思うぶどうは、やっぱり食べられませんでした。甘くも無いし、かと云つてさ程すっぱくも無い。味の無い実をならせたのです。これも又、今の僕とまったく同じなのだから不思議です。

うす青い、味の無いぶどうの実。それを見つめる腑ぬけな僕のまなざし、この対比はいったい何の伏線なのでしょう……。

いやなこと

武川 憲子

何か文章を書かなければならない度に、書くことは難かしいなと思う。

書くことがないのではない。手の届く所に書くこうとするものはあるのだが、それが文にはならずにとだ頭の中をから回りするだけ、(素直に書きさえすればこんな事はないのに、上手に書くなどというくだらん考えを持つからだろう)

ひょいと手を伸ばせば書くこうとしているものは捕える事ができそうだが。がそれはつかみ所ない。——これは表現力の足りなさからくるのだろう、心と手とは一致しないものだ——

て一年中での休みの日がたくさんあつて自由な時間が相当あるようだからやりたいと思つていたことがいろいろとできるだろう。無論、一番やりたいことは、その勉強であるからそのことだけで手いっぱい、なんてことになるかもしれないが、それもまた一層結構なことだ。

ところで、当面の問題は、大学になんとか入らなくてはならないということである。そうしないと今の延長戦のようなのがもう一年間続くことになる。だから最高に努力して入試に向かってやろうと思う。そしてまた、希望の学校にどうしても入ってやろうと思うのである。たとえもう一年かかってでも希望とうりの学校に行けなければ、前に書いたような大学のたのしさはだいぶへるような気が今はするのである。

東京ひとりぽっち

田村 好子

夏休みに東京に行き、アイビー族とやらを見ました。目に焼けた顔に、それもこんがりときれいに焼いて、髪はクレオパトラ型にし、チェックのワイシャツにロングスカートをはいたカッコイイ女の子が、友達と歩いているのを見ました。男の子なら、チェックのシャツに白いズボンをカッコよくはいている人を見たら、アイビー族といえます。今年はこういったスタイルが流行しているそうです。私はチェックの服は大好きだし、皆上手にオシャレしていたので少しも不愉快には感じませんでした。私もやってみたいと思いましたが、日に焼けて顔が黒くなるのはいやだし、髪型も好きでないので只楽しい観賞用として見てきました。でも傍観者の立場から眺めていたので感じよく見

いつの間にか時間は、一時間、二時間……と過ぎていきあせるだけそのうちにいらいらしてきて何もかも投げ出したくなる。たった原稿用紙数枚の文も書けない私に他の何ができるのだろう。それにしてもこうやって何かに煩わされている事は嫌なものだ。怒らなくてよい事にまで腹が立つてくる。書くことの好きな人には私のこのような気持は解らないだろう(書けないでいる私を笑っているのかも……)しかし私同様嫌いな人はいくら私の気持を察してくれるかもしれない。文を書くことの嫌いな者にとって書かなければならないということとはまったく苦痛な事であるのだから。

(あああ、いやんなつちやう。何も書けないでもこれを出そう。書く事が上手になれたらどんなによいだろう……)

九月十四日の夜思うこと

斎藤 茂

あと数カ月で高校も終りと言うことになった。いきなり三年になったような気さえする。そして、うまく行けば来年の今ごろは大学生である。

大学での勉強のことを考えてみると、何か楽しくなる。今までの基礎的なことを終えて、いよいよ自分の好きで得意な勉強を十分にすることのできる所に行くことになるのだ。大学の勉強では今までのように「もうこんな勉強するのはおもしろくなくなつちやうだ。」なんてことは起らないだろう。なぜなら、これは待望の勉強であるうし、第一に「がつちりやって他の人にはできないような事を何かやってやろう。」と大いなる野望を持つて行なう勉強であるはずだからだ。そも

えていたけど、いざ大学にうかつて東京へきたら、知らない間に東京の人達の流行に染まつてしまふのかと思うと寂しくなりました。

愛と孤独

菅野 悟

女を愛する事ほど喜びと苦しみが交さるものはないであろう。全て人間は「愛」だというものを生まれながらにして身につけている。親を愛し、兄弟を愛し、そしてまた恋人を愛す。全ての愛は自分自身の「孤独」からの脱出だと思ふ。

しかし肉親の愛から孤独を脱出したとしても愛する人からそれを脱出する事は恐らくある時期までは不可能であろう。

ここに「信じる」という困難な心の動揺が生じて来るのである。自分ではその人を愛していても心のどこかに愛への不信任、不安感がわいてくるのを押え切る事は出来ないであろう。ひとを愛す事は簡単でも信じるという事はむづかしい。いかなる寛大な心を奮った人でも愛においてはその信頼性が影をひそめ、悪い方へ悪い方へと向つて行くのである。しかしいつかは、その不信任も薄らいで又ひとを愛す喜びを味わうのである。それが恋愛というものであるうか。

人間は一生に一度だけ恋愛をし、そして結婚をするのが最適だと思ふ。ここに云う恋愛とは成長した男女の純情な愛のことなのだ。

人間は恋愛をして孤独の脱出の基礎をつくり、結婚して幸福が訪れほとんど孤独から脱出する。しかしまた老いて行くにしたがつてこの孤独がやってくるのである。僕には親もあれば友もいる。そしてちつとも孤独ではないといつても、いつか一人になり、じつくりと考えて

過ぎゆく日、遠くなる日

名取仁美

$$\begin{array}{ccccccc} & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ X & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ X & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ & \vdots & & \vdots & & \vdots & \end{array}$$

ったのね。

たのは小ブナでなくてアキカンでした。

とも不思議な国のアリスがいたのでしょうか。

考えていました。

隠れていた月が顔を出しました。森の中にも甘い芳香が流れ込んで

「どうした？」

「カバン、まちがえちやつてね。」

「で、バス待つてるの？」

「うん、俺はそうなんだけどこいつは見送り。」

そんな会話をかわして彼等と別れようとしたところへバスが来た。

私と彼は友達を見送ったあと図書館の方へ歩き始めた。彼の家はこの近所しかつた。何の気なしにたずねた

「どうだい、すいてるぜ。いつしよに行かんか。」

「うん。」

力ない声でそういったがそのまま一緒に来て中にはいった。

気配がない。

「おい、来たんだからしろよ。」

「うん、……詩でもつくるよ。」

みてまたすぐ前にむきなおつた。

た。

「これ見るか。」

日の記憶につながっているものでしょう。

31.

ある日のこと

三井正己

としながら帰っていったはずだった。

一ぺん読んで心の中で思った。

意気だし、困つたなあ。

詩は夜の町に降る雨のことを歌っていた。

「吉田弦二郎なみのロマンティストだね。」

「いんとうがいや。」

白ったことばはいけなかつたらうか。

お
び

宮川朝美

とりぼっち——そんなものを強く感じる。「この美

しい音色は、誰も知らない、私だけが想像できる―わずかにある世界―に通じているのではないかしら。この音色の帯に乗って……」

――田舎の秋の夜は静かである――

38 年 10 月 9 日。 今日（40 年 9 月 16 日）

童話 小さいお話

芦田川 きよみ

「お父様お願いします。私を人間の姿にして下さい。」深い森の、緑がむせかえるようなある日、小さい妖精は思いつめた表情でこう言いました。父親は驚いて答えました。「どうして急にそんな事を言い出すのだ。お前は人間の世界をよく知らないのだ。嫉妬や憎悪や恨みや、そんな思のつまるところは、一ぱいなんだぞ。」「いいえ、それは違います。私は毎日こつそり見ていました。ホラ、あの男の子は病気の母親のために毎日一生懸命働いています。今日はお金でお薬とむらさきのぶどうを一房買いました。あの女の子は道端で泣いていた子供をあやしながちその子の家まで送って行きました。そして、ホラ、あの若者の目はあんなに澄んでいます。」「……恋をしてしまったのだね、お前は、妖精が人間に恋をしたらどういう事になるかお前は知っているね。あの忘れ草の実を食べて全てを忘れてしまうか、さもなければ人間に変えられてあの醜い世界へ追いやられてしまうのだ。そしてその恋に破れた時、妖精は小さい真珠の珠になって永久に光り続けなければならないのだ。この美しい妖精の世界に帰る事もなく……」

こうして小さい妖精は人間の姿となってこの世界へ下って来まし

詩



生 き る

市川 訓弘

いつまでも生きよう、力強く
苦しいことも、悲しいことも
たくさんあるだろう
だが、生きよういつまでも
何も身につけていない、からっぽな人間
それでも生きよう
いつかだれかを愛し、愛されるだろう
その小さな幸せをつかむために生きよう
いつまでも生きよう力強く
うれしいことも、楽しいことも
たくさんあるだろう
そのために生きよう、いつまでも
何もならない石こうみたいな人間
それでも生きよう

た。でも妖精は幸せでした。毎日毎日木陰やベンチでその若者の姿を見つめていました。それだけで妖精は満足でした。

ところがある日、妖精がこの世界へ来て十日もたった頃でしようかいつものように、大きいポプラの木の幹に妖精が立っていた時、若者は愛らしい一人の女の子と寄り添って白い十字架のある教会へ入って行きました。女の子の着が甘い風にヒラヒラと舞っていました。妖精は身動き一つせずその二人の後姿を見送っていました。深い悲しみが妖精の心を一ぱいにしました。「いつもあの人を見つめていたのは私だということ、いつも思っていたのはこの私だということがあの人にはわからなかったのでしょうか。」妖精は父親のいる遠い森に向けて叫びました。そのことは何度でも何度も繰り返され、やがて晴れ渡った空の中へ消えてゆきました。澄んだ黒い瞳から涙がポツンとこぼれました。丸い水玉は太陽の光に照らされ美しい真珠となって緑の地に落ちました。コロロン、コロロン、と寂しい音をたてて真珠はあとからあとから地面にこぼれ落ちました。

そして、日の光がいちばん強くさした時、いちばん誇らしげに花が香った時、小さい妖精も美しい真珠となりみどりの葉の上をころりおちてゆきました。



夏のおわり

内藤 静雄

夕暮の街に
つめたい風が吹き
秋がしずかにしのびよってくる
夏につかれた一匹の犬が
街路樹の下でねむっている。
日が西に沈み
また今年の夏がすぎて行く
思い出だけを残して。

愛の讃歌

あれがあなたの星
あの光るのがあなたの心
あなたの心の底から吹き上る
まるで春の日のそよ風のように
我が心をそっとやさしくだししめる

樋口 一

あなたのその心が
緑の愛の泉に誘うことか

あれがあなたの星
あの光るのがあなたのひとみ

あなたはなんて悪魔なんでしょう。

その瞳の奥深く

緑の風の吹く鏡

ああ……

ただその中に

我が青春ぞこそある

春夏秋冬

誰かが

春だ、と言ったので

ぼくは春に なってやった

誰かが

夏だ といったので

ぼくは夏になってやった

誰も春にも夏にもなれそうもなかったから

ぼくもきつぱりやめてみてやった

・・・・・・

深沢賢二

詔かが
希望と

ラッパを吹いたから

ぼくには ラッパがなかったから

笛を吹いたら

ビービー鳴った

誰かだ

絶望の 笛を吹いたから

ぼくはぜいぜいぜんそくのまねをした

ぼくは希望とか絶望とかが

好きだったから

だから？ 神様許さるべきだ

少しは と・・・

気どって歩いてみたりした

そして今

何の持ち合わせもないから

ビー玉しこたま買い入れて

ガチャガチャ言わせてみようかな

自分

自分は一体なんだろう

自分は何のために生きているのだろうか……

山本順二

自分はとてもよわい
すぐにまけてしまう
すぐにげてしまう
自分は赤子だ
考えることを忘れる
自分は何もつと強くならなくてはだめだ。

春望

入試ニ破レテ予備校アリ

京春ニシテ浪人多シ

時ニ感シテハ友ニモ

涙ヲソソギ

怠惰ヲ恨ンデハ親ニモ

心ヲ驚ガス

辛苦三年ニ連ナリ

日々万金ニアタル

長髪カケバ更ニ乱レ

スベテ入試ニ勝タント欲ス

若尾和光



入 試 必 修 格 言 集

Like Teachers Like Pupils.

[- - - -]

Money wakes the mare to go

[地獄のさたも金しだい]

Beauty is but shin-deep

[美貌はただ皮一重]

He who is born a fool is never cured

[ばかにつける薬はない]

His bark is morse than his bite.

[口は悪いが心はやさしい]

Much coins much care

[金が多いと苦勞も多い]

Such father such son.

[この父にしてこの子あり]

Gine a dog ill name and hang him.

[悪評たつたら百年目]

What is learned in the cradle is carried to the tomb

[省百までおどり忘れず]

It is an ill bird that fouls its own nest.

[内の恥を外にさらすな]

A fool and his money is snoned.

[ばか者の金こあしたなし]

A penny soul never came to two pencil.

[けちけちしたとて得にはならぬ]

Every man has his price.

[金でうごかぬものはない]

There is a black sheep in every flock.

[どこにも性悪の人がいる]

Good wine needs no sign.

[良い酒に看板はいらぬ]

The less said the sooner mended.

[減多なことを口に出すな]

Store is no sore.

[ありあまるのは苦にならない]

If wishes were horses, beggars would ride

[かなわぬ望みはむやみにいだくな]

Might is right.

勝 て ば 官 軍

最後に三省堂、岩波ならびにその他各社の絶大なる御協力に深く感謝すると共に受験生の今後の御活用を期待してやみません0

1965 秋

Shizuko. Etsuko. Keiko. Mariko.



武田勝頼夫人願文の事

組主 功 刀 幸 丸

私の住んでいる所は合併して蕪崎市となつてはいるが、市とは名ばかりの、もと神山村字武田といった部落で

武田家にゆかりの深い峡北の「寒村」である。史書によれば、ここは崇

神天皇の御代に四道將軍の一人武渟川別命のいたところで渟川または

武田となえたのがその名のおこりであるという。時代がくたつて、

源新羅三郎義光から四代にあたる太郎信義が仁安三年、父の後をつい

でこの地の領主となり、この「武田の庄」に住んで治を行ない、武田

の地名をとつて氏とした。これが武田家の始めである。この地には、

、武田家の氏神である武田八幡宮（本殿国定）があり、私の家から東へ二

ているという景勝の地である。

この間、NHKテレビの大間記で見た天目山で

の武田家滅亡のシーンは印象的であつた。それを見

て自分の住んでいるこの地に今もお、たいせつに保存されている武

田八幡宮社宝の武田勝頼夫人願文を思い出した。むろん門外漢の私だ

が、ここにその一端を紹介したいと思う。

信玄の没後、武田家は次第に衰えたが、天正十年二月には織田信長

は甲府討伐の会を発し、兵七万をひきいて伊那口から攻め入り、信忠

は五万をもって、木曾口から進んだ。また、徳川家康は駿河口から三

万五千をもって、金森長近は三千をもって飛騨口から、北条氏政は、

三万をもって武駿口から進んだ。総勢実に十八万八千余人の連合軍で

ある。このとき勝頼は武田の危急存亡の瀬戸際にあり、まして親族一

館の奥ふかい一室にこもって、小田原の天地に心をはせ、人生の変転

をなげながら、日夜を過したと思われるが、これも戦国特有の政略結婚のいたましきであろう。ところでその願文の一節に「なかんづく勝頼累代重因のともがら逆臣と心をひとつにしてたちまちくつがへさん」とす。万民の悩乱、仏法のさまたげならずや。そもそも勝頼いかでかあくしんあらんや。思ひの炎、天に上がり、我もここにしておひともにかなしむ。涙又らんかんたり」と述べ、末尾には「天正十ねん二月十九日みなもと勝頼うち」とある。（全文は本校の内藤末仁先生著『武田勝頼』参照）今、私は目をとじて、その昔をしのぶ。危機に瀕した武田氏の光明を得んものと最後のとりで新府城での戦にすべてをかけたひたすら祈る勝頼夫人の必死な姿は、八幡宮の閑寂に吸込まれるかのようにである。政略結婚で迎えられた身でありながら、夫、勝頼にすべてをささげ、武田家を思い、夫をいたわるその心情が脈々とその文面にいきづいている。高遠城落城の報が新府に達した時、それが頼みとする最後の堅城であっただけに、一同は憂色につつまれ、城中で急に軍議が開かれた。結局、小山田信茂の言に従って城に火をかけ、五百余名は、小山田の岩殿城に向かつて退いた。その時先に立った小山田は、急に叛いて勝頼の軍に手向った。小山田にだまされた勝頼は大いに憤ったが、従兵は大方逃げっており、残るは、わずか四十名であった。勝頼は、今はこれまでと、日川に沿って田野にまでおちのびた。十九才の勝頼夫人は「黒髪の乱れたる世ぞはてしなき思いにきゆる露の玉の緒」の辞世をのこして自害。勝頼は三十七才で、信勝は十六才で、次々に自害して果て、義光以来二十八代の武田家は、ここに全く滅亡した。

釜無川沿いに退く敗戦の将腰頼、これを追う十万余の織田軍勢のう

く形成していく中にきわめて微々たるものではあるが、参加してきたのだ。そして一高の八十余年の歴史は日本の歴史の中で明治の初年くらいいまでの過程を形成しているものの中に微々たるものとしてではあるがたしかに参加してきた。さらに日本のいままでの八十余年の歴史は20世紀の初期からの世界史の形成に確かに参加してきた。そう考えると僕の三年間の生活はちりのようなものではあるが世界史の形成に気の付かない所できつと参加していたに違いない。世界中の何十億の人々がこの三年間踏み鳴らしてきた足音の中で僕の足音もある部分を担当してきたのだ。

僕ら一人一人は巨大オーケストラの構成員に似ている。僕らの踏みならす足音は世界中の人々の足音といっしょになつて壮麗なシンフォニーをかなでている。オーケストラにおいて万雷の拍手を勝ち得る時は個々の演奏者がそれぞれのパートで最高の調子を出し、全体として美しく調和しているときである。僕らが踏み鳴らして奏でられるシンフォニーも同様である。僕ら一人一人が最も正しくかつ適切な音を出したときこのオーケストラは美しく調和し最高にすばらしい。つまりその時の全世界は極めて幸福な状態である。一人一人の踏み鳴らす足音はきわめて重要な響きを持つているのだ。

こうして考えてくるといささほどまでかすかにしか耳の奥に響いていなかった僕の足音も音色はともかく急に強く響いてきた。

好きなことば

鈴木 徹

人には自分の好きなことはいくつかあるものです。言同に入って

いなぎ

しおのような追い討ち、馬の嘶き、兵のどよめき、願成寺の炎上、阿修羅のような巷、―それを眺めたであろう四周の山は、今も変わらぬ姿で、紅葉の美しい色の中に静まりかえっている。武田家滅亡の哀歌のヒロイン勝頼夫人の祈願文も、今北宮地部落の矢崎鎌次郎氏宅に保存してある。そして、いつでも見せていただける。私は以前上諏訪の学校につとめていたことがあるが、そのころの同僚である細川先生（現在長野史料編纂委員）はよく冬期婦人学級で武田勝頼夫人について講演し、春には毎年のように多くの婦人会の方々を案内して願文を見学に来県している。夫人の願文は県内ではまだあまり一般に知られていないようであるが、これも戦国時代の一つのあしおとである。今の世も、やがて歴史の一駒となるであろうが、大なり小なり、いろいろな点で哀歌の主人公にはならないように共に生きたいものだと思う。

あしおと

吉岡 一

学年誌「あしおと」もこれで終刊となる。「あしおと」という誌名を考えると、いままで三年近くの高校生活の中で僕が踏み鳴らしてきた足音が耳の奥からかすかに聞こえてくる。あまりに早かった月日だがその音はきわめてかすかだ。

僕はきわめて平凡な学生として過してきた。そして記録にのこるような足音を踏み鳴らしたことは善悪を問わず一度もなかった。今考えてみると、まことに寂しく、青春の一つのクライマックスであるこの時刻を無意味におくつたようで残念だ。しかし僕は、この三年間たしかに一高生として行動も、そして、一高八十余年の伝統をさらに大き

友達や読んだ本でできたりみたりしたことばにも何か胸をうつことばがありました。

それ学問は心の汚れを清め身の行ないを良くするをもつて本質となす”

このことばは今の学生にとっていちばん考えねばならないことばだと思う。学ぶことは人より知識を豊富にするのでなく、あくまでも自分を目的とするのです。怠ける自分に対していつもこれを心にうかべてはげましい。

”おまえの道をすすめ、人を気にするな”

私がどんな大学でもよい。見栄もなく自分の目的に適した大学を選ぶのにかたとなつてくれたことば。

”どんなふうに死ぬかでなく、どんなふうに生きるかが問題なのだ”

自分の人生に対して自信と勇気をあたえ、どのように生きるかを示唆してくれた。誠実に強く明るく生きようと決心させてくれた。いつ死んでも悔いなく笑って死ねるように、もつともつと成長するために忘れないでいよう。

我が青春の思い出に…………

佐田 要

今日もまた、静かに暮れようとしている。にぶい青紫色の山かげに沈まんとする、赤く燃える夕日に向かうとき、あらゆる苦悩、不安が抹殺され、壮厳さと生への活力が静かに湧きあがってくるのを覚える。このときを、せわしい人間社会における最も落着くことのできる

時間として、たいせつにし、求めて俺は、まだ幼なかった頃から（さう、兄につれられて来たときに、ある感動というより驚きを覚えて以来）しばしばこの荒川の土手に来る……。

さて、元来固苦しいことの大嫌いな俺だが、たまには少しばかり首面目くさつてもいいだろうと思つて、少しものをかいてみよう。

この世に生を得て十八年（ちよつとステキナ言い出したら）その十部分を無為に過ぎてきた俺だが、今ふりかえてみると、ある何らかのものを学び取ってきたと思つている。自分を客観的に見るとき、いや見れるとき、そのときにおいてはじめて自分の悟るべきものを知る。

甲一三年間、あまりに束縛の多かったことに憤りを感じ、また今も感じているが、とにかく貴重な時を過してきたと思う。

おわりに、我が青春の思い出に一首、名（迷）歌をそえて、筆ならぬ鉛筆を置こうと思う……。

いとほ おも

愛しき慕ひに胸はたぎつとも

をのこ

君は知るまじ男子の恋をかなめ。

先生

窪田幸治

功刀教授は、数学的見地から時間空間の研究をしていた。ある日、彼は言つた。「遂に、わしは発見したぞ。この機械は時間を逆にすることもできる。」スイツチを入れた。「もうそろそろなるころだ、なる、そろそろもう。」入れたスイツチを。「できるすることも逆に時間をこの機械は。発見したぞわしは、遂に。」言つた彼は、ある日。

めて精神安達剤の代用としてくれることを望みます。

——「氣迫だよね」——

ある高校生の一日

山田 忠

八時〇〇分、起床、彼は服をひっかけ重いカバンを持ち、下においていく。食欲不振で朝食はぬき、だが、新聞（特にスポーツ欄と三面記事）だけはじっくり目を通し。

八時三十分、家を出発（今朝のアストンマーチンはすべる様だな………ブレーキが）

八時三十八分、自転車置場へ彼の専用車を割り込ませ、ノコノコと二階の彼のクラスへオツとそれ前に（なんだ今日もなにもネエヤ。隣は今日もカ。連続だな！）そして彼の席へ（サア真面目にやるぞ）そこへ先生御来組

一時限、古典、「源氏物語」紫式部はよくもこんなむずかしい文章を書いてくれたなあ。

二時限、体育、学校での二大ハッスルの：（あと一つは弁当の時）

三時限、化学、これは入試には関係なし（どれ内職でも？）

サア昼飯の時間だよ。彼は裕然とかつアセリながら食べる。（アアうまかった）

四時限、英R。英語だけだと思うのだが、彼の細い目が一層細くなつていく。（満腹のため）

昼休み、友だちいわく「牛乳ノミニイカザア。金ダシトイテクリヨウナ。」彼答えていわく「仕方ネユナア。アシタは才前オモレナ。」

していた研究を……。

キハクだよネ

小沢 譲

もう思い残すことはない。（といつても自殺するのではない。高校生活には……である。）

楽しかった三年間。もう充分に楽しんだ。ただし勉強以外では……。例えば強行遠足である。一年の時は惜しくも途中まで。二・三年はどうにかこうにか最終地点まで行けた。体力のない自分にとつてはとても苦しいものであり、またこれが一生忘れられない思い出となるであろう。機会があつたらもう一度、あるいは二度でも三度でも、同じ条件のもとで歩いてみたい。

次に文化祭。また修学旅行。遠足テンテンポチポチ以下云々。

良いことばかりがあつたのではない。無論勉強の面においては、だいがりシゴキリを受けた。この三年間——正確に言うと二年七カ月——というもの全然芽が出なかつた。学生という立場にあつて勉強はさつぱりと言うのでは、考えようによれば、ヘンな男であつたかも知れない。しかし「勉強をするばかりが能ではない。」というまい口実を設けて自分で満足？している。愚かな一高生である。まあイイじゃんげ。

◇ ◇

自分は作文というものがどうも苦手である。ここまで読んで下さるには寛容と忍耐が必要であつたろう。昔君はその一人だ。とにかくありがとう。その意気で作つていこうではないか。

最後にこの言葉を残して作文という苦痛から逃れたい。よく嘯みし

五時限、政経、「公定歩合は1・・・」「買いオペは……」テレビのニュースでよくきくが一向にピンとこない。

六時限、数学、彼の不得手科目の：だが黒板の解答を懸命にノートへ、……チャイム（アア今日の授業も終つたな）カバンにあせて本を入れ一番で彼は教室を出るり

■

夜中。本日勉強これで終り。（今日「日俺は何したのかな。」と復しながら。世の中で最もラクなものに陥っていく。）

■

こんな劣等高校生の彼だが「克己」という信条をもっている。こんな調子の毎日ではその完徹にはほど遠い。しかし極く徐々ではあるが「克己」による、生活の向上、を目指している彼なのである。

この世の中

高原宮司

この世の中は、「事実」、「実物」の世界だ。有名な、著作を残した作家、すばらしい絵画を、かいた画家、ある事実を成した政治家、これらの人のみ、歴史に残る。信長の足軽の名とか、ある会社の平社員などは、歴史にも、何にも残らない。

山の様な、才能をもつ、大天才でも、何の実物を残さない者は、後世の人々に、少しも理解されない、ある法則に至らなかつた、科学者と、ある真理を見つけた科学者では、格段の違いだ。

一つの独創的な、その人だけの、実物、これが、その人の人生の価値を決める。実物を残さなかつた人は、生きている間は、それでもよ

いが、死んだら、わすられる。

この世に生まれて来たからには、すぐれた実物を、歴史に残したい。又実物を残せる様な人間になりたい。

ハエ

市川直道

片方の羽をもぎ取られたハエが本箱のノートのへりをよじ登って行く。ハエはノートの上へりにたどり着くとすぐに一息ついて、前足をこすり合わせた。じつとその一点にうずくまってその動作を続けている。

「ハエは一体何を考えているのだろう」ふと次の瞬間ハエはノートの上端からいきなり飛立った。ハエの演じた行為はあまりにもとつびだった。しかしそれは悲惨な姿に終った。くるくると回りながらスタンドの金属製の台にかすかな音を硬く小さく残して跳ねかえり机の上にいやというほどたたきつけられた。ハエは狂ったようにスタンドの台の回りをぐるぐると回りだした。自分の身に起った大きな変化にハエの行動は恐怖のどん底に突き落とされた人間の姿に似ていた。飛ぶことのできなくなったハエは残された自分の可能性を必死で歩くことの中に見いだそうとしているのかもしれない。片方の羽をもぎ取られて斜めに傾いた体を必死に支えながらなおかつハエは狂ったように歩き回る。やがてハエの行動に、いくらか鈍りがみえ始めた。少し歩いて立ち止まり、また歩く。ハエの行動はみるみるうちに衰えていった。ついにハエは立ち止まったまま歩こうとしなくなった。ハエはその一点にうずくまり前足をこすりあわせている。なすすべもなくただ

これは大江健三郎氏の小説の中の一節だが、アイツも似たようなことを言っていた。

牢獄のようだ。毎朝、あの狭い陰気な階段を上りながら思った。強制収容所だ。ガス室はない。たくさんの生徒はいたが、人間は少なかった。正門からゾロゾロゾロと入って来て、終了の鐘と同時にゾロゾロサーツとひけていった。放課後は墓場だった。死人すらいない。

しかし、こんな光景をヤコペッティなら実に素晴らしい楽園のように撮るだろう。ぶ厚いダンプの車輪の下からか、それともガーゼの下からか。アングルを変えればかくも美しい世界だった。

事実こんなことを考えるより、毎日重いカバンをぶらさげてくるのは辛いから何とか軽くならないか、とでも考えていた方が余程気が楽だ。ダーウィンは、本屋で本を買うとたちどころに、表紙をひきはがしバリバリとページを二分して両方のポケットにねじこんだと言う。中味さえあれば用は足りる。履修部分は学校に持ち運ぶ用はないから半分にしてカバンの重さを軽減しよう。ところがである。最近製本がしっかりとっていて、簡単にはこわれない。結局。あと少しの辛抱と重いカバンを運搬することにした。

意義ある生活

小林 誠

吾々が一度この世に生を享け、社会の一員となって生きていくからには、生甲斐ある生活をしなければならぬことは、当然である。それなら、いかに生甲斐ある生活は出来るであろうか。それは自己を明かに認識するに在る。即ち自己の存在を深く心に刻んでいることであ

こすりあわせている。次の行動に移ろうとしたのかハエの体がかすかに動いた。しかしハエは歩きはしなかった。しりを心もち上げ後足をこすりだした。時々羽を撫でようとする。その姿に「さあ飛ぶぞ／。」という意志が見えた。しかしもしもぎ取られた羽の跡にハエの足はただ空しくぶるぶるともだえるだけである。ハエは必死で自分の羽を捜しているかのようでもあった。ハエはどうとうあきらめてこするのをやめた。こんどは前足も後足もびつたりと机の上にすえつけられ、身動き一つしなくなった。エンピツでしりの方をコツコツとやってみた。ハエは動かなかった。

もう一匹のハエがうるさく飛び回る。ブーンという音が妙に響く。そしてうずくまったハエの所で一度立ちどまりすぐ後をすばやく通り抜けた。その動きはすはらしかった。そして憎かった。いかにもその動きは生きていた。例のハエはもはや何をしても動かない。

「ハエは一体何を考えているのだろう。」前足を力なく曲げ頸は机の面にすれずれまでさげハエは身動き一つしようとしな。実に堂々としている。しかしその姿はいかにも寂しい。ハエが何かをじっと待っているのは確かである。ハエは何かをじっと待っている。

S H E

増田直衛

僕は、その長い壁に触れてみたわけではない。しかし、壁はしっかりと閉ざしてい、僕らを監禁していた。僕らは一種の強制収容所にいたのだが、決してその粘液質の透明な壁に深いひびをいれて逃亡しようとはしなかった。

る。自分というものは、この広い世界中にも二人とは居ない自分がこの一米七五種の体を享けて生れ出たからには、何か自分一人よつてのみなされる使命があるはずだと、このような事を終始念頭に置いたならば、決して衆愚の大勢に押流されて曲事や僻事をするようなこととはないだろう。なほそれでも曲事僻事をなすようなことがあったらそれは意志の薄弱によるものである。しかしこの意志の薄弱だということも今一歩突込んで深く考えて見たら、やっぱり真に明かに自己を認識せざるに基くことを知るであろう。吾々が意義ある生活というのは、……………浅薄で中空な階級的に目覚めた生活とかというものではない。吾々の考えるものは、もつと真面目なものである。もつと深味のあるものである。それならどんなことを、意義ある生活というかと反問するであろうがそれは容易に言うことは出来ない。しいて言えば自分の理性が為すべきだと命じたことはどこまでもなし遂げることだ。自己を認識して自己の使命に忠実に生を終るべきだ。これが真に意義ある生活だと思ふ。

チビさんとチーコ

風間省二

チビさんとチーコがいた。

チビさんは番人、チーコはねずみ取り屋さんである。この二人は仲が悪い。チビさんが初めて我が家に来てきた時はまだ小さかった。チーコのこわさを知らないで、挨拶に行ったら顔をかじられ、それから「ジャーッ」ウーの仲となった。チーコはのら出身、チビさんは貴族？出身。二人の不仲は生れのせいもあるのだろうか。だけどチ

じさんもチーコもあまつたれだった。かわいかった。
そんな二人が今年、次々と我が家から姿を消した。

チビさんは死亡。春うららかな頃、女ゆえ今年も妊娠したのかと思
っていた。田植時期チビさんは元気がなくなつた。子供も生れそうも
ない。それなのにお腹は大きい。医者を呼んだ。「こりやあ苦しいだ
ろうな。」腹水をとってもらつた。肝硬変の病名。人間でも命を奪わ
れる病氣だそうな。

「苦しいかい?。」

「ええ、いいえ苦しくなんか。」

「無理しなくていいんだよ。」

「大丈夫です。こんなに元気ですよ。」

「注射をうってもらつてやるよ。」

「きらいなんです。チクツと痛いから。」

何回注射しても、何回腹水をとつてもよくならない。そしてとうと
う……………。

チーコは失脚。もう十数才になる老猫だがとても賢かった。賢い猫
は死ぬ姿を人にみせないと言うが、チーコに聞いてみるとそうではな
いらしい。「自分で苦しいことがわかるのよ。でも死ぬかどうかまで
考えた事はなかったわ。草を食べてもどそうと努力したわ。それから
静かな場所に、人のいない誰にも邪魔されない場所へ行つて眠つた
の。」それつきりチーコは姿を現わさない。

そして今はもうチビさんもチーコもいない。

白痴の戯言

小林文昭

私は琴の音が好きだ。私が琴の音に魅せられたのは、従姉妹の琴を
何気なしに弾いた時だった。従姉妹は聞くに耐え難かつたらしく、
「こう弾くの。」等と教えてくれたが私にとって弾き方は問題ではな
かつた。私は十三本の弦と美しい木目の槽が生み出す音に魅せられた
のだった。それは「日本の音」であつた。恐らくドイツ人が聞いても
あの音の「心」は理解出来ないだろう。丁度我々が、ヴァイオリンの
素晴しきを理解出来ても、心が理解出来ない様に。

私はその夜、奏で続けた。そして弾いている内に、「源氏」を読ん
でも見当がつかなくなつた。「日本の心の流れ」とはこんな感じなのであ
ろうかと思つた。私の様な者にさえ、琴の音は、あわれを、悲しみを
語りかけて来るのだった。

それから一年以上過ぎ去つた。その間、私は琴の音を聞く機会を持
たなかつた。又求めようとしなかつた。そして、これからの私の人
生に於いても、それを取えて求めないで、現在の姿勢で生きて行くば
かりである。しかし私が、暴れ、苦しみ、悶えた後に、やってくるの
は山寺で聞く琴の音ではないだろうか。そんな事を思う此頃である。

個人的な話

赤岡 猛

台風24号の暴風雨が荒れ狂っている。ニュースによると、伊勢湾あ

いいわけ

浅川料夫

「無能無才」とは芭蕉の謙遜のことばであるうが僕には現実だった。
その無能ぶりは無才から脱出する方法を講ずるところにおいてさえ無
能なほどなのである。このまま永久に無能無才ではないかと不安だ。
その意識は僕をイライラさせ多く排他的にさせる。就中、無能である
ことを知らぬ愚や無才であることを標榜し感傷に酔う人を見る時など
生理的に苦痛でさえある。自己を絵にみるからかも知れない。しかし
僕はいま生きている。それは何かを肯定するものであろう。何かにお
いて無能でないという希望を持っているからであらう。何とは何
か?。それをきわめるのが僕の生であると感傷的にもなっていられな
い。行為はすべて目的にしたいからである。ところでかような僕が今
何を主張できるはずがないし機知にあふれる文が書けるはずがない。
しかし、それも良しと思つている。若い時その情熱をみなぎらせ未熟
でも自己表現をすべきという気にはとてもなれぬ。いまの僕は享受す
ることだけなのである。果して本当に享受できているかは疑問だが、
大自然(具体的には雲の美しさなど)や美術品に感動することは事実
なのである。闇に一点を求めるのなら近頃感動の範囲が狭くなったと
いうことである。そこから表現への移行を思いたいのだ。僕の早急
のつとめは、自分の真実を発見することだといえるのである。

物言へば暮寒し秋の風 芭蕉

たりへ上陸、既に先日の23号以上の被害が出ているという。

風が不気味にうなつて吹き荒れている。雨が機銃のような音をたて
て窓にまともにぶちあたる。大自然が荒れ狂っている。そして人間――自己自
身を愛しすぎるちいさな人間は、何の抵抗を試みることなく
それぞれのちいさな幸福な家庭(今それは何と幸福にみえることか)
の中に、いちだんといさくさく隠れている。

この明らかな対象。一年前の私は、台風は人間にとって、害悪にす
ぎぬと考えた。けれども今、台風―この自然の狂乱は、神の深罪き人
間へのいさめではないか、そう思う。人間にはわからぬ、神のみぞ知
り給う人間の罪。自分が罪を犯していることを知らぬ無知な罪人を、
神は大自然の脅威をもつていましめられている。(9・17)

私の頭の中に、様々な思いが去来する。勿論いよいよ迫ってくる受
験ということで、私の頭の大部分はしめられているわけだが。

文学のこと、将来のこと。このころ、特に文学と私の将来とが、頭
の中で切り離せぬ関連をもつようになつた。私の将来を文学にささげ
たい。能力が許せばの話だが。

私は常に喜びを追う生活をしたい。喜び、それは幸福と言い換えて
もいいかもしれぬ。理屈をぬきにした官能的なもの。私の頭を、心を
肉体のすべてを喜びで酔わせてくれるような対象に向かって生きて行
く生活がしたい。(9・30)

ぼくの最近のノートから適当に抜粋した。きわめて直感的な、たわ
いない一瞬の思考。このころ、ぼくは自分を刺激している何かを感じ
ている。本気で、運命を意識しているのかもしれないと思つたことが
あつた。けれども、ぼくはことさら運命論者の立場をとらない。現在
の、一時一刻が、いかにこれからの人生にかかわり合いをもつかを考え

る時、ぼくは常に考え、最善の道を選んで努力せねばならぬことを痛感する。

愛

小泉久光

人間は結局一人だ、悲しくて泣いている時は、慰さめてくれるかもしれない。困っている時は、共に考えてくれるかもしれない。でも悲しくて泣いているのも、困っているのも自分自身で誰でもない。

かく思うと、人間生活の中には、真実は存しないと思われる。

人間世界には、いつでも勝てば官軍、敗ければ賊軍という。言葉が通っている。しかし、私達は、少なくとも、友人同志の間の中にも己の良心、他人の良心のみを信じ、愛とか、真実とかという言葉を超えた、世界を築かなければならないのではない。

今、世界の隅々で戦争が起っている。私達はこれをどのように考えたら良いのか、成人になりつつ我らだが、私は成人したくないように思われる。

人生雑感

細田晴夫

人生は瞬間に比べれば非常に長く、又、無限に比べたら瞬間にも及ばないかもしれない。しかし、現在そんなことを言ってもしょうがない。今の自分は前に向かって、これから進歩発展しようと思っている。過ぎてしまったことは短く感ずる。きつといつになっても過去は

平等の権利

大西透

福沢諭吉は言った。「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず。」と、しかしこの文章自体は現実にはあり得ない。もつともこれは地位の上での話だが。現世の社会状態における人間の価値は「地位」、それだけである。地位をより高く獲得した者、それが上層の人間とみなされる。人間の営みというものは、文明が進み、社会が複雑になればなるだけ他人を押えて自己の繁栄を望む。果してこれは人類進化において、必然的なものだろうか。今の状態では、僕は「イエス」と答えざるを得ない。ところで諭吉の言葉に戻るが、諭吉の言葉はもつと意味が違う。それは人間はあくまでも人間である。人間である以上誰でも平等である。与えられた権利も義務もまた同じである。しかし現実には差別がある理由は、その与えられたものをいかに活用しりっぱなものに成し得たか、ということにかかっているのである。確

無題

小林賢一

「本当の天才とは、天分を努力によって磨き上げた人である。」
とは川上哲治の言葉である。これは本当に真を突いた言葉である。

短かく感ずるだろう。人生も終るとそう感ずるだろう。人の一生はいかに生きるべきか、どう生きて一生だ。時代の変遷にともない、一個の人は、英雄を除いて、歴史の本からも消えて世に残るものはない。なるだろう。自分も多分そうであろう。それ故に自分の一生を思う存分、悔いのないように生きたい。

自由

小田切 純

辞書を引いてみる。住・柔：あった。「自由 ①思いのまま②束縛を受けないこと③じやまされることのない活動④わがまま⑤〔法〕法律の範囲内で随意の行動をとりうることなどがある。私たちがよく「俺たちが何をしようと自由だ。」「民主主義の世の中だもの自由じゃないか。」などという。ひどい時には、「憲法でも保障されている。」とまでいう。これは、自由という意味をよく考えた上でのことばであらうか。もし違ふとしたら、それは、自由という剣を片手に暴れている戦士とそれほど変わりはないではないか。ただ剣をもって戦うのみで、後の事に責任をもたない。それではないのではないのか。彼らは、自由という剣をふるうときに⑤の意味を忘れ去っているのだ。さびついたのこぎりのような刃をした剣をふりかざし、力まかせに叩きつけるのと同じようなものだ。⑤の意味をも考えて剣をふるい、自分のふるった剣に責任のもてるとき、初めてその剣は光を放ち、鋭利な刃物と化するであらう。このように、私たちは責任をもって「自由」ということばを言えるようにしたいものである。

我々をよく頭が良いとか悪いとか言うけれどそれは生れつきのものではなく、その人が努力したかしないかということにあると思う。

M君への手紙

小野松治

いよいよ勉強にスポーツに最適の秋となりました。M君、元気で受験勉強に打ち込んでいることと思います。

この夏休みには、君と高校生活ということについて話し合いましたが、二人の意見が対立してしまいましたね。その後私が、君の意見を参考にして私なりに考えた高校生活について述べてみたいと思います。

理想の高校生活といつては少し語弊があるかも知れませんが、それに近い高校生活というものは、学問や各種のクラブ活動を通じて先生と生徒、先輩と後輩あるいは生徒どうしの心のふれあいによって相手のもつ豊富な人間性を知りかつ理解し、それを自己の人間形成にも役だてる、といったようなことではないかと思えます。人生において最も大切だといわれている青春時代に、よき友人、先輩、師とのめぐりあいほど、その人に影響を与えることは他にないと思えます。しかし現在の高校生活においては特に私たちの学校のような、大学受験校においては、受験勉強本位の方向に走りがちでついクラブ活動などが、おろそかになり、お互いに話し合ったりつきあう機会が少なくなってしまうのだと思います。受験地獄のきびしい中にあるのだからいえばそれまでですが、そうした中においても、できるかぎりのクラブ活動などに参加するといった考えをもち、最大に利用するといった勇気をも

っことも大切だと思います。私も高校入学以来運動クラブに参加してきたことは君もよく知っていることと思いますが、その間勉強とクラブの両立ということで、随分悩んで来ました。そしてたとえば勉強がおもしろくないのは、クラブをやっているからある程度しかないのだというような考えをもっていました。しかしそれは、クラブ活動を口実とした一種の逃避にはかならなかったのです。私には両立させていくに十分な意志をもっていなかったのです。このことから考えると丑にとつてクラブ活動がプラスになったかどうかは疑問です。しかし私はそれを通じてよい先輩や友人をもてたことは確かです。このことが、ほんとうにわかるのはもつと後のことではないかと思ひます。話は少し変わりますが、この間校長先生が人生ということについて話をしてくれました。その中で個人の運命というものは、その人が、いかに、自分を理解するかによつて決つてくるというようなことをいっていました。私はこれからは自分を正しい方向に理解し、勇気をもつて残りの高校生活を送るつもりです。M君、君の健闘を期待しています。

家からの便り

深 沢 嘉 彦

楽しく読んだドーデの「風車小屋
便り」の書き出しに魅せられて。

朝、ニワトリの声で目を覚ました。一番鶏はすでに鳴きおわり今は奴さんたちの食事の催促です。彼らはなかなか忠実で、たった一くらいの契約なのに、卵を不自由なく御主人に供給してくれます。

詩

初秋に思う

虫の声に、
冷たい風に、
枯葉が、
思ひ出が……。
夕焼けの中に
赤トンボ、トウモロコシ、
山の上の社からの太鼓に
かすかに甘かった
泣きまんじゅう、
秋秋秋……………。

まだ青い生命に、
しっとりとした枯葉が
秋雨のしとへ、
静かに……………。

それなのに御主人達は、サラダに入れて……………おや、彼らの部屋が大分騒がしくなりました。どうやら食事の遅いのに冠をまげたようです。

屋近い時、庭のリンゴが落ちました。この御仁は三、四年前近所の家から引越してきたリンゴの樹です。今年は、今まで積っていた場所代を一度に支払うらしく、樹の上のリンゴが鈴のようです。リンゴの樹のすぐ隣にすましたモミジが立っています。この御方は、今年の春僕と親父がシャベルと袋をかついで山へ迎えに行った御方です。なにせ、親父が電車の窓から見始めたモミジのこと、秋の風にどう顔を赤らめてくれるか楽しみです。木といえは家のまわりの柿の木はここ二、三年一寸様子がかわりました。干し柿の伝統を誇ってきた渋柿も時代の波に勝てず、甘柿への商売替えです。ただ一本残っている渋柿の木は最長老、僕の生まれる前からの住人です。しかし、ここ数年、老衰の度はますますつり、楽しみだった柿の実をつけるのも苦しいようです。

夜、寝るところになると、いやはやスゴイの一語です。虫の大演奏会です。例年のとおり、八月下旬から九月にかけての、虫たちが一年の成果を発表する定期演奏会です。毎夜、毎夜の大サーピス、指定席は蚊帳の中、しかも無料だからこたえられません。以前は付近の川に行くとかじかのコーラスが聞けたのですが、此頃聞けなくなりました。きつと川が住みにくくなったのでしょうか。やがて、この虫たちも遠くに引越して、蚊帳の中から聞いたのが昔のことになるかもしれません。

そろそろ寝ましょう。虫の音が耳に遠くなりました。明日、ニワトリにせがまれないように。

親友

土 屋 裕

「親友」、実に落ち着いた語ではないか／

僕にはこの親友が数人いる。僕の人生において、この親友は実に大きな影響を及ぼした。僕は今、何の悩みもなく暮している。しかし僕が困っていた時などに何かと相談にのってくれたのは、この親友に他ならなかった。どんなことでも自分のことのように真剣に考えてくれる親友、僕はこの親友をもてて今、うれしさでいっぱいである。思ひ出をたどってみると必ず筆頭にでてくるのが親友なのだ。今から歩んでいく人生において、あと何人僕の前にもこの親友が現われるだろう。もしかしたらもう僕の前には現われなくてもいい。それを考えると僕は改めて親友の尊さを感じざるをえない。これから歩んでいく長い人生においてどんな困難が待ちうけているかもしれない。しかし僕は敢然とそれに立ち向かっていくつもりだ。なぜなら僕の後には、あの力強い親友がいるからだ。人間は一個人では非常に微力である。しかしそれをカバーするのが助け合いである。親友と力を合わせ、しっかりと心を握って一步一步力強く踏みしめていく人生、この人生に何の不安があろうか。僕は敢然と立ち向い、長い間、修得してきた「教養」と「正しい心」を土台として長い苦難にとんだ人生を過している。こうと思っている。

舞台にて

遠山 和男

彼はまだ社会を知らない普通の高校生だ。だが彼は様々な世界を体験してきた。

第二次世界大戦中彼は片足を負傷した動物園の飼育係だった。そこで彼は戦争のために多くの動物が殺されるのを見て、生物に対する愛情と、自分の反戦意識を目ざめさせた。その後彼はアメリカへ渡ったが、ふとしたことから死刑囚として捕われの身となってしまう。そして死を体験しなければならなかった。しかし、彼の屍に腐敗は訪れなかった。

昭和三十九年四月、彼は某詩人の前に幽霊としてその姿を現わした。無気味な程に青白くやつれたその顔は、シルクハットの影になり詩人には一人の紳士としてしか映らなかった。彼は詩人に対し、芸術家の人間性というについて説いた。その行為は天にある神をうなづかせた。彼は社会を知らない若人として生れ変わることが出来た。だがその為に彼は社会の矛盾と腐敗に苦しまなければならなかった。彼は演劇を愛する一人の高校生だ。

彼の体験した世界が舞台の上という限られた場所であつたとはいえ「それは劇の中でだけの体験だ。」と簡単にかたづけてしまえることではなかった。劇の中だけでも戦争の恐しさは十分理解できたし、複雑な人間社会の矛盾についても否定することはできなかった。

現実社会と演劇とを同一視は決してしないが、演劇という立場に於いて、社会を見つめ、考えたことは、彼にとつて有意義であつたと言

つて悔いない。

「怒り」と「愛」

秋山賢三

私たちは、個人的な嫉妬や野心のために相手に対して怒りを発する。その怒りはしばしば突発的なものとして現われる。

その時私たちは自分の良心とか正義感の上に立つて相手を失却させようというのではない。ただその場の言動の誤解がしばしば怒りに導くのである。もしそうした怒りが正義感、ときとしては責任感から発せられるならば憎みなどは絶対にないわけである。

しかしほとんどすべての場合、怒りは正義感から発せられない。これは私たちの人がら、性格の違いもあるが、ほとんどは突発的に起るのである。これは現代の映像ともいえる。そしてこれは、私たちが十八年間の人間関係より生じたものである。そしてこの間、秋たちはこういう見方しかできない人間的に弱い人間に作られ、いつも陰険な目つきで人を見、人の心の中までも探ろうとするいやな人種になっていたのである。

そのような人の怒りは其の怒りではない。其の怒りは倫理性に通ずるものがなくてはならないのである。もしその倫理性を持つて怒るならば、必ずや私たちの誠意は相手の心を動かすのである。その時怒りは愛に変わるといのである。何も愛は普通いわれる友愛、恋愛、隣人愛だけが愛ではない。怒りは、より高度な愛なのであり、人間の目なのである。

映画信奉者

前村 幸男

映画芸術については、僕が文学についても鋭い目をもっていないのと同じようにほとんど素人ですが、その身で時々映画を鑑賞します。

映画鑑賞についての僕の主義は、ひとりで、しかも夕方から夜にかけて見ることです。二人以上だと見ながら話をすることもあるし、話をしなくてもとなり友人がいることを思うと映画に没入できず、つい現実引き戻されてしまうことが往々にしてあるからです。また、騒がしい昼間より夜遅く静かな通りを帰った方が受けた感動を冷ましくいからです。

さて感動と言えば、僕は世に言われる芸術的価値の高い映画にも、ただの娯楽映画にも、種類は違いますが同様に感動を受けます。前者から受けたものは、人生いかに生くべきかという問題の解決の糸口として役だてますし、後者からのものー映画そのものについての感動ではなしに、それを見ていてフト感じたことーは、「もつと……しろ」という言葉に代えて勉強促進剤に転化し、用います。両者ともまめまめしきものではありませんが、これらが僕のこれまでの生活に与えた影響は、たとえ一時的であつたにせよ、太なるものがあります。そしてこれらの効用を考えると、僕はたちまち映画の信奉者になつてしまふのです。ただ、映画が、資本主義下における利潤追求を目的とする一産業の生んだ卵であることを考えたり、夢のような感動を持つて帰つてその次の朝になつたらすつかりその酔いがさめてしまつて現実をしみじみと味わつたり、勉強促進剤のききめが案外少なかったりした

経験を考えると、僕の信奉者たる存在を自ら危うくするのですが、それは、より客観性を備えた正しい度の眼鏡で映画を鑑賞すること、すなわち、経済的余裕と映画芸術性の両方を考慮し、空虚な感動に溺れず、しかも其の感動は大事につかみ保存することによって次第に解消されていくことでしよう。

反省

加藤 清一

僕の人生というものは、恐らく十六才の夏ころから始まつたのだろう。というのは、僕が一個の他人の一生というものに触れ、それによつて自分の人生というものを考え、やつと合理的に物事を理解しようとし、そのために失敗し、苦しみ出したのがその頃だつたからである。人間には誰にも如何に生くべきか、何を目的として生活をするべきかという信仰がなければ、人間は不安で、苦しく、淋しく、それは日夜襲い来る恐しい拷問である。そして夜の限になく遠退いた静寂と真昼間の照りつける太陽とは、心の空自や確かなものへの憧れ、狂うような不安、自分のみじめさ、自殺への仄かな意志、それらのものを手加減もなく曝け出す。生の遺瀨なき空虚、僕はこれ程のおびえる魂を知らない。その頃のことを思い出すと、必ずあのゲーテの『魔王』という詩が浮かんで来る。僕にはあの少年の気持がとても分るような気がする。そして大人という怪物は誰もそれを理解しない。僕らの周囲にいる魔王が見えないのだろうか。

僕は幼い頃から、自分の場合はこうだというのはなく、もつと大きな、世界の真理を求めて来た。しかしそうした世界性に立脚した真

位置の自覚というものは一つの力だ。……立ち上がりたまへ／生
きなければだめだ！それともどうしても死ぬのがきみらの運命である
なら、立っているままの姿勢で死ぬがいい。」
これこそは僕にとって疑えざる人生の邂逅であり、決定的な契機で
した。だがその少年から青年への懸橋は陰吞であり、苦しく、淋しい
ものだった。生活は爾来真剣で、厳格なものとなった。僕はずつと、
今もつまづきはなしだ。時には奈落の底まで堕ちてしまうような気
もする。僕はやつと「無知の知」というのを身をもって知ることがで
きた。如何なる人といえども、何れを真に知っているというのは嘘で
あり、ただそう信じているだけであつて、我々はあるものを知覚とか
意識とかというものを通してしか知り得ないものなのだ。そしてそ
うした信仰によつてのみ存続することのできる生活、それが人生である
のだ。僕たち人間は、その曖昧さや、永遠の懷疑という運命的な呵責
によつて生きなければならない原罪的な、煩惱具足の生きものなの
だ。僕はそれ pensando と、ファウストの靈魂を運ぶ天使らが言つたよう
に「たえず努力していそしむものは、わたしたちが救うことができま
す」ということがどうしてもなければならぬような気がするのです。
そうでなければ恐いことです。僕は感じる、人間は何ものかによつて
生かされているのだと。そして運命も決して偶然なものではなく、必
然的なものだと、だが僕はそうしたこの世の一切のものが神である
のかどうかは勿論分らない。僕は一生問い続けるだろう。ニーチ
エの叫んだように、「人間を究極的なお取り巻く環は何処にあるのか。
それは世界であるのか、神であるのかと。究極における統一的な戒
者、知られざる神、それだけが僕らの関与できる限りだ。そういう
事状の中で僕らはどうするべきか。そのときあるのほまは過去の生

事状の中で僕らはどうするべきか。そのときあるのほまは過去の生

数学でいう「疑問なんとか」の逆の証明であるが、大物はこのような
些細な事にはかまわないと聞いているので、結局私は大物ということ
になった。このようなことから「あしおと」の原稿みたいな些細なこ
とはかまわないうことにした。

ある人生

加賀美 竹彦

彼はオギヤアと生まれて幼稚園、小学校、中学校と何も目立つこと
一つせずに進んだ。彼はノンビリ屋でどちらかというとチャランボラ
ンで気のいい奴であつた。彼の唯一の長所は従順であるということだ
つた。それだから彼はいつも笑顔で、先生、両親には扱いやすいい
い子リであつた。ただ、慢然と勉強した割には成績が良かったので、
その地方では一流と言われるある高校に。ばスした。

作者も高校生なので、彼の高校生活について多くを語らせてもら
うでしょう。

彼が第一に感じたことは中学時代に比べるとずっと自由であるとい
うことであつた。このありがたみを身にしみてわからせてくれるのは
三校時の休み時間に食べる弁当の味であつた。そんなわけで何も大
した不満はなかつた。ただ一つ不満なことは着帽の義務であつた。そ
う、彼も君と同じく当世流行のルック七・三に分けていたのである。
ところが、帽子をかぶるとこのイカスヘアスタイルが台無しになる。
スタイリストで内気な彼は先生方にもこのところをもうちょつと理
解してほしいと考えていた。もつとも帽子をかぶるのは校門を通過す
るほんの一瞬の出来事であつた。高校生活は一面から言えば、忙しい生

加賀美 竹彦

すみません

飯沼 明

また「あしおと」の原稿のべ切りが迫つてきた。どんなことでもよ
いらしいがいざ書くとなるとどうもいかん。ここでまた何んかないか
と考えることになる。先生も「『あしおと』の原稿出してない人は、
明日が最後のべ切り目だそうである。早く提出するように」と、こん
な言葉を十回近くも言われ相当の余裕を与えてくれたのであるが、ほ
んとうにどうもいかん。インスピレーションの泉が枯れたのではない
かと思われるほどである。周知のことと思うが去年はもう少しのこ
ろで芥川賞をもらいそこねたが、今年こそはと思い、将来夏目漱石、
森鷗外のような大文豪になろうと思つて私にとつて、これでは全
くおてあげの状態である。思いあまつて墓の予約までした。

ところで亀井勝一郎氏が言うのには、人間絶望しなければだめだ。
絶望した人間こそ価値があり立派な人である。このことから考えると
私はどうやら人間として価値があることに気がついた。それに大物と
言われる人は立派で価値ある人であるそうだ。すると私も大物だとい
うことになつてくるらしい。ところがここで問題になつてくるのは、

事状の中で僕らはどうするべきか。そのときあるのほまは過去の生

加賀美 竹彦

すみません

飯沼 明

彼が第一に感じたことは中学時代に比べるとずっと自由であるとい
うことであつた。このありがたみを身にしみてわからせてくれるのは
三校時の休み時間に食べる弁当の味であつた。そんなわけで何も大
した不満はなかつた。ただ一つ不満なことは着帽の義務であつた。そ
う、彼も君と同じく当世流行のルック七・三に分けていたのである。
ところが、帽子をかぶるとこのイカスヘアスタイルが台無しになる。
スタイリストで内気な彼は先生方にもこのところをもうちょつと理
解してほしいと考えていた。もつとも帽子をかぶるのは校門を通過す
るほんの一瞬の出来事であつた。高校生活は一面から言えば、忙しい生

事状の中で僕らはどうするべきか。そのときあるのほまは過去の生

三年間

富永 幸人

活であつた。勉強はもちろんのこと、恋もしなければならず（注、一方的なもののみであつた。）、又、彼のおう盛なる食欲のためにあごを上下に何度も動かさねばならなかつた。

又、その時はやりのエレキギターにしびれ、ビートルズのレコードを聞かねはならなかつた。（注、作者はクラシック、つまりヴェートーヴェンの詩とかゲーテの交響曲の「運命」というようなものにしか興味を感じなかつた。）又、真面目くさつて文化祭でフォークダンスを踊つたりした。しかし、三年も後半になるとそう、うかうかもししていられず、受験勉強に猛烈な追いこみをかけねばならなかつた。そのころまでは勉強チョッピリ、ボンヤリザーっと、という調子だったので、三年間の勉強が全部半年間に濃縮されたようなものであつた。それだから学ぶことも新鮮なことが多かったので興味はグングンわき効果は目に見え、耳に聞えるほどまでに現われた。そして彼は幸運にも月謝の安い国立大学に入学出来た。しかし彼は何も目的を持って勉強したわけではなく入学するためにのみ勉強したので、それからの大学生生活は、まったくの怠惰を極め、ただ単位を落さないことのみに四苦八苦した。

こんな風にして卒業しても大学出は大学出、彼は親の期待どおり出世コースに安々と乗り、平社員から始まり専務の地位に落ち着くことが出来た。しかし彼は人生に何の理想も持たず、ただ出世と人生の安定のみを願つたのでその状態に満足していた。なお、彼の死に際しての言葉を付け加えておくと、ナポレオンは「フランス、軍隊、戦争」と言つたそうであるが、彼は言つた。「気楽な人生だつた。」

に、自分の全精力をついやしてもがんばり抜こう……………。

後輩よ、俺の二の舞をするな、自分の目標に向つて突進せよ、その過程は苦難の連続だ。しかしそれには努力したもののみが知る喜びがあるのだ！

詩

息 絶

北 村 敬

おまえの「詩」は生きているんだ。生々しい新鮮な大気を吸収して……………

おまえの「詩」は永久に生き続ける。たとえ今、おまえの生命が消えたとしても、おまえの書いた文字の連なりは、けつして死ぬことはないんだ。「詩」はおまえの生命だ。

濃赤の威圧
翻える烈風に思考の拒絶

むなばら

胸腹に突き刺された憂患の苦痛は

無機に劣れる肉体を

極狭の存在とし

つきあかり

月光の憂愁は

まさに我が浮き彫りとす

畏敬の亡びた私身に

『三年間』、長い様だがたいへん短かつた。希望に胸をふくらませて入学したのが、三年前の四月某日、一学期はあつと言う間にすぎてしまつた。夏休みの合宿で一週間は、苦しかつたが又良い思い出にもなつた。日新ホールの階段が登れずに、下の芝生に腰をおろして皆と話をすることが思い出される。その時は皆、良い先輩であり、すばらしい友人だつた。二学期になると、文化祭・強行遠足等々、めずらしい行事がたくさんあり、そのたびに学校が休みになるので、非常にうれしかつた。ただ、勉強の方は、習つたことをその日のうちに先生に返上していたので、いつこうに芽がでず、いつも組の平均点を一人で下げていた……。

二年になつても同じ様なことが続き、成績の方は一段と下がつた。

しかし、サッカーをやっている時は無心だつた。本当に楽しかつた修学旅行は良い思い出になつた。それまであまり話もしたことが無い様な友達と親しくなれたということは一番の収穫だつた。ただ、連日、

「お寺まわり」ばかりでつまらなかつた。修学旅行から帰ると、教室が急にさわがしくなつていつも先生におこられてばかりいた。しかしこのところが一番楽しかつた。……………最上級生となつて、大学入試が目前にせまつてきても、実感がわかず、勉強をしなかつたので、二学期になつて、あせり出した。これでは来年は浪人を覚悟しなければならぬ。やはり一・二年のうちにしっかりやれば良かったなあ、ということが悔やまれる。しかし、まだ、四力月あるのだ。希望をすてず

暗軍な大気が

噎びながら流触し、

盲目の憧れは朽ち果つ

赤裸々を求むるも

悔恨ここに遅く

純粹の無が

眼前の虚無を襲う

我、立脚する道なく

博大に隠れる楚困となる。

（永効に寄せて）

僕と高見順氏の詩

末 木 健

氏と僕の詩を並べることを許して下さい。悪劇があつてこうするのではないのです。何かを言いたいのです。でも……………

赤い実

不眠の

樹木の充血

患者の苦しみの

はじまる暁

赤いザクロの実が割れる

無題

悲しみに泣くのは
不感性の男女ではありませんぬ

『昔』

……おかしくて言えません。あしからず。

あしおと

三年の秋を迎えて
オレもしみじみ思う
このまなびやを母校として
去る目を目前にして
オレはどれだけのあしあとを
残しただろう
ほこりっぽいグラウンドに
プラタナスの木の下に
この長い廊下に
オレのあしあとは無数にある
だが、今日改めて考える時
オレのあしあとは余りにもうすい
オレは力強いあしあところ

鈴木保彦

残すことができなかったが
のこる数カ月に
うすくても整ったきれいな
あしあとを残して
オレは母校を去ろうと思う。

在りし日の感傷

横打淳吉

クローバーの上の彼等は天を仰望し
陽炎は強く遠く燃えさかる在りし日。
彼等は思索させられていた。
現下の現実の現象の現況を。
1 + 1 = 2。
ただ人も形而上に教えはされるが。
内容と形式の矛盾が内在すこれを、
彼等のみ疑心暗鬼を内包するのか。
人間が考え得たある波動作用に圧殺され
底流を形成するもの知ることなしにして
激烈なる情性体の激浪の中において
逆らわず流され沈みゆく現存の人間。
思考を喪失し權利を放棄した乱雲下で

ひとみ

日野原正樹

同種多産製造組織下の誇らしげの人間
そのような人間に何が可能であるのか。
彼等はその乱雑より脱却したかったが。
重く恐ろしい雷雨の雷獣により
彼等の意思は現時に引き戻され
総べての総べてが総べてに為る時。
川原に紙きれ風に吹かれて川端に。
枯れ枯れと変象した緑の草。
速く鈍色と変色した青の空。
彼等は何処へか立ち去らん。
緑と青の有る快適なる所へ。

哀れなるかな理性と知性の動物たち。
人間は理想を追う動物であるがゆえ。
悲観の激度は計り知られずに。
来たる日も希望のない現在に。

ああ／
哀れなるかな彼等も我も人間なり。
ああ／
哀れなるかな彼等も我も人間なり。

ああ 何を
えがいていたのか
それは小さな幻だのに
胸がなる心がおどる
幼の小さき眸よ
黒く澄む黒く輝く
何かは言わねど
リーベよ沈黙して
心をつとう

二

ただ漠然とした心苦しさに
星眺めいる広原の夜よ
心ないリーベにたましいを
うばわれたその様に
消愴は胸裡をむしばみ
胸をうづき高原の彼方の
淡い星影をみつめている私の眸に
ただ漠然とした涙のわく……。



◆ 随想

月 見 草

伊 藤 昭

朝早く起きた時はとても嬉しい。まだ家の者が誰も起きていない時、そつと玄関の戸を開けて外に出る。雨あがりの霧があがつていくように段々と景色がはつきりしていつて……とたんに寝むたい目はすつきりし、頭はさつと冴えあがる。まだ近所の煙突からは煙は出ていない。始発の列車に乗る人が忙しくこの道路を通り過ぎる時刻には随分はよい。道路を隔てた向こう側の河原には昨夜咲いた月見草が今もまだ優しく笑っている。川には水がチョコ・チョコしか流れていない。だが一面に咲いた月見草があたりを黄色一色に塗りつぶした景色は本当に美しい。僕の拳位の大きさの花はたった一輪でも十分に美しいが一面の黄色もまた爽快なものだ。河原に降りて石を拾い、大きなモーションをして力一杯鉄橋めがけて投げつけた。ガーンと大きな音がしたが、予期していたがあまり大きな音にはいささか驚いた。二度目はさすがに鉄橋は遠慮してその下のコンクリートの土台に投げつけた。バ

シッと小気味よい音がした。コンクリートに書いてある数字を狙って次ぎ次ぎと投げつける。ヤーイ、やつと当たったぞ十個以上も投げてやつと当たったのだ。当

った瞬間には顔が自然と綻んでいた。何がそんなに嬉しいのだろうか。無論当たった事自体などそんなに嬉しくないはずだ。良く考えて見る。何回も投げてやつと当たった嬉しさが、何回かの失敗の後で成功を喜ぶと同じような気持であるからだろう。同じような豊かな気分になるのは成功した時の条件の違ひはあっても喜びという感情は一つだからであろう。もう一度で当たっていたら、ほほうこいつは凄いや、これではプロ投手並だ。とすこして呆れる位にいい気分になった事だろう。しかしそれにはまぐれに当たったのもう一度投げれば二度続けて当たらないであろうという自信のなさがその感情の底を流れているのを否定できない。人間の世界において苦勞せずには掴んだ幸福や偶然の成功はその瞬間はそれらを喜ぶ気持は大きいながらく心に刻み付けられるものでない事は明らかなです。しかし人生においてまぐれ当りはいかに重要な位置を占めることであろうか。

人間一生懸命努力してやつと掴んだ幸福よりも嬉しく感慨深いものは



強行遠足雑感 組主任 根岸 昭

私は数年前から強行遠足の資料をまとめておきたいと思いつつぼつ仕事をして来た。来年は四十回になるのでその時までには仕上げたいと思って居たのだが、創立八十五周年の記念行事の一環として強行遠足の歴史を編集することになり、その委員の一入となったので急いで必要な資料の整理をしているとつい十日程前になって今年が四十回であることを発見してすっかりあわててしまった。途中で（昭和二十一年以後）一回ずれてしまっていたのである。八十五年の学校の歴史もさることながら、大正十三年に始まって実に四十二年間に四十回と言う強行遠足については今更ながら驚嘆のほかない。その第一は強行遠足が大正からいわゆる戦前、戦中、戦後と言われるあまりにも変転きわまりない時代を生きたことである。特に敗戦の年の二十年中止しながら翌二十一年には復活し食べ物もなく、混乱した世の中で完全に実施されていることである。

第二は大正十五年（第三回）以後昨年

までの毎回の資料が戦災もまぬがれ殆んど全部保存されている。昭和十一年第三回の記録映画や昭和七年第九回に強行遠足を始めた江口校長からの激励電報。さてはトラックなどに不正乗車した生徒氏名（昭和四年）など。参加者全員の到着地記録は勿論である。

第三にこの行事には男女延四万余の生徒が参加し約二百五十万軒（月へ三往復と半片道）を歩行しながら交通事故などが皆無であること。

第四は二十四時間制の一人平均歩行距離が七十三軒強（大正十五年から昭和三十六年まで）最高記録が百六十七・一軒であり、参加率が九パーセント以上であること。

第五に昭和十七年には先生達が七班に分かれて甲府から松本まで五十米の縄を張って道路実測を行っていること。などなどまったく恐れ入ってしまう。とても他の真似の出来ることではない。強行遠足こそ本校の世界に誇れる意義ある行事である。皆んなで努力して永久に続けたものだ。

四十年十月十日記

はないはずだ。しかし努力しても努力しても何の幸福も成功も掴むことが出来なかった時の悔やしきも何と大きいことか、そのようなくやしさを味わいつつ短かい人生を終わってしまふ人間は一杯いる。でも意地悪く定められた運命と戦っている姿は美しく尊いものであると思う。何にかの本で「運命と戦う賢者の姿は美しい。」とかいうような言葉を見つけたが、私は運命と戦う凡人の姿は美しいと言いたい。だから世のいわゆる出来る人よりも努力しても努力しても普通の事しか出来ない凡人を私は大好きだ。だから自分は大好きである。また僕は勉強の出来る程度や有名大学に入っている事で人の一生が決まってしまうとは考えていない。もしそうであったなら自分を始め世のどれほど多くの人々が生きる事つまらなさを感じる事か、人は誰でも自分の人生は無限に良く展開する可能性が十分にあると確信してまたまぐれ当りを期待して生活している。人間は夢に生きる動物であるといえるだろう。欲望つまり夢があの一本の強くて太いロープなのです。つまり夢を失った人間は形だけの人間なので、いやむしろ夢を失った人々は死ぬより道はないのです。あほうは失望する事を知らないといひます。

私も失望することを知りません。私は過去に対して反省はするが後悔はしません。未来に強く羽ばたこうと、ただその欲望を満たすために努力をします。真なるものは欲望だけだと考えるからです。しかし反面それはむなしい努力と帰することを十分承知しています。また一日が始まったこのすがすがしい夏の朝の新鮮な空気も十分に吸った。さあもう家に帰って今日一日の準備をしよう。

荒川が呼んでいる

清 水 毅

「アーア、ナニかイコト、ないかな。」 「アッ／＼素晴らしい夕焼けだ。」 「ウーソ、こんな時に家の中でモソモソしているなんて、さえないなあ。」 「自転車で、一時間ばかりドライブして来ようかな」
：：：：：：：：：

荒川の土手へ出る。ほんのり赤い富士サン目差してブンブン飛ばす。ところが道の悪いこと悪いこと、ガタンガタンガタガタ。あごはカクカク前歯はカチカチ。途中から道幅が急に狭くなり、草が両側にボウボウ。緑の河原では、子供たちが野球をしている。アレアレボールが川に落っこちちゃった。一瞬ハツとする。むこうから、モノスゲエ犬連れたオッサン来る。土手の、できるだけ端へ避けて、道をあけてやる。俺って親切なんだね？この辺へ来ると、あたりの河原には、牛が二・三頭、草を食っている。道草は食っていない。鉄橋がある。おりる。歩いて、踏み切りの向こう側へ行く。そこはなんと平和な世界であることよ。日本一の富士サンよりも、ズーツと高く、強い南ア連峰。ここに来ると荒川ほど美しい川はない。タモヤの中に流れ

静かな、静かな、里の秋

お背戸に、木の実が落ちる夜は

ああ、母さんと二人だけ

栗の実、にてますいろりばた

僕は元来ねこは好きである。二、三年ほど前までは、家でも三毛ねこを二匹飼っていた。なかなか美猫であつたが、そのねこは、むしろ自分のほうから家へ入ってきた、いわば押しかけねこである。最初、おもしろがつて食い物をやったのがいけなかった。いかんせん家を離れないのである。でも可愛いからというわけで、家へおいてやることになったが、彼女、女であるということがそもそも非運のおこりであつた。子供の問題である。

最初のうちは、もらってくれる家もあったが、一通りゆきわたるともうだめである。二匹欲しいという家はめつたにない。そうなると当然拾てるという処置をとる外ない。しかし捨てるのを母親ねこに見つけられると万事休す。泣きながら後をついて、離れない。うまく見つからずに捨てても、いないとわかると、ちよつとの間泣きやまない。

こんな事を二・三回経験すると、さすがにいやになる。ところがそんな事があつて、すぐ脱毛症にかかり始めた。どうも野良ねこことつきあつたのがいけなかったらしい。いままでねこにしては整つた姿形をしているということだけが、とりえて飼われていたので、そのとりえがなくねれば、もう用はない。残酷な話である。毛が抜けて醜くならないうちに、捨ててしまったほうがねこのためにも、いいだろうななどといいかげんな理屈をねて、とうとう捨てることに意見が一致した。しかしへたな所へ捨てると、また、もどつてきてはこまるから、

は吸い込まれる。静かな中に家がチラホラ。窓には、そろそろ夕げのあかり。遠くで真白いスピツを連れたお嬢さん（おばさんかも知れない）が――。こちへ来るのかな？いや、むこうへ行くらしい。ふりむくと、今、自分が来た方から、オバさん一人、やつて来る。白い（もとは白かったんだろう）エプロン、茶色の風呂敷包みと黒い買物袋をさげて、踏み切りの所で止まる。西の方から電車がやつて来る。ブーッと行つてしまうと、オバさんはハナオのゲタをカタコトいわせて、鉄橋を渡つて行つてしまう。また一人になる。しばらくそこにポサツと立っている。気がついて自転車のところへ行く。ヒヤーツと冷たいハンドルの感覚。また、暗くならけた土手をまっしぐら。あかりがたくさん見える方へ……………。

初秋閑目

長田義人

秋風が肌に感ぜられる。ある日の昼下がりのこと、隣の家のトタン屋根がさかんに、バリ、バリと音をたてている。近所の子供達がいたずらをしてのぼっていると思つて、やめさせようとしたが、しかしまでよ、人間がのぼっているにしては音が小さいし、それに、いやにちよこちよこしているようである。そう思いながら窓ごしに見ると、子供のねこが母親ねこのまわりを行ったり、来たりしてあばれているのである。時には母親ねこの尾を踏んだりするが、母親ねこは、いっこの気にしないようすである。なにかほのぼのとした気持になって、急に歌が思い出された。

ずつと遠くへ捨てた。最後まで世話のやけるねこであつた。こんな事があつて以来、ねこは見るのは好きだが、飼つてみたいとは思わなくなつた。これは自分の身勝手であらうか。

屋根の上の子供のねこは、しあわせそうに、顔を母親ねこの胸におしつけて、尾をバタバタさせていた。

蝉

斎藤正敏

厚い雲が割れてまぶしい光がさすと、雨がまだやみきらないのに青蝉が鳴きだした。なるほど、地上での命は数日というから、彼等はそうは知らないだろうが人間はあの元気な声にも哀れを感じてしまう。

いやいやまでよ、奴等は本当に知らんのかしらん？

本能とは恐ろしいものだ。

何年かの土中生活から今年忘れずに飛び出してきたのと同様、その命も知っているのではあるまいか。そうだろう。きつと。

しかし死を意識していたとしても、そうでなかったとしても、それは私達が哀れを減ずることにはなるまい。哀れの内容を変えることはあつても。

ところで私はいつも、物事の経緯を意識したいと思つている。つまり「さあ始まりだ」と思つて事を始め、「これで終りだ」そう考えながらやめたいのである。青春というもののように、それがはつきりした始めと終りを意識するのが無理なものもあるだろうが、そんなとき

でもその時だけは意識していたい。というのも何かが知らぬ間に終ってしまっていた。というとき、後に残るのは虚無と不快それに後悔だからだ。

私は今、心配である。私の高校時代はこのまま受験受験と追いたてられて、終りを意識せぬまま過ぎてしまうのではないだろうか。あのプラタナスの硬い玉の感触も、木目の浮かんた床板の踏み心地も、知らぬまに他人のものになっていったということになりはしないか。親しかった友達と言葉もかわさないうで別れていた。なんてことにならないか。

不満やいやなことがいくらあつたにしてもやはり高校時代は貴重である。そして繰り返せはしない。それ故、終ってしまうこの時代をも一度つかみとめて、眺めなおしてみたいのだ。受験は現実的な問題だし、それに目に見える。だからどうしても気持はそれに奪われてしまう。そして、自分も学校も友達をもあらためて見る事は忘れられてしまいくらいだ。その後には虚無感、後悔が必ず持っているだろうに。

穂が出揃った田は、上にあぐらをかいて坐っていられそうに重さと堅さをもった。無数の雀おどしの布切れが風になびいて、源平の合戦を眺めるようである。田中のバスの窓には、穂の潮の香にもた匂いのしづきがある。

“ ねずみさし ”

斎藤 遼子

学校の入口に大きなヒマラヤ杉がある。入学した当初、潤いのなさ

確かにこの木は、木としての価値も低いし姿も美しくはない。針の鋭さ以外、見るべきところもない。しかしそれは、私が託した夢を知ってか知らずか、大きく成長して、意気盛んである。

威風堂々たるヒマラヤ杉を見ながら、私はいつも対抗する気持で、我が愛する“ねずみさし”の姿を思いうかべる。私の心に根をおろして、なお、のびようとするその樹を。なんの負けるか今にみると、ぐつと天をにらむその樹——その葉陰で、私は星を抱きしめる。

どくだみの花

堀口 和美

庭の西側の所に少し湿っぽい所がある。そこにどくだみが緑色をしたハート形の葉を広げ、節のある赤黒い茎を伸ばし、梅雨の降る頃の灰色の空に向かって内気な白い花を咲かせていた。白いといってもモクレンのような明かるさを持った白さではない。ペンキのような濃い白色に淡緑色が溶けこんでいて、ちよつと人目を引きはするが、寂しい陰気な白さを持っている花なのである。そしてそれは、強い臭気を放って、薬用に供せられるために、むざんにも刈り取られる哀れな運命に咲き出る花でもある。しかしこのどくだみの花を見ていると、いくら憂鬱で寂しい時でも自然に慰められてくる。何度も刈り取られてもまた奮然と立ち上がるこの植物の力強さが、見つめている私の体にひしひしと通ってくるからである。そして刈り取られてしまった後のむざんな有様は目もあてられぬ程であるこの草が、つぎの年にはまたものすらりとしたスタイルのよい茎になり十字科の白い花を開いてりっぱに成育する有様は、また格別の感じを与える。入梅の陰うつ

を感じ始めた私には学校の行き帰りに仰ぎ見るこの大きな樹が唯一の慰めであった。

家の庭にもこんな木が一本あったらと思い、植える場所をさがしているうちに、日陰の隅に貧弱な、から松とヒマラヤ杉を合わせたような小さい五〇センチ位のあるのを見つけた。春になると灰緑の芽を出す、普通は一年中緑で、そしてちよつと触れても飛び上る程痛いところから“ねずみさし”と言うのだそう。幼ない頃―小学生の頃―縁日でいろいろな木々を盆栽様に植えてあったのを買い、その箱がこわれたので土におろしたのだ。それにしても、よくこんなに日陰で栄養のなさそうな土地でこれまで生きてきたものだ。

入学以来、劣等感が急激に高まり、日に日に心を針で鑑うようになってきた私、いっこうに見栄えのしない私―私はそこに自分の分身を見たような気がした。そして思った―ヒマラヤや杉は、色といい、姿といい上品な美しさがあつて確かに第一級品だ。今の私が植える木にはふさわしくない。しかしこの“ねずみさし”今までの悪条件の中でこり固まつてしまったようだが、これを明るく暖かい土地に植えれば、やがて澁刺とのびるだろう。葉針の鋭さに、変わりはないけど。

夏の乾燥の日ざしの中に、水をいっぱいかけ、ふりつもった雪に傾いた時には、行つてはらつてやつた。

時が流れた。私は今三年になり、二階の教室にいて、そこから青い空と、あのヒマラヤ杉が見える。いつ見ても本当に美しい樹、と感嘆しながら。しかし、私はそれを見ながら思い出す。九月の或る雨あがりの朝、何げなく“ねずみさし”の横に立つた時、そいつが私の背を越していた時の、あの喜びと感謝とを。

な雨がはじめと降りしきるところ、連日の雨で露草の葉はぐつしよりとぬれ頭を低く土に垂れ、いちじくの真青に茂った感触の悪い葉には雨がしとしと寂しい音をたてて降りそいでいても力強い花をつけ、すつくと頭をもたげてそこに咲いている。私はこの陰うつな雨に日毎夜毎に打たれながらも、いつみても雄々しく咲き誇っているどくだみの姿を見た時、これがどくだみの真の姿であろうと思った。じつと見ているとその一つ一つの花が「どんな苦しい事にもまげずに最後までがんばりなさい。くじけずにね。」とやさしくささやき教えてくれるようであった。今年もまた入梅がきてどくだみの花が例年と変わりなく、元気よく梅雨にうたれながらさいていた。あのどくだみがやさしくささやき教えてくれた。大きな教訓を深く胸に刻み、強い意志をもつて毎日の生活に臨まなければならないと思う。

父と一諸に

小屋理恵

日曜日の夕方「りえ、ちよつと行くか」と父が私を誘ったので父の運転、私はその横に座わって二人で見晴らしのよい道路を他愛もないおしゃべりしながら事を走らせた。窓から入る風はひんやりとしていてなんとなく秋を感じさせる。事をおりて近くのお店に入り、父はビール、私は・ジュースを飲みながら眼下に見ることのできる釜無川の流れ―殊に台風が過ぎ去った後なので、遠くのお山ひだや木々の一本一本、町の灯や、薄紅いの夕焼けの空、川はその空の色を映して、ゆつくりとあるいは、はやく流れている―を眺めていた。ふと私は父の横顔を見て「いいおとうさんだな」と思った。今までの私といえは

口には出さないまでも心のどこかにしりがあつた。しかし、この時初めて私より数倍大きい人だということを、また何をしてもちつともしからない父を物足りないなどと思い、わがままばかりし続けてきた私が恥かしくなってきた。皺のひとすじひとすじは私以上に私をよく知っているのではないかと。いつも忙がしいためにゆつくり話してもできない父。でも二人だけで二人の静かな時が待てたことが嬉しかった。私の父に対するわだかまりも川の流れと共に遠くへ行つてしまつたようである。わずか一、二時間のことはあつたが、いつまでもあの美しい川の流れや夕焼けの空とともに、私の心の中に残ると思う。

ある日の午後

三沢直美

日曜の午後うたたねからふと目ざめて外を見ると、庭に続いた前の山でリスが一匹クルミの木の枝から枝へと飛び移っているのが目についた。羨しい程の身軽さだ、時々こちらを見るけれど危険を感じないのだろうか。時々こちらを見るけれど危険を感じないのだろうか。逃げる気配もなく又餌を探している。いよいよ秋だなとしみじみ感じさせられる。

駒ヶ岳のふもとの我が家では、前の山に訪れる小鳥や動物達で季節の変化を知る。うぐいすが春の序曲をかなで始めると、「日毎に小鳥の種類も増し、名も知らぬ鳥共もその時々を楽しませてくれる。

父が丈夫な頃図鑑を開けて見たがなかなかはつきりした事がわからないうままに終つた鳥が数多くある。五月の朝のかっこうの声はさすがにしい眼ざめを誘ってくれるし夕方のかっこうは、一日の疲れをいやし

帰りのことだ、私は疲れて電車の中で眠つてしまつて、父に負ぶつてもらつて駅に降りた、その時「ドン。」という大きな音で目がさめた。町はちようどお祭りで、花火を盛んに打上げていた。私は半分眠つていて目で夜空をながめた。暮れた夜空の其暗い中に、大きく花火がパツと開いた。私は父の背中であつて空を見上げていた、眠りを防げられた不愉快さは全くなくて、ただ花火がうれしかった。父はこの時、足をケガしていたので私が背中にいるのはつらかったと話してくれた。私はあの時の花火の色は赤だったと記憶している。他にも色はあつたはずだが、赤い色だけが今も鮮烈に残っている。私は花火を見る度に、あの花火を思い出し、今開いた花火は何て貧弱で、色あせているのだろうかいつも思う。この思い出は、いつまでも色あせずに、遠く小さくならないでいてほしいと思つてゐる。

深夜

後藤節子

ガタンゴットン、ガタンゴットン……夜行列車の音が遠いように近いように聞こえてくる。いつ頃からであろうか、それに魅せられるようになったのは。旧友と何年かぶりに再会したときのような懐かしい感じを、何かしら切ないような感じをもつて聞こえてくる。私はそれに誘われるように裏庭に出た。あらゆるものは夜露に濡れてしつとりとして、叢からはスズムシやコオロギのさわやかな声が聞こえてくる。昼間は特別に何も感じられない木々が、威厳な感じをもつて迫ってくる。仰ぐと、澄んだ空には一面に星がまばたいている。何と不思議な感じであろう。つまらないことに悩んでいるちつぽけな私の

てくれる様な気がする。六月に入るといつも決まつて同じ柿の木に、あかしやびんが止まつて、パイヒョローと一クタープ高い声で鳴く。胸もとの赤い美しい鳥だ。こまどりじやないだろうか。なんて言つていたが、ラジオの「自然と共に」の時間に同じ鳴き声の鳥が放送されあかしやびんらしい事がわかつた。七月に入ると暑苦しい蟬の声に一日を過すが、立秋の声を聞くのと待つていたかの様にカナカナ蟬が鳴き夜は、スイッチョン、コオロギが賑やかなになる、庭のイチイの木には、何の鳥か知らぬが毎年ヒナを育ていつの間にか巣立つていく。昨年までは、半分枯れた栗の木にきつつきが来て規則正しくコツコツと虫を掘つていたが、切り倒してしまつたので今年は姿を見ないで淋しい、いつかの夜、母はくいなの声を聞いたとも言つた。二、三年前まではきじの姿も変つた鳴き声も楽しめたが、去年の冬、どこから来たハンターが、ガサガサと前の山を歩いてから危険を感じたらしく影をひそめてしまつた。母が人の家のやしきの中まで入るなんて失礼な人達だと腹を立てていたが、県都に出るのに二時間近くも要する辺地に住んで、自然の恵みを友として暮している母にしてみれば、四季折々の山野の友を庭に続く山にまで入つて荒し廻る人達を心よく思わないのも無理もない事と思ひながら、小さな体で大きい尾、クリクリ目のリス君の動きをしばらく眺めていた。

花火

岩崎法子

小さい時、よく負ぶつてもらつたが、いつも思い出すのは、確かに私は五つぐらいの時だつたと思うが、父に温泉に連れていつてもらつた

存在を冷やかに笑っているようであり、また「努力せよ」と優しい光で励ましてくれているようである。同じころ同じ星を仰いでいる人がどこかにいるかもしれないなどと考えると、未知の人々、未知の世界への憧れが募ってくる。あたりの家々の明かりはすでに消えている。夜気が心底までしみ透る。あらゆるものの寝息が聞こえてくるようだ。明日はどんな日になるだろう。この静けさの中にあらゆる可能性が含まれているように思われる。



私達は想う

あるロマンチストの手記

宮川安法

息苦しくなりましたね。えつ、受験勉強でかつて？うん、それもあるにはある。確かにその為にも苦しくなっていることはいくらですがそれよりもっと大きなもの、「自分の国」がです。昔（戦前）のこと知ってるんですよ。ふうん、じゃ、この息苦しさは解つてもらえますね。えつ、充分解つてゐる。

卑劣だなア。そんなに解つてゐるんだつたら何故黙つてゐるんですか。日、二日と黒い影がその姿を現わそうとしている今、貴方は何故黙つてゐるんですか。意気地なし。口惜しくないんですか。貴方は僕らに、貴方の子供たちに、自分たちの犯した過去を繰り返させたいんです

か。あの過去を忘れたんですか。

えっ、僕の考えが突飛だった？ 冗談じゃない。何が突飛ですか。それに左傾向にあるって。真理を貫くことが左傾向ですか。右でなきや左という定義は何処からきたんでしょう。ああ恐ろしいことですね。二十年へだてた今なお、貴方の体には矢張りあの残忍な血が脈々となみうちつづけているのですから。だから僕らをかたい殻に平気で閉じ込めておけるんですね。

話が少し変わりますが、僕はこの学校に入ってから、『終始受験第一主義』を教えこまれてきました。しかし良心を眠らせてなにが大学ですか。この小さな殻の中で、こんなに均斉のとれない人間を造って貴方は平気なんですか。だったら実際に教鞭をとっている人はどんな気持でしょうね。自分がしていることが学校を破壊させている位のことは分かっているんでしょね。

ああ、こういつている僕自身、大きな矛盾の中に自分を置いている。この苦しみは、二年前の親父の死に直面したときの苦しみに以ています。一歩下がつて考えるとその時以上のじめじめとした苦しみなんです。ああ、そうか、親父がいらないから一層苦しいのかも知れせんね。でも頼れるものがないってことはかえって力強いことですよ。

これからどうするって？ 勿論分かっているじゃありませんか、先ずこれ以上の苦しみにぶつかっていいこうと思います。どんなことをしても真理は守らわはなりません。この血で貫ぬかれようとも。それで本望です。

偽善

今泉 茂

すべての美德とか善行とよばれているものが、多分に偽善的要素をふくんでいることは、否めないはずである。もちろんいいわるい自己欺瞞をもふくむ広義であるが。

こういうたぐいの言葉が頭の中にうかんでくるときは、必ず少なからぬ嫌悪の気持をおこさせる。

だが以前よりは、偽善に対して寛大に、あるいは妥協したというべきかもしれないが、なってきた。

我々の行為、あるいは思考が偽善からのがれえないとすれば、それを生涯ぬけられぬ条件と考えて悪い理由はないはずである。

偽善の範囲を思考にまでおぼしたのは、何かの理論をおしすすめている場合、いつとはなしに他人との対話を予想した形式にしてしまっていることに気がついて、啞然とし、どうにもみじめな気持になるのを、よく経験することによる。どんなに意識を働かせても、いつのまにかこうなるのは、自分にはどうにも出来ないことだと思ふようになった。

偽善を論ずる場合には、必ず、その基準をどこにおくかが問題になる。私はこれを自分自身においた。不遜なように思うかも知れないが私はそうは思わない。よく自分を中心にする考え方は否定されるが、自分というものを中心におかないで、いったい何を考えることが出来るというのか。私は個人主義の立場に立つ。もつともこの場合個人主義という言葉は適当でないかもしれないが。

矛盾ある友情

鮎川 高

ある文学者が友情について、「友情と称せられるものは、精神のゲマインシャフトとしての人間関係を原理として働らく。」とのべています。これはつまり、精神的な共通性或は一致ということが友情が生まれる重要な基盤なのであるのだろうと思われれます。友と精神的に、直接、物質的なものを含まずに、結びつくことほど我々傷ついた若人にとって、救い、慰めとなるものはないで、ありません。

友情というものは、それと対比されるものつまり、不満や憤怒を前提として、はじめて目覚めさせられるものでありましょう。しかしここで僕らは、一つの矛盾に気づかねはなりません。友情・友人関係はかならず、精神的なものでなければなりません。がその精神となる不満や憤怒はかならずしも精神的なものとは限りません。物質的なものも、十分にその原因となり得るのです。

青年期にある僕らの友情というものは、互いに救い合い、慰め合うものではありませんが、その結び付きの基盤というものは、すこぶる不安定で、矛盾しております。

三年間の高校生活を通じて、痛切に感ぜられた唯一の事は、友情とは、救いとなるべきものにしては、著しく、その根底が俗っぽく物質的なものではなかったかということです。

自我からかけはなれた思考はもはや思考の用をなさない。まず自己自信について考えることだ。

それに私は快楽を否定しない、道徳などという言葉は、私には何の意味もなさない。なるほど禁欲は自尊心を守ることが出来る。もつともその自尊心たるや多くの場合恐怖からくるものと思われるが。虚栄心のうらがえした。

しかもこの状態を他人に吹聴するなど、偽善が、この場合には、はつきり虚栄心とよぼうか、顔をのこさず表わす。この禁欲が宗教的な様相を帯びてくると、これがまた打算的になる。天国行きとひきかえに、この世では禁欲生活をする。禁欲によって報酬を期待するというわけだ。何のとはない。しかられるのがこわいからいたづらをしないのとの何の変わりもない。いわゆる聖職の説教に、耳をかたむけていることを考えると、はなはだ自尊心を満足させられる。弱いがゆえに、いらぬ神などというものを持ちだしとくる。

宗教が出たところでちなみに書いておくが、かといつて話の前後にあまり関係なく、「私は無神論者である。」などと吹聴するのもしこし滑稽ではある。近ごろ「偽善」などとなるにたらぬ問題だと思ふこともあるが、なかなかここからぬけ出せない。

泥行

志村郁造

そんならどうするか。
生きる。生活する。

答は簡単である。しかしその内容は簡単どころではない。

一体我々は生きるということを知っているだろうか。小学校の門をくぐってからというもの、一生懸命にこの学校時代を駆け抜けようとする。その先には生活があると思うのである。学校というものを離れて職業にありつくと、その職業をなしてあげてしまおうとする。その先には生活があると思うのである。そしてその先には生活はないのである。

現代は過去と未来との間に割した一線である。この線の上に生活がなくては、生活はどこにもないのである。

ジョンソン君の後がまにおれがなり、ダンゼン大きな気持になって沖繩なんか小つぽけな日本にくれてやり、隣人愛をもつて北爆をやめ人々の幸福のために軍備を取りのぞく。――夢か現実か胡蝶か夢かいや現実か――。

歴史をふりかえると世界の歴史はことごとく戦争の歴史である。交通、通信の発達した今日では局部的な戦争はたちまち全世界に広がる。歴史をおぼえることのきらいなぼくだが、少し考えると、今後戦争がないとはかぎらない。いやかならずおこると思う。

一番大事なもの――政治

金と実力の両方があつたなら政治家になつたであらうこのおれが、ふとしたことから道を誤り、社会のちっぽけな細胞になるのをやりきれなく後悔している。しかしまだぼくは若かつたのだ。

大学は何のため――就職のため

就職することを入社会に出るという。社会に出るということは、自分で生活することだ。だた生きているのはおもしろくないから、少しでも世の中のためになるような事をしたがる。社会はよくにとつて人生の花、命である。だから高校、大学は手段であつて目的ではな

佐田の山が「克己」ということを目標にして今に到り、（彼のファンではない。念のため）日紡貝塚がああ激しい訓練によつて不屈の精神を養ひ、レスリングにおいても我が身をわざとあれくるう荒波の中にとびこませ、もみくちゃにされながらそれと戦ひ、図太い神経を養つて最後に栄冠金メダルを獲得したのである。何もスポーツばかりではない。何事にもこの「己れに勝つ」強固な意志が必要なのである。

今僕の欲しいのは、この「己れに勝つ」不屈の精神、強固な意志である。だが、これは、欲つてはいけないのだ。自分から作り出さなくては。怠惰―墮落―意志―克己。この最後に到達できるように頑張つてみよう。「努力」という言葉があるじやない。

努力

宮崎進

「始めよければ終りよし」と古いことわざがある。これはどんな事にしても最初が大切だということである。勉強にしても強行遠足にしても、最後が問題だけれど、最後をよくするために途中からではなかなかうまくいかない。ある映画で、一人の会社員がいた。その人は頭が悪かつたけれど、大会社の一番下の配置につくことができた。その人は会社中でほらふき男だとか要領がいいとか言われていた。その人は何月何日までには係長になるとか課長になると言っていた。そしてそのとおりになつた。みんなびつくりしていたけれど、けつして変ではなかつた。その人は会社が終つてからもそこへ残つて毎日、ほんとんど眠らず、休み時間も仕事をしたからだ。この人は最後には重役になつたけれど、現実にはなかなかうまくいかない。しかしこのように

い。大学にはいつたら、社会で働くために全力をつくして勉強する。教養がなんだ―捨てちまえ。学問のために学問をして何になる。そんななよなよとした、中途半ばな考えははねとせ。

ぼくの最も買いたいものはクルマ。

川に捨てられた10円より、道におとされた10円の方が何百倍かの価値がある。その10円は貧しき者のパンになれ。おれはその10円になろう

ぼくの最も楽しかった高校時代よ、もうおわかれだ。

克己

斎藤俊樹

怠惰／考え方によつては、これ程恐ろしいものはなく、又これを克服すること程、難かしいことはない。昔、ずつと昔、ある国の王が政治を怠つたためにその王朝は滅んだ。今、今日、理論と実践とが伴わないために（つまり自分の考えを実行することを怠つたために）現代の矛盾した社会が生まれたのである。

こんなことを書いている僕も実は、この為悩み続け、今なお悩んでいるのである。何か一つやり始めても、すぐにやめてしまふ。僕には根性がないからだ。「己れに勝つ」ことができないからだ。

「勝つ」ということには、外見上二通り存在する。すなわち、「他に勝つ」とことと「己れに勝つ」とことである。勝負の世界は前者に属し自我の確立は後者に属す。が前者、「他に勝つ」ためには「己れに勝つ」ことを必要としている。そして「己れに勝つ」程、難かしいことはない。つまり、「己れに勝つ」ことが怠惰を克服することである。

一つの目標に向かって努力することは大切なことだ。徹底的にやることだ。

人

鶴田洋

高校一年の時の夏休みに無銭旅行をした。甲府―懐古園―川中島―親不知―兼六園―親類宅―京都―大阪―甲府というコースであつた。出発二日目の午後十一時、日本海にしている直江津の駅に着いた。有名な駅とはうらはらに非常に殺風景な駅であつた。駅員さんの話によると午前三時まで汽車の連結はないということであつた。前からあこがれていたベンチでのごろ寝、これさいわいとばかりに構内のベンチに横になつた。星の酷暑と、乗物の疲れでひじようにまいっていた。おまけに蚊の来襲でほとんど寝入ることができなかった。登山客など私と同類の者が七、八人いた。あぐらの果てには十二時頃、他の人達とともに駅外に追い出されてしまった。待合室のベンチはもう人でいっぱい。残っている所は外のざらざらしたセメントの所だけであつた。バッグを背にしてどうやら横になつたが動きたびに骨がセメントにぶつかり、とても寝られる状態ではなかつた。私の側では登山服を身に着けた20才ぐらいのほっそりした弱々しい青年がリュックから毛布をとりだし、地面に敷いた。ぼくに向かって「言いつた。」「一諸に寝ないか。」私はただコックリうなずき彼の側に横になつた。彼は一つしかない携帯マクラを私にかし、彼は自分のリュックを枕にした。蚊取線香をたいた。二人共ただ目を見開いて、空の星をながめていた。「これから敦賀に行くんです。」「そうか、僕は岩手山から金

沢の家に帰るんだよ。」ただそれだけが交した言葉であった。午前
三時、取り片付ける時も二人共無言であった。臨時急行列車が入った
のであわてて汽車に乗り込んだ。彼とはそれきりであった。汽車の中
は身動きもできぬありさまで、彼がどこにいるのか見当もつかなかっ
た。お互いの素性はもちろん名前さえもしらない。だが彼はともかく
私は彼のことはどうしても忘れられない。彼はほつそりとした、中ぐ
らいの背で、どこか弱々しいところがあるそんな青年である。

劣等生

田中秀文

哲学者カントも、その細すぎる足に劣等感をいだいて、決して黒色
の靴下をはかなかつたそうである。僕も高校入学来劣等感に悩まれつ
づけてきた。劣等感とは自分自身が他の標準と比較されて、その相違
が意識されて自分自身の欠陥に注意が向き、それが弱みとなってこれ
を暴露しまい、されまいとして緊張しその緊張から苦痛し恐れを感ず
るようになることであるという。それではこれらの劣等感を克服する
にはどうしたらいいだろうか。

楽聖といわれるベートーベンは、若くして耳が遠くなり、歌手のこ
とばをきくためにはオーケストラにくつついた座席にすわらなければ
ならないほどだったということであるが、しかし彼は、「肉体はいかに
弱くとも、精神でたたかってみせよう。」と自身にいいかせ、そ
ののちに「悲愴」「田園」などというりっぱな作品を完成させた。こ
のように彼は自己の努力でその欠陥を補ったのである。これによつて
わかるように、自分のもつ劣等感をその人自身の努力によつて克服で

き得る人こそ真に値打ちのある人だろう。努等感に悩む諸君、勇気を
もつてそれを克服することに努めよう。

実行力

谷川 洋

僕は昨年もその前の年も「あしおと」に原稿を出さなかった。その
事は僕に実行力が無かったのだと今では自覚し、残念に思っている。
もし、僕に実行力があつたなら、この事に限らず高校生活が楽しかつ
ただろうと思う。もう僕たちが高校生活をする時間も残り少なくなり
、僕たちの目の前には大学入試に合格するという大きな目標がある。
僕は思う。この残り少ない日々を自分が出せるだけの実行力をフルに
使い、その目標を乗り切り、大きな勝利をこの手につかみ、友人と楽
しく語り合いたいと。

まず、この実行力の手始めとして、僕はこの原稿を「あしおと」に
初めて出した。

無 限 性

乙 黒こずえ

ある雑誌に、国語の先生の生徒からの質問についての話が書いてあ
つた。

……「先生ぼくはこの問題を読んで感じたのですが、原作者はパス
カルの言葉についてここに並べた選択肢のどれにも当たらない。その中
間ぐらいのことを考えていたのではないのでしょうか。どうもこの選択

肢のように言い切れないのですが」とある受験生は私にいう。彼の理
解にもなるほどと思われる点もある。そこで私は「ただ入学試験とは
あくまでも出題者の読みを読むんだね」と答えた。略

出題者の意図を探るとい自分の言い方に決つてまちがつて
いないこの言い方に一抹の後味の悪さを感じそして又、人が人を裁く
という形の試験制度の上に驕る「人間の有限性」を思いそこはかとな
い悲しみを感じないわけにはいかなかった。………終り

現実社会に対する何かのいきどおりと、あきらめを感じどこかにお
き忘れてしまいたい、ような気がする。この話に他の事をつけ加える
のはこじつけかもしれないが。

音楽の演奏者を考えてみるとーもちろんここで私は作曲者の有限
性を言おうなんて思つてもいないー譜面どうりに読んでいたのでは
作曲者の心が出てくるはずがないと思う。楽譜に心が書けるはずがな
いー又それを再現するのが演奏者というものだろう。人によつて考え
方はちがうー受けとり方もちがつている。だから、同じ楽譜でも感じ
はずつとちがつてくると思う。おかしい話になつてしまつたが、個人
の個性を尊重したいものだ。私達の無限性を信じたい。

静寂に思う

丸山正之

遠くの方から聞きなれた曲がかすかに聞こえる。いつもは気にもと
めとめないで、聞きながしていた曲が今夜は妙に感じ良く響いてく
る。耳に入ってくるのはその曲だけである。近ごろは神経がとがつて
いて何を聞いても、何を見ても、ちよつとしたことで腹が立つ。

しかし今は頭の中がからっぽになつたようで考える機能がまったく
停止している。音楽が消えてしまつた。何の音も聞こえない。がらん
とした部屋の中には必要以外のものの他は「ミロのヴィーナス」の絵
が壁に掛けてあるだけである。お盆のころ知っている女の子がふいに
病気で死んだ。その子は頭もよく、とてもかわいい子で、よく近所の
親戚へ来ては遊んでいた。最後に見たのは、六月のどんより曇つた日
だった。その時は無邪気に走り回っていた。だれがあと二ヶ月たらず
で、その子が死んでしまふと考えただろう。小学校六年でその子の生
活は永久に止まつてしまつたのだ。人間なんてほんとうに弱いもの
のように思えてくる。それは生まれた時にもう定まつているものなのだ
ろうか。気がつくとすず虫の声が聞こえていた。

ものの見方

土屋 一三

この世は比較の世界です。私達は比較の世界に住んでいるのです。
たとえば私は朝、いつも乗る電車へ乗つて、少しでも手足が自由に動
かせれば今月はずいているなと思います。けれども初めてこの電車へ
乗つた人なら、おそらくこの状態を、こんでいると感ずるでしょう。
つまり、私にはこの電車は毎月手も足も自由にならぬほどこむという
観念があるので、この状態を比較的すいていると感じたのです。また
私達が友をみる場合、あるいは自分自身の成績や態度などを考える場
合、他人との比較が価値判断の基礎となります。

ところでこういう比較の世界において秋達にとつて最も大切なもの
があります。それは豊富な経験です。何でも見れるものは見る。聞け

るものは聞く、できることはする、してみる、こういった態度が必要なのです。そこから、ものごとの適切な判断の基準、判断の能力が、自然に生まれてくるのではないかと思うのであります。

笑 い

望月 克 充

笑いにはなん種類がある。大笑、微笑、苦笑、冷笑………そして実際に、周囲の人の笑った時の顔つきを思い出してみると、千差万別といていい。愉快に明るく、さばさばと笑った顔を決してみせない人はどうも薄気味が悪い。腹黒くはないのかも知れないが、こちらはつい警戒するようになる。

人間は何かの際に、ともどもに気持よく笑った時に親しさを増すようである。又微笑は相手にいろいろな感情を与えるものである。女の人は時々気取り笑いをする。……………

「笑い」というものは、人間の生活にとって欠くことのできないものであり、人類とともに無くなることのないものだ。ウィットやユーモアが社会や人間関係の潤滑油として、バカにならぬ作用をしてきていることは周知の通りである。だが、私たちは人とつきあう時に他人の其の笑いと嘲笑とはつきり見きわめられるようにはしておかなければならない。というようなことを読んだことがある。笑いを忘れないよう精神的（思想的）バックボーンをもちたい。

「腹黒い嘲笑はもともと

笑いとはいいがたい。」

ゴールドスミス

える暇もなくなつて来たのが残念である。

わからない事

仲田 栄子

二学期もはじまつたある日、学校帰りの汽車の中で中学時代の友と会つた。彼女―卒業するとすぐに社会に巣だつたのであるが―とはずいぶん久しぶりの出逢いであつた。と。とめのない話の間にも何かしら彼女のたくましさ―あきらかに中学時代にはなかつた―が感じられた。ここにも三年という月日があつたのである。

ふと考える。「時」つて変なものだと。十分でも、ある場合はその速さに驚き、またある場合にはのろのろしたそれにいらいらする。時計の単位が場合場合によつてちがうのかとさえ思う。でもそれは実さいには同じ長さだ。それが証拠に同時の一瞬でもそれを楽しいと思つてゐる人には短く。いやだと思つてゐる人には長く感じられる。人生を長くしたい人は後者のようにするとよい。でもそれが必ずしもすてきな事とは思われないが。「時」とは感情により左右されるものだろうか。「時」には、何かの作用能力があるのだろうか。前に述べた彼女との出逢い、それは時がそうなるようにしたのか、偶然―偶然も時の一種にはちがいないのであるが―であつたのか。それとも生まれた時からそうなるよう定められていたのか……。いずれにしても人間にはわからない事である。

そもそも時とは何であらう。

辞典で調べると、

時：過去―現在―未来と連感してとどまることなく、すぎる現象：

此の頃の学生は

遠藤 博之

などという言葉を良く聞く。確かに現代は少しモラルの面で混乱していると思う。その事が僕等の世代に一番良く現われている。一口で言うと、利己主義の氾濫である。一因はいろいろあると思うが、僕には社会がそう育ててきたからと思えてならない。幼年時代から今までの教育の、社会環境の、ゆがみが今現われたと見たい。そしてその責任は大人が負うべきである。今の大人は自分達のしてきた事が思ひがけない結果となつた事にとまどい、訳が分らないまま罪を他人になすりつけて問題の解決から逃避しているように見える。終戦後、民主主義を實行してきた我国にとつて、それはやはり与えられたものだったのだろうか。それとも戦後の日本は身体ばかりが発達して、精神は物質の間でふり回されるようになったのであらうか。僕には分からないが、とにかく今の世は住みにくい。そこで一つ提案してみようと思う。言い古された事かもしれないが、自分の事ばかり考えず、他人にももう少し注意をはらおうという事である。もつと他の人間の存在を認識する事が僕等にとつて必要ではないか。もちろんそんな事では解決されない問題であるが、最小限のモラルは守るべきである。といつて僕等の持つ自由さを捨てる必要はない。ただ同じ事をくり返さないよう注意すべきなのだが。

現代を理解しようと思つてゐる人に僕は映画を勧めたい。この芸術が一番敏感に現代の世相をとらえているように僕には思える。ただこの頃は、時間がないのであまり映画館にも行けず、こういつた事を考

私はちよつと前まで時計の針の動き、カチカチという音、それが「時」だと思つてゐた。でもまちがつてゐた。なぜなら人間がまだ猛獣と同居（？）してゐた頃だつて時はあつたはず―時計の針の動きはなかつたはずであるのに……それで結局、時は「わからない物」ということになつた。

「時が解決してくれる」「時がたてばわかる」「時を得る」……。

「時」があちこちにごろごろしているのに気がつく。でも「時」つて何でしょう？。

月をみて考えた事

志村 満喜子

今年の十五夜は残念ながら、月は見れなかつた。といつてもこれは、月見の時間ごろには見ることができなかったというだけの話で実際は名月を仰ぐことができたのであるが、ひとねわりして起きて外に出て見た時、十時をまわつてゐた頃であるが、天上にまんまるのお月さんが輝やいてゐた。本当にお盆の様に丸く、大きい満月である。その光はあまりにも澄んでいて鋭かつた。その澄んだ光は、私の身体を洗い清める様であつたし、その鋭さは私の胸をも射るかの様であつた。

めざましい科学の発展は月の正体をあはきつつある。月ロケットが打ち上げられ、その裏の写真までも映すことに成功した。かぐや姫に出てくる月の都の美しい物語の世界に住んでいた人々の夢は完全にやぶちれ、うさぎのもちつきの話を信じてゐた素朴な民の心も傷つけら

れたか。

しかし、美しい月の夜、こうして月を眺めていると、非科学的な私にとつては、月にはやはり、月の都があり、うさぎがすんでいる様に見える。

「月見だんごあります。一個十五円。」十五夜の日にはきまって菓子屋の前には、このはり紙が出る。このはり紙のなんと空々しいことか。月が出てもなくても月見だんごは売られる。「月よりだんご」まさしくこの境地である。せせこましい現代人にと、つて、月のあまりの美しさに時のたつのも忘れてしまったという。芭蕉の境地を理解することは、はなはだ困難になりつつある。さみしいことだ。せめて十五夜の晩だけでも、芭蕉になつてみてはいかが、かぐや姫になつてみたらどうだろう。

おおげさな考え

鈴木和子

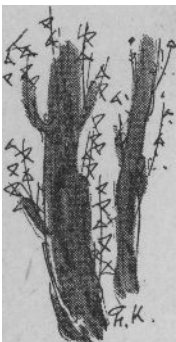
毎日、忙しく過ぎていく。たれもかれも人に接して毎日生きていく。人に接することが生きていることみたいである。そういう時に自分自身をみつめる時や、又何かに熱中することによって自分をよく知り、自分の中に新しい何かを発見するというようなわずかもいいから心のゆとりがあつてもいいし、そうあるべきだと思う。しかしそういう時が今の生活では、何か思い出の中にでもあるかのように遠いものになりがちである。そう思いながら私達は現代又は生活をすて去ることはできない。それをするとは生きるということを放棄することだからである。人間性のそれぞれの深さ、豊富さをだんだん失つてい

本いや、愛すべしと義務づけられた本、それは、参考書、問題集、むずかしい評論文である。だが一たび勉強を始めると、それらは、私にとつて、かつこの睡眠剤となる。のどの筋肉が疲れてしまう程頻繁にでるアクビ、トロンとした眼……。でも私は公言する。ロマンチックな恋愛小説、スリルとサスペンスのある推理小説よりも、今はズット、ズット、参考書、問題集、教科書の方がいいよ／

ああ、……。今頃彼等も彼女等も着々と自己の計画を実行していることだろう。

私は机にうつ伏してしばらく眠つた。それから大好きな参考書を出して勉強を始める。

感 雑



母さんの歌

平井恒治

勉強に飽きて、ふと物思いに沈む時

「恒治、勉強なんかあまりしないでいいから体には気をつけなさいよ。」

「めんどうでも、カンヅメばかり食べないで、野菜のいため物でも作りなさいよ。」

き、ただ単に呼吸して黙々と過ぎていく。こんなことを考えると何か恐いような気がするが、それさえも今は感じなくなつていきそうである。現代のこの多忙と対人関係とだけが生活のすべてになつてはならない。いや、決して今みんながそのような空虚の中に転落しているというのではない。今、夢中に一つの目的に向かつてわき目もふらず突進している。立派だと思ふ。こんなえらそうなことを書いた私自身も空虚のふちに立っている膨大な数の人間の中の一人かもしれない。

「一番だましやすい人間はすなわち自分自身である。」

自己に甘えることなくいつもきびしくあれとか、自分を失わないでとか、どこかで聞いたことがあるが、むずかしい理想である。

結局は現在あるいはずうつとずうつと将来においても自分と自分とが対座する時を持つていこう。そう努力しよう。こんなことを書いた私もそれができるかどうかあやしいものである。

本

窪田美文

私の好きな本、それは「大地」「アンナ・カレーニナ」「罪と罰」「武器よさらば」：現実生活で満たされないものを、小説に求めたのである。だが読んでいる頃はそんな意識はなかった。可能な限り書物に接し、甘ったるい陶酔感に浸るのであった。しかしそれもすでに過去のことである。

今や本立てには、パール・バック、トルストイ、D.H. Lawrenceに代わり、参考書、問題集と並んで三木清、小林秀雄等が飾つてある。私の読書は、欧米小説家から日本の評論家へと移行したのだった。今や私の好きな

「暑いからといって、寝冷えなどしないように。と、母さんが真剣な顔で僕に言つた事が思い出されます。自炊生活二年余り。

その間いろいろいるな事が起こつたが、いつも僕を激励してくれた母さん。甲府にくる時はいつでも僕の好物をたくさんもつてきてくれる母さん。もう五十に手が届くようになった母さん。その母さんに早く安心してもらうために、「しっかりとしなければ」と気持をしめて僕は机に向うのです。最後に僕の好きな歌

かあさんが よなべをして
てぶくろ あんでくれた
こがらしふいてつめたかううて
せつせと あんだだよ
ふるさとの たよりはとどく
いろりの おいがした。

自然に流りたい

津久井高憲

宇宙の根源が「オギャー」と鳴く以前の胎内から今日、未来と限りなく継続している物で、手にも、絵にも、書にも、まして言うことも出来ない。それ自身は、人間のそれに対する経験や実験に加えて、その有効性から定められたものでしょう。古代一本の棒で測り発明以来は、ゼンマイの返動で歯車と二つ以上の針が、キイキイキイ、チイクタクチイクタク、カチカチと刻み動き、その厳格さをある程度まで守り続けられている。しかしそれには両極があるのだろうか？、もしも運命が、限らないフィルムみたいに成つていて、万物が、あるスクリ

ーンに投影されているとしたならば、他の世界のそれがあるのではないだろうか？　やはり、ピカソにも、カンバスのものには、ならなかったのでしょうか。60進法などと数学的にあつても、その価値はどうだろう。昔から「光陰矢のごとし」、「時は金なり」などと、その速度や尊さを、重視しているけれど、厳格に關してはどうだろう、一分、 $\sim$ 60分、 $\sim$ 60分……と絶対不変の動きと厳格性をもっているこのものは、可変とはなるのである。時間日本人となつたのも昨年のオリンピックだ、村時間と称ぜられるものも、田舎の「のんびり」した風習から生じるのである。だから、それは生かすことも、殺すことも人々に係っているのである。また、それが「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり……」であることは、確かなことである。この灰色とされている時期をただ無駄には過ぎなかつたとは思ふけれども、残された流れの中に、淀を持たずに流れたい。

アトムと私

遠藤 和男

幼稚だと思われるであろうが、私は手塚治虫（知らぬ人はあるまいが私の考えでは、世界一流の漫画家）の昔からのかつ熱烈なファンである。彼の作品とのつきあいも長い。小学生の頃から私は「鉄腕アトム」（テレビで放送中）「リボンの騎士」（少女連載）「オマン」（少年サンデー連載）「ジャングル大帝」（テレビで放送予定）などに熱中していた。（最近のものとしては「W・スリー」「オズマ隊長」がある。）そして現在読んでみても実におもしろい。彼の作品に心ひかれるのはなぜであろう。まず第一に彼の豊かな空想力の為であ

となく、ごく自然のふるまいであるかのように。実は前にも球技大会の時、パンくず、袋、アイスクリームの棒などのちらかった教室内でだれにいわれるともなくたつた一人でそうじていたこともあつたのです。現代のこの世の中——他人を傷つけてまでも自分の利益を得ようとする孤獨な現代人が存在する——にあつて彼女はまた何という博い、美しい心をもっているでしょうか。そんな彼女をみたとき、後光がさすようにさえ思え、彼女に対する尊敬の念と平行して自分に対してはすかしいような気持ちさえ起つてきたのです。彼女のその奉仕的なしかも、だれにも認めてもらおうとは思わない謙虚な態度は一高生（自分もふくめて自己本位の動物）にとつてまさにアイドルともいふべきものでありましょう。またある人にいわせると「そんなことは」といふかもしれません。確かにそれはごく人間として自然な行為でありましょう。しかしそのごく自然な行為が私達すべてにとつてできないのはなぜでしょうか。私達この社会という機構の中に生きる動物として、今とつて自分の行動を反省し、社会に生きる個人の役割を再認識しつと博く、美しい心をもちたいものです。

進歩

矢沢進一

「あしおと」の締め切り日が迫つてきた。寄せ書きも出来上つた。もうそろそろ卒業の話があらちちらで聞かれるようになった。高校生活に入ってから二年半余り、一体僕は何をしてきたのだろうか。一年生の時は何が何だか落ち着かないうちに過ぎ、二年生の時はよく遊び、そしていつの間にか三年生になった。そしてそれぞれの学年の

ろう。特にSF的なものでは拔群である。第二にそのしつかりしたストーリーがあげられる。他の多くの漫画はストーリーが支離滅裂である。第三に絵、彼の描く絵は品があつて美しい。第四にそのユーモア。

そして彼の作品の底には、常に暖かいヒューマニズムが流れている。彼の描く愛情、友情の世界は美しい。

彼の作品を読んだ後、ほのぼのとしたものを感じるのはこの為である。それはこの、殺伐とした世の中の一服の清涼剤ではあるまいか。以上くだらぬことを書きました。

僕のアイドル

田中紀夫

皆さんは自分の性格について深く考えたことがありますか。僕は今頃、自分自身の性格が実にいやらしいものに思えてきたのです。もつともつと素朴で美しい心を持ちたいと思うようになりました。素朴——実に感じのいい言葉であります。飾り気なく自分の個性をまる出しにした状態。美しい心——生まれたままで社会悪にそまらない純心無垢な心。これらこそ人間が理想像にちかづける唯一の条件でありましょう。

さて僕がこのように考えるようになったのはひとつのきっかけがあるのです。それはクラスの一女生徒であります。彼女こそは前の二つの条件を省した理想の人間であるかもしれません。ある日の昼休みゴミ箱の近くを通りかかると、僕等のクラスのIさんはほうきを片手にあたりのゴミをはき集めているのです。しかもだれをも意識するこ

始めには、それぞれの決心を内に秘めてしつかりとふんどしを締めて行こうと決心をした。その決心も三度とも数ヶ月も立たないうちに奇しくも挫けた。今、「あしおと」の原稿を書きながらまったく我ながら情け無いものだと思つづくと思う。

人間、前進するばかりでは進歩はしない。常に反省という添え物を付けなければ進歩できないものだろう。だが僕は反省はおろか前進すらも今まで思うように出来なかつた。今さら何をくよくよしても始まらないが、もつと積極的に活動的に高校生活を送ることができていたらと思つている。卒業を控えて「あしおと」の原稿を書きながらたとえわずかな時間であつても、今までの僕自身の事を振り返ることができたのは何ともうれしいことである。この事が少なくとも今現在の僕自身にとつてプラスとなつたものと信じている。

私

浅川博子

赤い夕やけの空の下で赤トンボを追いつながら家路についたあの時からもう数年間、なにもしないまま過ぎ去つてしまった。数年の間……ただ怠惰な自分の姿のみが浮き彫りにされたがごとくに思い出される。

小さなまで堅いつぼみにらめつこをし、美しい花の香と語り合つて過ごしてしまつた春の日、一年間ががんばろうと自分と堅い約束をした。青い小さな波と戯れ、柔かい太陽の光と話し合つてすごしてしまつた夏の日、二学期からはがんばろうと自分に強く誓つた。まるい大きな月と静かにすわり虫とおしゃべりをしてすごしてしまつた秋の日

スポーツに勉強にと心に決めた。黒い小さなみのむしと日なたぼっこをし、こがらしとささやき合つてすごしてしまつた冬の日、来年こそは心機一転と神に誓つた。

これらのことが昔のまた最近のにがい思い出としてさまざまな形で私の頭の中に宿っている。そして今、からの頭からなにかを出そうと必死になつてゐる私。不可能なことより可能に近くしようと必死になつてゐる私。ある一本の道をいろいろなことを経験して歩こうとしている私にとっては何かが欠けているかもしれない。でも今の時があとになつて楽しい思い出として残ることを夢みながら全力を尽くそうとしている。

無題

遠藤ひろ美

九月の十日が締め切りということになつていたので、そのうちに書けば良い、と高をくくつていた。それに、五日の日曜日は、翌日の試験の準備も手伝つて、「あしおと」の原稿を書くなど、思いもしなかつた。そして、テストも終つて一息ついてみると七日、十日までにはまだ日もあると思つて、一日延しにしていたら九日になつてしまつた。ところで、もう一つ悪いことに、私は、どうした加減か九日を八日と感ちがいでいたので、九日の日に学校へ行つてはじめて、皆の話している声で、あしたまでと気がついた。でも私の生れつきののん気さで、今夜書けばなんとかなると思つた。しかし、S・H・Rの時担任の先生が「まだ書けないようなら十五日までにしよう。」と救いの手をさしのべて下さつた。それで、幸いその夜は書かずに過んだ。

つた。今こそ本当のものを見たと思つた。なんという気分だろう。風の感触の心地よさもともなつてものの姿が見えるとはまつたくすがすがしいことだ。

もし自分の姿や行くべき道がはっきり見えたら、どんなに良い気分になれるだろうか。私は今、ただぼく然としたものの内で、すべてのことを手さぐりでやつてゐるのだろう。少しばかり自分が見えてゐるつもりでいてもそれはやはり、いつも見る景色のようなものに違ひない。だがしかし自分の見える人はそういないという。それがわかる人は偉人だともいう。そんなものだから私がいくら望んだところで、それはおよばぬものかもしれない。私はあせるまい。いつか私にあの台風がおこつた後、突然見えてくるかもしれないもの。

私の背が低い

舟久保良子

わたくしは残念ながら背が低い。生まれつきかとあきらめながらもいつの日か母を見下ろすことができると確信していたものだ。でも今となつてはそれは永遠にかなわない夢でも今となつてはそれは永遠にかなわない夢と化した。ことによるとこう決めてしまふのは早いかもしれないけれど、それにしても、家にいるときはいつこう気にならな。というのわたくしは家族の中で一番年下であり、至極当然なことに考へてゐるからだ。ところが満員バスの中では、大いなる悲劇である。わたくしの顔のまわりはみな他人の背中。まつ暗な中でただ上方からの光を頼りにしている所は、「井の中のかわず」という図だ。頭上からのにぎやかな声の中から、ただ車掌さんの言葉を聞きわけて

と、又私の、のん気虫が目覚すのではないかと恐れて、早速、今、十二日の日曜日にこれを書いている。でも、昨年、一昨年と題が与えられていたので、筆ぶしよの私も、それほど困らなかつた。とはいへ、きよ年などは辞書の抜き書きと、教科書の引用で、ようやく用紙をうずめたのだけれど。普段、あまり真剣に物事を考えないので、何について書いたら良いか少しも分らない。ついこの間、といつても六月頃、寺田寅彦の「田園雑感」の一部を何かの本で読んだことを覚えてゐる。作者は「子供の私がしだいに失われ、おとなの私のどこかに隠れているにすぎない。」ことについての悲しみを述べていた。私も別の意味において、そう、何も考えずに、こんな年にまでなつてしまつた事を、いささか後悔している。今では、返す由もない小さかつた頃の思い出が、しみじみと述懐される。

雑感

長谷部 幸男

台風のおかげで今日はすばらしい景色を見ることができた。空気がいつもとはまるで違う。遠くに散らばる木々の緑が雨に洗われたことと重なつて、くつきりと紙におされたように見える。日をうけているところとその影になつてゐるところがはっきり区別できるからだ。山の本木で一本一本が見定められる。山ぎわの空もつきぬけるようになりが。東京ではスモッグが吹き飛ばされて今日は久し振りに青空が見られたとか。

私達はいつも見る景色、木々の姿がそのものの本当の色であり、形だと思つてゐたのだが、そうではなかつた。これこそ本当の姿だと思

今どこを走りてゐるのかを知り、自分の降りる所を知る。そしてバスの中でのわたくしは、物としてしか扱われないようにさえ感じる。

わたくしはいつもささやかなレジスタンスを試みたいと願つてゐる者だから、小さいからといつて悲観してゐるのではない。小さいのは小さいのでいいのである。が、しかし、林の中に立つてゐるように感じてゐるうちに、わたくしの心までがだんだん小さくなつてしまふのではないかと、それを恐れてゐる。

この世の中には満員バスのようなものだ。いろんな物がつめこまれてゐる。よいものも悪いものも、いつまでも輝いてゐるものも明日にもすぐに捨てられてしまふものも、いっぱいまつてゐる。ただバスと違ふところといえば、世の中には車掌さんがいない。今どこを走つてゐるかも、いつ降りるべきかも、わたくしは自分でなんとかして知らねばならない。わたくしを押しつぶしてしまひそうなあらゆるものの中から、自分を求めようと必死になつてゐる。

バスの中で見上げる光が、果てしない大空へ続いているのをわたくしは知つてゐる。たとえ視界はせまつても、わたくしの心もそれに向かつて大きく広くのばされなければならないと、常に思つてゐる。

無責任な男の日記

石井俊彦

夢からバツチリ、八時ジャスト。朝食もそこそこ大切な弁当をかかえ学校へ急ぐ。ドアをけとはし授業にすべりこむ。「オース」「ヨオ―」でミスター無責任の一日が始まる。この男の日記をお見せしよう。

十月一日

どうして、こうもてるのかな。エッなぜかって。だつてさ、君、通る人が全部おれを振りかえつて見るんだぜハンサムはつらいよ。おい君、なぜ笑うんだい。ええつ、おれの顔に墨が付いてるつて！、なんだ、そういう事情であつたのか。

十月二日

古典の時間、中世の物語にはどんなものがあるかって聞くから、オレ、こう言つたよ。『食堂物語』、チャイムの音、空腹泣き虫の響きあり、われ食うカレーの肉の量、身体発達の理を表わす」つてね。するとみな笑いだしたんだぜ。まったくふざけちよるよ。その上先生はこんなことを言うんだぜ。「そんなものがあつたかねつ」つて。「サアオレ知らないがね。でも言うじやありませんか。あなたの生徒を信じなさい」てね。

十月七日

年ごろになるとおかしくつて、クッククックツ。ホラ、あそこでも女の子がおなかをかかえて笑つてらあ。クッククックツ。あの子、だれか芦似てるなあ。そうだ、動物園の猿に似てる。クッククックツ。ええ、そういう君は何に似てるかって。そうだなあ、アラン・ドロンつてとこかな。なに？、似てないつて。おれは君のようなうそつきはめんどう見きれないよ。ガチョン。

変な話し

丹沢良二

やがて太陽が沈もうとしている。

「時は金なり」。一秒何円、一分何円ということではない。時間というものはあつというまに過ぎてしまい、再び取り返せないから有効に使うべきだということ。僕は高校生活三年間を、遊びと勉強で、一対九、いや間違ひ、九対一の割合で過ごしてきた。一年の時はまだあと二年もあるから、二年の時は皆さんがおやりになるという中休みを素直に実行し、三年になつてようやくやろうと思つたら、もう夏休みも終わってしまった。勉強時間は馬の顔のように長く感じ、遊びの時間は、誰かの足のように短く感じるもののようにだ。かくして三年間夢のように過ぎてしまったが、今はただひたすらどうしたら大学の裏門に入れるか研究中である」冗談はさておき、今は多少悔いているが、ただ一つ後悔していない事がある。それは、一年、二年とクラブ活動をやつてきたことだ。勉強とクラブは……なんてことは考えないでとかく無味乾燥になりがちな高校生活に潤いを与えてくれ、僕にとつて格好な清涼剤となつた。そこでは、先輩との交わり、合宿での共同生活、普段の練習などクラブ活動をしていれば当り前の事かもしれないが、貴重な体験をした。この点において、僕は時間を有効に使つたと確信し、悔いてはいない。数あるクラブ活動が今後も永久に続き、さらに発展することを願っている。

卒業にあたり

桜本安善

『卒業文集を作るので書いて提出しろ』といわれて、いざ書こうと思つても適当な題材が頭に浮かんでこない。生徒が自発的に言い出したわけでもないし、誰が言い出したのだろうかとその人をうらむ気持

俺は今日も楽しいようなはずかしいような変な気持でペダルを踏んで行くのである。

高校一年の時からである。

そこは俺のうちから南へ（ええと）南へ約一〇〇メートルの所である。俺はただそこへついて帰ってくるだけのことである。

時間にして十分間である。

ただそれだけのことである。

しかしである。

何が俺をそうさせたかである。

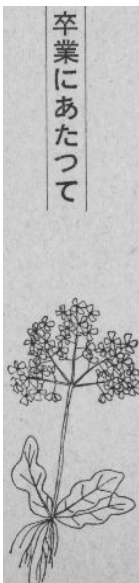
なぜならである。

そこには俺に生まれて初めて感動を与えたところの赤い小さな花がいつも咲いているからである。

ところがその花、二、二日前から突然赤い大きなバラの花と化したのである。

それからとはである。

ないしよないしよの話である。



クラブ活動

小沢基次

にもなる。おまけに期限をつけられたら

どうしても出さねばならぬ。あれこれと考えて、学校のことを思い勉強のことを書こうと思つたが、いつもクラスの平均点をさげてばかりいて、クラスメートにつらい思いをさせたり、めんどうかけている僕には、はずかしくて書けないので、すこし早いが卒業記念に二言ばかり書いてみたい。ぼくはいつも考えていることだが、皆、人は一つの信念を持つて生きてゆかねばならないと思うし、人間としての道徳は守らねばならぬと思う、が道徳といえは在来の旧道徳しかないと考えているコチコチな奴もある。最初から相手が悪いのだときめてかかつて、「道徳を知らない奴だ」、「態度が悪い」と、ガミガミ言う。が、僕は心の中で反論する。「世の中に道徳を守らぬやつが抗どこにあらう、完全に無道徳な鳥獣などは決していかなる道徳にも反しやしないではないか、一つの道徳を否定することは、他の道徳に依っているからなのだ」と長与善郎のいったように。だがすこしもそんなことを知らない。いやわかつてくれないのだからこまる。それはそうと、僕は『最後の勝利者はあせらない』という言葉が好きで、つらいときも悲しいときも心のささえとしていきたいと思う。最後の勝利者は自分だと信じ、それなりに努力するのだから、その課程における失敗は気にならぬ。だからというわけではないのだが、人から少し位の非難はうけても、ぼくはあまり、気にしない。これをうぬぼれとも独善主義ともいいたいやつは言うがいい。自分の人生は自分の考えで力でこの腕で切りひらいてゆくのだ。そのためにも、人よりおくれても良い、あのカメのようにゆつくりと自分を鍛えてゆきたい、なにごとがおころうともすこしもあわてぬ大きなずしりとした心の持主になれるように。

最後に、わずか三年間の交際ではあったが君たちはそれなりにいい人たちだった。かなしい時にはなぐさめて、さみしい時には話し相手になつてくれた君たちにこの僕が三年間大過なくすごせたことを感謝するとともに、新日本建設のためにそれぞれの本分をつくすだろうことを信じながらペンをおきたい。

集中力

依田政幸

授業終了の鐘で部屋へ行き、練習着を着てバレーコートへ、練習開始、パス、アタック、レシーブ、サーブと順を追って午後六時過ぎ家路につく。これは私が暮らしてきた約二カ月前までの放課後である。その中でもっともつかしいのは対人レシーブの思い出である。その最中は脳中を走るものといえば汚れたボール、空を走るボールだけでいかに拾うか考えるだけであった。頭の中にはたった一つの事だけが存在していた。たった一つの物体だけを見つめていた。

精神を集中することは、物事ををなす上に大切なことであるが、意志のもとには存在しない。人間の無意識の行為である。従つてその力は常に働くことによつて維持され停止することによつて低下してしまうだろう。私はこの力の存在をバレーの練習によつて発見させられたようである。

精神を集中することは、私達が人生何事かなすにおいて最も根本的な要素であると思う。私はこの力を学生生活においてこそ大きくゆるぎないものにすると思ふ。

思い出

伊東千歳

もう高校に入つて、三年という年月を過ぎようとしている。まだ入学式のこと、ついこの間のことのように思われる。あのポロ校舎も入学当時はひどく立派なもののように見えたものだ。私は夢あふれ、希望に燃えていた。そして今の私は無残にも夢破れ、傷ついている。勉強のこと、他のこと、すべて自分の考えがあまりに甘かつたように思えてなさない。なぜもつと毎日毎日、いや一秒一秒というものを大切にしてみなかつたのかと悔いる。今さら後悔しても遅い、それよりこれからは、もつと時間を大切にしなければならぬと思う。

いろいろなやんだり、孤独という気分になつてみたり、死について考えてみたり。なんでもないことが、むしろ悲しくなつて、ポロポロ涙を流したり。みんな青春のうれいというべきものであろうか。

楽しかつたことも数々ある。強行遠足、身延山での研修会。修学旅行、と数限りない。強行遠足では、砂ぼこりの道を汗をかきながら、自分の足だけがたよりで、やつと野辺山につけた時の感激、足のまめの痛さも、思わずふつとんできました。紅葉した山々の景色の美しさもわずれられない。身延山の研修会では、現代の学生のあり方とか、男女交際についてとか、いろいろ意見を戦わせた。恋愛論までとびだした。修学旅行では、古くから栄えてきた奈良京都の町の偉大さに、あらためて感動させられた。何千年何百年という歴史の興亡のありさまを、目のあたりに見る思いであつた。しかしこの町にも近代化の波

がおしよせてきて、古くからのものがそこなわれようとしているのは残念な気がした。

こうして数々の思い出多い高校生活をおえようとしている。これから、大学への進学、実社会へと、まだまだ人生は長い。そして私がこれから先、どのような人生を歩むかはわかつていないが、ただ私という人間を、できうるかぎり、活用したいと願っている。

友達

竹之内憲子

私は前に友達から小学校のときからの親友がいる事を聞き、たいへんうらやましいと思つた事があります。小学校のときから、高校三年の今まで、ずいぶん多くの人に会っているのですから私にもその様な機会があつたはずで。それなのに今の私の親友とは高校生活で得られた一人だけです。もちろん私は親友は多くなくてよいと思ひますが……

私がここで反省すべき事は、友達というものへの考え方なのです。というのは、その私の偏見のために今までなんとか私の歯車はから回りしたり、動かなくなつてしまつた事があつたのです。私は高校入学の前までは、友達とはそれほど必要かつ重要なものとは思つていませんでした。その人々との接触によつてそれほど大きい成長ができるとも思ひませんでした。

ほんの遊び友達としてしか考えてなかつたのだと思います。でも、高校へ入学したとき、多くの人から高校時代によい友達をつくつておくといひといわれ、初めてその気になつたのです。

讃歌

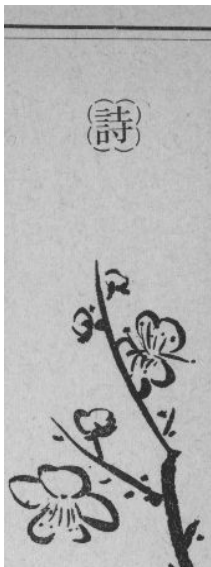
雨宮由貴子

高校三年間、ただ学校という大機構の中で何物にも、さからわず時の流れにそつて生活してきただけであつた。少しでもちつぽけな自分を伸ばそうと、せのびした時、そこには深い谷とはかりしれない障害があり、それにくじけ自分のはかなさを知つた。

そんな時いつも自分の頭に浮かんできたのは、こんな言葉であつた。「なぜ、もつと広い心を持たないの？　ただお前はひとつの限定された世界をみているだけだ。今一番の目標が入試だけなら、お前は本当に生きてゐる価値があるのか？……」そこで私は答えた。

最大の目標にたどりつくための手段として入試の道を通るのさ。時には苦しい事も泣きたくなる事もあろう。しかし自分はそれらを通し

て成長していくのだ。しかしもし入試に破れたら、お前の最大目標はどうなるのだ。そこには根拠がないではないか。競争の勝利者だけが目標を達成することができるのなら多くの敗北者はどうなのだ。ただ単純労働のあけくれになるのか。殺人が悪行であるなら、弱肉強食の勝者は殺人をおかすことと同じだ。自分は、そんな事を平気でやって行く様な人間に育ったのか。なんてひきょう者なのだ。相手を倒してまでなぜ勝ちたいのだ。自分をみがきあげるためなら、それは自己満足だ。それでは、社会が悪いのか。多くの人は言うだろう。今の世の中が悪いのだ。ある者だけが得をする様にできている資本主義がいけないのだ。お前まつて、彼等にとつて有利な人間になるために育てあげられているのだ。お前は、その典型的な人物だ。高校三年間ただぼんやりと批判も抵抗もせず、過ごしてきたではないか。そんな味気ない人間は、社会の改革も忘れ、いつかは自分も、社長になろうなんて考えたすのだ。そんな社会に住む人間に魅力など感じない。それでは、自分の最大目標は何だろう……。そうだ、多くの犠牲者を救うことだ。機械のとりこになっている人間ロボットや、貧乏の為自分の才能を十分發揮できない人の為に働くことだ。そのためには、改革が必要だ。革命をおこすのか……。それは性急にはできない。今そんな事を思つてもただ理想であり、机上の論議だ。それよりも、もつと身近かな問題から着手しよう。「身体障害児の施設を完備する。」それ也需要だ。しかし自分のできることは、そうだ山間の恵まれない子供たちの教育だ……。末末の社会を築きあげて行くために、自分は自分に精一杯努力しよう。社会と戦つて生きていくのだ……。



道

波羅栄次

いつまでもどこまでも続いている道
いくら早く歩いても
いくら遅く歩いても
小鳥のさえずり
木々の緑
太陽の輝き
すべてが僕等を見守ってくれた
あの思い出の道
短い道よ
今はおもうすべてから離れ、
自由の道を歩もうとしている
たとえそれがどんな道でも
いくら遅く歩いても

前進を続けよう

小鳥のさえずり
木々の緑
太陽の輝き
すべてが僕等を見守ってくれ
この希望の道
長い道のため

現在生活において

小沢藤雄

うず高くつまれ
ま白なかおをしている本
おまえは何ぜきたならしく
ならないのか／
おまえは・
もう俺になにもよそはなくても
よいのだ
おまえ
おまえとは長いつきあいだったな
おまえをけとはし
おまえは
柱にゴツンと音をのこして……
ゴムくずの中にいたつくな

おまえは俺に限りない苦しみを与えても、おまえは
時には学生としての俺に喜びをあたえた。
感謝する
おまえを世にひろめたいんだ
お願いだ／
俺におまえを語らず権利を与えてくれ
解答用紙で、公の場で
おまえの恋人をつくってやるから
もういまは
おまえが性質を人に語ってもらえるのは
俺だけだと思え
努めて思ってくれ
もつと俺と無遠慮に、親しく
交際をもて
おまえを語ってやるから
俺も努力する
魂をつぎこんでがんばるから
最後の一秒まで充実して生きるから
おまえ、おまえ
最後まで見守っていてくれ
最後まで
ああ……

僕の印象に残った詩

いや 輝いてくれ
心に安堵を与えてくれ

思いつくままに

人生は
只一人歩む旅
……自己。
自己は、自己只一人
自己が空虚でありながら
知らぬ憐れさ
自己の欠陥を
悟り得ぬみじめさ。
とさした殻の牡蠣の身を
憐れみながら
自己を知らぬ憐れさ。
自己が空虚だと知った時
一歩、前進する。

人生は
只一人歩む道
完成のない道。

岩間一子

かの時に言いそびれたる
大切な言葉は今も
胸にのこれぞ
この啄木の詩は僕に
対して、さまざまな
思い出を語ってくれる
まただれにとつても
思いあたることが
あると思う。

わが星

保坂誠一

勉強を終えたあと外に出て見る星は美しい
何の悩みもなく
純粹に
正しく輝いている
僕らに安らぎを与え
深いおちつきを与えてくれる
僕らの頭の重みを取り去り
僕らの心のもやもやを取ってくれる
ポーン……一時を打った
あしたも輝くだろうか

深山にさく一本のユリ
探底に漂う一本の藻
心をかたむけよ
だれに見られずとも。

人生は、広さよりも深さだ。

人生は
只一人歩むもの。

只一人と、自己一人と知った時、
どうして自分を粗末にできよう。
どうして努めずにいられよう。



卒業の皆さんへ

組主任 寺田和男

見苦しかったであろう物理の授業も終りに近づいて、残り少なくなってきた頁を教える君達の顔に、何かほっとした安堵の色が見えるようだ。

、法則、公式に続く計算、また息抜きの実験かと思えばレポートの提出と、やつぎばやの授業に押し流されてきたことであらう。

たしかに人間性をはなれた物質の世界のできごとだから、感情豊富な高校生活に織りこんでゆくことは、かなりむづかしいことだったに違いない。幼少時代の単純な頃は「なぜか」と問う問題に素直に対応できて、その解答になにか奇妙な驚きと喜びとを感じるけれど、長じて知識、感情が発達し複雑になってくると「なぜか」と問う問題も少くなり、あつてもなかなか明確に納得できる解答が得られず、そのことのみに苦心して、いまさら喜びや驚きどころではない。ましてや自

初めて、自然の扉を開いたといわれる運動の法則の中にはありありと人生の姿がうつしだされているし、また全く想像しかできない極微の世界（原子）から今までにない莫大なエネルギーをとり出した相対論も、飛躍した人間の一面を探りあてている。

このごろ、物質文明はいちぢるしく進歩しているのに反して、精神文明が追いついてゆけないのではないかと極論されているが、絶え間なく移りながらも、過不足なく円滑にめぐる自然の姿が、何かを我々に教示しているように思われてならない。

反作用の力に屈してはならない。それは前進するための作用に付随してくるものだ。休息は静止であるとともにやはり一様に働き続けている進歩も意味しているのだ。そして仕事に熱中している時に湧いてくる使命感を立派に実現してもらいたい。

長い人生の旅には、曲り角もあらう。ゆき詰ったら、別の角度から基準を変えて考えなおしてみることだ。再び地平線の見える丘の上に立つ自分を、みいだすことであらう。

鏡

学年副主任 相良智佐子

「さあ、ボク達、早く起きろよ」。時計のネジを巻きながら枕もとに立つて呼んでいる父親を亀の子の様に布団から首だけ出して片目だけ開いて見上げた小さい方の息子が「ハ。ハ。時間を止めてよ。昔に戻して呉れないかな。そしたらもつと

然の神秘にふれることなど、なくなってくるのが当然なくらいだ。そうはいっても、授業を始めてからすぎた二ヶ年の月日は、君達が将来「何か」を考えるとき、必ずや一つの方向をみいだすために役立つことと信じている。

運動の法則。

物体は力がはたらかねば、静止しているか、または一直線上を同じ速さで動いていること。
物体は力のはたらいた方向へ、質量に反比例する加速度を生ずること。

作用があれば、必ず反作用があり大きさ等しく方向が反対であること。

エネルギー保存の法則
どのように形態がかわろうとも、始めもついていたエネルギーは、増えも減りもしないこと。

相対論

一見だがみても不変であり、量の基準とされていた、長さ、質量、時間は、相対的に変化するものであり真空中の光速のみが絶対唯一の基準であること。

寝ていられるんだけどー。」「あら賛成。それじゃ私は十五才位まで戻すわ。ねえパパあなただったら幾つ位に戻したい？。」「そうだね、パパは二十一才に戻すな。」「素敵ね。」「二人の寝ぼすけ共に「すると残念ですがあなた達はまだ此の世におりません。だけどさ、生まれちゃらんだから世話を焼かさず早く起きなさい。」「

それから二階の鏡台の前に座って私は考えていた。十五才も二十才も私達は戦時中だった。間違った教育を受けてはいたが純粹に国を思い、国を愛して、襦袢を着、炒り大豆をかじり、弾丸を作ったり防空壕を掘って暮した。青春時代と戦争とは切り離して考えられないし、思い出の中の私は必ず壊れた町中か工場の機械の前に立っている。

もう一度十五才の私は教室の中で友人と一緒に勉強して見たい。色々な本を読みたい、そうして友人と「生きる」という夢を話し合いたい。素晴らしい恋愛について語りたい。色々な所に出掛けて見聞を広げたい。あんなに粹純で情熱的に自分を見つめ、世の中を見つめることが出来たらもつと異なった私になれただろう。又二度とない青春時代をきつと大切に送るだろう。

起き出したららしい階下の息子達の声にフツと再び考え出した。あの子達が十五才・二十才になった時この国はあの子達をどんな若者にしてくれるかしら。青春時代の思い出をどんな風にあの子達は又その子供に話してやれるかしら。鏡の中の私は、パフで頬べたをたたいた。

野口英世の母堂の手紙に思う

杉山 協子

最後だから高校生活の思い出でも書きたいところだが、思い出すのが苦痛な事が多く、愚痴と後恨の連続になりそうなのでやめる、かわりに、私が強い印象を受けた、野口博士の母堂が米国の博士に帰国を願ってあてた手紙について考えたことを書くように思う。

初めてその手紙の写真を見たのがいつ頃かは良く覚えていない。字も文もけつして上手ではなく、読みとれない部分もあった。にもかかわらず、手紙にあふれる、真心と愛情にうたれ、涙がぼろぼろ出たのを覚えている。私は意外に涙もろく、感傷的で、よく感動の涙を流す。ただ絶対に一人だけのときに限るが……。

母堂は博士に手紙を書くために、年老いた身で字を覚えたそう。平仮名で、本当に真心こめて一生懸命に、思ったことありのまま書いている。

「はやくきてください、はやくきてください」

の「点のあかりである。

虫のごとくあかりを求めて、惑うすべし

争――

ああ、私はほしい。

疲れてしまった魂の安んずるを。

――いつか、「自我」の歡喜が心の底から叫び出される時、私はそれで十分なのだ。

余裕を与えよう

五味 武彦

現在、君の存在がなくなってしまうても、人は、友人は日常茶飯事として日をすごせば存在したかどうかということさえ信用できない、それほど君はささいな者なのだ。

君はいままで他の役に立った事があっただろうが、人の期待に答えた事があっただろうか。学生なのに勉強せず、一般常識、一般教養を貴重と考えずにブラブラしてばかりいるじゃないか。君が次の世に善人となって生まれ出するため、私は今君を殺したい。でも君はこの世にまだ未練があるようだ。この世でもう一度生まれ変りたいのなら、五年間私は君が年令相応の精神的、肉体的発達を遂げたかを見るため余裕を与え、この世の事物を見

れ、いつしよのたのみであります。にしきわいてはおがみ。ひがしきむいてわ。おがみしております。きたさむいてわ。――中略――なおわすれでも。これわすれせん」。これ以上役割を十分果し得た手紙があらうか。なんて尊い手紙だろう。東西南北向いて拝むというのもしもオーバーに感じない。事実、信仰心の強い方だったらしい。

すぐれた人の手紙もいくつか読んだが感動したのは少い。もつとも、私の単純な頭では直接、感情を表に出さず、裏に深い意味を秘めた文など理解できないので、このように素朴で率直な手紙に感動するのであり、後者を好むのは、それを書くのが前者のような文を書くよりやさしいという、いわば考え違いをしているからと考えることもある。

ところでこの手紙のような真心と率直さが私の高校生活、いや生まれて十七年間にあつたろうか。いったい友情でも勉強でも何をするにも「真心」をもつてしたことがあつたろうか。よく人は言う。「上手に做的是むずかしい。でも真心こめてやりなさい。」と。「真心こめる」って簡単なのか。誰にでもできることなのか。そうかもしれない。見栄や利己主義を捨てれば、また「真心こめる」と

させてやろう。その間、君は一日一日を貴重なものと考え、再びめぐりこない学生時代の人生を幅広く、底深く学ぶがよい。しかし、何事もせずに一日が終つたと思われる日々が続いた時、私は君を死に追いやり、この世の中での君の姿を白いサラサラした骨粉に変えてしまふぞ。君の存在は世間の人には無益であり、人々の進展を阻害し、不幸への扉を開いている門番でしかありえないのだから。

感じたこと

芳賀 美佐子

八月七日付朝日新聞、題「平和のあしもと」見出しには「米軍参りの商社マン、他国に落すなら爆弾でも。」これを読みはじめました。「ナパーム弾をつくれと言われれば、つくりますよ。もちろん、日本の上に落すというなら話は別ですがね。民族の違う国で使うなら、感覚的に違つてきます。」と大阪、富士車両の取締役。また紙面には、不況から特需へ高まる期待。有刺鉄線、軍用トラック防虫網、すでに、さまざまな戦争物資が日本から送り出されている、とも書いてありました。不況であれば戦争によつてでももうけ

絶対後に恨みは残らないものなのか。何だかわからなくなってきたが真心が真実である故に強い力を持つ例をあの手紙で知った。またまらないけど、これ以上支離滅裂にならないうちに終ろう。

自我

守屋 操

私に「自我」が感じられたら喜びたい。その確立はすべてであり、その存在が私の化身であるから。それがいかに虚弱であらうと、かまわない。――ただめざめてほしい。在つてほしいのだ――。

つぶれる地球は信じられても、自我のない自身を信じられない私であるから。だれにも同化されない一個の人間でありたく思う私であるから。

それを、個人主義と指摘されようか。

私はかまわない。むしろ歓迎しよう。

なぜなら、自己本位こそ自我のめざめに通ずると思えるから。もともと、私のめざすものは自己本位であらう。今はそう思える――

それは、自失した私に指図してくれるものであり、私の生の宿り木である。煩悶の果て

る。過去の日本にはそういう事があつたことを歴史で学んで知つてはいます。しかし第二次世界大戦という悲惨な経験をしたのですらかつての戦争を反省し、平和を最も強く願わなければならぬ日本人の一人であり、また取締役という責任ある地位の人から話された話、他民族ならばどうなつてもかまわないという利己的な考え方を、日本人として恥かしく思いまた腹が立ち読み終つてからしばらくの間、何もすることができませんでした。

こんな見方いかがですか！

西村 憲一

僕等の考えにあまい所があるのはどうしてもしないめない。責任の曖昧な、経験の乏しい時代を過ごしてきた者にとつて避けられない事である。中学校時代に考えた事を回顧してみると、いかに単純に考えていたか気付くでありましよう。さて大人の考えは確かに浮世になつたものであるし、定まつた見方を持つてゐる。しかし、人は一つの見方をもつ必要はあるが、その見方だけで押し通すことは十分考慮しなければならぬ。一つの事件に

対する人々の見方が、立場や色々な知識、経験、その他の要素によって、様々に表われて来る。現在、僕等や一般の人々は盛んに批判をするが、ただの批判に過ぎない。しかし、この批判は自分達の願いで、切実なものである。ここで考えなければならぬことはこの批判が出て来る根源は、自分達にあるということである。こんな見方、いかがですか。

土色の土 空色の空

米山浅雄

「へへ？そんなに急いで。」

「空をしろん。まっ黒い雲がでてきたんだぜ。」

「……………」

「雨にたたかれ、風にもてあそばれたのはつらいからね。ドブに落ちた猫のようにじめだからね。じゃ急ぐから。」

「待って『雨よ！沛然と降りたまえ！』なんて気持になったら。」

「冗談じゃないよ……………」

「嵐のあとね、土色の土が君の足もとから地平線のかなたまで広がるよ。空色の空がね、君の頭上高く開けるよ。それに映えて緑の

かもしれないな。

又ある日曜日は終った。

重衡 卿

笠井智明

数年前、仲のよかった奴

もう大学を卒業したはずだから五つ位は年

上だったろう。

本当の兄貴みたいだった。

そんなだったのにもう忘れていた……………が突然、静かに、巻いてある糸を引き出すように思い出した。

書画だけでいにしへの人を評価するのは危険だと思いが僕はある本一冊だけで平重衡という人を好ましい人だ、いい奴だったんだなと断足した。清盛の子として生まれ奈良の衆徒の手で斬られるまでの生涯、時代もなにかも違う人なのになにかひかれるものがある。

いい男だったんだなあ重衡は。男らしく又やさしく、なにかも僕の理想とするものをもっていたんだなあ。そんな事を考えながら遠い昔のことをおもっていたら、おもいだし

ね、いや群青の草がピリツと天をつくんた。その時君は空気のうまさをはじめて知って驚嘆するよ。『こんなうまいものね十数年も吸ってきたのかなあ。』なんてさ。」

「……………そんなもんかね。根こそぎ倒れた木々。土にベツタリひれ伏した草。枝にからまったゴミ。草をおしつぶしたゴミ。嵐のあとね、『地球上にこんなにもゴミがあったのか。』

なんて驚嘆するのがオチさ。」

「……………違うよ。嵐のあとは土色の土それに空色の空それに……………それに……………」

「聞きたくないね。なにしろこっちは急いでんだから……………あつ空がもうまっ黒だ。失敬」

「……………」

ある日曜日

稲葉一俊

跳ねろ／もつと高く。

打て／もつと強く。

青い空だった。

本当に青い空だった。

暑い、真夏の太陽は暑過ぎる。

たんだ奴のことを。思い出がでてくる。その一つ一つに奴の、あの日に焼けたけど最高にハンサムの顔がうかんでくる。そうだあいつ重衡の生まれかわりかも知れないぞと思うといても立ってもしられず無性にいたいくなつた。

思いだすのは

三科弘

短かった。ほんとうに短かった。この二年五カ月、しかしいろいろの事があった。なかでも印象深く残っている事は、一年半ぐらいだったがサッカー部へ入って先生方や先輩達との心の触れ合いや、泥のボールをヘッドイングさせられて、頭へしこりができたりしてもしそのボールをよければグラウンドを走らせられる。あの時はせつないやらくやしいやらで涙をこぼしながら走ったことだ。しかし今考えると、あの様な事も一生のうちたまにはあつていいと思う。また、ある事である先生に注意され、「サッカー部なら先輩が先輩だからな。」と、言った時には実にくやしかった。もし今だったら反論して、足をだすかもしれない。

何も考えるな。おもいきつてやれ、ただボールを打てばいいのだ。

胸は騒ぎ、足は興奮に震えている。

やれるぞ、もしかしたら今日はやれるぞ。

日に焼けた顔が、腕がそう言っている。

さあやるぞ／やつてやる。

頭上の太陽、空の青さ、緑の山々、白いボール、目がくらみそうだ。

おい、お前何をしている。そんなボールがとれないのか、こわいのか、この阿呆め。

膝が破れ血がにじみ出た。

転がれ！もつと転がれ。

駄目だ。敗けた。

みろ敗けてしまったじゃないか、どうするんだ。意気地なしめ、今日まで何をしていたのだ……………」

もういいじゃないか、又この次ががんばるさくよくよするな。

いやだ、こんな事いやだ。どうなっているんだ。理由がわからない。こんなバカな事があるものか。

おい、お前まだKillerをやるのか。さあどうかな、わからないよそんな事。やる

勉強の事だが、テストをやる度につかりしてリオレはなんてバカなんだろう。山と、考える事が多かった。だがその反対に成績が良くて、フアイトがわいた時もいく度かあった。最後に言いたい事は、『俺は、一高で勉強することができてよかった。』という事だ。また、校内サッカー大会で優勝した事や修学旅行での出き事など、書きたい事は山ほどあるが、時間と用紙が、そして眠けがゆるさない。

さあ、第六校時、数学の授業が始まる。眠いのを我慢して、ヤツタルゼ／

ある授業風景

浅川春夫

先生はいつもの調子で出席をとり始める。教室はまだざわめいている。あたりのざわめきを気にしないかのように話を始める。ぶ厚い参考書にやたらに赤線を引いている奴もいる。そうかと思うと、一生懸命に話に聞き込んでいるのもいる。前に座っている奴と平気で話しているものもいる。さすがに女子は真面目で、ノートに必死で写している。前と後という違いから大分雰囲気を変えている

る。突然、先生が「そこに眠っているのはたそ。」と叫ぶ。一瞬あたりは静まる。しかしまた徐々に騒がしくなる。もう先生は何も注意しない。自分のペースで話を進めている。我れ聞せずと言わんばかりに、参考書にしがみついていたものは、あきてくると、時々あたりを見まわし黒板などをぼんやりと見る。先生はおもしろくない話を話し続けている。それでも熱心なものは、よく授業についている。時々おもしろい事を言って笑わずと、あたりは急に明るく活気づいている。そのうち廊下の方から少し騒がしくなってきた。授業が終りに近づいていることを告げている。早くも筆入れをしまっている音がする。まわりは増々うるさくなってくる。先生は例の調子で授業をしめくくった。

投書記事から

今井良子

ここ数日、インド・パキスタンの領土争いが新聞をにぎわせている。そしてベトナム戦争はどこかに行ってしまったようであるが、相変わらずドロ沼の戦いが続けられているのである。

限り、人間は殺人者たる汚名に屈せねばならないのである。

「生命」とは、人間とそれ以外のものの間で、そんなにも異なるものなのだろうか。人間だけが「生命」を保障されている特権階級なのだろうか。疑問は続く。だが結論はたった一つしかないことをこの地上の征服者——いや征服者だと自惚れているにすぎないのだが——は知っているはずなのである。それなのに何故、他の生命あつてこそ己の生命があることを悟ろうとしないのであろう。

悲しい事——人間の過信——恐しい魔物いまに人間性をも滅しそうな恐しい魔物にほかならぬ。

そして今私はここにいる。傍にはまだ目もあかぬ小犬が眠っている。——腐敗した人間の手によって「物」のごとく捨てられた子犬が

息づいている。息づいている。幼い生命は生きているのだ／。

夏の日

吉村真佐子

遠くもやが山々を包み、ひややかな風は黄

先日、新聞に「戦争は人間の業である」という意見が載っていた。それによると、民族国家間の死闘の経験の少ない日本人は、一度の敗戦で戦争はこりこりと厭世思想でいっぱいであり、敗北主義まで横行している。しょせん人間は神と動物との間に生みつけられたもので、神の慈悲博愛と動物の弱肉強食の両性をもっている。戦争なき世界は神の世界で人間の世界ではないそうである。

たしかに人間は戦争好きの一面をもっているかもしれない。小さな子供は戦争映画など好む。歴史を学ぶと「戦争なき世界は不可能」とさえ思われるほど絶え間なく戦争が行なわれてきたことを感じる。また、現在、一部の人々の中に、不景気のため、戦争が起これるによる特需を望む気分があるという。

私たちは戦争を知らない。しかし、「戦争は人間の業である」として戦争肯定をしてはならないと思う。

動物好き

丸山恵子

……己の如くに汝の隣人を愛せよ
「動物好き」とはやっかいなものである。

緑の首を波立たせ、夕幕を誘ふ。

眼前に小高い森——色ざめた空にそびえるその松の暗緑、静寂さ……時折不調和に虫、蟬の鳴き声が響く。

私は大きながらんとした家の中で一人座っていた。姿勢を気にしながら、じつと顔だけを外に向けながら、ぼんやりした目はぼんやりした景色にすえられていた。それから私は何か心を通り抜けるものを感じた。一瞬の虚無感がさった。

この日々のにがにがしい生活が思い出され自己の醜さに心を痛め始める。

おさえても気をつけても無意識に出てしま
う ego ego……

どうしてこんなに我儘と冷たさが心にはびこるのか。自己を偽り、虚なるもので飾ろうとするのか。いつか私は美しい何かに染まることができようか。この全てを少しでも流してくれるような——少しでも。もしも可能なら、生きる真実なんてわからなくてもエゴについて考えていくのだが。

しかし感覚、脳、全ての神経の無能な私……ただ迷っていくだけなのは、混乱する疑惑がいつまでも続くのでは……

私にとってこの夏の日々の異常な天候は、不

やっかいなものの故にそれに伴う弊害も多く、私が近視であるのも、この「動物好き」によるところが大きいと人は言う。（私は遺伝だと信じているのだが。）

というのも、私が極端な肉類禁食主義者だからである。肉類禁食主義者などとは、いかにも厳めしい呼称だが、つまりは、動物と名のつくもの一切、その一片なりとも口に受けけない極端な偏食者なのである。

それは幼少の頃であつた。屠殺場にひかれていく老いぼれた牛の姿の哀れさは、幼い胸の中にいつしか大きな傷跡を残していた。しかもふと肉屋の店先で見かけた生々しい肉塊の山が、あのようにして運ばれていった動物たちの変り果てた姿なのだと思つた時、傷跡は深くさく裂してしまつていた。以来、私はその厳しい呼称者に化したのである。

人はこんな私を情深いと言い、しかしあまりに感傷的な幼知な考えだとも嘲笑する。だが、己の生命の為には他の生命など容赦しない人間の非道さ、残酷さが私には耐えられないのである。思慮分別あるはずの人間が、毎日どこかで極悪な殺人者と化し、苦痛に至んだ動物の顔の上に残酷な笑いを浮べ、よだれを垂らしている。そしてそのよだれの止まぬ

思議に私を考えさせるような気がした。

もしも暑かつたのなら……

一高生活の意義

萩原克彦

今ふり返つてみるとこの三年間は実に短かつた。多分一高生活が楽しかつたからだと思ふ。勉強は別にして高校生活において得たものが意義あるように思える。その一つとして不断の努力があげられる。これは一高生活最後の年になって初めてその貴重さがわかつた。もつと早くその価値にきがつけばよかったのだがやはり自分の努力がその価値を気がつかせるにいたらなかつたのだ。この遅い自覚の第一の原因だと反省している。この不断の努力ほどおそろしいやつはない。どんなにがんばつてみてもこれにはちよつとやそつとでは太刀打出来ないものである。又これほどつらくきびしいものはない。これをやり通した能力ある人間こそその人間としての値打ちが完成されるように思える。又次に述べるのは一高生活で陥りやすい欠点である。それはどうも自己中心なカラにとじこもりやすい傾向である。又それは人間としての大きさを欠く

ことが住々ある。勉強中心の世界にとじこめるのである。この欠陥はいうまでもないがこれに陥らないようにすることは出来るだけ多くの人に接しそれらの人々から自分にかけているものをどんどん吸いとることであらうと思う。そうすれば人への接し方や各人の性質の微妙な相違に気がつくようになると思う。そしてそれだけ世界が広くなるだろうと思える。この三年間は短かった。今日出来ることは決して明日に延ばすな／

高校生活

飯室和男

誰でも言うことだが、長いようで短かったのがこの三年間である。あわただしかった入試、そして感激の入学式などはいつこの間のようにはつきり記憶している。なんといつても一番よかったのは一年の時であった。することなすこと、見ること、聞くことすべてがいままでになかったことばかりであったから何事にもやたらと興味がわいたものだった。特にあの一高の長い伝統である強行遠足には大変の魅力がうかがわれた。実際は想像以上の苦しみ、つらさであったが、それをのりこ

年はその感が強い

周囲が暗くなると、毎夜、窓から珍客が訪れる。小さな金色の蛾や、虹のように輝く薄い羽を持った緑色の虫や、木の表皮をはがして、それに足をつけたような虫など、それぞれ個性的な小さな虫たちである。以前は気味悪さも手伝って虫が好かなかったこれらの虫に、最近、愛着を覚えるようになった。大きなのはだめだが、小さな虫の動作は、かわいくてよい。小さな前足で触角をしゃいたり、ちっぽけなヤツが、じつと動かずに沈黙考（？）していたりするのを見ると、思わず口もとがはころんでしまう。ちよっぴり「虫めづる姫」の心境になって、これらの虫を見てみると、何だか、心が大らかになるような気がするから不思議だ。

ところが、蚊や蠅となると、とても大らかな気分にはなれそうもない。一匹でも殺すと「人類の衛生の向上に貢献した」「とくくの気分になってしまふ。「蚊も殺さぬヒューマニスト」などというのは、しよせん物語の中の話にすぎないのだろうか。こんなことを考えていた時に、あのシユバイツァー博士の話を知ったのである。彼は、ほんとうに蚊を殺さなかったという。小人の悲しさか、こんな話

えた時の征服感はまたかくこのできないものであり、一生忘れられないものとなると同時に、いつの日かきつと役に立つ時が来るだろうと思われる。こんなによい行事であるからなお末長く続けられ、ますますつばなものであるだろうと思う。いやだったことは、今もそうだが、試験に追われたあわただしい日々であった。ためになり、そして短かった高校生活だった。

秋の夜に

小笠原 芳美

夜になつても雨は降るのをやめなかった。が、ときおり、全くピクリとやんだ。そんな時は、コオロギの一層高く鳴く声に、深まりつつある秋を知らされた……十時の愛の鐘のメロデーが「荒城の月」にかわつたと母がいつた……

秋の夜はほんとうに心をしみじみとさせる。でも、ふと、いいようなない悲しみに似た様なものに襲われる。こんな夜は、いろいろな考えが頭の中を巡る。きょう、学校では志望大学調査が行われた。いよいよ大学入試も近づいたし、高校生活も残り少ないことを知ら

に多少の矛盾を感じないでもないが、しかしこういう心は素晴らしいものだと思う。何か、全宇宙的とも呼びたいような、心の広さを感じてはいないか。現代は宇宙時代だといわれているが、そこに生きる我々人類に最も大切で、かつ、最も失われかけているのは、こういう心ではないだろうかなんて考えてみる。

先刻、積み重ねた本の上にとまつた虫は、私がおこなことを書いている間も、ずつと動かずにいる。彼も人類、いやすべての生物との、平和共存を考えているのかもしれない。

秋は、なんと物思わせる季節じゃありませんか、お互いに。

詩

これで最後だから

三浦 遺子

これで最後だから
心をこめて書こうと思つて。
これで最後だから

された。この高校生活で表面的ではあるが、いろんな友達を知つた。そして、皆、それぞれ美しいところを持つていると思つた。私はその美しさに気づいた時、近よつて、その美しさをみんな吸収しようとした。が、いつまきまつてその美しさは、その人が意識していい結果から生じることがわかつた。美しいと感ずるのは他人であつて自分で自分の美しさを感じることが出来ない。それと同時に、私は、自分というもの、まだはつきりつかむことができないで、気持が整理されていいことの不安を感じた。私という人間に必要なものは何か、そして、まず自分をよく知るために、一人になつて、孤独と戦い、自分をじつとみつめようと思つた。

秋の夜長に

吉川 敏子

虫の声が繁くなつてきた。何種類もの音色の糸で織られたベールに包まれた感じである。忘れかけていた「自然」を感じさせてくれる虫たちに感謝したい気分になる。と同時に、今まで季節の推移など味わうゆとりもなく過してしまつたことが恨やまれる。特に今

これで最後だから
思い出のページを開きながら……。

これで最後だから
自分をふり返つてみたいと思つて。

これで最後だから
いろんなことを書きたいと思つて。

これでおしまいだから
上手に書こうと思つて……。

でも……………

結局、何も書けなかつた。

これが最後の文集だから、
何だか寂しくなつてきた。

これでお別れだから、
何だか悲しくなつてきた。

無重力の世界

矢 崎

春の細流は谷川の氷を溶かしていく。
自然を全く閉じこめていた水
それも今は動き出そうとしている。
春の細流は野山の雪を溶かしていく。
一面に積つていた雪
やがて一すじの光となつて流れ出るのだ。

ヤマメやニジマスの舞踏会。

夏のせせらぎは魚たちの天下。

青く豊かに繁った緑は水の上で歌ってる。

真白なしぶきの下で子供たちの叫び声

夏の細流は子供たちの世界。

強烈な太陽も一すじの天子である。

九月は極彩色の世界

秋のせせらぎは静かに流れる。

青空と木の葉を水面に浮かべながら。

夕日が空も木の葉も赤く染めてくれた。

秋の細流に伝わっていくリズムは

彼等の愛の調べなのだ。

静まりかえった冬の世界は

静かなゆつたりとした流れなのだ。

淡い満足感にひたっているのだ。

いくら厚い氷が流れをとめ、

純白の雪が大地を包んでも

秘かな春への愛着はいきづいている。

あの素晴らしい世界は展開される。

せせらぎはもうそこまできているのだ

しまうのだろうか。「愛」とは、「愛」とは

。私は理解しえない。私の一生は「不可能」

という言い訳に終わるのだろうか。

.....

「我思う、故に我あり。」——何という愚

かな発見であろう。

鵜の瀬

木原悦子

自転車は走る。朝の新鮮な大気に身を投じながら、あるいは、たそがれの山並みに心を奪われつつ。今日も又、大なる富士川の流れを脇に見ながら、駅までの短い通学の一時を楽しむ。そこには、三力年の通学の終りが迫りつつあるという一種の不思議な閑寂の念があったが。

甲府盆地の水すべてを集めている富士川。

この盆地の南端に位置する鯉沢の地、この川に依って開かるた古い町である。街はずれに川向うとを結ぶ鉄橋―富士橋―がある。車輪はすべる様に橋を通りすぎる。ほんの二、三分で自転車はこの橋を渡り切ってしまいい。だが私にとってこの二、三分は経過してゆく單なる「時」ではなかった。必要欠くべからざ

卑怯者の記

清水啓子

Acceleration...

九月十日（金）雨

——自己とは一体何でしょう。「実在」とは果たして、「明日あるだろう」私なのではないか。

私は悩んでいるといいました。しかし、実際、常に悩みの中にある人がいるのでしょうか。（前進するエネルギーを持たない悩みはもう悩みとはいえませうまい。）私はごまかしている。明らかにごまかしの中に住んでいるのです。これが本当だから、私は辛い。——私には何一つわからないというのが私の本音です。何か一つ、根本的なことが、おぼろげにでもよい、見えてくれたら。しかし、私の生活が客観的なものである以上、そんなことは望めそうにない。客観的人生、観念的人生：それは、生きているとはいえない人生なのです。私は、生きがいのないこの「客観」——むしろ「観念」といった方がよいだろうが、——この「客観」から脱けだしたい。しかし、

る理由があった。勿論一つは、橋を通らなければ駅まで行けないという事だった。

もう一つの理由は――。

橋に立って水の流れゆく方向を見る。そこには、もう盆地の広がりはない。左右から流れに迫った山が二重に三重に重なり合っている。それを縫う様に富士川は左へ折れている。流れに沿って国道が走り、数える程の人家が並んでいる。それはいかにも平穏な一面である。

しかし、古人の手柄があり、古来郷土の人々の努力があった。昔日、江戸の町がちゃんまげでにぎわった頃、この川が左へカーブしている地点は、急流であり、渦がまき舟は困難きわまる旅をした。その頃東海道岩淵まで城米を運ぶための甲斐唯一の宿場町鯉沢であった。角倉了以は、これを知ってこの地へ訪れ河川の開発に努めた。

そして現在富士川は全くその利用価値を異にして在るのだ。時としては、人の心から忘れ去られることさえある。

しかし、私にはこの一風景が手に握ることさえできそうな親しみのあるものだった。いわば、大自然の中にかすかに息をする私にとって唯一の友人であった。暖かな母の手の様

それは、人生に対して盲目となることに通じはしないか。それとも、それは、こざかしい知恵を捨てて自然にかえることなのであるうか。自分をごまかすことの卑劣さを知り、自分を否定しながらなお、生きていくことの矛盾――私の盲目的な「永遠」への信仰は、また、「永遠」への恐れに通じているのではないだろうか。すべて一人の人が自分をどこかで肯定している。自分を決定的に否定するならば、そこには死が待っているだけだ。自分を「無」と感ずることのできる人は幸いだ？――私は観念的二重人格である。――一体どうしたらよいのか。どうしようもないような気がしてならない。：私の夢は極度に広がってゆく。しかし、私の真の悩みは、そんなところには存しない。だが、本当に悩みなのか。ごまかしうる悩みなどが存在するだろうか。

人間は動物であるという。動物である以上「生」への本能をもっている。精神はこの動物性と並び存することはできないのか。私の精神とは！：慰めを期待してはならないのか。（信仰、それは私の精神（？）にとってこの上もない妙薬である。しかし、私は今、それをも完全に是認しえない。）絶えず動いてゆく時の中に、「私の」真実は燃えつきて

な感触と覚え、折れ流れ行く富士川は私に意志を与えてくれる人間の理想国の様に見える。た。

そのような昔の人々の心の流れがあるのか自分は何とも言えぬ愛着をそこに感じるものであった。だからほんの二、三分であろうと私にとつては最大の楽しみであり、大自然を相手に語り合う唯一の機会であったのだ。橋の上立ってそれに向うと、石につまづいた事もころんで泥だらけになったこともすべてが川の流れと変わり、新たな魂が、小さな一人の間の中にも、限りなく湧き出る源泉の如くに生ずるのであった。

昔の人は、そして鯉沢の人は、その地点を「鵜の瀬」と呼ぶのである。川の折れゆく地形が鵜という水鳥ののやに似ているからだというが――。

私は思うのである。これが私の古里の河であり、古里の山である……。

そして若人として私は明日への階段を登るのだ。



父

山本登志子

父は今年の定期異動で、東京に転勤しました。本来ならば、家族もいっしょに行くところですが、単身赴任しました。離れてみると懐しさをしみじみと感じます。

孤独を愛するというのが、静かに本を読むことを好む父ですから、一人暮しの不自由さは感じても、寂しさはあまり感じていないようです。家にいた時は、それこそ何もしなかったのに、現在では自炊生活をしています。

自炊といつても、夕食だけです。ゆっくり食事をとりたいたいと結構自分で作っています。

大変な変わり様なので驚いています。けれど買物をする時は、恥ずかしいようです。無理もないことですが、生涯に一度はこういう経験があった方が、いろいろの面で参考になると思います。月に二度程帰甲しますが、私は父からどんなさやかなお土産ももらったことがありません。それどころか励ましの言葉をかけてくれたことも、またおこられたことさえ一度もないのです。もちろん心の中では考えていくとは思いますが。今では

慣れてしまつて、またあきらめています。以前は何となく満ち足りない感じがしたものです。けれど数学などのわからないところを聞くと、とても親切に教えてくれる面もあります。やはり、父のするの我が家は、何か寂しく感じます。

山つて大好き

中島洋子

山つて大好き。そうあの時からだった。あの山に登った時からだった。私が山を好きになったのは。といっても、たくさんは登ったことがない。でもそれだからこそ、未知の世界が残っているからこそ、単的に好きだといえるのかも知れない。すべてを知りつくしてしまつたら山は案外空虚なのかも知れない。私なんてまだ、山の一角をちよつぱりくずしたにすぎない。もつとその奥深く自然の神秘や自然の厳しさが潜んでいるにちがいない。私はその神秘やきびしさを求める。情性にすぐす毎日の生活。私はその中で自己否定の必要性を感じる。他人の中では自分は他人の自分である。悲しさも辛さもおし殺さなければならぬ。しかし、ひとたび自然のふところ

いる人

きつと私よ！

一冊の本

小林美和子

私達世代の求めるものそれは昔の人も変わらなかった。

昔の人が考え、思い、そしてだした結論にたつた一人で深くひたる時

いいようなしれない喜びを感じた。

そして不安を感じた。

私の

浅くそしてうすい考えに。

けれど、

ある冬の晩、

一冊の本に夢中になった。

食を忘れてとはこのことかと思ひながら、

それは喜びの連続だった。

思つた通り、

考えた通り、

ただそれでよかった。

それから何カ月して

に帰り、すべての事物から庶断されると、私は自然の子となる。おもいつきのびをして山の空気をすいこみ、悲しさを悲しみ、辛さを辛く思う。山に語りかけ、こだまに聞き入る。そんな山の魅力が私の心をうばっている。それは下から眺めていたのではわからない。山は自分の足で一步一步登った者だけに、その魅力をのぞかせる。そしてその魅力は、いつも新鮮で若々しい。まわりの山々がきょうも美しい。そして私をよんでいる。山つてやつぱり大好き。

私

茂手木聰子

こんな私をつくつたのは、いったい誰かしら／お母さん？

四人姉妹の三番目。当然リウンザリリの出生だつたことでしょう。産婆さんが、最初「お坊ちやまですよ。」と嬉しがらせたのがなおいけなかつたのです。まだ元気だったお婆さんは、男の子が生まれたと思ひ、喜んで近所に知らせに行つたとか……。そんな風に私は「男の子を」と望まれて生まれたリ女の子だけに幼い時から我が家においては、男

はつきりと心にきざむことができた。
確かな一本の道を。

この道

山口憲子

夕暮れの街道は、忙しかった。人々は時間に振り回されきつて、それに甘んじているかのような頭で、ぶつかり、そして去つて行つた。ただ自分の目的とする暖かな我が家に向かつて、突進しているのだった。私も、そうした人々の一人には違ひなかつたが、何故か彼らと一緒に、なりたくなかつた。というよりは、むしろ何かが私と一緒にさせなかつたと言つたほうが、適切かもしれない。とにかく、私は、やがて人の少ないこの道を歩いていた。夕暮れの風は冷たかつた。時折、青白い空気が、サーッとアスファルトの道を通り抜ける。その時、さっきの人々が、私の脳裏を、フツと掠めて消える。私は、つぶやく。

「アタシは、この道を行けばいいんだ。」

この道は白く赤く、そして、そこに歩く一つの影法師は長く黒かつた。赤トンボが、無表情に影法師を切れ、勝ち誇つた様に、スーイスイと横切つて行く…。影法師は微笑し

の子同様の存在でした。それにもかかわらず大変なノンビリ屋さんでした。学校までの五分の道を三十分程かけて、道草しながら通つたのです。又一人で田舎道を目をつむつて歩くのがおもしろく、ある時は川へポチャンと落ちたこともありました。もちろん田舎のきれいな小川ですから御心配なく。姉からメトロノーム50という仇名をもらったのも、ちょうどこのころでした。

しかし、そのスローモーションも、中学に入り、電車通学と共に煙のごとく消え去りました。今はメトロノーム30くらいになったのじやないかしら。スローモーションはなおつたけれど、親の遺伝とも思われるこのオシャレリとオテンバ、中学一年に入り、静かにしましょう。女らしくこれまた三日と続かず、机の上をはね回るにまで到りました。高校一年心気一転。すっかり見ちがえるくらいにしましょう。と思えどもやつぱりだめ。私自身あきれはてて、もうなおすことを止めました。どうにか使ひようで、これらも良い性格の一つに持っていけるかもしれませんもの。

いったいこんな私を作つたのは誰かしら。それはね／すぐ身近な人、友達よりも、両親よりも、姉妹よりも私のことをよく知つて

た。そして慌てて涙を拭いた。ほんとは、無表情でいたかったけれど、思わず見上げた西の空に、大好きな夕焼けが、夢のように広がっていたものだから。

私は赤トンボを追いつけて、この道を走り出した。そして、この道の向こうに着いた時には、きつと心から笑えるに違いないと思った。本当に、そう思った。

秋風が、サーツと通り過ぎて行った。

コドモダナア

こんどう ひさこ

勉強するの嫌い。

おそうじするの嫌い。

お料理作るの嫌い。

お習字嫌い。

美術嫌い。

それにもまして作文嫌い。

でも好きな事だつてアルヨ。

歌謡曲唄うこと。

万才を見ること。

居眠りすること。

食べること。

いたずらすること。

でも作文は嫌い。

まだまだ好きなことアルンダヨ。

お星さんを見ること。

チョウチョをつかまえること。

雲を眺めること。

太陽を見つめること。

風をほつべに受けること。

でもそれを作文にあらわせない。

ソシテネ

一番先にお風呂にはいること。

ホカホカのふとんにねること。

お洗濯すること。

鏡を見ること大好きサ。

でもねやっぱり作文大嫌い／＼。

おとなしくしていること。

敬語を使うことも嫌いだけドネ。

ゴメンナチャイ。チェンチェイ。

秋の夕暮れ

角田 啓子

くし形山に太陽が沈む。いつのまにかすき通るように青くなった空のあちこちに、羊雲が紅色に染まりながら流れている。ちよつびり寒くなった風が柿の葉をそよがせ、私の心

もそよがせる。草かげでは草ひばりやおかめこおろぎが鳴いている。

まだこの間、木々の芽がふき、草が萌え出したばかりだと思っていたのに。まだこの間、ざらざら光る太陽の下で、木々は葉をだらしなくしおらせ、サルビアの花が熱苦しそうに咲いたばかりなのに、もう秋になってしまった。学校に入ってから三度目の秋に。そして高校生活も過ぎ去ろうとしている。

入学当時の私は、はたして今のような私を想像していたのか。たしかにもっと何倍もすぐれた私を想像し、それになろうと努力しようとしていた。それなのにその努力すらほとんど実行できなかったではないか。無計画のまま、その日一日を何の収穫も無しに、時の流れのまま、季節の移り変わりのまま過ごしてはしなかったか。私は悲しいことにこれらの事、すべてを肯定しなければならぬ。私は残されたわずかな日々をこれらを否定するよう努めなければ……。

こんなとりとめのない事を考えさせるのもこのうつすら暗くなった外で、風に吹かれているせいだろうか。まだ東の空には青空と夕やけ雲がわずかに残っていた。

つまらない空想

大久保 礼子

闇が明けて、霧のかかった林の道に出た。

敷きつめられた落ち葉に露がおちて、甘ったるい匂いが私を誘った。そつと足を踏み入れると柔らかな感触が身を包む。足を運ぶごとに、黒い落葉が、小さな音をたてている。かさつ、かさつ。左右の木々にはもう一かけらの葉さえ見られない。何もかも震えているように、ほう木になった茶色の木が遠くまでかすんで見える。その時、すつと光がもれて、また消えた。ほんの一瞬の間だったが私の目に小さな赤いものが映った。そつと駆けよつた。赤い小さな花だ。摘んでみた。別に匂いもなく、また、始めてみる花だ。でもどこ

もなく私を引き付け、その色が情熱的だ。かすかな音をたてて冷い風が、髪の毛をゆすつた。でも、身が軽くなる様なそんな風だ。ふと、前方を見ると道端に白いかたまりがうずくまっているように思える。そうつと近づいてみたがなかなかはつきりしない。人だろうか。その物から三メートル位あったらう。始めてきれいな石とわかった。大理石のよう

白い大きなかたまり。ちよつと不思議な思い

もした。手を触れて下を見ると、やはりさつきのあの赤い花だ。手をそえた。その時、何か体に突き刺るような寒けを感じ、後をふりかえつた。身がしみる。黒い塊のようなものが、迫ってくる。足が急に動かない。――まだ来る。恐しさが身を走つたどンドン迫ってくる。――まだ。

小さな事

加藤 マサ子

まだ一字も書いてない。「あしおとの原稿など今度は絶対に書きなさい」つい数時間前までそのように思っていたのですから何も書けないのが当然です。何かひとつ書きあげなければと思つて見たものの頭の中には何もないので。でもそのなげやりな態度で果して自分自身のプラスになるのだろうか……このあしおとの原稿を書くという行為はさして重要なことではないのかも知れないが、たとえこんな小さな事でも気を抜くということが後に来るであろう大切なものに対しても、再び安易な態度で接するようになってしまふことを私は恐れるのです。困難な事に突きあ

たつたらそれを踏越していく強さを失なっているのです。努力してなし遂げようとする意志がないのです。そこには真の人間の生きる姿というものがありません。せめてこれを書いた後からは自分の生活時間と態度に何らかの変化をもたらすことを願うのです。

きみのために

窪田 岩夫

私達には、この世の中で、何が正で何が否であるかは、何が善で何が悪であるかは、言い切ることはできない。すべての事象は相対性を伴うからである。にもかかわらず、物理的法則の相対原理のごとく、私達の生活にいくらかではあつても、絶対性を認めなければならぬというものは、なぜであるうか？絶対性を認めるには、たとえば何が善で、何が悪かと言ひ切ることができずためには、何か普遍的な基準がなければならぬ。

実際において、私達の社会には、いくらかではあつても、時と場合によつてではあつても、絶対性は必要なのであるが少なくとも、善悪の区別が可能でなければ、社会は混乱するばかりである。

故に現在、私達の社会の秩序が保たれているのをして、現実には、絶対性事象の存在を、認められるのである。

それでは、その事象の絶対性であるための基準は、いったい何であらうか？ 何に對してその絶対性を、確信するであらうか？

私は確信する。すべての事象にその絶対性を必要とする時、その事象に絶対性を生み出す基準となりうるものは、神以外の何者でもないことを。神以外の何者も、その基準となつた事象に、絶対性を生み出すことは、けつしてできないということ。人間同士でのみ決定する事象はすべて相対性を伴う。しかるに絶対性事象は存在する。故に神の存在を確信するのである。

人間個々の理性は、ことごとく異なっている。異なっている理性間で決定されるものはすべて相対性を伴う。すぐれた哲学者が何人よつても、神の存在を認めなければ、道德さえも決定できないであらう。それは、彼等の自己の主張の正しいを信じるがために、道德のもつ相対性を、許せないからである。

ここに於て、無神論者の自己の理性を基準とし、事象の絶対性を内に求めて生きて行くとするのを、批判するのである。彼等の神

ビー玉

河阪幾代

街角をまがると、男の子が三人、ビー玉遊びをしていた。一人のガキ大将らしい子が、一方の足を後にのばし、小さくなって、目ちやきをしていた。私が小学校の頃すくはやつた、緑のキラキラ輝くガラスの玉をはじくあれである。その子はちよつと首をかしげてチロツと、こつちを見た。私が、「あれあれつ。」といつてかけ寄ると、三人はいっせいに上目ずかいでこつちを見た。

私は一番おとなしそうな子に、「何やってんの。」ときいた。すると、さっきのガキ大将がうけて、「僕が一番つよいもん。」と上向きかげんにいった。「お姉ちゃんの方がつよいもん。」と、私は続けた。友達と思つてくれたのか、小さな顔の中で、三人の目がチカツと笑つた。

一番小さい子がビー玉をくれて、四人は、「あつちの玉の方が近いよ。」
「もう少しビー玉ちょうだい。」
と、走りまわつた。ビー玉をころがすと、キラキラと輝いた。六つの目が笑い八つの目も

を否定する心にも、神の意識がある。」

神の存在は理論では証明できない。しかし推測はできる。しかし、神の存在の否定は、理論で証明もできなければ推測もできない。

山

広瀬和江

私は山が好きだ。遠くから見るのもよいし登つてみるのもよい。山は自然の象徴であつて、奥深い何かをもっていると思う。緑濃い山道を登る時、雪の積つた山頂を仰ぐとき、又ナス紺色の小さな湖を藏しているのをみつける時、私は自然の中に吸い込まれていくのを感じる。山は母であると感じる。

私がこのように山に興味をもつようになったのは、中学時代の八が岳寮を経験してからである。その時、山は非情であると思つた。山との戦いはとりもおさず自分との戦いである。権現岳に登つた時、私は非常な孤独を感じた。それは霧のように淡く忍びより、冷たかつたと覺えている。

そして高校に入ると、強行遠足があつた。自然に親しむと同時に、自己の力の限界を知

笑つた。一つの口が笑い四つの口も笑つた。

ガキ大将君は、私が、「お姉ちゃんの方が強いもん。」といったのを忘れたのか、ビー玉をくれて、ずいぶん味方した。すると小さい子と、おとなしい子は、「ちやつくい。ちやつくい。」といつていたが、何を思つたのか「あつちの方がいいよ。」といつて、赤つていつてしまつた。ガキ大将君も、いつてしまつた。

あたりには、ビー玉が鈍い光を放つて、石ころのように、ごろごろしていた。

私のかばんが、遠くでポツリとしていた。

考えること

坂本佳寿子

時のたつのは何と早いことだ。「光陰矢のごとし」と言うことわざを何度も聞いたことがあつたが、現在の私にとってこれには胸せまるものがある。

時間とは何と神秘的なものであらうか。頭に何もたたきこまなくても、楽しく遊びくるうことがなくても、ぼんやりもの思ひにふけつていても一秒、一分は刻々と規則正しい歩みが続ける。休むことがない。どこまで続くこ

ることができた。山に登るには、多分に精神力が影響するものだと感じた。

今年の五月、親類の人が八が岳で遭難し、亡くなつた。山をそんなに直接肌で感じていなかった私には、少なからずショックであつた。その事故が、自分との戦いに破れたとは考えたくなかつたのだ。

今、八が岳は頑としてそこにある。そして八が岳をも含む山を私は好きだ。

夕日が沈む時、黒ずんでいく山をみると、胸がしめつけられる。すっかり黒くなつてしまつたが、あの山をこえたらまた青々とした山々をみることができるようかと思う。

短歌 清水陽子

庭先に秋のおとずれ身にしめて

小さくさけり朝顔の花

赤きかさかぶりていでし名月に

そなえしダンゴわびしくみゆ

いく夏をおしみて登る裏山に

赤きとんぼのたわむるを見る

とか。この歩みのエスカレーターに乗つて限りなく、無限に続く未知の国へ行つて見たいような好奇心もわく。しかし不可能なことはわかつてゐる。人間には寿命がある。

こういう間にも時は刻々と過ぎ去る。

せめて『現在を有意義に過す』しかこれに対する対策はないのだろうか。もしそうであるならば私は何と愚かも怠惰であつたことだろうか。まず頭に浮くは授業に臨む態度のなまぬるさであつた。自分はなぜもつときびしい態度でたち向かうことができなかったか。

今はただ考えれば考えるほど自己嫌惡に陥いるだけである。

庭先から虫の声々が胸をさすようにひっきりなしに秋の訪れを告げている。十五夜の日は何かいいたような顔をして青白い光を放っている。ああ：もう秋だ。入試まで余す日はわずかだ。自分の実力は？これに応えてくれるのはただ自分の努力だけだ。しかし人生はたつた一度のこの世の招待であり、明るく楽しく過ぐすには健康が第一だ。

私は決して人生の一段階において健康をそこなうような無理はしたくない。だがせめて残り少ない高校生活を実のある、充実したものにしたい。

砂 漠

荻原圭子

見たすばかりただ一面に砂のみあるという。荒れはてた殺風景な平野には生命力はない。あるのは自然の偉大な力、雨、風、嵐、雲。しかし砂漠はこのような力のどれを恐れるだろう。何も恐れるものではなく広漠の平野は静かに横たわっているのではないか。

もしこのような砂漠が人間の心の中にあつたなら。それはこの世の中のどんな事をも受入れないだろう。絶対にだれものぞけず、だれとも協調しない場所だろう。どんなに強い力がかかっても常に平静にしてしまう場所。ある時には感情をおし殺すかも知れない。しかし、これこそ本当の人間の心ではないだろうか。とかく現代の私たちほ心の中にあるすべてを表面化する感情的な人間を最も人間的なものとしがちなのではないだろうか。それに反して私は砂漠を持つ人間を人間的だと思うし心の砂漠はその人の持つ心のゆとりと考えたい。砂漠を持てる人間はきつと博愛主義者だろう。何をも憎まない勇氣ある心を持つてこの短かい人生を生き抜いたらどんなに美しい

素晴らしいだろう。心の砂漠を持つ人間とは悩み多い今の状態からそれらのいやな事をまつ殺し心を平静にしてくれるものを求めたいと思う私の望みかも知れない。

夏 の 頃

荻原和美

心地よい風が南の窓から入ってくる。夏の終りには、少し強すぎるくらい風の風になったが、一面のとうもろこし畑や丈の低い野菜畑をふきぬけてくる。私はよくそこへいった。

まだかわききらないようなとうもろこしの穂、陽に照らされて、葉がいつせいにキラキラ輝き、穂は薄赤い透明になる。

それらの畑の横を、やわらかい草におおわれた小道が少しまがりながら、鬱蒼とした森の中へ入ってゆく。その道の片端にずっと植えられたねぎの白っぽい青。そこだけが輝く緑の中で、ばかに新鮮だ。

森と畑との西寄り小さな池がある。水面には水草が一面に浮いていて、何かの抗が二三本つきでている。緑の幼いすすきが風のふくたびにしだれかかつて、水草を分ける。

私は、あれが好きだな、と思った。

その池は、つりざおを持った小さな男の子達も素通りしてしまう。「ぼく、ここでつらないの?。」「うん、何にもいないよ。」

夕暮れになると、からすがきまって降りてきた。黒い羽を広げたのは気味が悪かった。

しかし昼は、後の鬱蒼とした森に対照してすべてが明かるく陽気だったし、畑と池の間の野生のひまわりが、群をなして上を向いているのは愛らしかった。

森のまわりを囲んでいるけやきは、すばらしく大きかった。夏の陽に、かえって黒々とした影をつくって涼しくて快い。そんな中では考える事は必要がなかった。よもぎやアカザだのの雑草にふれながら、これが小さな幸せだのの雑草にふれながら、これが小さな幸せだと思った。そして一番輝やくのは、夏の陽の下の木々の葉だとも思った。

——昇山荘で

今は秋、森へ入るころに、其赤な彼岸花

でも咲いているだろうか。

ぼく の 生活

佐野公保

高校

夢中——苦悩、苦悶——光

大学

大学生らしい生活。

文学に没頭するべく。

哲学に没頭するべく。

ピアノに夢中になるべく。

ドラムに夢中になるべく。

テニスに熱中するべく。

サッカーに熱中するべく。

油絵に熱中するべく。

彫刻に夢中になるべく。

愛に苦しむべく。

愛に喜ぶべく。

音楽に陶醉するべく。

小説を書くべく。

映画に夢中になるべく。

コースに熱中するべく。

学生運動でデモっているべく。

友とダベリあうべく。

大学生らしくない生活はすまい。

教師

生徒の前で赤くなるべく。

生徒といっしょに楽しそうなべく。

編集後記

◇「あしおと」第三集は卒業記念集としてここに完成しました。学年を迫ってページ数も多くなり、内容も深く豊かになったようにも思えます。この「あしおと」は将来にまでつながって、高らかになりとどろかんことを切望しています。

◇この「あしおと」には特に一年、二年の時、学年の主任、副主任としてお世話いただいた保坂忠信先生（現日川高教頭）、須藤良清先生（現山梨高）にご寄稿していただきました。御礼申し上げます。また、この三年間、表紙を描いていただいたのは遠藤ひろみさん、この集の主要カットをおねがしたのは田中孝道君でした。あわせお骨折を感謝しています。

◇昭和四十一年一月四日には大雪が降りました。北風が冷たく吹きまわっています。

まだまだ春は遠いといった感じです。卒業生諸君が晴ればれとした顔で迎えられる春を期待して編集後記といたします。（渡辺）

昭和四十一年一月八日印刷
昭和四十一年一月十四日発行

編集兼 甲府第一高等学校第三学年
発行 学年誌編集委員会
甲府市美咲二丁目13番44号

印刷者 佐藤森三

印刷所 株式会社又新社

甲府市丸の内二丁目30-17
電話② 七二九五